女學世界

第三巻第七號

口繪

夕顔　前田青邨筆

新緑

清國風景

虎　刺繡画

熊澤蕃山

近畿風景

[illegible]　刺繡屏風

笠岡女學校

癸卯園遊會活人画

初風雛御座室

夏山、百合、澤瀉、撫子、画手本




地方よりの御註文は御手紙にて
御申越被下候はゞ小包郵便にて
發送仕る可く候尚ほ註文御
案内書は御一報次第御送り
可申上候
一切の商品は店内一
面に陳列致し置候に
付き御立寄り御
縦覧被下候様奉
希上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋二丁目

女學世界 第参巻第七號 目次

表紙 夏禽 極彩色模様 武内桂舟意匠

口繪 (寫眞銅版アートペーパー共十二頁)
▲夕顔(前田青邨筆) ▲新綠若狹遠敷 ▲清國風景西湖沿岸 ▲虎(刺繡畫) ▲熊澤蕃山(水野年方筆) ▲近畿風景 ▲刺繡屏風 ▲京都淑女學校 ▲初風號御坐室 ▲笠岡女學校 ▲癸卯園遊會活人畫 ▲南米風景

書畫手本
●和歌 多田親愛翁筆
●消息文、單語 坂正臣翁筆
●百合、夏山 野口小蘋女史筆
●潟湖、撫子 跡見花蹊女史筆

卷中插畫
▲水禽(川合英忠) ▲朝露(中村鈴子) ▲料理(水野宗方) ▲身じまひ(山中古洞) ▲五月雨(片山春帆) ▲唱歌(大野靜方) ▲落城(山中古洞) ▲夏衣(三宅花塘)

論說……一
福澤先生流行の說……
言語と品性……江原素六
夫婦の獨立……記者
婦女雜觀……大町桂月

家庭……一七
身だしなみ……禮法師範某氏談
食物のはなし……塚本はま子
室內躰操……體操教師
料理の取ゎはせ……近藤格齋
入梅節の心得……
季節總菜料理……
一週間の献立表……
つけもの新世帶……
家庭と新聞……
姑に仕へる秘訣……水原翠香
獨逸人の家庭……稻澤英子

家庭衛生……U K 生
家庭日記……
精神の修養……棚橋刀自

談叢……七一
衣食住の奇聞……坪井理學博士
洋行の話(四)……巖谷小波

史傳……八一
會津戰爭と婦人……無名氏
ナポレオンの母……本多たづ子
郷人談……塚越停春

科學……一〇五
梅雨の天地……佐藤禮介
バクテリアの話……とし子
歷史の綱領……茗溪女史
英語實習……藤生貞子

小説……一二五
紅寶石……巖谷小波
刺繡圖案……

雜錄……一四一
近世事始……石井研堂
泰西婦人風俗……三枝みつば
看護婦社會……
苺の栽培……小畑いく子
癸卯園遊會活人畫……佐々浪子
流行の夏衣……

才媛詞藻……一七九
和歌、雜文、新体詩、

彙報……二〇一
日本大地主の家事經濟摹集外三件

裁縫……二〇二
三つ身被布
襷待針刺方及縫方……小出新次郎

夕　顔



（博進社工場印行）

前田青邨筆

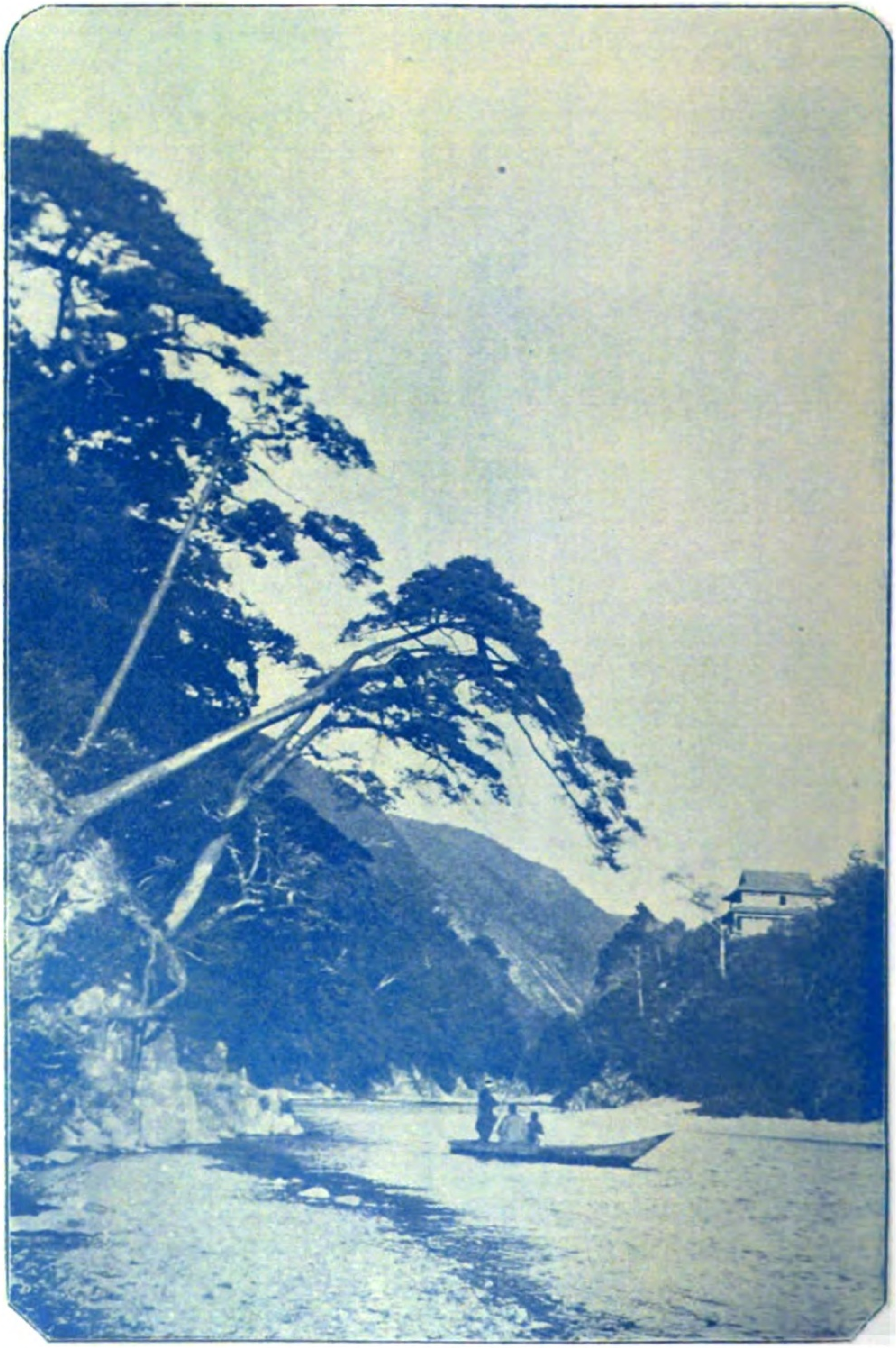
新綠



(神戸小島氏、寄贈)

近畿風景

近江愛知川の上流



（京都關嘉十郎氏寄贈）



杭州西湖の北岸

（甲の二）

(甲の三)

女學生必讀要書

女學世界主筆　松原岩五郎君著

女學生の栞

（近刊）

中判洋裝美本
寫眞銅版挿入
紙數四百餘頁
定價三拾五錢
郵税金六錢

此書は女學世界の責任者松原氏が女子教育に對する多年の抱負を筆にしたるものにて立言の根據は專ら婦人をして獨立自營の氣象を養はしむるに基き、文章は平易流暢を旨とし、丁寧懇切に、利害のある處を辨識して聰明なる婦人の智識に訴ふ、書中々、諷論諧謔の筆を弄して時弊を刺し、或は諧筆を以て單刀直入婦人の弱點あぐる處あり、世間未婚の婦女子は勿論、花嫁、主婦、母親、いづれも新日本の淑女たらん人は一讀して著者が萬斛の涙の如何なる點に向つて灑げるかを知りたまふべし

本書目次

▲女子と獨立
▲母親のつとめ
▲家庭の趣味
▲世帯の秘訣
▲眼に見へぬ資
▲廢物利用
▲流行と貧乏神
▲親子別居論
▲女學生の全盛時代
▲花嫁の覺悟
▲忍耐と勇氣
▲姑と鬼千疋
▲交際の眞意
▲勤儉の德
▲持參金の活用
▲愛情論
▲婦人と職業
▲家政の按排
▲學問の早道
▲早婚と晩婚
▲健康の價
▲生活の分限
▲婦人の七難
▲理想的育兒法
▲女學生の前途
▲主婦の責任
▲節儉と貯蓄
▲良人と子供
▲良人の撰び方
▲眼前の黄金
▲婚禮の仕度
▲醜婦安心論

附録　●女學校案内●女子教育大家意見

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（甲の四）

虎

第五回內國博覽會出品

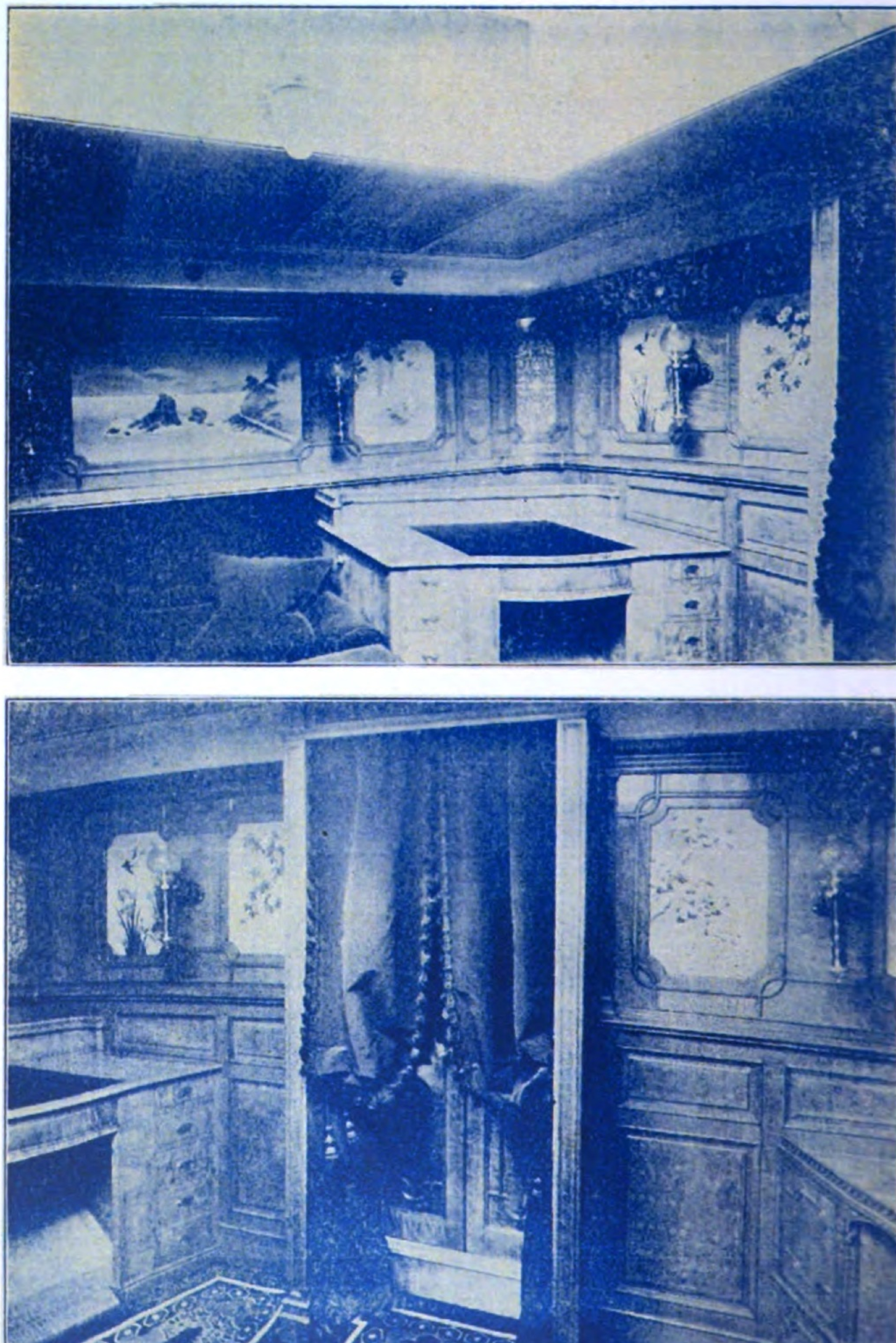


京都西村惣左工門刺繡

熊澤蕃山



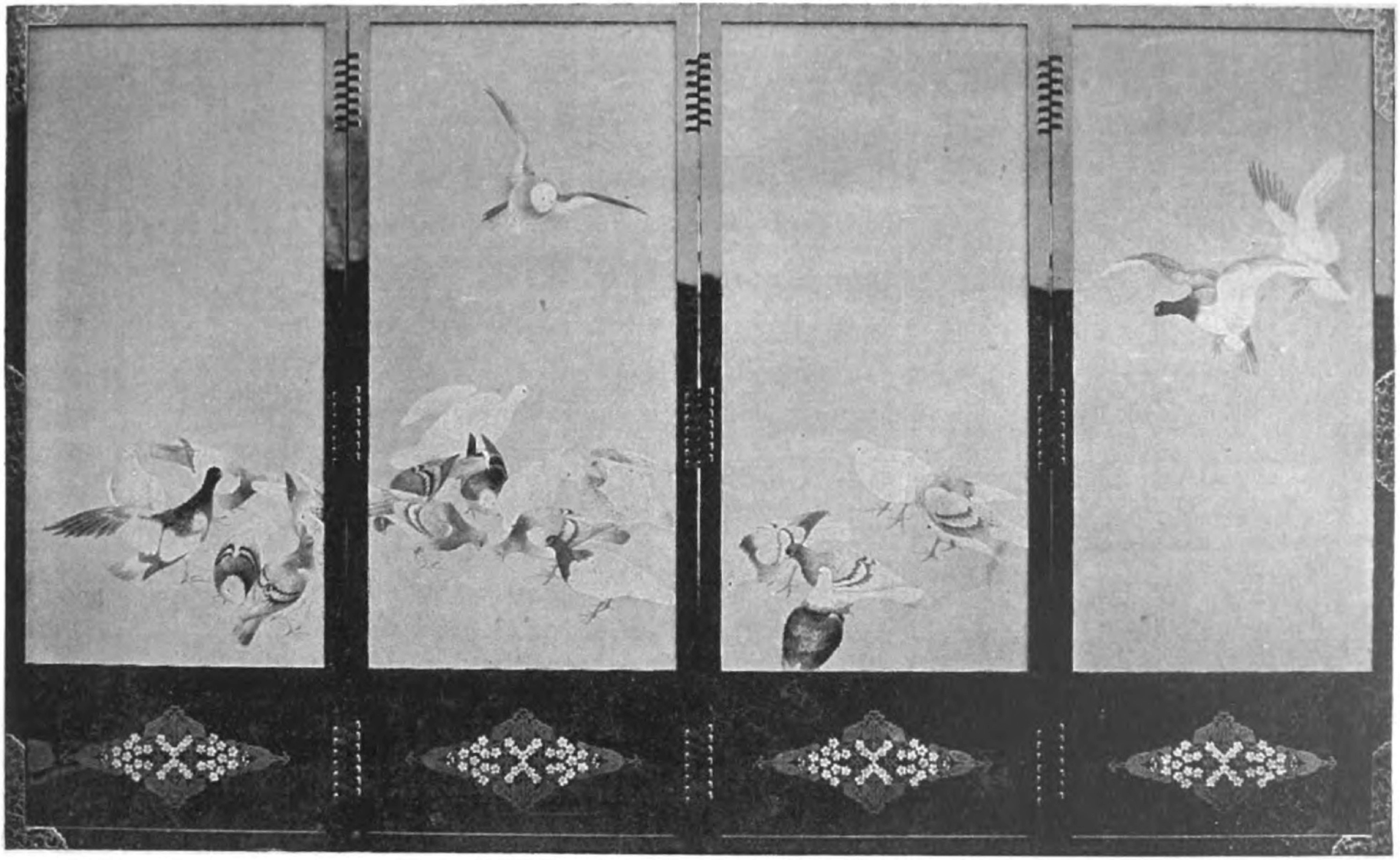
水野年方筆



皇太子殿下御用船初風號内御座室

屏風

第五回內國博覽會陳列



京都西陣飯田新七刺繡

見よ　社會主義　見よ

理學士依綠軒主人著（近刊）

社會主義新小說 文明の大破壞

全壹冊洋裝
合表紙菊判
紙數四百頁
正價四拾錢
郵稅八錢

物質的文明の大進步は、貧富の大懸隔を生して、大富豪の專制となり、玉樓天に聳えて、貧者地に哭し、金殿甍を列へて、餓莩地に滿つ、既にして、大反抗は社會主義なる標榜の下に激成せられて、闇黑なる地下より絕叫せられ、現文明は、大叫喚の間に粉碎せられて、理想の自由鄕は却て天外萬里の山頂に建設せらる、其間英雄の血淚あり美人の熱情あり、忽にして、妖魔の毒彈空に破裂し、忽にして白骨の高塔、天に冲す字々痛快句々壯烈、人をして魂躍り、神悸らしむ、方今の社會主義を說く者、先づ此書を繙かざるべからず

内田不知庵君著

●社會百面相……全壹冊洋裝菊判美本 正價五十五錢郵稅十二錢

村井弦齋君著

●酒道樂……全貳冊洋裝菊判上製 一冊五十五錢郵稅八錢

發兌元　東京日本橋本町　博文館

（乙の一）

●速記法自宅獨習生募集

二ヶ月卒業月謝三拾錢規則入用者郵券二錢を要す

東京市下谷區徒町三丁目九十五番地 速記學專習所

治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵券三錢封入申込者に無代施本致すべし

東京下谷上根岸町百十一（電話本局二一五九番） 藥學得業士 金澤巖

男女美顔法

皮膚病專門醫 坂本李堂氏著 增補第四版

價四拾錢 郵券壹割增 郵稅無

○右は美學衛生精神的に美貌法を詳論せり
○容易に行ひ得可き美貌の秘訣を詳說せり
○之を繙ば醜婦も美人となる稀有の珍書也
○名家の賛助にて其面目を改む
○家庭の讀物なれは之を讀ざるを耻とせり
○好評嘖々大に訂正して第四版を出版せり
○請ふ諸君諸姉陸續御購讀被下度伏て希也

發行所 芝區高輪南町卅（電新三三四〇番） 保椿堂

特約販賣所○京橋區弓町松邑三松堂○麻布區飯倉町四の六杉村盆世堂○外各雜誌店

袖珍名著文庫

饗庭篁村、上田萬年、幸田露伴、關協正眞、芳賀矢一、藤岡作太郎、宮崎三昧、尾崎紅葉 以上諸先生校訂

天下の好評を博せる我邦唯一の名著文庫!!!

第三編 **雨月物語** 上田秋成作 芳賀氏校訂 定價上製金廿八錢 並製金廿錢 郵稅金四錢ツヽ

第四編 小三金五郎 **娘節用** 曲山人補綴 紅葉氏校訂

雨月物語は高潔月の如く、娘節用は濃艶花に似たり。前者は寧ろ理想的傾向を帶び、主として事實の變幻怪奇を弄し、直に人心の肺腑を刺す、後者は全然寫實小說にして巧みに世態人情の委曲を盡す、而して是れ共に德川時代に於ける有數の傑作也。明治の文壇寫實主義理想主義を說くや久し、現時の文學小說に倦める者、請ふ此兩名著を把つて座右の珍となせ。

●第一編 芭蕉翁繪詞傳 附 句集……蝶夢作 露伴氏校訂

●第二編 近松淨瑠璃三種……近松作 篁村氏校訂

●全部百冊（每月二冊發行每編紙數二百頁）賣捌全國書籍雜誌店

東京神田裏神保町 冨山房

（その三）

早稻田大學藏版

佛國大文豪デューマ氏原著
秋濤居士長田忠一君譯

新意匠三色版及コロタイプ數葉入

文學叢書 小說

椿姫

全一冊 紙數四百八十頁
並製金八十錢 郵税金十二錢
特製金一圓 郵税金十四錢

十九世の大文豪デューマが、愛すべき人にして世の愛する所とならざりし薄命の人に向つて、無限無涯の同情のを涙灑きかけ、同時に愛すべき人を愛せざる社會を責めたるの傑作は、歐米十八ヶ國に歡迎飜刻せられ、十九世紀五大傑作の一として讃和唱導せられたるもの、偶々極東法曹界の一問題となれりと雖も、其眞價は社會の認識する處となり、玆に潤歩して江湖に現はる、先に之を難せしものの熱涙無乎、將た文學眼無乎、速かに本書を繙いて其是非を判せよ、

高安月郊君譯 イブセン作

社會劇

上製一圓 郵税十四錢
並製八十錢 郵税十錢

饗庭篁村君註

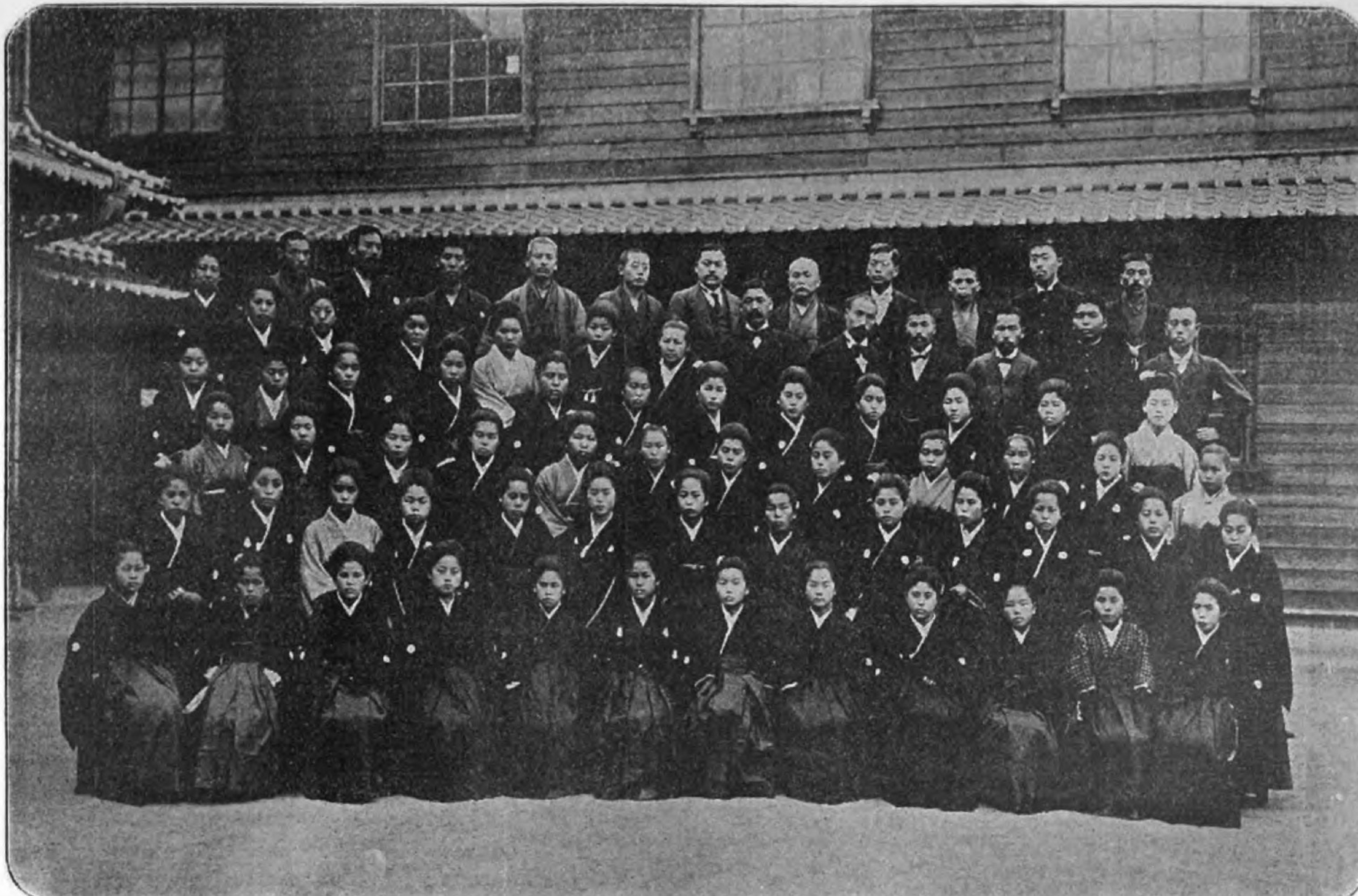
巢林子撰註

上製一圓 郵税十二錢
並製八十錢 郵税十錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館



京都淑女學校卒業生

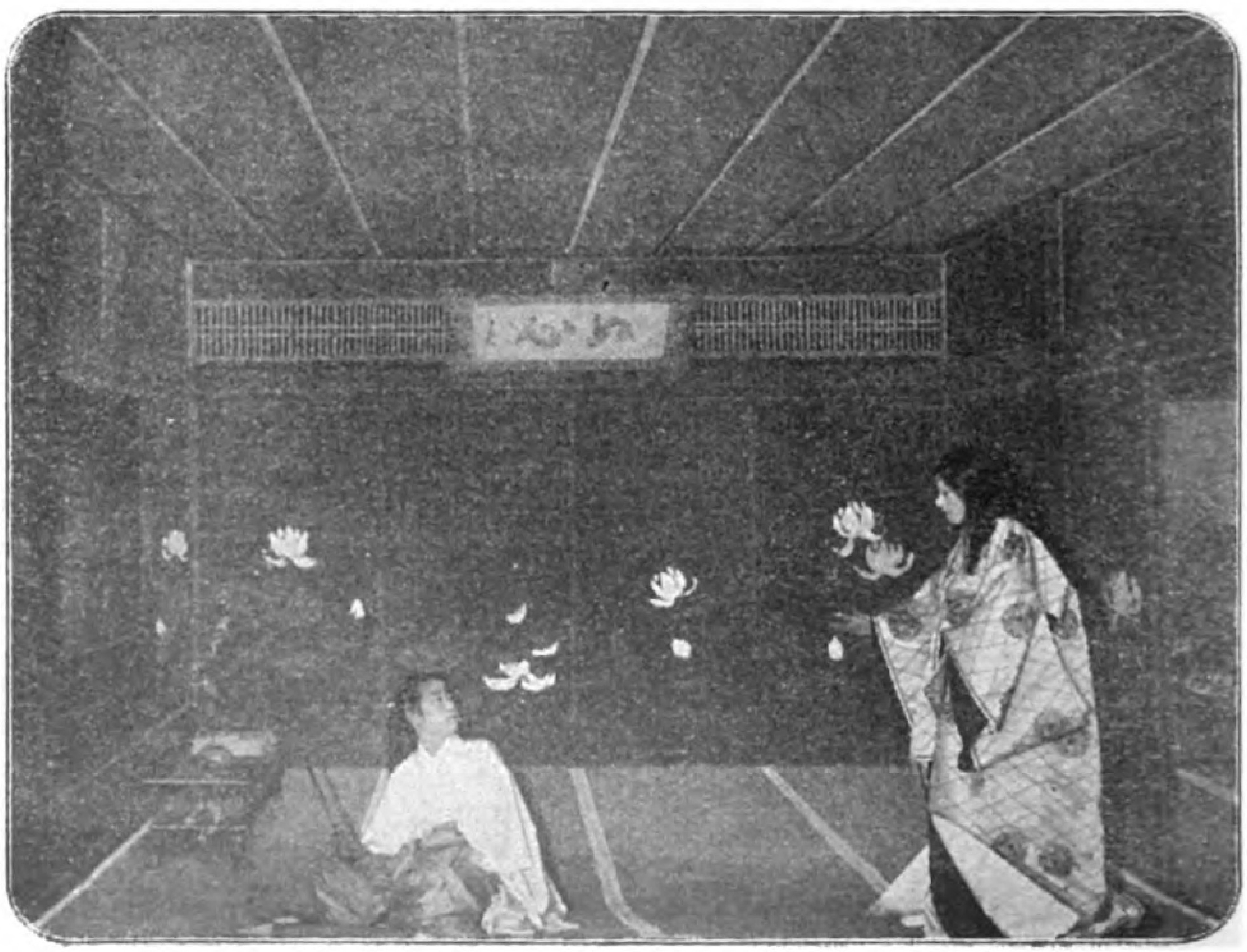


笠岡女學校卒業生

癸卯園遊會の活人畫

楠逸成の女





楠正行

すみれ



寺尾良正筆

新刊廣告

博文館編輯局校訂

繪本太閤記

（近刊）

全壹冊洋装
上製金字入
正價六拾五錢
郵税六錢

眞書太閤記は正にして剛、繪本太閤記は奇にして變なり、兩種各其得所ありと雖、其筆通俗に渡りて、其文興味の深きこと、蓋し繪本太閤記に若かざるなり、故に世に傳唱する豐公の出世經歴は實に此繪本に於て、其眞相を知ることを得べく。且つ挿繪の精密なるは、慥に眞書に倍するの妙處あるを見るなり、製装極めて美麗なれば、机上の珍籍として是非一本を備へざるべからず

博文館編輯局校訂

●眞書太閤記（全四冊洋装）

正價一冊六拾錢
郵税一冊拾六錢

博文館編輯局校訂

●南總里見八犬傳（全三冊洋装）

正價一冊六拾錢
郵税一冊拾六錢

發兌元 東京本町 博文館

（其の二）

東京養育院慈善興行

五月下旬より開場

明治座演劇 川上音次郎登場

高安月郊君作 小峰大羽君畫

江戸城明渡

口繪彩色摺 表紙極美麗

全壹册

洋装美本

正價廿三錢

郵稅四錢

本書は東京養育院慈善興行として、川上子が歌舞伎座に演する脚本にして、高安月郊氏の新作に成れり、筆を德川氏の末路風雲方に起らんとする時に起し、二條城に後藤象次郎が大政奉還を說く所より小栗上野介の苦諫旗下の激昂、一方には岩倉村の密談、鳥羽伏見の破裂、江戸市中の沸騰、勝安房の苦心、西鄕吉之助との談判、前將軍の配慮、遂に城渡しに終る。英雄の奇遇勇士の慷慨、君臣の血淚、義民の俠骨、美人の苦節等、相錯綜し、劇的の事實を更に潤色して、活歷に陷るを避け、猥りに定想を交へず、夢幻劇に流るゝを避けたるの新史劇なり、況んや今之を新俳優の重なるもの、新工夫を凝らして、之を舞臺に上すに至りては、眞に是れ錦上添花の觀ありといふべし、海內の國士たるもの、必ず一讀を要すべきなり

福地櫻癡居士作

芳哉義士譽

正價金三十錢 郵稅金六錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

幸田露伴先生校訂

（近刊）



上卷

和裝上製紙數四百五十餘頁 正價郵稅未定

狂言記目次

第一
(一)烏帽子折 (二)ひめ糊 (三)ぎんじ聟 (四)拔殼 (五)貰聟 (六)寶論 (七)萩大名 (八)酢薑 (九)七騎落 (八)鹿狩

第二
(一)福渡 (二)こんくわい (三)苞山伏 (四)をばが酒 (五)二千石 (六)惡坊 (七)內沙汰 (八)胸突 (九)茶壺 (十)生捕鈴木

第三
(一)末ひろがり (二)かくすい (三)どごんさう (四)法師物くるい (五)かき山伏 (六)薩摩守 (七)太刀ばい (八)どぶかつちり (九)八句連歌 (十)佛師

第四
(一)わいやい袴 (二)粟田口 (三)なすの與一 (四)つり女 (五)かさの下 (六)あかかかり (七)文山だち (八)ふねふね (九)かきうり (十)二人大名

第五
(一)鞨鼓炮錄 (二)角文字 (三)文藏 (四)武惡 (五)富士松 (六)花子 (七)長光 (八)腹立てず (九)すね薑 (十)緡繩

續刊

中卷……續狂言記五十番

下卷……狂言記拾遺五十番

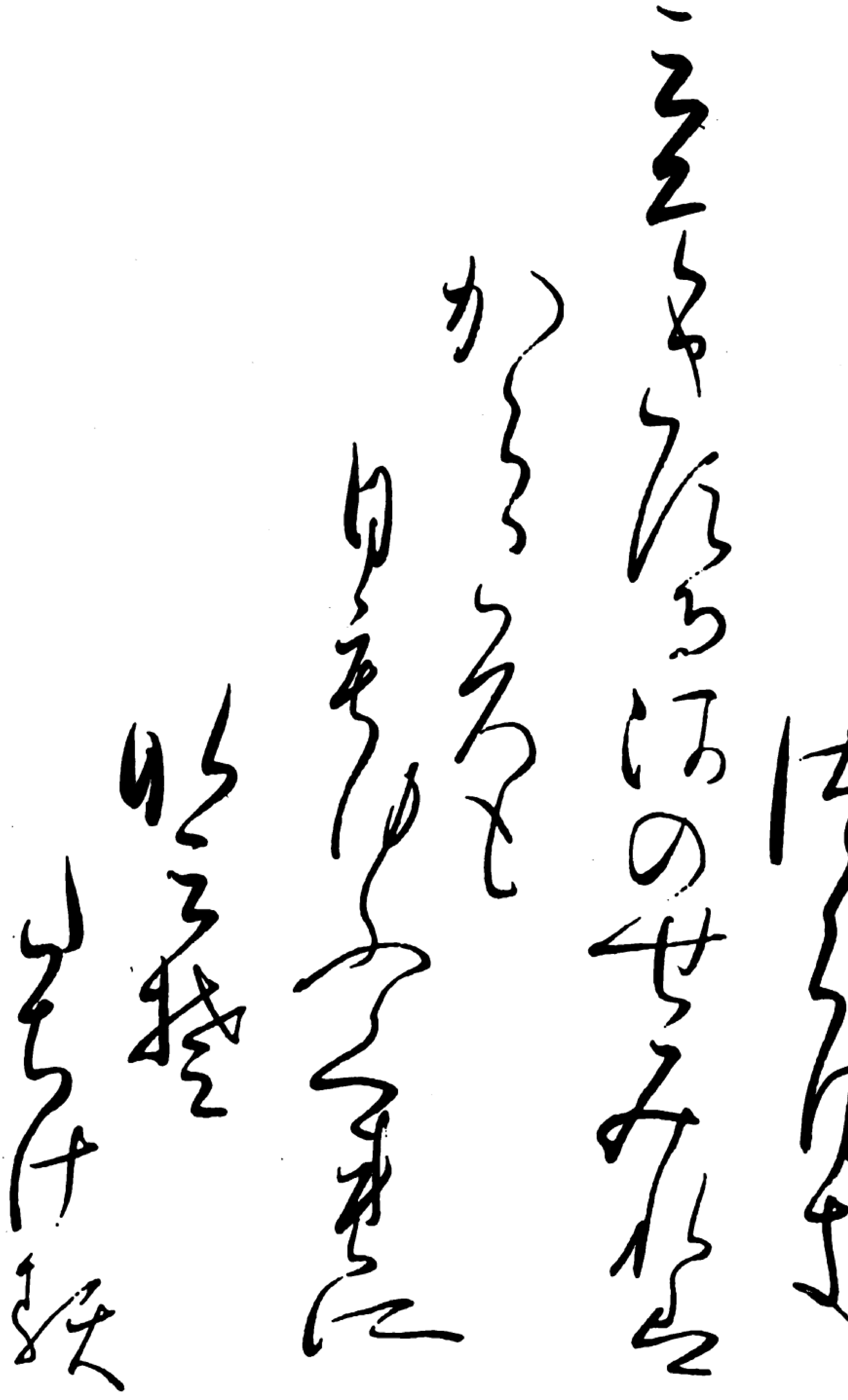
(丙の三)

多田鄭愛先生筆

藤原定家朝臣

玉ゆらの露も涙もとゝまらす
なき人こふる
やとの秋風

多田親愛先生筆



阪正臣先生筆

単衣　氷川祭

皐月闇　芸種

入梅　こつきうばこ

さみだれ　鳴蛙

坂正臣先生筆

大宮御園の御こゝろやりとして
御ゑらよりあそばさる深山よ
おろし下されあまざくは
この御稽は歌にて申上ぐたく
なべども申あゞこうえしく

なあく

百　合



野口小蘋女史筆

夏山雨後

野口小蘋女史筆



方四燀瀉



跡見花蹊女史筆

撫子

跡見花蹊女史筆



専賣特許

安全かみそり



定價

甲 壹圓五拾錢 替刄付箱納

乙 壹圓 紙函納

丙 七拾五錢

此新發明ノ特許品柄ノ先ニ車トネジアリ自在ニ回轉ス耳鼻穴ノ他ハ思通ニ剃レ小兒ノ頭ナ剃ルニハ至極妙陸海軍人海員海外移住者並ニ旅行ニハ是非必要品ナリ

發賣元 東京日本橋本石町一丁目廿六番地 三劍商店

◎東京女醫學校廣告◎

本校は明治卅三年の創立にして爾來志望者日を追ふて増加し漸次改善を加へ校務益々整頓せり此際一層の擴張を計り汎く生徒を募集す志望の姉妹は至急入學願書を差出さる可し

嚴重なる監督寄宿舍の設あり

東京市麹町區飯田町四丁目九番地

東京女醫學校事務所

◎婦人科 ◎小兒科 専門 女醫 鷲山彌生

東京市麹町區飯田町四丁目九番地

◎歐米流行新化粧品

目下佛國巴里を始め、其外歐米文明國貴顯紳士貴婦人間に最も賞用せられつゝある優等品なり

● 毛髪發生増殖液（原名ヘヤーウッチ） 甲五圓 乙三圓 丙一圓 丁五十錢（藥價）

● 毛髪發生脱毛劑（仝ヘヤーオミット） 甲五圓 乙三圓 丙一圓 丁五十錢（藥價）

● 美白光澤皮膚液（仝スフロスミン） 甲三圓 乙二圓 丙一圓 丁五十錢（藥價）

● 面皰斑點鑿止液（仝リ、オニース） 甲二圓 乙一圓八十錢 丙一圓 丁五十錢（藥價）

● 口中含嗽芳香液（仝ザンシエンクチユアー） 甲一圓 乙五十錢 丙二十錢

郵送料各十錢

● 其他雲南產正眞麝香、清涼ふけ止め、しらが染め巴里香水、香水入はみがき、其他數百種

內外藥種化粧品卸問屋 東京市日本橋區大通り本石町角

博愛堂本店（電話本局二一八六番）

◎御注文之際は即日發送仕候

（丁ノ二）

新刊圖書廣告

村井弦齋居士著　小峰大羽君畫

繪入下女讀本

全壹册洋裝美本製
正價金拾五錢
郵税四錢

本書目次

第一▲台所の心得
第二▲料理の心得
第三▲拭掃除の心得
第四▲洗濯の心得
第五▲衛生の心得
第六▲行儀の心得
第七▲子守の心得
第八▲平生の心得
第九▲證明書

今や教育の聲盛なり。然れども未だ一家の經濟と衛生とに大關係ある下女教育の必要を説くものなし。著者本書を著はして下女が執るべき任務の秩序と心得とを説き旁ら之に經濟衛生禮義道德の事を懇切平易に敎へ。以て下女の改良より延て家庭の改良に着手せんとす是亦方今社會の急務といふべし

村井弦齋居士著

繪入小僧讀本

全壹册洋裝美本正價拾貳錢郵税四錢

本書目次

第一 惡い小僧
第二 小僧の禁物
第三 小僧の心掛
第四 小僧の行儀
第五 小僧の貯蓄
第六 小僧の風儀
第七 小僧の勉學
第八 主人の撰擇
第九 小僧の辛抱

東京 發兌 元博文館 本町

(丁の二)

女子最良の習字手本

多田親愛先生書

（製本既成）

假名習字帖 古今和歌集序

全壹册綸子表紙大和綴装幀最優美

▲正價
中奉書紙刷上製　金壹圓貳拾錢　郵税六錢
上等美濃紙刷特別製　金九拾錢　郵税四錢

多田先生夙に書道を以て、畏き邊りに奉仕せられ、能書の聲譽は朝野に隠れなきを、今更喋々を要せず、然れども、翁は思ふ所ありて、是まで習字帖を上梓せられずありしが、追々老齢に向はるゝを以て、門人より頻りに之を請ふて止まず、翁また筆蹟の精熟せしを鑒み、門人及本館の請に應して、古今集の序を揮毫せられぬ、閑雅精麗の能筆、近世稀有なる女子習字の師範といふべし

下田歌子女史著
坂正臣先生書
●女子用文習字帖
全貳册　大判百四十四枚
正價八十錢　郵税四錢

橘千蔭翁書
●烏丸帖
全壹册主綴大判二十四枚
正價三十五錢　郵税四錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（十ノ四）



家庭と新聞紙

晩餐の後、家族團欒してくさ〳〵の談話をなすは一般家庭の有様なるが、是に依て快樂を増し、一日の勞を慰め又兼れて世間の事情をも知ることとなるが、その話頭に上る題目は主として新聞紙に記載されたる事項なり、斯くして吾人は廣く社會の事情を知り、智識を増し、見聞をも廣くし愉快と實益とを併せて得るものなれば、その利益は他のよき讀書と同じき効力あるものなり、されどいかゞはしき新聞紙の三面記事の中には随分卑猥にして親子兄弟對座して讀むに堪へざるものあり、こは新聞紙の理想の低しと言はんよりは、未だ社會の嗜好の高尚ならざるに基くものなれば、せめても新らしき健全なる家庭を作るの心掛ある主婦は新聞紙の選擇に深く注意すべきことなり。

福澤先生流行の說

開國文明の先達、新日本婦人の恩師福澤翁の文集を讀むに、先生が此の說を立てられしは今を距ること二十餘年の昔にありと雖も、猶よく今日の時弊に當るものあり、爰に其一端を掲げて大方の劉覽に供す。（記者）

衣服髮飾等すべて時の流行物は眞實其の品柄の貴きゆゑに流行するにあらず、世の中の人の心は思ひの外たわいもなきものにて唯流行とあれば、其の品柄の良否を吟味する者甚だ少し、故に流行が流行を導き流行する故に、其品の直段が高くなり、其直段が高きゆゑに益々流行することあり、之を物の馬鹿直と云ふ◉馬鹿直の品物を買ひて、悦ぶ馬鹿者には傍より異見の仕樣もあらず、老人が若い者に向ひて此品は高いから買ふなどといへば若い者は高いから買ふと云ひ、其異見する趣意も異見を聞かぬ趣意も丁度同じことにて迚も通用す可き異見にあらず如何にも困り果てたる譯なれとも若しも此若い者に少しにても商賣の心得あらば左まで法外なる馬鹿は盡されぬ筈なり、譬へば博多の丸帶の直段を聞くに十五圓より五十圓までといふ、御孃樣の目には一圓でも高い品が善く見へて五十圓の品をと云ふは當り前のことなれども、よく考へて見れば此帶地は絹糸で織たもので目方が二百目餘りあり、少し糊の目方もあれば糸の正味二百目として其代が今の相場で凡十圓内外これに染代織賃、仕入れ元金の利息、問屋少賣店の運賃一切掛て極々高く踏むも三十圓の上に、上る可らず今これを五十圓で買へば二十圓丈は品物の代にあらずして流行の代なり、其上に此流行も永くして來年まで續くとして一年十二ヶ月の流行に二十圓の馬鹿直を拂ひ一月に付一圓六十六錢の運上を納るの割合、然も此流行の源を尋れば猿若町の役者が柳橋の藝者より傳染したるものなり、との事を合點せば或は老人の異見なくとも自分に思ひ留ることもあるべし、返す〳〵も商賣の心得なくては世帶は持てぬものなり。

言語と品性

江原素六

世間往々にして理想の高卑を言へど、既に理想といへば卑いものはなき筈なり之に反して品性といへば甚だ上品に聞ゆれど品性こそ教育又は習慣の力によりて天壌の差を生ずるものなり、故に孔子は性相近く習は相遠しと曰へり、勿論孔子の言へる性とは「キャラクター」にあらず「テンペラメント」即ち氣質といふことならんが品性上に就て論ずれば殆んど異名にして同質のものならん。吾人國民教育に從事するものは國民品性上に就て種々注意せざるべからざるが言語も又其一ならん、佛說に兩舌、惡罵、妄語、綺語の四目を擧げて大に誡めり、儒教、基督教に於ける言語の訓誡は殆んど枚擧に遑あらず、華盛頓の語に、爾の語を充分に發し、又忙がしげに出す勿れ、秩序正しく明白に語れと。

斯る事は極めて容易なるが如くにして實は頗る困難なり、今日の青年又は少年輩に就して簡單にして能く了解し易く用談を陳ぶるもの甚だ少く僅かに入組たる問題を陳ぶる時は秩序もなく屢々重復し前後して其要領を得ること甚だ難し、殊に「アノ」「ソノ」「エー」「即ち」など無益の詞非常に多く、此際若し秩序正しく音聲朗かに簡潔にして且つ要領を得るときは大に其人の品性を高貴ならしむるものなり。殊に社會は日を追ふて復雜に趣き口上にあれ文書にあれ辭少くして意の明徹なるを要するなれば時として言語の功拙により大に要務の成敗を左右

することありと知るべし。

往昔蜂須賀家の祖先家政或時伏見御殿の大廣間にて石田三成に逢ひしが三成日頃家政の帯せる大刀を見只管に欲しく思ひ家政に向ひ願はくばその大刀を予に譲り玉はずやと懇望せしに家政は當時屈指の猛將にして日頃三成輩と伍を爲すを潔とせざるものから强がりて、三成に向ひこの大刀は腕に骨のあるものが帯べるものなりと答へぬ。三成は此の一言を深く恐れり。爲めに太閤に向つて家政を讒しその讒言入りて家政は久しく太閤の怒を解くこと能ざりし。

人の智徳進めば言語の過失自然に減ず、孔子曰く夫の人言はず、言へば必ず中るありと即ち理に中りたる事を言へるなり。

言語に就て最も大なる問題は家庭上にあり、家庭に於て或は他人の過失を噂さし、猥褻なる語、金錢上に於ける不義の談話、若しくは藝妓娼妓の事柄などは非常に其の子女の品性を卑下するものなり、一例をいへば一人の書生或る有名なる博士の宅へ参り食料持参致す故是非書生として御使ひ下さるべしと請ひけるに、其家の主婦答へて書生を置けば損が立つ故嫌ひなりと言はれき、書生曰く斯る立派なる家に住ゐて猶書生を置きて儲ける積りかやと双方共に何ぞ其の語の野卑なるや。

青年男女の不品行は其原因種々ありと雖も家庭の言語も又其一因ならん、人は心に知りたる事を實行せんと欲するものなり。未だ聞かざる事を知る筈はなし、而して誰れか語らずして聞く事あらん。家庭の言語豈等閑に附すべけんや。

夫婦の獨立

女學記者

凡そ人として此の世に生を稟けたるものは皆必らず獨立すべきものなり、文明社會は獨立の人に依つて組識さるゝものなれば、獨立の出來ざるものは文明社會の人にあらず、又獨立は決して男女に依つて區別すべきものにあらず、男子元より獨立せざるべからず、女子も又獨立せざるべからず、獨立の出來ざる男子は女子の厄介物たると同じく、獨立の出來ざる女子は又男子の厄介物たり、獨立の男女相合ふて茲に始めて眞成の夫婦てふものを作り、眞成の夫婦あッて茲に始めて家てふものを組織すべし。世界廣しと雖も未だ獨立の男女にあらずして眞成の夫婦を作るものあらず、又獨立の夫婦にあらずして眞成の家を作るものはあらざるなり。縱へその家は宮殿の如く立派なるも、縱へその夫婦はお雛樣の如くに美麗なるも、獨立の眞價なき夫婦は社會の寄生虫たるに過ぎず、その家は空中樓閣のみ風吹かば倒るべし。されど獨立の男女に依つて組織されたる家は、如何なる狂風怒濤に遭ふも容易に倒れざるなり、又容易に碎けざるなり、人間社會に獨立の貴き以て知るべきなり。

然らば人は如何にして獨立すべきものなるか、一言にして、之を盡さば、他人の厄介にならぬやうにするなり、他人の厄介にならぬ是れ誠に容易なるが如くにして實は容易にあらず、自分一身の計を自からするは人間獨立の第一要義にして、これを爲すにはまづ一人前の健康、一人前の思慮、一人前の能力、即ち此の三つの物を具備せざるべからず、而してこの三者を程よく働らかす爲めの活動、忍耐、勤勉なかるべからず是等の性能を一身に具備せしめて世に處す、即ち始めて獨立の人たるを得べし。

從來日本の女子が動もすれば、男子の玩弄物と見做され、厄介物と見做され、所有物と見做され。家に在りて、對等の地位に居かれず、社會に出で丶は輕侮せられ、役に立たぬもの、未熟なるもの、智慧の淺きものとして見くびられたるものは主としてこの獨立の要素に於て缺く處ろあるを以てなり。婦人にして若し此の獨立の要素を具備せしならば、決して斯る侮蔑を受くるに至らざるなり、而してこの獨立の要素を作るものは專ら學問の力にして、千種萬種の學藝、畢竟するに獨立の要素を作るの資料たらざるなし、女子が學問を務むべき所以即ち是にありと言はざるべからず。さりながら女子が獨立すべきに就ては男子と同じく又その順序なかるべからず、年齢未熟の少女に向つて直ちに獨立の要義を求む、元より無理な註文なるべし。然れども未熟の間に於ても又其の覺悟なかるべからず。女子が學問修業の間は慈愛に富める父母よりその資を仰ぎて一定の年限を是に費やすものなれば、その間は所謂社會の厄介物にして未だ獨立の人にあらず、故に或る程度までは父母長上の命に從ひ、教師の訓戒に從ひ、他人の監督によりて其の身を處せざるべからず。然れども他日必らず獨立すべきものなれば、その時代に於てもなるべく獨立の意志を以て身を處し、なるべく他人に事を依賴するの念を去らざるべからず、萬事萬般自分の事は自分の能力を以て事を處するの習慣を養はざるべからず、即ち獨立の覺悟を定むるものにして、他日獨立の基礎を立つるものなり。

婦人一たび嫁して夫に從ふ、是に於てか始めて獨立の要あり。自から獨立して而して後に夫の獨立を助け、以てその家を計營せざるべからず、是れ婦人第一の務めなり、女子が人として世に處するの務め是より大なるものはあらず、此の時に當れば、眼中最早父母なく兄弟なし、唯在るものは自分と一身同體なる自分の良

人のみ、毀譽、褒貶は更なり、窮達も榮枯も苦樂も艱難も共にすべきものはその良人にして、利害得失、皆悉く此の一點より割出さゞるべからず、是れ即ち男女獨立の要義なり。是に於てか始めて眞成の夫婦たるべし、既に夫婦の結合成りて而して後に父母あり以て孝養すべし。兒孫あり以て養育すべし如何なる場合に於ても未だ夫婦の結合なくしてその父母に殉ずるの所以を知らざるなり。

斯くいへば世に多少の反對者を生ずべし、殊に東洋道德を重んずるの人々は得たり賢こしとて吾が論に攻撃の箭を放つべし、さりながら、世の道理は道理にして古來の習慣や情實に拘泥すべきものにあらず、如何なる場合に於ても未だ夫婦の關係を第二にして親子の關係を第一にするの所以を知らず夫婦あつて始めて家あり、家あつて後親あり、子あるなり夫婦は元なり父母は次なり、未だ夫婦の利害を捨てゝ父母の利害に走るの所以を知らず。不幸にして父母自から立つこと能はざれば夫婦に於て是を保護すべし、是れ當然の義務なり、然れども夫婦自ら立つ事能はずして、父母の保護を仰ぐ世に斯の如き不道理はあらざるなり。故にまづ夫婦立ちて家を成し家を成して後ち父母の孝養に及ぶ。夫婦の獨立は第一にして、世間百般の事皆この獨立よりして成るべし。然るに東洋道德の餘弊が社會に瀰蔓して夫婦の獨立を妨ぐるの例甚だ尠からず。彼の妻女が身を賣つて父母の衣食を貢ぐことあり。又亭主が妻を去つて父母に孝養を盡すことあり。而して世間は是れを孝子の例に數へ、自からも又孝行を盡したりと信ず、誠に苦々しき次第にして此の如くは是れ文明社會の秩序を紊亂する罪人といふべし。



婦女雜觀

女子と手紙

大町桂月

賢母良妻として、文章の用ゐ處は、手紙をかくことに有之候。上奏文をかく必要もなく、檄文をかく必要もなく、議論文をかく必要もなく、優雅なる美文をかく必要もなく候。侍る、こそけれの擬古文をかいた處が、何の役にもたち申さず、たゞ手紙が達者にかけて、自由自在に意を達するを得ば、それで賢母良妻の文章上の能事は畢り申候。

在來、高等女學校などに於ける文章の敎へ方、大にあやまり居候。讀本には、中古文、もしくば擬古文おほく、從つて、作文にも、擬古文を作らしめ候ふが、これがその誤れる點に候。成程、擬古文は、優美にて、女子に相應しきが如く候へども、少しも實際に役立ち申さず、殊に中等敎育程度の者が擬古文を作りたればとて、たゞ文字に拘束せらるゝのみにて、十分に意を達しうべきものに非ず候。文章は達意を以て主とせざるべからざるに、擬古の文體は、達意をよそにして、美なる外形を以て、優美に言ひあらはさむとするものに候へば、決して、中等敎育に課すべきものには非ず候。たゞ文才あるものが、普通文を作る餘力を以て、擬古文を作るは、啻に差支なきのみならず、洵に結構なることに候へども、主客を轉倒して、擬古文が書けて、普通文が書けざるに至りては、これ一種の不具に候。作文の眞意を誤れる者に候。普通文が野卑にして女子に適せざるやうなら、まだしも、普通文なればとて、優美にかけざるものに非ず候。更に一歩進みて、普通文も、賢母良妻には、さまで必要ならず。唯手紙が書ければ、それで十分と存じ候。擬古文にて十分に意を達せむとは、專門の國文學者にても、なほ困難なることにて、これを中等敎育程度の女子に強ふるは、無理に候。高等女學校を卒業せるもの、おぼつかなき古

語をならべて、擬古文らしきものを作るもの少なからぬやうに候へと、手紙がよくかけるものは、極めて稀なるやうに見受け申候。手紙が書けざるにあらざるも、意盡さず、情盡さず、靴を隔てゝ痒をかくやうに覺え申候。かくては、文を學びたる甲斐無之、敎ふるものも間違ゐ居れば、學ぶものも不心得千万と存じ候。

擬古文は作る必要なし、普通文を作るべく候。普通文も作らずともよろしく、手紙かくことを學ぶべく候。その文体は、言文一致体にてよろしく、必ずしも書簡文体ならずともよろしく候。唯自由自在に筆が廻りて、意をつくし、情をつくせば、それで十分に候。

文はやりたし、書く手は持たずとは、古の敎育なきもの丶述懐に候ふが、今の世の賢母良妻は、手紙かけざるにあらざるも、美事にはかけず。爲にやりたき處にやらず。かいてやるも、たゞざつと用事を記するのみにて、筆を十分にのばす能はざるもの多く候。かくては高等女學校に學びたる甲斐なく候はずや。賢母良妻には、家庭を治むるが、その主任に候へとも、手紙をかゝざるべからざる場合、頗る多く、また夫の職業如何によりてはその代筆せざるべからざることもあるべく候。手紙をかくことは、實に賢母良妻に缺くべからざる一大資格に候。女子もそのつもりにて、手紙かくことに熟達せざるべからずと存じ候。

女子に限らず、男子でも、物名など漢字にてかゝねば、無學と見られて、耻にならむと思ふが常に候へとも、これも間違ゐたることに候。漢學に達したる人とても、成るべくむつかしき漢字を用ゐずして、普通一般に通ずるやうな書き方をするがよろしく候。杜鵑、杜宇、子規、郭公、蜀魂、不如歸とかゝずとも、ほとゝぎすとかきてよろしく候。心太とかゝずとも、ところてんとかきてよろしく候。かゝる類を漢字でかゝねばならずと思ふより、手紙かくことが、おつくうになるべく候。たゞ假名遣は間違へぬやうにありたきものに候ふが、これは中等敎育をうけたるものには、困難なることにはあらざるべしと存じ候。

今日用ゐ居る女子の書簡文は、男子の書簡文と異な

る所有之、無暗に多くゟを用ゐ候へども、女子の手紙とても、わざわざ男子のと異ならしむるを要せず、男子と同じ書方にて可なるべしと存じ申し候。

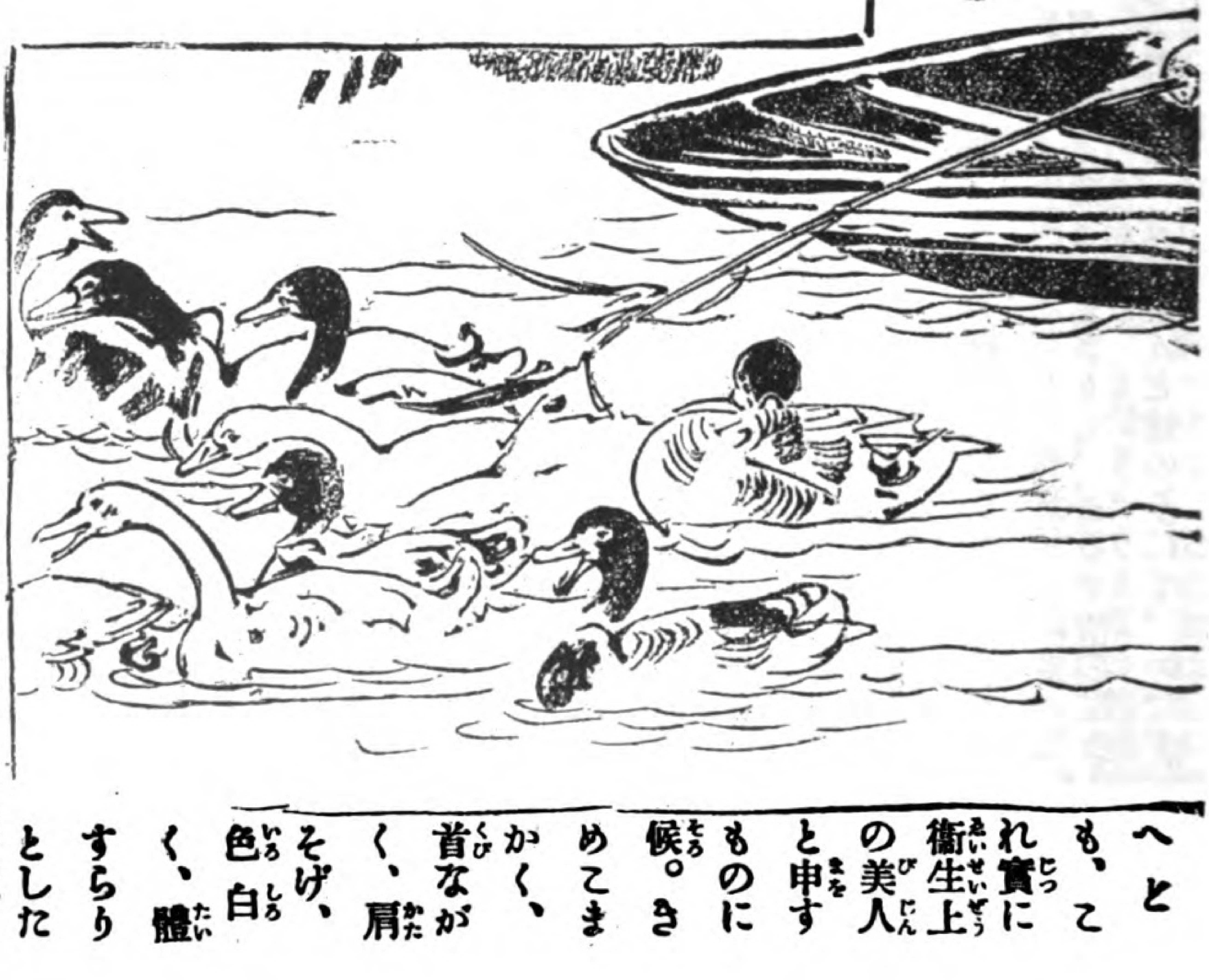
手紙かくにつれて、必要なるは、筆蹟に候。文字がぞんざいにして、きたなく、且つ拙く候らはゞ、その人品も何となく下等なるやうに思はるゝものに候。之に反して、



文字美なれば、その人品もゆかしく思はれ申候。女子も高等女學校を終るまでには、成るべく多く習字の稽古したきものに候。たゞ字を習ふのみならず、細字をかくとにも熟したきものに候。筆蹟達者にして、且つうるはしく、その手紙の文も縱横自在にして。かゆい處に手の届く如く、趣味あり、情味もあり候はゞ、啻に用事を辨ずるに都合よきのみならず、その人品にもねうちがつくものに候。

衛生上の美人

きめあらく、色くろく、顏はひらべつたく、腰は大道臼の如くふとき女、或はお氣に入らぬかも知れず候へども、これ實に衛生上の美人と申すものに候。きめこまかく、首ながく、肩そげ、色白く、體すらりとしたるは、見ては美に候へども、これは肺病の特徴の由に

候。世の幸福の源は、まづ身體の健康に候。身體の壯健なるうちは、慣れて何とも思はざるべけれども、重き病氣にかゝつて御覧候へ。何を見ても面白からず、何を食つてもうまからず、體はいたむし、氣はふさぐし、苦しい思をして、それで金がかゝつて、これほど馬鹿々々しきものは無之候。殊に細君の病めるは、まるで火の消えたやうにて、家庭の幸福の大半はなくなり申候。申すまでも無之候へども、細君は、床の間の置物にはあらず、唯その形のみを見るべきものにあらず候。必ず〱色にのみ迷ひ給ふと莫れ。顔は二の町なりとも、體の壯健なる女を御撰びなさるべく候。

男をもつて痩せたいぞとは、近松の院本の文句にて、女子の情をのべたるものに候ふが、今に日本の女子は、この考を持ち居るこそ、なげかはしく候へ。痩せたい〱と申す女は有之候へども、肥りたい〱と申す女は、一人も無之、誰も肥り居ることを耻るやうに候ふが、これ甚だ以てわけの分らぬことに候。足利義氏とか申す人は、無類の勇力あるものにて、無類の醜婦、おつといや、無類の衛生上の美人なる板額をば、自から乞うて妻となしたる由、そのわけは、斯る衛生上の美人を妻として非凡なる勇士を生みたしとの事に候。これは尤も至極なる心掛と存候。生とし生けるものゝ第一の役目は、子を生むことに候。それも弱き子うみては、十分に役目をはたしたるものとは申されず候。女も痩せたいなどいふ不了簡を起さずに、ふとりて、大に壯健にならむとするが、女の第一のつとめに候。家にのみ座つて居らずと、大に運動すべく候。體育が、女子敎育中の最も重きものに候。海水浴にゆけば、色が黒くなるから、いや、などゝ云ふべからず候。世のわからず屋におてんばと云はれても、かまふとなし、自轉車にのるもよろしく候。

同情

男は知と意とがまさりて、まるで情のなき人少なからざれども、女は殆んど情のみにて、かたまり居候。

かく情のみにてかたまり居らば、從つて同情があるかと申すに、さうは參らず候。
　女は情に富むもの、、情が激しては、隨分不人情なこともいたし候。女は弱く、且つ臆病なるものに候へども、丑の時參りと申して、夜の二時頃、獨りで寂いしお宮のある處へ參り、恨める人をのろひ殺すわざをいたし、例少からざりし由、物の本に傳へ申候。瞋恚のほむら、胸にきざしては、同情もあつたものに非ず、男よりも、もそつと殘酷なることをいたし候。同情の反對なる嫉妬心は、男よりも、女の方が強く候。下女などに對して、無慈悲きはまる奧樣も多く候。あによめをいじむる鬼千疋も多く候。嫁をいじむる姑も多く候。姑をいじむる嫁も多く候。女が女をはむることは滅多になく候。本妻がめかけを敵視するは、言はずもがな、女同士よりあへば、靄々たる和氣は決して無之候。
　同情多かるべき筈の女子にして、かく同情の反對の結果あるは、何故ぞと申すに、元來、情は盲目にて、知が加はらずば、往々方向をあやまり申候。知が勝ちすぎては、冷になり候へども、知の加はらぬ盲目の情は、同情にもなれど、またとんでもなき無慈悲なることをしでかし申候。女はまた度量せまく候へば、思ひつめて、同情をも何處かへ追ひやつてしまひ申候。女はまた私情つよくして、一身もしくは一家のみを氣にいたし候故、金の二三圓も人にめぐむのを、國家が亡ぶるやうに思ひ候へば、同情を表出するに由なく候。
先づざつと、このやうなものに候。
　同情は人の美德に候。殊に婦人の美德に候。而して婦人をして、この美德を全うせしめむには、私情を押へ、度量をひろくし、知をみがくの外なく候。

懸賞 日本大地主の家事經濟

（投書〆切八月十日限）

家事經濟に關する廣汎なる智識を養成し、智見を弘くして以て世事に應ずるは女子教育の主眼たり、學問は必ずしも理科、博物、歷史、地理に限らず、活計を知り、世帶を知り、深く世上の生活狀態を識りて之が應用に敏なるものこそ眞に學問の活用を得たるものといふべし。本誌深く是に見る所あり今回全國各階級に於ける生活の事情を明かにしその得たる材料を取捨して是を九月以後の定期增刊誌上に揭載せんと欲す、是れ一は現在世帶の主働者たる主婦の參考に供し、一は學窓生徒の應用に資し、普く家政的智識の普及を謀るの趣旨に出でたるものなり冀くは江湖の家事に熱心なる諸氏の奮て寄稿されん事を（女學記者識）

懸賞金
- 一等　金貳拾圓　一名
- 二等　金拾圓　一名
- 三等　金貳圓　五名

（十行二十字詰紙數十五枚まで）

【投稿注意】

▲本文　現代家政學上の資料とすべき者なれば成宜く文飾を避け事實有の儘なるを望む

▲大地主の標準　耕地十町以上、又は直接國税三百圓以上を納むる農家、若しくは傍ら商工業を營む地主を標準とし、成宜くは其地方にありて數代連綿たる名望家か、又は品位、德望ある家に就て記すべし。但し家名は變名にて差支なし

▲家の由來　祖先は如何にして家を興し如何にして身代を作りしか、勤儉忍耐家名を興せし著るしき事歴あればこれを記されたし

▲現在の地位　家の地位、名望、勢力並に家産の大躰を記し、その家の現在の特色を記すべし又農家の外に商工業を營む家ならばその商工業の有樣をも記されたし

▲生活事情　年中行事、冠婚葬祭、家族、雇人、衣食住、日常生活の狀態、其他小作人の關係。家風、娛樂、百般生活上の狀態を詳細に記すべし殊に近來文明の進步に伴ひ、地方富豪の生活狀態も多少の變狀を來したる向もあるべしそれ等の事項は別けて詳しく記載し相互の參考となるやう務められたし

▲經濟事情　收入、支出、租税、敎育費用、物價、賃銀、給料、其他金穀の出納に關する事一切洩なく記載ありたし

▲收支計算表　一年間の收入、經費若しくは一ヶ月間の收支計算表を造り明細に記載されたし

八月以後募集の項目

▲都鄙中等社會の家計

▲日本小作人の世帶

▲舊大名奥向の經濟

▲現代華族の家政

黒田畫伯の配色談

飾装に意を用ゆるのは女子の先天的習慣であるが 日本人の其習慣は慥かに西洋人より劣つて居る所がある、譬へて言へば日本では納戸色が 流行すると誰でも彼でも納戸に適せぬ人も適する人も皆納戸色の衣服を着る、又紫の流行する時は紫許りを好み色の配合だの調和には少も注意しないのである 然るに西洋では婦人が帽子を購ふ時は自分の皮膚の色と其の反對色を選ぶので、衣類でも其他の裝飾品でも總べて此の如く色の 配合に注意する、紅顔者流は其の反對色なる緑色とか、又顔色蒼白なる人は紅にて 彩れるものを擇ぶとか總べて皮膚の色と相反映せしむると云ふ風である又色の引立つとか引立たぬとか、或は品位のよしあしは皆其色を彩れる色の 配合如何に依るものであるそれ故万人に通じ誰にも彼にも適すべき色のある筈はない、此等の簡易な事理をさへ解し得ない人の多いのは實に殘念ではないか、それで今簡單に色の配合、色の區別色の性質を話して見よう、先づ赤青黄の三色を 主色として此三色の混じ方で總ての色が出來るのである、譬ば赤と青を混じると紫といふ色が出來る、赤青と 黄を混ずれば緑となり、黄と赤を混ずれば樺色となる、是則ち造色の方法だ扨て前にも述べた赤青黄の三色が 主色で青は寒色、赤は温色、黄が中間色で青は又温色に屬するものである 寒色は温色の反對色で、紫緑は中間色であるが寒色に屬して居る、又黄、樺色は温色に屬するものであるから此の寒温二色を程よく 調和すれば宜いのである、それで寒色と寒色を並列せればならぬ場合には此二色の間へ白の線を入れて 調和すればよい、但し金銀の如き金屬性の色は寒温色を問はず何の色でも調合し得る、黒白の二色は極色と名付け是亦金銀と同じく配合し得らるゝのである、然し場合に 依ると黒と赤との配合が凄い感情をあたへる場合も有る、而して青、赤は反對色では有るが 此二色を並べると餘り高尚な感じはせぬ故此れも白を間へ入れた方がよい、以上述べた樣な風に色の配合を以て 頭の飾りから衣服下駄シーヨル等に注意すればよいのである云々

家庭

婦人の身たしなみ

（修容と裝飾）

某禮法師範の談

美麗を愛し又美麗ならんことを希ふは人間に固有する最も高尚なる性情で在つて、殊に婦人に於ては貞操や慈愛と並べて最も重要なるは此の美を愛するといふ心である。此の心即ち修容の美德は人格を高雅に進むる性能を有てゐる。故に之を等閑に附し去るは決して文明人の事でない。

然るに世間は往々之を誤解して修容を無益徒勞の事のやうに思ひ、鏡に對つて容を整ふる少女を見て惡様に言ひ罵るのである、頃來或新聞紙上に八釜しく言ふて居る女學生白粉禁止問題の如きは此の誤解より來たものと思はるゝ。

紅粉を粧ひ頭髮を梳るをメカシだのお洒落だのと言ふて花柳社會專有の惡風の樣にいふのは、大變な間違である、古昔は宮中で女官が紅白粉を用ゐぬのは弔祭凶禮の時に限るとしてある。支那などでも殊に此の一事を重く云ひ爲し、歐羅巴では正式の宴會を初め、招請訪問などに至るまでも必ず華やかに飾り立てゝ行くのが禮である。それで主人の方でも化粧の間を設備して客の修容に供へてある。此の通り修容の美風は古今東西其の軌を同じうして居るのである。

人間には修容の美德といふものが自然に授けられてあるにも拘はらず、之を忽諸にして外貌を修めざる時は成長の後不檢束なる習癖を有して、その顔容無精らしく、其の衣服だらしなく、其の家庭不整頓にて、見るに堪へざる不躰裁を極むるに至る。西洋の諺にも美

麗を尊み四肢鼻口を清潔にし清淨なる衣服を着け頭髪を好く理めたる少年少女は後來美麗なる家屋に住し精巧なる珍寶を以て其の身を纏ふ運命を有すと云ふとがあるが是はさもあるべき事である。

然るに近時女生徒風と稱へて、磊落無頓着を粧ふことが流行するのは嘆かはしい事である、此等の徒は頭も理めず衣服も垢付たるを殊更に自慢らしく衒ひ、亂暴極る風俗を敢て爲てゐる。かくの如きは己の放逸無趣味をさらけ出すは無論のこと、人に對しても無禮であらう。殊に女子として趣味の無いといふことを顯すは如何にも恥づかしい次第ではあるまいか。こんな事で何うして將來母となり主婦となつて家庭を美しくして行くことが出來やう。

尊者の前には襟を正すと云ふことがある、襟を正すは身構をして容儀を整ふるので、取も直さず之に依て敬度の意思を表すのである。然るに未來の主婦となり母となるべき而も現任にあつては最も高潔清秀なるべき女學生の身でありながら亂髪敝衣で恥づる所なく、平然として講堂に入る如きは言語同斷、教師に對して無禮なる計でなく學校を侮辱すると言はざるを得ない。此の放縱不檢束の風は今や方に多くの女學校を吹き荒みつゝあるが上に、或一派の論者の如きは之を矯正せんとはせずして却て之を助長するの言辭をなすのであるが、誤れるも亦た甚しいのである。

然し斯くいへばとて、決して厚化粧せよと言ふのではない、をメカシをせよといふのでは無い。物には程度のあるものだから、修容に就ても其の程度に注意して修容の精神を失はぬやうに致したきものである。動もすれば此の修容を小楯にお洒落を專らにするものが無きにしも限らぬから、學校及家庭に於ては修容の程度を考へて監督を怠らぬやうに在りたきことである。程度と言ふてもさのみ六ヶ敷事ではない、第一に清潔を主とすること、第二に驕奢に流れぬやうに注意すること、第三に高尚の理想に伴ふべき高潔の意匠に則ること、此の三つを忘れざる樣にすれば其で宜いのである彼の修容といふ美名の下に野卑なる花柳社會の惡趣味

を傳播するが如き、又た驕奢贅澤の風を作るが如き、或は之が爲に無用の時間を費すが如きは斷じて許す可からざる事である。

東北の某女學校では毎朝生徒が教場に入る前に控席に備へてある姿



見鏡の前で髪を理め衣紋を整へて而して後教場に入やうにしてある所がある。そして其拔毛や手拭紙を賣拂つた金で櫛とか手巾とかを買ふと云ふ面白い仕組に成つて居るさうだが、どうか何れの女學

校の生徒も是位のたしなみは有りたいものである。扨又女子の服飾は能くその體格容貌に適ひて恰好したるを最も良とす、如何にその衣服の地質は立派にして多くの黄金を費したとてもその體貌に不似合なるは決して美貌を形つくる所以では無い、體貌に適へる洋布の衣裳は不恰好な絹製の衣服に優るとは巴理婦人の理諺である。

凡て容儀の都雅なのは時の風を守りて極端に趨らぬ所に在る、然るにむかし氣質の老婦人などは往々流行衣や凡ての時様を卑むことがあるが、それは餘りに片意地偏窟と云はねばならぬ。事物の變遷は自然の趨勢で變遷がなければ活動が無い、活動の無いものは死物である、この生きた世の中で、生きた人間がどうして死物に安ずることが出來やう、それは人間の心計りでは無い天地間一切の萬有草でも木でも變化の無いものは無い月の光までが春は朧に霞み、秋は冴ゆる、春に成れば草木は綠の衣を着る秋になれば木々の梢に織ではないか、して見れば時様、流行は人の心に避くることの出來ぬ自然の趨勢であらう、然し何程流行が自然だからと云ふて夏から冬に一足飛をする樣に急劇な移り變りは宜しく無い、花柳の巷などの下等社界にはまゝこの急劇なる流行の變化を見ることがあるが、それは極めて非淑女的である。

流行と云へば所謂移り變りであるが、然し全く新樣をつくるものでは無くて、丁度環の巡りて端なきが如くに幾度も流行を操り返すに過ぎぬ、長き羽織が流行するかと思へば短き羽織の流行は暫くにして來る、さうかと思へば須叓にして又長く成る、小紋の模樣、納戸の染色、其他帶の巾の廣狹等一として古い流行を操返さぬは無い。

この現象を一寸見ると流行は非常にその物の變化するかの樣に思はるゝが決して然樣では無い、只々その組織せる要素を組み變へ或は入れ變ふるに過ぎない、例ば、茲に茶と納戸との織色があるとすれば、或時はその茶の部分が多く成り或時は少くなると云ふに外ならぬ。元と人心の好尚は常住不動の者であつて、斯樣に

色に就ても配合に就ても人の嗜好は少しも變らぬものである故にこれを基として行けば自ら流行を造ることが出來る即ちその人の新意匠を顯すことが出來る今茲に流行は何樣に變化しても其には關係せざる原則の二三を記して讀者が衣服撰擇の參考に供せむ

一凡ての物は羽織と云はず帶と云はずその色彩に由て其物に大小ある如く感ぜらるゝもので即ち白又は納戸等は其着する人を實際よりも大く見せ、黑又は茶等の如く濃暗の色は小く見する、又この衣服の色彩は顏貌及び顏色に由て配合の好きと惡しきとがある例へば黑色の衣服は白き人、顏の細面の人に克く似合ふの類、

一衣服の色の配合は大にその風貌の美觀に關係を持つものであるから二種以上の異色はその配合の適否に由ては時として互にその美を奪ひ合ふことがある下衣と上衣の取合せ羽織とショールとの色の配合なとは殊に注意を用ふべき點である、假令ば藍微塵の衣物を着て赤味の勝つた肩掛を用ふるが如きは頗るその色の美を損ふものである、取合よきは、鼠小紋或は納戸地の衣服には黑色灰色の類、黑色の衣服には白樺橙色などの肩掛が尤も取合よからむ。又夜間美にして日中に然程引き立たざる色あり日中は美にして燈の光に照して餘り麗はしからぬ色合がある、これ等も注意すべき一要件である例之ば紅色白色なとは晝間よりも夜間にはえあり。薔薇色綠色は夜間は餘り麗しからぬも日光にて見る時は大に見晴がする類である。

此他竪線の多き織物が人の身長を延して見せ又横線が低く見する理て肥滿した人、丈低い人には横じまの衣類を忌む。或は時候に由て衣服の染樣を異にする斯樣に擧げ來れば際限も無い事であるが、然しこの修容及び修飾に附屬した諸種の注意は決して無益徒勞の一言を以て排斥することを許さぬ。それは古い諺にも衣服の整へる婦人は身たしなみ無き婦人に比して善良なる行爲を爲すといふことがある。

食物のはなし

塚本はま子

食物のはなしも、隨分種々な雜誌に、澤山に出で居りますが、何れも、季節料理とか、お獻立とかで、食物はなぜ夫ほど、私どもが重く考へ、研究せねばならぬのか、といふ事はあまり書いてないやうですから、こゝでは甚だ面倒な角張つた、女らしくない事を申すやうですが、食物の大切な原理を少し述べて見ませう

▲命は食にあり

とか申しまして、人の身體を健康にしやうとするには、衣食住の三つの中で、一番食物に氣をつけねばならぬのです。御覽なさい、古代人間が播殖した土地は何所でも地味が肥えて勢力をらずに食物を得られた土地です。埃及のナイル河畔や、西部亞細亞の、ユーフラチイス河とダイグリス河との間などが、よくその例に出る所で、何れも野生の小麥があつたとか牧畜に適したとか、夫れは夫れはまことに結構な事實ばかりです。ことに其後起つた人種の移轉の跡をたづねて見ましても、人文進歩の道、人民强健の度、何れも主な原因は、まづ食物が豐かで良いのに歸さなければなりませぬ。國民としての强弱も、個人としての健否も、體力の多少とか、元氣のよしわしとか何れも皆よい、食物を食べればよく、惡い食物を食べれば惡い、といふ事はまことに明かな事實です。

ところがどうも日本の人に外の事の進んで居る割合に一般に科學的の事、特に衞生上の智識がそれほどでないやうです。尤も德義上の理屈や、制裁は或點に至つては、歐米諸國に負けぬところか勝さつたほど、鎖港の昔から發達して居つたのですからどんな田舍の山の中や、都の卑い生活塲裏に暮して居るものでも、天子樣の有難い事や、父子兄弟の大切な事などは、知らぬ者もないほどですからこれ等の知識は、よしや廣い意味に用ひられないにしても、身分相應には發達して居りますが、衞生上の事などは、却て欲を削ぎ忍耐を

練習する爲に、粗食を賞し、飲食を卑しみ、反對な結果まで起して居るやうですから、中々一朝一夕に普く世人に分からせるといふ事が難かしいのかも知れませぬが、狭い島國に蟄居してゐた昔とちがい、世界の舞臺で、先進國といはれて居る、歐米人と手を取つて跳もせねばならず、競爭もせねばならぬ世の中ですからやはりそれに耐えるだけの身體になるやう衛生上にも注意せねばならぬのです、如何に精神的、精神的と申しても『健全な精神は健全な身體に宿る』で、まづ身體を健全にして、健全な精神を宿すに差支ないやうせねばならぬので、夫れには第一人體は何うして生活をして行くか、何に因つて生長が出來るか、それから研究をせねばならぬのです。

一體人の身體は、たとへ眠つて居つても、息んで居つても、苟りにも生活て居るといはれる以上は、堪えず心意だの身體だのが活動して居るもので、睡眠中ねがへりをしたり、呼吸をしたり、循環の續いて居る事、食物の消化れる事などは、その證據でしやう。かやうに絶えず心意や身體が活動することの出來るのは原因なしではありませぬ、亦體内の諸機關が、一秒一分も休みなく、活動を續けるからです。ところで何うしてそれなら、體内の諸機關は、絶えず活動が續けられるかと申しますと、諸機關を組織て居ます、諸成分が化學的變化を常に起して居るからなので、丁度石炭が燃えて(化學的變化)その力で蒸氣機關を動かすと同樣です。そしてこの化學的變化の爲に出來たものは、體内にあつても、もう何にも役に立たぬものですから、生理上の機能で、絶えず呼出氣や、汗や尿などになつて、身體の外部へ排泄しますので、生活體の諸機關は、年中一秒も止みまなく消耗して人體は時々刻々、衰弱し終には全く生活の出來なくなるまでになるべき筈です。何とお互に心細い次第ではありませぬか。

併しさほど心配して、恐れずとも健全に生活を續けて行くのには、この時々刻々消耗して行く身體組織の諸部分を補へばよい筈です。即ち食物は唯一の補充すべき物質で、食物の外には何物もこれを補ふ事は出來

ませぬ。實に食物は生活の基で、この原理が分つてこそ『命は食にあり』といふ諺の味が眞實に解決されるのです。決して榮耀に食物を取つたり我まゝにすき嫌ひなどをしたりしてはならぬ事が、分りましよう。隨つてまた口腹の爲に、食事を望み、餓を癒やす爲に、食物を求めるといふやうなのは、謬見だといふ事も分らねばなりませぬ。

そこで今度は、體內諸機關の補充に用ひる物質は何が一番よからうか、また何々であらうかといふ事は、第一研究べて見ねばならぬ問題ですが、人體の消耗を補充するのが目的ですから、まづ人體成分をしらべて、略々これと似たもので補つたらよからうとは、誰れにも分かる理屈でしよう



▲人體はどんな成分から出來て居るか

とたづねますと、まわざッと水、蛋白質物、脂肪、炭水化物、(含水炭素ともいふ)鑛物質といふ五ツの成分から出來て居るのです。その中でも、水は一番餘計で、體重の七割以上八割位までは水だと申しますから、十貫目の人でも、七貫目以上八貫目は水の重さだと思

はれます。その役目は、食物から出來た身體の養分を運送したり、化學的變化で出來たいらない物を體外に運びだしたりして、絶えず汗や液といふ水尿の形で排泄をされてゐます。次の蛋白質物と申すのは、水のやうに多量に含まれては居りませぬが、身體の組織の本質とでもいはねばならぬほど大切なもので、身體中どこの機關でも蛋白質で搆成てない所はないほどで、その役目は、酸化されゝば體温や體力を生じるのですが、人體が生長する時節幼少の時代とかまた姙娠中の婦人とか、その外病後身體の衰弱して居る時分などにはことに組織の本質ですから、よほど大切であつて、外の物で代用の出來ぬものです。脂肪と申すのは、人



によつて多いのも少いのもありますが、一般には男子より女子の方が多いのです。瘠せた人になれば、體重の一割ないのもあり、肥えた人では二割以上あるのもあります。主な役目は、酸化されて體温を保ち、體力を生ずるのです。次の炭水化物とは形こそ違つてゐますが、成分が同じですからよほど關係した所があるので、身體には炭水化物として殘して居る事は稀で、餘分があつて貯蓄されるといへば、必ず脂肪の形になるのです。通常の人の身體に炭水化物として在るものは、まづ葡萄糖か「グリコゲン」位なもので、乳の出る婦人は無論乳糖が乳汁中に、あるはずです。この他の澱粉や糊精や、砂糖類纖維素などは、皆食物として身體にはいつた當座、存在しても絶えず體内の化學的變化をうけて、體力や體温と化し、殘れば前に申した通り脂肪になるのです。鑛物質と申すのは、若し身體を燒きました時には、その跡へ殘る灰の成分になるべきもので、一番多くは骨の中にあるのですから、骨格を强固にし、身體を大きくするには、必要なもので幼少の時、即ち生長期には、多少氣をつけねばならぬのです。併し普通の食物中には幾分か鑛物質を含んで居るので、大して供給に世話のないものです。

まづこの水、蛋白質物、脂肪、炭水化物、鑛物質の五ッの成分は、各別々な役目がある、特性があるので、一つ缺けても不足しても、正當に生活機能をする事が出來ませぬから、萬遍なく供給せねば消耗したゞけを補充する事がむづかしいです。それ故人間の食物には色々注文せねばならぬ事がありますが、まづ

必要なる食物の成分

は亦水、蛋白質物、脂肪、炭水化物、鑛物質の五つに過ぎぬのです。併しこの内水と鑛物質とは、普通の食品の中には必ず含まれて居りますから、特別に取る必要はないのです。例へば米飯や麪麭のやうな、一寸水分のさほどなさゝうなものでも、六割から四割ほどは水ですから、外の野菜や魚類肉類などはいふまでもありませぬ。ことに食事の時にはかならず汁氣のものを吸ひ、湯茶をも飲みますから、身體に需るだけは自然

食事で充たされるものと見て差支ありませぬ。鑛物質もこれと同じで、さほど供給に心配もいりませぬが、たゞ人體の生長期には、時々その不足を感じる時があるとみえ、三四歳から十歳位の少兒に、壁土をなめたものが稀にはあります。これ等は骨の大きくなる爲に、普通の食品中の鑛物質ではたらぬのでかういふ不思議な物をのぞむ様になつたのですから、萬一かやうな場合に出合つたら、牛乳に石灰水を加へて飲ますとか、其他適當な方法を取る爲に、醫者と相談して子供の體質を考へ、よく適合した手段を取らねばなりませぬ。さてこの二つを除きますと、あとは蛋白質物、脂肪、炭水化物の三つで、これをよく配合に注意して、食物とせねばならぬのです。

私共の食べて居る大概の食品には、全で蛋白質物を含まないと申すものは殆どないほど、一般に行き渡つた成分ですが、併し物によつて多少があります。まづ第一に動物性の食品、即ち鳥肉類、獸肉類、魚肉、介類、乳汁卵などは最も蛋白質を多量含んで居りますし、植物性の食品でも、豆類や野菜中の幼芽や、嫩葉などは、まづこれに次いで割合にたくさん蛋白質物を含んでゐるものといはねばなりませぬ。ですからまづ、蛋白質物を最多に供給しやうと致せば、どうしても勢ひ、肉食の方針を取らねばならぬのですが、困つた事には、日本ではまだ牧畜や酪農などが盛んでなく、漁業も昔から行はれてゐるとは申すもの丶、まことにおもちやの様な、幼稚なやりかたで、外國風の大仕掛な漁業法は近いうちには中々行はれさうにもありませぬ、その結果として、一般に肉食の價が高くて、生計の度の低い人々には、とても十分にこれを取る事が出來ないといふ傾があるのです。併し衛生上何の役にも立たない、絹着物を着たり、高價な下駄を履いたりする事を注意れば、同じ生活費で十分營養の價値のあるものを食べられやうかと考へます。ことに蛋白質物は、人體の實質となる組織をつくる原料ですから、これを儉約するのは眞に身を削ぐやうなもので、健全な生活を續けた

いと思ふ人は、決して爲てはならぬ事ですから、宜しくまじめに考へねばなりませぬ。

脂肪も亦、動物性の食品に多く含まれては居りますが、植物性の物でも、胡麻、胡桃、豆類などには、隨分澤山に含まれて居りますから、これ等で代用しても、少しも差支はありませぬ。

炭水化物と申せば、まづ澱粉質のもの、砂糖を多く含んだものですが、主としては澱粉でしやう。澱粉を多く含んで居る食品は、麥米を始として、豆類、芋類等ですが、まづ日本人の常食は、炭水化物に富んで居るといつても差支はありませぬから、その供給は別段心配はいらぬわけです。

ことに炭水化物は體內で酸化されますと、一は體溫を生じ、一は體力の基となるのですが、その需要を充たして、まだ餘分のある時は、前に申した通り、脂肪と化生して、體內に蓄貯して置かれるといふ便利があります。ですから、若しも供給した炭水化物では、體溫體力を生ずるのに、不足であるやうな場合には、脂肪が分解して、體溫や體力を出し、萬一脂肪が分解してもまだ不足を告げる時には、食物中の蛋白質物が酸化されて、體溫も生じ、體力も保つのですが、まだそれでも不足であるとすれば、身體を構成して居る、蛋白質物が漸々分解して、その役目を續けます。かやうな場合には、申すまでもなく、身體は衰弱し、長く續けば體溫も減り、體力も盡きるのですから、なるべくそんな悲境に陷らぬやう、身體の狀態さへ普通なら、食物の供給を十分にして、炭水化物で體溫や體力を生するのに餘りのあるやうにし、蓄積した脂肪は、へらさぬやうにし、蛋白質は生活機能の爲に消耗した、諸機關の組織を補充する役目を全うさせ、また餘裕があれば、諸機關を增大させて、筋肉のたくましさ、骨格の強壯さを、ひとしほ增させるやうつとめねばなりませぬ。

食物の必要はざつと前記の次第ですから、お粥ばかりをすゝつたり、甘藷ばかりを噛つたりして居てはいけない筈です

ことに心意のつかひかた、身體の動かしかたで、諸機關の消耗する分量に多少があるのですから、多く活動いた時には、多くの營養を取らねばならず、少し活動いた時には、少しの營養ですむわけですから、此の次には活動の多少によつて、取るべき營養分に差異のある事を申し上げ、それに應じた獻立のおはなしを致す事としましよう。

婦人の室內體操

體操教師

サンダウの『鐵啞鈴』は都鄙到る處に行はれて男子の室內運動には事を缺かず。『エキザーサイザース』は男女共に之を行ふに適するも、其價廉ならざるを以て上流の家庭にあらざれば之を備ふるは難く、隨て未だ十分に行はれず。此際婦人の爲に簡易なる室內體操術を紹介する亦決して徒爲ならざるべし。

或は曰はん、婦人は夙に起き宵に寢ね、一日家事の爲に忙はしく、自然の運動十分に行はれ、又別に體操など行ふに及ばずと。此の如きは勝れたる健康は優れたる美貌の源なることを解せざる人の言なり。或は曰はん、一定の體操術を行ふは必ず特效あると疑なきも、之を行ふに適當なる時間を得ること難しと。然れどもサレー女史は其著す所の『健全美貌體操術』に記して曰く、若し人健康上の干係より規則正しき運動の必要を知らば、之を日々の義務の中最も肝要なるものと爲し、之が爲に喜びて其時間を作り出さゞるべからずと。而して此に紹介せんとするサレー女史健全美貌體操術は最も婦人の室內運動に適し、腹壁を强壯ならしめ、特に運動缺乏の爲に內臟の軟弱と爲り、不自然に弛緩し、遂には其位置を變ずるに至れるが如きを未然に防ぐ效力あり。あらゆる階級の婦人は試に之を行ひて可なり。唯だ注意すべきは纖弱なる婦人の初めより過激なる運動を爲して過勞を覺ふるに至らんことを避け、徐々に其筋力の發達を計りて勞に堪ふる程度に於て之が進步を待つにあるのみ。

第一運動。　左右兩腿は直角の姿勢を爲し、兩足は開きて一尺乃至一尺二寸の距離を保ちて椅子に腰懸け(椅子とは限らす、椽側にても踏臺にても便宜に隨ふべし)兩手は各々輕く握りたる儘、手の甲を外側にして眞直に頭上に擧げ、緊く腰懸けたるまゝ體を少しく右方に向け、靜に前方に右腿の上に眞直に屈み、胸の膝に觸るゝに至り、暫く此姿勢を保ち、然。後徐に體を舊位置に復すべし。其際兩腕は伸したるまゝ體に伴ひて動かし之を下ぐるとわるべからず。又左側へも同一の運動を試み左右相互に交換して各々十回之を反覆すべし。

第二運動。　廣く兩膝を一尺二寸許の距離に開きて跪き、兩手は左右の栂指を交叉し、各四指を重ねて之を頭上に伸して擧げ、及ふ限右方に體を屈し、又舊姿勢に復し、左方へも同一運動を試み、運動回數を各々十回に止め、數日間は引續きて徐に之を行ひ、日を經るに隨て漸次に速度を增すべし。

第一圖



第三運動。　右膝にて跪き、左脚を十分前方に伸し、兩腕は左右の栂指を交叉して各四指を重ね之を頭上に擧ぐると前運動の如くし、其儘體を徐に後方に反し、然る後舊位に復し、此の如くにして四五回此運動を反覆し、次に左膝にて跪き、右脚を前方に伸し、前同樣の運動を爲すべし。初めて此術を試むるものは注意して過勞に陷るとを避くべし。(第一圖參看)

第二圖



第四運動。兩脚を左右に開きて、馬に跨るが如き姿勢を保ちて起立し、體重を兩足に均分して支へしめ、兩手は各々輕く握りて眞直に頭上に擧げ、其儘體を後方に反らす、第二圖の如くすべし（是れ即ち第五運動に移る準備の姿勢なり）。

第五運動。兩腕に力を張り、體を前方に屈すると同時に、兩手を眞直に伸したるまゝ徐に前方より下げて體の兩側より伸びる限り背後に伸ばすと第三圖の如くすべし。

第六運動。左脚にて起立し、左手は椅子の背にて支え（椅子に限らざれば襖又は障子の縁にても可なり）右手は腕に垂れ、徐に右足を擧げて下脚を浮く如くし、次に下脚に力を張り、腿より趾に至るまで全脚を眞直に伸したるまゝ、前方に擧げて稍々水平狀を爲さしむると第四圖の如くならしめて舊位に復し、更に姿勢を變じて左右同一運動を反復すべし。而して第四運動より第六運

第三圖



第四圖



動に至るまでは、一時に五回乃至十回之を行ひ、體力强壯と爲るに隨て累次回數を增加すべし。

美貌と健全とは之を分離せしむることを得ず、健全を加ふる運動は其人の美を添ふる所以なり。以上の體操術は美の基準より容貌の發達を目的とする所なり、絶えず之を行ふて怠るなからんには其結果は晝の夜に尋ぎ、光の暗に繼ぐが如く、健全と美貌とを齎らして人の妻たる者には室家の幸福を增倍する歡を得しめ、之より人に嫁せんとする淑女の爲には無上の至寶を享くるに均しき樂を得しむべし。幸に試みたまひね。

料理の取あはせ

近藤格齋

西京の人は蒔繪の重箱におから（東京人は卯の花といふ）を入れると云つて、東京人はその吝嗇を笑ふ。が私は、それは笑ふ方が大に拙いと思ふ。流石に西京の人である、その山紫水明の景物に養はれた、友禪染の樣な優美な思想は即ち、この蒔繪の重箱に卯の花煑りを盛るので、豆腐の殘滓、食品の等級から申さば、實に最下等である。そのつま

らぬ物でも一ぴ西京人の手に料理をされて、金蒔繪の重箱の一隅を占る時は、そのつまらぬ豆腐の殘滓迄が大層面白い馳走に成る、黄金色の人參や若草を散した様な葱、丁度、ぬる手紅葉や楓手の染かけたのを松の葉越に眺る様な趣があつて、味の美不味は、暫くおいて、先づ打見た所が美味そうに思はる、ましてその盛方に少しく意匠を用ひたならば、或は初秋の嵐山を望ひにも栂尾や、箕面あたりの秋景色にも見立つることが出來やう、鯛の刺身や、てり燒を蒔繪の重詰にする、それは云ふまでもなく錦上の花で結構ではあるが、何も下等なものであるから、良き器物に盛ることの出來ぬと云ふ事は無い、否何方かと云へば、つまらぬ物はと美はしき器に盛りたい。彼の牡丹の様な……又杜若の様な美しい花は煤けた花籠に挿した方が錦手や、七寳燒の瓶に挿したよりも風情が多いと同様で、若し美麗なものを上等の器に盛り下等なものを下等な器に盛ると云ふ、意匠も趣味も無き、有のまゝ主義から割り出して、豆腐の滓を竹の皮にでも包むだら、如何であらうか、それでは恰で乞食の御馳走である。これでは兎ても花の蔭や、紅葉の下では開くことが出來ぬ。

斯様な譯で、その取合せ、心遣ひ一つで、料理が優美にも殺風景にも成る、これは、ほんの一寸した注意の仕様計で料理に醜美の差が出來るのである。一體昔から東京の料理は出し方も意匠も至つて殺風景で、同じ料理を出すにも膳の上へコテ〳〵と一杯に陳列する、そして、ヤレ紅蒲鉾だ、蜜柑だ、きんとんだのと、加之も椀盛も壺も刺身も一つ膳に置かるゝから、趣味も餘裕も少しも無い、恰で料理品の見本を並べた様だ、それでは折角の佳肴も引つ立たぬ、誠に働きの無いと云ふもので、其の盛り方、出し方、器の取合などは、恰で畫を描いたり盆石を打つ様なもので、その働き次第で種々の變化があつて、云ふにも云へぬ趣味がある。何方へ參つても東京人の習慣で、まゝ蕎麥や鮨を客の饗應に點心の様な趣向で出す事であるが、それも蕎麥屋の器を赤塗りの盆にのせたまゝで出すよりは、同じ事ながら自宅に所持する椀にでも盛替へて折敷にでも


宗方

載せて出したならば大層風情が添ふことであらう。これは、ほんの一つの例に申す計りであるが凡てにその心がけが有りたい。

それから洋食……これは又近頃の大流行物で何方へ參ても諸君の手料理のオムレツや、カツレツを進めらるる、夫は至極良い、が私は今少しこの洋食を咀嚼して日本流に消化させたらば更に面白からうと思ふ、洋風の意匠が悪いと云ふでは無い、彼の青き野菜でチキンゼリーなどの周圍を飾つた樣子などは至極面白い、が然しこれを若し日本流に趣向をして出したらば如何であらう、論語に切目正しからざれば食はずと、何も切目が正しきとて、正しからぬとて、別に味に變つた事のある譯でも無いが、然し又たその切り樣出し樣に由て、大に趣味風致の加はることは前にも申す通りで彼のオムレツにしても、ビーフステキにしても今日の歐式の樣に鈍狀不正の形にて盛るよりも、その四隅を正しく切り落して角形とか長方形とかにして、附合せにもセロリや、馬鈴薯計りでなく、當季なれば、みつ葉とかふきと云ふ樣な野菜を二三寸程に切つて添え、或は金柑の甘煮でも附合はすと云ふ樣な風に致したれば如何であらうか。

昔しの日本人は凡ての物を消化する力を以て居た、外國のものを、その儘に用ふると云ふことを爲ぬ、何かその間に一つの趣向を添へて我が物にする。料理に就て云へば、アノ茶碗蒸、素と長崎の出島あたりで葡萄牙人や和蘭人などに習ふたオムレツを趣向して、それを液體としてその內へ椎茸や、胡桃や栗などを入れて日本的の料理とした、又之を少しく硬くして玉子燒にして丸形に巻き上げては、小口切りにして、海苔巻の鮓の樣にして同じく日本の料理にした、その外、歐風の料理が長崎を經て日本流に變化されて段々と內地に流行したものは幾許もある。それが近來は、殆んと丸呑である。只モー少しも歐式と違はざらんことを期すると云ふ有樣、若しこれが、日本人の意匠的胃の腑の活動とすればその消化力が大に衰弱したのであらうと思はれる。（完）

入梅節の心得

梅雨の季節となるにつれ、家庭にて種々注意すべきこと多し、今その一二を擧れば

衣服、雨勝にて洗濯の出來ざるは云ふまでもなく、濕氣を含みて、かび易く、大切の着物に斑を生じ、その質を損ずるなどは單に不快を感ずるのみならず、健康上甚だ宜しからず、されば、汚物あると心つかば以前によく調べて晴天の日を待ちかまへ洗濯すべし、さなければ日に乾し、後悔なきやう豫め用意を整へ置くべし、梅雨中はフラネル、紀州ネルなど毛織物など尤もよし、また此季節には下着、シャツ等の類を多く用意し置て取りかへを怠るべからず、寢卷など最も然り。

食物、これは直接の病源となるものなれば注意の上にも注意すべし、殊に毎日、じめ〳〵の天氣にては不斷壯健の人も心地あしく覺ゆるものなれば、三度の食事も何となく進まぬものなれば、主婦たるものはなるべく消化よき滋養品を擇び、且つその調理法に、深く心を用ひて一家の團欒を樂うすべし、さてこの時節には自然運動も少きものなれば、消化にはよく注意し、たまには麵包とか麥飯とかを用ふるをよしとす、又小供の食物なども餅菓子の如きは餘り與ふべからず、少しの不注意より、チブス、赤痢、マラリヤ、脚氣、胃、腸カタル、等の疾病を引起すものなり。

住居、部屋の隅、臺所の流しなどを清潔にすべきは不斷なれども、殊に梅雨の時節には丁寧にせざれば思はぬ結果を來すものなり、臺所の戸棚などは誠にかび易きものにて食物を入るゝ所なれば毎日ならば最もよしさなくとも一二日隔に熱湯をもて拭き常に清潔を保つべし、又便所なども掃除をよくし石灰石炭酸、臭氣止などを撒りをくべし。

季節總菜料理

○夏の浸しもの

夏季の總菜は淡さりとしたるものよし、和もの浸しもの抔よし、浸し

物には野菜類を用ゆ、仕立かたは何にても煠でゝ搾りて水を切り、生醤油をすゝぐなり、生醤油をかけたる上へ炒胡麻の擂りたるを撒け、又芥子粉をふりかくるもよし、又削り鰹節をかくるもあり、扨てその材料は春ならば蕗菜と干蘿蔔の繊切、菠薐草、芹、三葉、蒲公英なるべし、ほうれん艸は醤油の外少し酢を加へ花がつを撒りかくるもよし、夏はちさ、にんじん、胡麻の抜苗、煠架子十六角豆等なり、但し煠茄子には山椒醤油を用ふ、

○酢和えの拵へ方

和え物の種類には芥子和、胡麻和、木芽あゑ、等種々あれども夏は酢和をよしとす、味噌を擂り酢と砂糖とを加へ、當節ならばちさ、茄子素麪の耳などよし、ちさは煠でゝ一寸ほどに切茄子は竪に薄く長く切り素麪の耳は煠でゝ水にさらし、笊にあげて水をきりて和ゆるなり、

○昆布巻の拵へ方

辨當の菜又はお茶漬の菜としてよきは佃煮煮豆なれども、毎日には厭きるものなり、さればとて夏季は、煮〳〵もおもしろからずとて昆布巻をすゝめん、材料はあら昆布又は白こん布にて鯡、はぜ、章魚、その他小魚ろゐ何にてもよし、尤も蛸は一度ゆでゝ巻き、その他の魚は素焼にすべし、又鯡は白水にてよく澁味を抜き巻きて一度白水にて煮るべし、さて味をつけるには醤油に砂糖、飴、味淋又は酒いづれもよく但し十分に煮あげざれば味よろしからず、

○捧鱈の旨煮

是れも夏季の賞翫なり、捧鱈を水につけおき、柔かになりたるをよく洗ひて骨共によきほどに切り水にてよく煮あげ、酒と醤油に飴を少し入れて充分に煮上ぐべし、骨まで柔らかになり中々に味ひよろし又兒いも、牛蒡小口切など一度湯煮して共に煮るべし、

○豌豆スープの製へ方

淡泊を好む夏の野菜料理に豌豆スープは尤もよし而してこのスープに肉入スープと並スープの二種あるなり、今その一つの製法を示さん、青豌豆スープを製せんとせばまづ二斤の豆をよく洗ひ、皮をむきて二つに割、火に懸たるスープ鍋に大匙二杯の牛酪を落し、之に前の豆を入れ、凡五分間煮つかぬ様よく掻まぜ煮たる後、水一升八合を注しその沸立つを待つてうきかすを去り玉れぎ三個、にんじん、かぶ各々一本を細かに刻みてスープの中に入れ鹽、砂糖にて味をつけ一時間ばかり煮て用ゆべし、

○夏季取合料理

▲煮物としては○あなご薄らす煮、すり生姜○鶏肉むしり○こんにやくすり柚○筍輪切、さやえん豆緑煮○▲刺身亦は鱠としては○洗ひ

鯉、うど白髮、いも酒にて○鯛細づくり、白瓜せん三ばい酢にて○水貝新生姜花づくり、鰡細づくり、むしり海老、わさび醬油にて○鰹大身づくり胡瓜小口暮 薩すり醬油○鯵青こし胡瓜、蓼した酢にて▲吸物としては○花小鯛口めうど、つまみ菜潮仕立にて○海老のつみ入れうちは茄子口柚子○はもの骨切さやえんどう口青さんしやう▲香の物としては○夏蕪と茗荷たけきりまぜて鹽おし漬○おろぬき大根もみづけ○白瓜印籠づけ○胡瓜うづまきづけ、

一週間の献立表

(柳澤伯爵家の献立)

朝は午前七時、晝は正午、茶(御所おやつ)は午後三時半、夕は全六時、

◎十二日　△朝　ばん牛乳△晝　蛤のつゆ、鯛の味噌燒△茶　海苔卷すし△夕　鳥に菜のつゆ、刺身、

◎十三日　△朝　いりゆば△晝　玉子のつゆ、刺身△茶　しろこ△夕　はんぺんと菜のつゆ、鯛の煮付、

◎十四日　△朝　佃煮△晝　玉子のつゆ△茶　せんべい△夕　豆腐つゆ、鯛鹽燒

◎十五日　△朝　煮豆△晝　玉子の露、カレー煮付、△茶　せんべい△夕　蛤のつゆ、燒はんぺん

◎十六日　△朝　きりぼしの汁、豆煮付△晝　玉子のつゆ、あなごとたけのこの煮付△茶　あまなつとう△夕　鳥と菜のつゆ、刺身

◎十七日　△朝　海苔△晝　ちくわのつゆ、赤貝の酢付△茶　牛乳、紅茶、カステーラ△夕　かき玉子のつゆ、コロッケ酢蓮根

◎十八日　△朝　薩摩芋の汁、オムレツ△晝　ウイスカレー、鯛の鹽燒△茶　稻荷すし△夕　しらすと海苔の露、鰻蒲燒

次の週間

◎十九日　△朝　千六本の汁　いりゆば△晝　落し玉子のつゆ、鯛の酢漬△茶　まんぢう△夕　鳥と菜のつゆ、土鰌鍋

◎二十日　△朝　むきみの汁、佃煮△晝　玉子のつゆ、赤貝の酢漬、△茶　かろゝすせんべい△夕　はんぺんと菜のつゆ、鯛のてり燒

◎二十一日　△朝　あさりの汁、五分玉子△晝　八杯豆腐のつゆ、かれい煮付△茶　ちらしすし△夕　玉子と豆腐の露、赤貝の酢漬

◎二十二日　△朝　薩摩芋の汁、オムレツ△晝　しゞみの味噌汁、刺身△茶　もりそば△夕　鳥と菜のつゆ、鯛の味噌燒

◎二十三日　△朝　若芽の汁、黑豆の煮付△晝　ちくわのつゆ、玉子燒△茶　デセール、紅茶、牛乳△夕　蛤のつゆ、小鳥のたゝき燒

◎二十四日　△朝　ゆばとしいたけのつゆ、きざみするめ△晝はんぺんの露、鯛味噌燒△茶　汁粉△夕　かき玉子のつゆ、刺身

◎二十五日　△朝　千六本の汁、いんげん豆、海苔△晝　玉子と菜のつゆ、蒲鉾△茶　にぎりすし△夕　茶碗蒸、鯛のおぼろ
△果物は十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十四日は蜜柑、二十、二十二日は林檎に蜜柑、二十一、二十二、二十五日はころ柿に蜜柑

つけもの新世帯

◎梅干漬　梅のよく實の入つたのを一日か二日位水（又は白水でも）に浸して置き、梅一斗に鹽三升と紫蘇の葉多少見計ひて漬けるのです。そして、初めは押を輕くし、梅に鹽の浸みるに從ひ、段々押を強くかけろ。それから十四五日か二十日位も經つてから、天氣のよい日を見て、之を簀の上に並べて、天日に干すのです。で、當座喰には一日か二日干て、壺に貯へて置けばよいが、永年貯つて置くのには、一日干して、夜は梅酸につけて置き、又翌日干す。かやうにして同じこと三四度も繰り返して、夫れから四五日よく乾し上げ、少し濕びるやうになつてから、壺に入れて蓄へるのです。これは成る可く乾して貯へる仕方なれど、少し濕つたるのを欲せば、一夜夜露を取つてから壺へ貯へる。又梅酸に漬けておくこともあります。

◎青梅漬　青梅を若いうちに採りて、一夜程水に浸して置き、（これ苦味を去るため）翌日水を斷つて、青梅一斗に鹽二升を入れて、かるく押をかけろ。で、水が上つたならば、其水を零して、さつと洗ひ、水氣を乾して、又少し鹽をふつて漬けるのです。因にいつて置きますが、甘露梅といふのを製へるには、右の如くにして苦味を去つてから、砂糖蜜に漬けて置き、大分甘みの付いた時に之を紫蘇の葉で包み、白砂糖をふりて、輕く押をかけるのです。

◎守口大根粕漬　これも一旦湯をくゞらせ、一日天日に干してから、粕に少し鹽混ぜたのに漬け、輕く押をかけるのであります。

◎獨活味噌漬　山獨活を二三日陰干にし、軟くぐよ〱するやうになつてから、三年味噌に漬ける、百日ばかりで風味至てよい。

◎午蒡味噌漬　午蒡の本末の所を切り去り、中の所を六七寸許を、さつと湯をくゞらせてから味噌に漬ける。そして、是も味噌漬澤庵と同じく、成る可く桶の底の方に入れておく方がよい。で、之は一年餘も經たればよくつからぬもので、三年五年と降いほど風味がよい。

◎京水菜漬　之は元と東京では少かつたが、近頃京の水菜の種を植ゑてから、漸く之を漬けるやうになりました。此菜は一株で百本餘りもあるから其株の根を切りて庖刀目も澤山いれ、そして甘鹽で漬けるのです、水上つても惡汁少いから、之を別に捨てるに及びませぬ。

家庭と新聞

獨逸教育談(教育公報)(下田次郎氏)

獨逸にて小學校は六歲より十四歲まで八年間の義務教育なるが、政府の命令嚴にして學齡兒童中不就學者は殆んとなしといふ有樣なり、而して小學校にては敎師は問答躰を以てする故一寸參觀しただけにては敎へて居るか、復習してゐるか殆んど分らぬ位なり、日本の如く唯書物によりて消極的に敎へて行くといふ風でなし、つとめて小供の腦力を開發して行くの方針なり、又試驗に就て見るに小學校は勿論、高等學校にても學校試驗が格別苦にならざるなり、此際父兄は多く參看し居るなり、つまり試驗は生徒の學力の進歩を見るにあらずして父兄に學問の敎へ方を示す位に止まるなり次に家庭と學校の有樣を見るに家庭は獨學校の如く父母が敎師の如く威嚴を持ち居るのみならず、長幼の序正しくして幼者は長者に服從し、且つその間嚴格にして兒童の爲めには聊か可愛想に思はるゝ塲合あり、扨又獨逸にては他國に比して兒童多し五人位の子を持ちたる家は珍らしからずして多きは十四五人位あるもあり、されば小學校も中々繁昌にて都會に於ての壯麗なる建築といへばまづ市廳とか小學校位のものなり、中には一小學校の建築に數十萬圓を費やしたる處あり以てその設備の完整せるを知るべし。又一般に衛生行屆けるを以て子供に鼻液を垂らし居るものなし、歐米諸國の兒童を通觀するに日本ほど鼻汁を垂らし居る小兒はなし、詰り日本の服は咽喉の衛生に適せず、頸首の邊空氣に曝さるゝの故ならんか、次に高等學校に就て見るに彼國にては日本の如く資力なくして高等學校に入るものなし、大槪父兄の身代に應じて幼少の時より學問處世の針路を定め、早く職工學校等に入るなり、又女子に高等敎育を施こしその女學士をして高等女學校の敎師たらしむることは目今女子の一つの運動となり居れり、從來女子は男子の壓制の下に屈してその力

を伸ばすこと能はざりしも今後は女子も出來得る限り男子と同等の働らきを爲し得べしといふにあり、又大學生間には麥酒の飲會などありて頗る學生の生活上陽氣なるものなれども、又品行上に甚だ遺憾の點多し、何は兎もあれ獨逸の人は生々しくして而して忍耐力强く、事物に精密にして一見遲鈍なるが如きも、着實に事を成し、且つ協同的にして日本の如く一人駈拔を爲すが如きとなし、故に隨分大なる事業も出來るなり云々。

早婚と晩婚の話（愛國婦人 吳文聰氏）

世間では早婚の弊を云ふ事多けれと予は晩婚の弊に就て言はんと欲す、まづ早婚の弊は(一)年齢若くして結婚すれば精神、身躰共に發達せざる故身體虚弱となる事(二)學事職業未熟にして一家を經營する力なく、經濟上不能なる事(三)子女を教養する力なく社會の迷惑となり、その子女も亦身體虚弱教育不足の爲社會の厄介となる事(四)早婚は上等と下等の兩階級にありし中等健全なる階級には少し、從ッて下級民族の子孫增殖し國民の品位下劣となる事(五)早婚は夫婦同棲の年月永く從て子を產む年數永く教養上家計困難を來す事等なり、扨晩婚の弊如何となれば、晩婚には其主義二個あり、一は家を維持する用意周到なる故、結婚の時期を後らし人口增殖の程度を減殺するの恐ある事、二は家を維持し子女を教養するを無用の重荷となし、其得る處ろの收入を以て肉躰の嗜慾を逞ふし、且つ妻を娶る事なり、元來人類の食色は天性なるが故に能く三四十歳に至るまで堅固にして清潔なるを得べきや、普通多數の人民は恐らく是を維持する事困難なるべし、特に社會の進歩に伴ひ生活の費用增加するが故に、下層の婦女は嫁資を得んが爲めに、言ふべからざる業を營み、婚姻の遲延と共に風俗を紊り、社會を毒し、惡疾の蔓延を來し、國勢萎靡し、唯外面のみ華奢を競ひ、精神枯槁するに至る是れ晩婚に伴ふの弊害なり、又近日早婚に就ての統計を見るに青森縣にては五千組の婚姻中十九歳以下の夫五分の一あり、又十七歳以下の妻十人

中四人まであり、斯の如く早婚は東北の隅青森に始り、北越の富山、石川、福井等いづれも女の若き婚者あり、又靜岡、鳥取、沖繩の三縣は男の若き婚者あり、又九洲に早婚は長崎、福岡、大分の三縣、而して早婚の地方にては十六七歲の娘が家に居ると、何故嫁に遣らぬか片輪ではないかなど、噂をするといふ、而して一度他に嫁して戻さるれば却て世間の批評を受けぬ位なりといふ、如何にも呆れ返りたる事にあらずや云々、

家庭の快樂（二六新報　爪紅子）

家庭の快樂を增す第一は、茶間改善の必要なり、從來の茶間は、家族の會食所、細君の事務所、兼細君の面接所なれとも、大抵の家屋にては六疊、若くは四疊半にして、甚しきは三疊なるすら有り、かゝるムサくろしき所に、戸棚、長火鉢など据付け、或は衣物箪笥、用箪笥、佛壇などすらも、一緒に輻湊して、壁には三味線など下げたるもあり、夏の暑さ夕の會食など、不快さ、さこそと察せらるゝばかりなり、勞働者は勿論、官吏、會社員など、總て晩餐は一日中、最も愉快なるべき性質のものなれば、可成だけの御馳走あるべきは勿論、これが會食場たる茶間は、出來るだけ快活なる構造ならざるべからず、今日の粗造なる貸家の生活に在るものゝ、斯かる注文は言ふべくして行はるべからざる所なれとも、そこは細君の注意に依りて、可成だけ興趣ある裝置を爲すべし、第一は光線の十分に射入すること、風通の宜しきこと、從來の茶間は北向の陰濕なるもの多きを改めて東南に面したる最も快活なる室とすること、以上は借家住居の勝手に行かぬ場合も多けれとも、第二は細君の働きにて如何ともなるべきなり、即ち早朝掃除したる後の、四季折々の草花など、手早く瓶中に挿み、又は鉢などを奇麗に拭き取りて、庭中より卓上に移し、新聞、牛乳、茶、珈琲など、夫々用意して、主人、及び子弟を案内すべし、午餐は主人を始め、一家の子弟は學校に在りて、大抵は不在なれば殘る婢僕と共に輕便に濟し置き、晝の支度の爐火尙燼きざる內た、直ちに晩餐の獻立して、煮

物など此の時よりドロヲと煮置くべし、總べて煮物は緩かに煮たるに味有るものなれば、ある物は朝飯の後、其の火にて煮始め、然らざるも午餐の後、直ちに晩餐の献立あるべきなり、此くて、三時にもなりて主人始め、子弟皆々歸り來らば、茶など各々其の居間に運び後靜かに茶間を整理して、銘々の座席を設け、膳ならば膳、卓子ならば卓子を調へ、窓掛、窓扉など時候に應じ、晴雨を見計らひて、垂るべきは垂れ、開くべきは開き、挿花、植木鉢は、朝のと代へ、又は枝など直し置き、繪額、掛軸などに、注意して時刻至らば案内あるべきなり、酒は必ずしも用ゐずとも、晩餐は、殆んど晩酌の心得にて、自他ゆるやかに、且談じ、且食ひて、十分のもてなしある可し、邦俗の粗食なるより、少年など間食の惡習あれども、かゝる惡習は極力これを制して、菓實にても、點心にても、用意あるものは盡く晩餐の卓子に並べ立て、食後も尚、香しき番茶に約一時間の暢談を與ふべし、勿論主人たるものも、事務は時間前に整理し置き、自他共に食時の訪問を避けて、晩餐には細君の許に客に來りたる程の心にて、俗事を談ぜず、忙はしげに出入し、不時に立去る如きことを愼しみて滿身の敬意愛情を以て晩餐を受くべきなり此の如く晩餐は一家一日の大祭日も同樣なれば、獨り家族のみならず、家庭の副たる馬、牛、及び犬、鳩など、總べて家族が食卓に就くと同時、又はこれに先ちて均しく食を分ち、愛を推して普ねく及ぼすの用意あるべし。

白鉛禁止（報知新聞 安井哲子氏）

余は白鉛を修飾する事には絕對的反對なるも白鉛を女學生に禁止する手段として特に校則を設けて制束するには同意する能はず、斯樣なる校則を設くるは甚だ不健全なる手段にして能く滿足の効果を擧ぐるは困難なるべし、敎育者の考案が、往々父母姉兄の意に適合せずして困難を感ずること數々なるが、此の白鉛の如きも假令學校に於いて禁せんと欲しても家庭に於ては之れを好まざるあり、母は其の娘を美しく整裝せしめた

いと云ふ念慮から白鉛の修裝を奨むるが如し或る學校などでは色々窮屈な制限を立て、或は衣服の仕立方或ひは縞模樣を云々して遂には黑の木綿紋服を用ひて一齊に整へしめんと努むると雖も、是等は餘り干渉に過ぎる事にて、其精神は良しとするも、女生徒を敎育するに單に校服を制定し質素を旨とするのみの考にては實に遺憾千萬なり、人は各々特殊の容貌に依て外裝の修飾も樣々に差異あるにより各自獨得に備る美を發揮するが肝要なり西洋人は能く此點を細かに考へて、服裝等は其人の年配は申すまでもなく身の丈け貌の色又は頭髮の色等も可及的渾てに調和を索め樣と心掛け居れり、然るに日本人は何分美と質素との意義を解し得ずして衣服の縞柄も細かい黑つぽい物を纏へば之を質素な風と心得、偶々容貌風格に好く調和したる似合はしき美しき風姿の人を見れば直に贅澤の裝ひ抔と言ひ做す弊あり、贅澤を離れて美を保つ事能はずといふ理なく、質素と美裝とは相一致する事能はずといふ理由なし、若し比較上から云へば白鉛の禁止論は服裝制定よりは重要の問題と言はざるべからず、併し之を禁止する手段として嚴則を設ける事は意外の方向に意外の弊を生せざる可きか、美貌を保たんとするには其人に依て或は白鉛を少し用ひて能く其の美を作すと云ふ塲合もあるべければ美裝修飾の觀念を必要とする女子に向て單に嚴律する事能はず、特に道德上女學生の弊風を矯むる手段としては餘りに姑息なる方法と思意す、白鉛を塗飾する事に風俗上道德に有害なりとすれば、之れを修身又は作法の課程に於て誘掖を試み、衛生上に論ずる時は之れを生理の課程に於て敎示を努めて自然に滿足の念を以て、實行するに至るの手段を採ること蓋し穩便なる方法なるべし云々。

白粉非禁止（同上　山脇房子氏）

女學生白鉛禁止論など持出すは近頃報知新聞にも似合はしからぬ事なり、西洋人は本來白色の性質なるにも拘らず、猶は白鉛を用ひて老ゆるに隨て益々塗飾すると云ふ風あり之は美を愛する心に基けり、況して日本

人は色の黒い方なれば、程善く白鉛を塗飾して美を保つと云ふ事は寧ろ必要の事たり、白鉛に限らず何物にせよ量を過せば害の伴ふは免れざる事なれば、白鉛も粗悪な者を避け精良なる白鉛を少量適度に用ふれば敢て衛生に害ありとは思はれず、西洋人と交際する時に先方は美しき面貌なるに此方は素面の其まゝ黒き顔をもて並び居たらば、如何あるべき、又女は却て素面が良いと云ふ人もあれど其は僻事なり何事も自然に任せ放しで粉飾装飾と云ふ事を嫌ふとすれば、頭髪も奇麗に結ぶ必要なく、衣服も美麗なる物を選ぶ必要なかるべし、こは餘り極端なるべきが、白鉛も此極端的に禁止仕樣と云ふ事は宜敷くなき事なり、論者は察する處明治革新時代の舊思想を今日も抱持し居らるゝ人なるべし、衣も短きを着け裸足の大股で濶歩横行などの時代とは時代が異ひ居れり、當今女學生杯に髪も紊し衣服も調へず白くもなき顔に白鉛も付けずに居るを見るが、感心の出來た話にあらず、敢へて白鉛の塗飾を奨勵するの必要はなけれどさりとて禁止の必要は尚更無し、余の家の女中杯には勸めて、適度に白鉛を用ゐさせ居れり、之は女のたしなみとして美と云ふ事に注意をさせ身を奇麗に調のへ人樣に應接してイヤらしいと云ふ念を招かない樣にと思ふが故なり、渾べて美的の思想を養なふには物に就いて美と云ふ事を感ずる事が第一着なるを以て、其の中で已れの身、已れの身の邊たりの手近なるものを美くして其れに慣れること肝要なり、故に余は女學生白鉛禁止の問題には賛成する事能はず。

家計收支の實况（愛國婦人東京會員某報知）

會員の君たちは、皆上流社會の方々のみにて、下層社會の生活の有樣を御覽なさつたならば、さぞや不思議に思召しませうが、木綿着て粗食しましても私共の家庭にはそれ相當な愉快があります。「樂しさや夕顔棚の下涼み」とか申す有樣をちと御覽に供したき儘、書送り申候

〇明治三十六年一ヶ月分平均額

一家族三人　但し夫婦に子供一人

收　入

一金貳拾圓也

支出

一金拾七圓九拾錢也

内譯

金四圓五拾錢	家賃	金參拾五錢	湯賃衛生費
金五圓	米代	金貳拾錢	散結髮代
金三圓	副食物費	金參拾錢	通信費
金五拾錢	薪代	金拾五錢	二六新報代
金參拾錢	炭代	金壹圓	被服料
金五拾錢	醬油代	金六拾錢	主人小遣
金六拾五錢	味噌砂糖酢鹽	金拾錢	慈善費
金四拾五錢	石油	金參拾錢	茶菓代

殘金貳圓拾錢

評　僅に貳に圓の少額を以て貳圓餘の殘金を見るは誠に珍らしき經濟なり。併し米代の五圓は違算にはあらずや三等米位て辨じて至當なるべし。主人の小遣六拾錢にて交際費も辨ぜらるべきや疑はし。錢湯及び衛生費の參拾五錢も三人分としては如何のものにや。

家庭衛生

肺病豫防法

醫科大學　U、K、生

肺勞の主要な症候は咳嗽、喀痰、熱（殊に日暮に體温の上昇るもの）呼吸困難、胸痛、盜汗食欲不振、喀血及羸瘦なりとす、一定の法を以て喀痰を染色て、顯微鏡で撿べる時は結核菌が發見らるべし。

◉如何して病源は人體内に侵入るか

肺臟内に吸込む

結核物質を食物と共に攝取す

皮膚に接種す

肺勞に罹つたもので未だ臥床につかぬものは、日々無數の結核菌を排出す、今喀痰を無遠慮此處彼處の地上に略出し、此乾燥機會わらば、風の爲めに塵埃となり

て捲き上がる、而して此の塵埃を吸ふた人で、若し其體質が結核菌のそだつやうな身躰を有た時は非常に危險で結核となる（結核菌の繁殖に良好培地とは肺勞遺傳の傾向有るもの、或は飲酒或は疾病の爲めに衰弱へた身體を云ふ）

尙ほ乾咳、或は高聲談話の際に飛散唾液も、周圍に對して危險なり、

●結核菌咯痰の豫防

▲痰壺の裝置　元來肺勞患者及び其周圍の人々がこの豫防方法を施行ふは、自身及び同胞の利益なることを自覺せねばならぬ、此の豫防法は、患者自身の新感染を防ぎ、又周圍の人々に傳染せない方法がある、其疾患の何なる時期にあるを問はず、患者の咯痰は其乾燥に先つて無害とするにあらねば、安心が出來ない從つて患者は常住咯痰を容れる痰壺を所持つべし、家內では廣口の「プリキ」製或は石造の痰壺を使用するが宜しい而して病毒の乾燥及飛散を防ぐには常に痰壺の半分程水を盛るか又は水の代りに濕つた鋸屑を用ゐ、使用後は之れを竈內に投こんで燒却べし、但し鋸屑は決して乾燥してはならぬ、且つ痰壺の內容は一日一回づゝ燒却ねばならぬ、又水道の存る所では痰壺に水を充れて直ぐ便所內に投棄る、但し便所に投棄るに先つて一回煮沸を宜しとす、（製造所、商店の如き多數人の交通する場所には、水を盛れる痰壺を設け置き、其痰壺は常に淸潔にせざるべからず）

▲被蓋をする事　かくして猥りに床上に痰吐きて、同胞の健康を害するが如き惡風儀を避くべし、病室に於ては被蓋をした痰壺を使用し、且室隅の一定の高い所或は小箱內に設くるを宜しとす、臺付の小箱を作り、箱の戸扉に痰壺を掛け、洗滌の際には取り放の出來るものが宜しい、且つ臺の高さは凡そ三尺ほどを最も便利とす、被蓋をする時は蠅や昆虫の病毒の傳播するを拒ぎ、且つ一定の高さを有する時は咯出時に便のみならず、犬猫、鷄などが咯痰を甜る事なし、

▲壺內に廢棄る事　若し出來得べくば痰は一定の水を充たした壺內に廢棄るべし、其壺を毎日一升ほどの水

に一茶匙の曹汰を投じて火上に上せ、五分間煮沸たる後、其内容を廢棄る、斯くの如く處置する時は病菌は死滅ぬる故に、水は全く無害なりとす、

▲濕布の裝置　決して手巾に咯痰を咯出べからず、大抵は病床に多數の濕潤た布片を備へ、之れに咯出さしむべし、之れに使用した布片は乾燥ざる内に燒却か煮沸かすべし、唯だ初期の患者には咯痰を使用しめざるものあり、此の際には衣服より取り出し得べき油引帛或は他の水分を泄さぬ質にて作れる囊内に手巾を入れ置き、此の内に咯出さしめ其使用後は煮沸、若くは燒却べし、

▲病室の消毒　患者の寢室及び病中の居室は、時々大消毒をせねばならぬ人若し其親戚或は朋友が結核の爲めに死亡せるが如き、不幸に遭遇せば、屍體取片付けの後には患者の室、家具、書籍、寢具及び衣類を消毒せざるべからざるは明かなり、

▲談話の際唾液浸入の豫防　乾咳及高聲談話の際唾液と共に、排出し來たる病毒を吸入るの危險は、長時間結核患者に接近し患者が咳嗽し、或は談話する場合に存するものなり、旣に患者と三尺位はなれし時は感染する事無し此の場合に於ては排出せる小滴をして氣中に飛散らしめぬやうするべし、故に患者の室は滑澤なる木床を用ゐ、決して毛氈類を敷くべからず、又た箒を以て掃除せず屢々濕布を以て淸拭ふべし、此の注意は家具の洒掃時にも同樣なり毛絨天鵞絨其他總て塵埃を發する裝飾品は、病室內に入るべからず、其他何れの患者も出來得る丈け自室を有するを宜しとす、獨占の室なき時は必ず患者のみ使用すべき寢具なかるべからず　結核患者及健康者が接近して臥床を設くるは、一臥床に同衾すると同一の危險あり、親戚朋友及看病者は無益に患者に接近して長き間在るべからず、又た結核患者には咳嗽及び嚏の際常に手巾を以て口鼻を被ふべきを勸告す、又患者は二個の手巾を所持すべし、一は前述の目的及び咳嗽後口を拭ふの用に供し、一は鼻拭ひ即ち唯だ鼻の淸拭にのみ使用するものとす、之れによりて鼻粘膜及び氣道感染の危險避くべし、

患者の總ての汚穢なる洗濯物、夜具敷布、下着手巾、食卓、用巾等）は出來得る丈け乾燥を避け、使用後石鹼水內に浸すべし。

●人體結核は動物に傳染す

牝牛其他の動物が吸飲する洗水內に於て結核患者の衣類を洗濯するは危險なり。動物は之れが爲めに結核に罹り、此の結核動物より人體に傳染すべければなり。結核患者の咯痰を牧場、厩舍等に咯出すは人體結核を動物に傳染せしむるものなり、曾て地方に於て一肺勞者あり醫の充分なる監督なかりしを以て患者は毎日散歩に出づる每に彼れが欲する儘に何處となく咯出せり患者の隣家に乳清製造所在り、牝牛を飼養せり、乳清製造所の所有者は注射を行ひて常に牝牛の健康を試驗するとを知れり、然るに多數の牝牛は結核に罹れり、

●病毒の食物より傳染する豫防

肉類に對しては檢査を行ひ結核動物の肉は之を燒却べしと雖も此の肉檢查の充分に行はれざる處に於ては、確實に煮沸し。或は攝氏百度の熱にて炙りたる以上にあらざれば食すべからず、斯くの如くせば確實に諸病毒を撲滅し得べし、殊に牛乳を以て小兒を營養する場合に緊要なりとす、總て買入たる牛乳は必ず先づ煮沸或は消毒すべし、肺勞患者の唾液は屢々病毒を有す故に結核患者とは決して接吻すべからず、又た結核動物（鸚鵡、かなりや、鳥、犬、猫等）の唾液より結核を人體に傳染せしむることあり、故に此等動物を餘りに寵愛して接吻等をなさゞるを宜しとす。

結核患者は自身の水飲、匙、肉叉等の食器を有し他のものと共用にせしむべからず、又た患者の使用する食卓器具は常に注意して煮湯を以て洗滌すべし患者が恥と思ひ其咯痰を嚥下すは甚だ危險にして爲めに腸結核を起すものなり。去れば能く之れを敎訓して咯痰嚥下を避けしめざるべからず、其他注意するも、咯痰は患者の手指に附着し、其手にて食物に觸るゝを以て患者は屢々手を洗滌せざるべからず。

●他の結核病と其重なる症候

先づ肺勞に最も類似せる頸部結核或は喉頭結核に就て

述ぶべし本病は呼吸器結核の第一症と見做すべしと雖ども、實際は多くの肺結核の末期に來たるものなり、其症狀は肺勞と同じく熱、盜汗、羸瘦、呼吸困難、咳嗽等の外尙は音聲嘶嗄及び屢々烈しき嚥下疼痛あり從て麪包、肉其他の固形食物を攝るに極めて困難を感ず、

●健康者の結核防衛

偶然病毒を抱有する空氣を吸込たればとて健康者が直ちに肺勞となるものにあらず、結核牛乳を飮みたりとて或は痰壺の爲めに負傷したればとて直ちに結核に罹るものにあらず、健康者の鼻粘液、血液及び胃液は疑もなく病毒を滅殺するの性質を有す故に健康者は餘りに結核に對して恐怖を抱くべからず、唯だ自己の利益上斯くの如くして感染すべきものなることを知り出來得る丈け之れを避くべきなり、

●結核遺傳者の心得

これは尤も肝要の事柄なり未來の兒童に肺病の素因を避けしめんことを欲するの母は常に（殊に妊娠中）最も健康なる生活を營み好んで外氣に生活し、屢々深呼吸を營み、規則正しく且つ充分に飮食し、決して胸部及胃部を狹窄するやうな衣服を纒ふてはなりません、なるべく呼吸に容易なる袴を用ふべし、總て母の衣服は一般に自由なる運動を行ふを得べし、且つ總ての臟器の官能を害せざるものならざるべからず。

健康に適する衣服が人類の幸福と身體の發育上に如何に緊要なるかを知るべし

男子に於ても下袴を帶にて結ぶを禁ずべし、蓋し帶を以て緊結する時は、獨り消化時に必要なる腸の運動を障害するのみならず、下腹脫出の好機を與ふるものなればなり、總て結核の傾向を有するものも良好なる消化力を有せば疾患の發生を防衛することを得べし、

襟卷は絕對的に有害なり、若し餘りに狹き時は空氣の缺乏を起し、腦の充血及び之れによりて頭痛及び眩暈を起すの原因となる、温き襟卷は身體を柔弱ならしめ從つて天候の變化する際には感冒の原因となるものなり。

●母の注意

若し母自からが結核の傾きある時は、小兒の哺養は強壯なる乳母或は良好なる牛乳の助けに據らざるべからず、此の如き場合には醫に謀ること必要なり、小兒は自身の臥床を有し決して母と同衾さすべからず且つ室は常に換氣を充分にすべし、而して出來得る丈け日々小兒を屋外に出すべし、但し餘りに厚き覆面を以て頭を被ふべからず、生後十ヶ月或は十二ヶ月よりは漸々冷水拭洗を習慣せしむべし、即ち先づ初めは溫湯に入れたる後ち、迅速に冷水に浸せる手掌を以て小兒の體を摩擦し、漸々慣るゝに從て冷水に浸せる海綿を以て摩擦し、遂に冷水灌漑を行ふべし、これは小兒並に大人の感冒を豫防するの良法なるを以て、一般に之れを實施されんことを熱望す、大人は容易に冷水に慣し得るものなり、其法初め一日一回酒精を以て、全身を摩擦凡そ一週日の後次で冷水を混じたる者にて摩擦すること一週日なる時は次週に單に冷水を使用し得べし、斯くの如くして遂に冷水浴、冷水灌漑等を行ふを得、冷水浴を行ふの時間は早朝床を出で更衣する前或は夜臥床する前を最も良しとす、又夏季は勿論冷水殊に河水及海水に游浴するを宜しとす、但し病者及老人は夏季と雖とも唯だ醫の指圖の下に入浴せざるべからず、皮膚を清潔ならしむるには冷水のみにては不充分なり何人と雖も少くとも一週一回は溫浴を取るべし、但し溫浴を取りし後も常に冷水を以て全身を摩擦すべし、感冒なるものに對する最良の豫防法は身體の强練に在り、從て何人と雖ども生活中避くべからざる感冒に對して慣さざるべからず、

皮膚をして常に健康ならしむるに、晝夜同一の下着を着用するを避けざるべからず、夜は唯だ麻衣或は綿衣を着し日中は充分空氣に暴露せしむべし、

生長しつゝある小兒には出來得る丈け早く深呼吸をなすことを教へ、後には次の呼吸操法を教ゆ、即ち窓を開放し、或は屋外に於て所謂陸軍的「氣を付け」の姿勢を取らしめ、口を閉ぢて徐々に深吸氣をなすと共に兩腕を地平に迄擧げ、此の位置に止むこと、凡そ三秒

間の後再び呼氣を出しつゝ兩腕を垂直に下す、是れより第二第三の實際外觀上他人の注意を喚起することなく、此操法を屋外に於て行ふことは困難なり、故に兩腕を擧ぐるを得ざる塲合には尚は一層簡單なる呼吸操法を行ふ、即ち歩行する時にせよ、座する際にせよ鼻より深吸氣を行ひ同時に肩部を擧げ且つ後方に廻轉し通例の如く呼吸を二三秒間止め肩部を前方に且つ下方に廻轉する際呼吸を行ふ、



◉少年少女の注意

少年及び少女は屢ば前屈の姿勢を取る、而して之れを避くるの法は次の呼吸操法を行ふを宜しとす、兩手を臗骨上に固定し拇指を前方に向け、吸氣をなしつつ後方に屈

し、二三秒間此の位置にて止り、次に呼氣をなしつゝ直立の位置に復す、尙は又次の注意を要す即ち先づ容易なる操法より始め充分之れに練習したる上困難なるものに及ぼす、而して半時間或は一時間毎に六乃至九回の深呼吸を營み、以て深呼吸をなすの習慣を養成すべし、但し常に新鮮なる塵埃なき空氣中に於てすべし、



又た疲勞する迄持續すべからず、獨り晝間のみならず夜間も亦新鮮清淨なる空氣に注意すべし、市街に於ては夜間の空氣は晝間の空氣より清淨なるにも拘らず從來夜風は毒なりとの迷想の傳播せるは甚だ悲むに堪へたり、故に毎夜寢室或は其隣室の窓は其天候を計りて空氣交換に充分なる丈け開放すべし、直接の通氣を避くるに

は通氣が直ちに睡眠者に當らざる樣臥床を設くべし、此の裝置不充分なる所には所謂衝立てを用ゆべし、結核の遺傳傾向を有する者は、常に新鮮なる塵埃無き空氣を呼吸することを務めざるべからず舞踏所煙草の烟を充せる處等には出來得る丈け出席せざるを宜しとす。

●屋外運動の必要

結核の傾向を有する小兒の敎育は甚だ緊要なるものにて多くは生來食量少なし、此等食欲過少に對しては多くの甘味を食するを禁じ、食事の時間を正規にし便通を良くするに注意すべし、又た早くより食後に齒牙を淸洗すべきを敎ふべし齒牙の良好なる狀態と消化の良好とは相關聯するものなればなり、

屋外に於ける遊戲を好まざるものは多くは、肺勞の後備者なり、是等は嚴格なる敎育を以て匡正すべし、是等小兒に暖衣を纒はしめ、室內に蟄居せしむるが如きは全く排斥せざるべからず、學齡時に於ても餘りに勉强せしむべからず、前屈して座し精神を勞し其他餘りに音樂に耽るが如きは、結核の傾向を有する身體を虛弱ならしむるものたり、

年若き男女は體操を持續すべし、殊に結核の素因を有する少女は成年に至るも尙は屋外遊戲を廢すべからず去れど總て過度は有害なる如く餘りに激しき餘りに長き時間に亘る運動は却て有害なり、規則正しき生活をなし强壯滋養の食餌を攝り酒精の飮用を禁じ、便通を正規にし身體を淸潔にし且つ少くとも八時間睡眠することは健康を保全すべき最良法なり、尙は再言すべきは大人の衣服は健康に適するものならざるべからず而して時季により自由に運動するを得べく身體の働作例へば呼吸消化等を毫も障害せざるものならざるべからず。

年若き男女にして遺傳的素因を有するものは職業を撰擇するを忘るべからず、農業園藝其他屋外に在て執るべき職業は最も適當す、是れ結核の素因を有する人をして强壯ならしめ得べし。

結核は治癒の希望なしてふ古來より民間に流布せる思

想は不條理なり治癒の希望は遺傳の有無に關係するものにあらず、其父或は母の肺勞なりし男女にして治癒せるもの幾百なるを知らず、（完）

獨逸人の家庭

稲澤ゑい子

獨逸婦人某の君は、南獨乙ヰュルッテンベルク國首府シツットガルトの市民にして、當時彼國美術界に名ある同市博物館美術部長プロフェッソオル、男爵ドンドルフ氏の第二女に在すなり、今より十四年前某氏に嫁し、夫の君の任地たる我東京に來りて過る年に歸國せられたり、近く迄此の邦に住せし夫人と歸國後との夫人とに就て知れる限をいさゝかうつしいでむず。

夫人性淡泊にて心氣爽快且注意細やかの質なり、其性質中特に高尚にして美術的感想に富めるはこれを、父君よりうけ傳へられたるが如し。

夫人の我邦に着してより一二ヶ年間は心を潜めて殊に本邦一般人文のほどを觀察しぬ、まことに多數の外客とは其趣を異にし専ら根底につきて各方面よりこれを知らんことをつとめつ、故に夫人の觀察や多く公平にして眞率なりき、且つ日常百般の事物は彼女の思慮ある温情にふれては一として興味をもて充たされずといふことなし、かるが故に其人に就いて余が親しく見聞せし所の一班を記して此の夫人の優しき面影を偲ばしむるも强ち無用の業にもあらざんめり。

本邦に着せられし年の師走一日、夫人は予に問ふて曰く貧しき人々の如何にして來るべき嚴冬を過すべきか御身の知人中誰なりと予の助けを要する人しあらば、心おきなく漏らしねと、予はまづ直ちにさる所に一家六人中に病める父あり、二人の盲目なる姉弟と他に二人の幼弟ありて兄なる人のいとあはれなる樣を語りいでつるに、立ちところに彼等には最も丈夫向の布こそ必要ならめとて、一切新調して暖く出來上りし四布蒲團を贈り、且つ年も暮れ行けば新らしき年迎へむ用

意もがなとて祝ひの物など取らせあまつさへ二三枚の餅をも添へられたり。

又夫人住家のほとりに年老ひたる人ありき、彼は武士の果なりといふ、いかなる境遇の彼をかく淺猿しきものになし果てにしか、狂人たりといふも語る所ろは往往眞面目なり、こゝらの噂には彼は今縁家に係人の身なるも甚だしき虐待を受けつゝありと、之を聞かれし夫人は一日彼の家を見舞はれたり其家といふは畠の隅の堀立小舍にて寒村にも稀に見る如き破れ屋、人の住家とは思はへぬ淺ましきものなりけり、夫人は憐みの情切に禁じがたく、早速蒲團よ食物よと取揃へて彼處に送りやり、又日毎に人をして何にても彼の望みに任せたる物を取らしめなんと計られつるも、あやにくの心より種々の語を設けてそを辭むとなどさへありき、されば此度はわが家の車部屋ならむには心安からむとて、此處に宿るべく告げやれば、唯取とめもなきをかしき事のみ口走りて從ふべくも見えねば、四五度の應答の末にはやみぬるも、冬の寒き夜の薪の料などは態ざと使ひして人知れず送り屆けぬかゝる内に一夜爐火の己が衣にうつりしを知らで終に焚死したりとなむ、無殘の事といふ可し、

夫人は知人中に病める者あれば種々のやさしき助言を與へて劬り遣るを常としたるも、補助を與ふべき必要あれば、道の遠きも物かは、時々滋養の食物を送り遣はし病軀を安臥せしむる料にとて柔かき蒲團枕を屆けしのみならず、又或る時は便器をさへ送りしことあり、又折にふれては自ら器とりて病める人の口に適ふやう調味しておくりぬ且つ自らの力のみにて支へがたき折は自國人に協力を求めけるとぞ。

或る學校に一少女ありけり、右足を傷つけ歩行いといと難澁なりければ夫人は自ら大學病院に伴ひ行き、外科醫ドクトル、スクリッパ氏に治療を乞ひしに、氏は之れが治療の甚だ六ケしき由を以て答ふ、切に乞ふて、入院せしめ充分なる手當を施しつるも遂に其効なかりしぞ彼女の爲め夫人の爲め共に悲しき限にこそ。

又或る夕ぐれときの事なりけり予に向つて今夕は病客

ありといふ、いかなる人よと其室に至り見れば、病み蓬けたる六十七才計のむさくるしき老夫が室の一隅にいと體裁悪氣の素振にて蹲踞り居たりけり植木職なりといへど食なく居なく剩さへ衣といふものは一枚も持たずといふ、唯薦にて身を包みたるを夫人が途上にて見つる儘、例のあはれがり玉ひて直ちに車にのせて我が家に連れ來たりて、まづ綿入を購ひあたへ、下婢をして、入浴理髪などに伴はしめ、暖かき食を充分に與へ肉も卵も能く調理して飢えたる腹にたらふく飽かしめたる後、徐ろに其來歷を問ひたるにあはれ、酒故にこそ斯くの仕末、酒飮までは一日も生存することあたはずと語り出でぬ、夫人はとかく色々と敎へ諭して酒飮まずば部屋も與へ永くも宿らせんとまでいひきかしつれど、更に聞き入れず、遂に止むなく二泊をゆるしてこゝを出しめにき。

又家豊かならざる若き娘の病後の保養に事かくときゝて、日々自家の晝食に招き且つ牛乳の代を拂ひ遣りたるなど一々は數ふるに暇あらず。

夫人は車上にある折にも、徒歩せる折にも必ずひろく四方に注意して、もし憐みを要する人とし見れば五錢銅貨一個を投ずるを以て例とはなしぬ、夫人の忠實なる車夫はしば〳〵いふ、『けふは奥さんハズンダよ』と、こは例にこえて五錢以上を與へし折のことなり、かくて又老ひさらぼひし人のよぼ〳〵しながらも、猶孜々として、なりはひを營めるを見れば呼びて其品を求め遣りぬ、公園街上或は彼等の店頭に至りて、家に待つ家僕と其子女等との土產にといふを名として數個を求めて餘分の價を拂ふは常のことなりき、誠に夫人のやさしき手は病める人苦しめる人の身を撫でゝ慈愛はその極に達しけるよ。

夫人はかく眞實なる交際をなすを以て自國人中に重んぜられたり、前獨逸代理公使夫人の如きも亦たもとより氣品高く慈愛の心おはしゝとはいへ、公使夫人としてよく每冬貧家の子女に物を贈らしめられたるなどは全くこの夫人のおきて玉ひし所に誘はれ玉ひしにこそよるべけれ。

歸國後夫人よりたまはりたる書状われば、之を掲げて夫人の面影を知るのたよりとせん。

(上畧)親しき友よ斯るが此の世の常なりと御考なきてとそこそ、望ましく候、神は御許と我とに何物を送り給ふか其時の到來する迄信じて待ちかまへ申べく候、御許も我も未だ年若く候へば何故此の世ながらに悲しき別れなさねばならざりしか其理由は一つもわかり兼候、今日御互に萬里の海波を隔て居る身を近しくも又た堅く結び付け候ものは唯祈禱の外には無之かるべきかと存じ候、今日良人儀は友なる人の幼兒の葬式に臨み申候、私は愛兒フリッツ(五才の子息)を抱きつゝ遙か彼方に見ゆる小さき棺を望み申候折は云ひ知らず悲哀の感にうたれて、彼の父の心の内を推せば嘸ぞかし哀しうも思さんと存じられ候、此の場合この父に力を添ふるものとては神に祈禱して氣力を強ふする外には術なかるべきことゝ信じ居候。

人生は實在にして生活は又眞面目なるものに候、時としては余りに嚴かに存じ候。

扨て當地に着後一ヶ月程は病の床に打伏し居候ことは御許様の御承知なきことゝ存じ候、只今にては全快いたし候へば善良にして勤勉なる家婦たらんものと勵み居候、當地に着して間もなく候へば何事よりも家事上の用向多端にまつはり居候、當家屋は十棟を有し此の邊にてはまづ〳〵眺望よき牧師館にて御座候、御地より持ち歸り候種々なる器具を美はしく飾りつくるは容易なる業には無之幾個の大なる箱を一々開き品物を悉く取揃へ候は隨分手間ひまを要することに御座候、御地にては車屋とか職人とかを雇入れ何の苦なしに打過せしも夢の間にて、此家にては、頼みたくもかゝる調法なる人は御座なく候、兼々御話いたし候通り、牧師館に候へば周圍には大きなる庭園、草花も野菜も又は果實の樹木類も處狹きまで生ひ茂り居り候、菜園には人參、豌豆、芋類、菠薐草、さらだ、赤茄子、きうり、あすぺらがす等を栽培いたし此等は皆私自身にて種子より育し立て申し候、此外には廿羽の鳥も飼養致し置き候、下婢バアベルは私共外遊中に著しく

老い既に人手をかゝる程に相成候へば日毎日毎の働きの程御推もじ被下べく候、もはや御國にて呼ばれ候奥様には無之、誠の獨逸の家婦にかへり候を是にて御承知被下度候、折々はまめやかなりし勇（料理人）やおかみさん（料理人の妻）の事を出るにも入るにも想ひ出し候、彼の折の望ましきパラダイスは我が生涯には再びてれなかるべくと存じ候。

某孃に托して御送り被下候好物の餅と日本茶とは二つながら私共の深く謝し參らする處に御座候、兼て伺ひ居候通り、餅せんべいを爐火の上にてやき、醬油をひき茶と共に喫し候時はおのづと日本在住中の心地致し、大に愉快に感じ申候、又既に四回程純粹の日本料理を調理いたし候、魚類は御地の如き良きものは得がたく候へどもまづ〳〵新鮮なるものを得候、老婢パアベルに若しやと思ひて進めしに、取別け刺身を舌打して頂き候、細長き庖丁にて魚肉を薄く切りて刺身に作り候は最とむづかしき業に御座候、夏の暑き間はフリッツには日本服をのみ着せ草履をはかせ置き候、幼兒のためには涼しさゆゑ至極よろしからんと存じ候。

當地は人口二千三百の町と四百の村より成り、新教徒の多き土地柄にて御座候祈禱又は説教のひま〳〵には最下の貧しき人々を見舞ひ申候、シウェスター、ソフィー、（ソフィーは救護婦の名にて、婦人の尊稱たる夫人令孃等を冠する場合に救護婦には、シウェスター即ち姉妹を用ゆ、此の種の婦人は貧民、病人、孤兒其他何なりと人の補助を要する人々の間に働くを職分とす）はまめやかに住民を訪問して細かに其狀況を報道いたされ候へば、毎日曜日の晝食には必ず私方へ御招き致居候。（下畧）

夫人は曾て高等女學校卒業後佛蘭西瑞西に於て學識經驗共に秀でたる二婦人の設立なりと傳へられたる寄宿學校に入り二ヶ年間佛語を專修し、國風によりて一箇の婦人として世に立つに叶へる丈の修業を積み、それより又夫の君と共に英國にも渡られたれば英佛二ヶ國の語いづれも、自由に操り玉ひけり。

曾て獨逸人この夫人を評して曰く『獨逸國民が理想せ

る獨逸婦人は正に夫人に於て其面影を認め得らる」と此處に獨逸婦人の眞相を明かにせんとて、この夫人をものしつ。

子供の癖をなほす法

明治母の會の例會に於て、小兒の惡癖矯正法に就き山口三之助氏は左のやうに話されました。

▲小兒の惡癖　を矯すのには、まづ第一にその原因を究めねばなりませぬ、そしてその原因に應じて或は精神的に、或は生理的に種々の矯正法が案出されるのであります。

▲怒りやすく我儘な癖　をなほすのには勉めてその子を社交的に傾くやうに導いて行くのが大切です。即ち我儘な子供に限つて多く孤獨を好きまして、友達と一所に面白く遊ぶと云ふとを知らぬものでありますゆゑ母親は種々の場合を利用して、成るべく人交りの樂しさを知らせるやうにするのです。また剛情な子供に對しては己より以上の抗爭即ち子供が剛情を張る時に、ドンナ事があつても決してその剛情を通させないといふ強い仕方をとることもありますが、矢張我儘な子供と同じく社交的に導くといふのもまた一法で御座います。

▲子供の狡猾　は如何なる所より來るかと云へば、それは多く母親の一面に嚴重でありながら、どこかに拔けたところがあると云ふやうなことから來るのです。即ち子供のあしき所業を見つけるとひどく嚴しく誡しめますが陰でしたことには一切氣がつかぬといふことでもありますと、自然子供はわるさをしながら、母親の前をつくらうことを覺えるといふ樣な次第です。嘘をいふ癖もまたこの樣なことから起ります。

▲づう〳〵しい癖　は子供の無心の行爲をひどく批難したり、嘲笑したりすることから起るので子供の感情を猥りに害するといふことは、實に恐るべきことであります。

▲母親の不注意　から知らず〳〵子供に多くの惡德を敎へつゝある例は澤山ありますが、客のあつた時「よ

ーこそ」と笑顔とお世辭を以て迎ひながら、歸つた後に厄介な人が來たと云はぬ計のことをいふのは、ありさうな事ですがこのやうな事こそ、子供に嘘を敎ゆる適切な一例です。

なほ惡癖の中には、生理的の原因から來るものが多う御座います、それゆゑ身體の營養發達を充分ならしむることに注意するのはやがて、子供に確かな思想を宿らしむる基になるのです。

次に子供にありても大人と同じく、勞働は心の上にも身體の上にも何よりの藥でありますゆゑ、惡少年などに適當なる勞働を課して感化の實蹟をあげた例も澤山あります。

（了）

姑に仕へる秘訣

水原翠香

◎家内の風波は十中八九迄饒舌に發る、女は上下ともに多言の失あり、殊に下婢抔は姑舅の事を惡さまにいへば婦の氣に入と心得て大體の御事ならず、痛はしなど云ふに忽ち釣込まれて讒がま敷詞を出せば、それに二三も輪をかけて又姑の氣を取らむとて告らるゝ事ある也恐る可愼むべし、向ひて諂ふ者は必背きて讒すさる事をいひ掛る者あらば事に託して其座を去らしむるか、我よりたつか然も爲難くば早く、話頭を轉じて紛らすが賢き也。

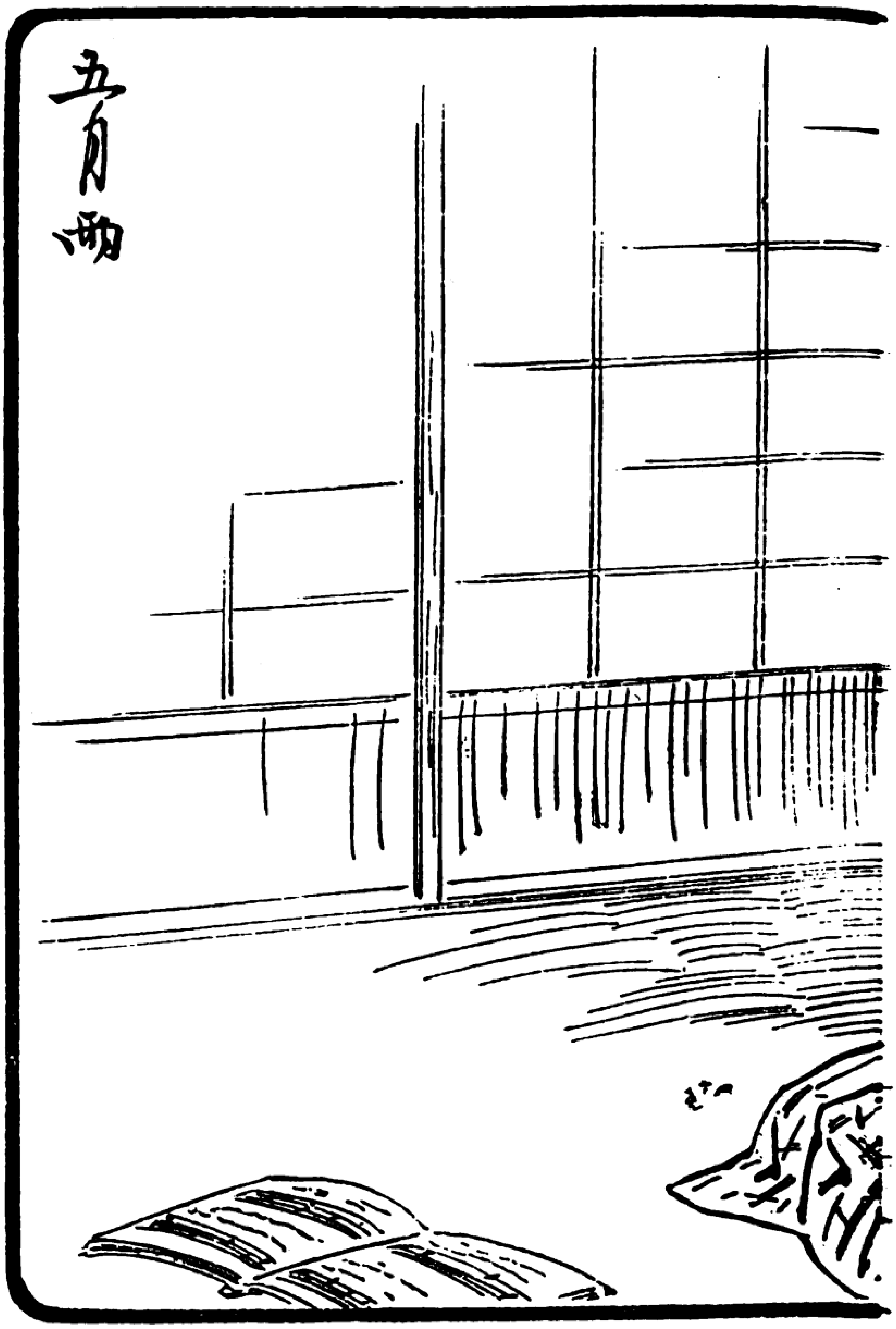
若き婦人の癖として何でもなき事をも克笑ふ此笑ふはあながち惡き事には非ねとも、事と品により笑ふ間じき事を笑へば、大に害を招く也、姑の老て眼耳ともに疎く成物事を見誤り聞違へなどするを笑ひてそれより惡感情を惹發す事世間に例多し、只一時のをかしきにて別に侮蔑する等の惡意に非ずとも笑はるゝ老人がもしさばけぬ頑固人なる時は忽ち腹立ちて是より互にひがみを生ず、眞實の親子中はたとひ諍ひても其事終れば元の如く根も葉もなき物なれど、姑婦の中にては一度事行違へば容易に解がたく、萬事互ひにあしき方

へのみ疑ふに至る豈愼み恐れざるべけんや。
◎家内に風波の立つは十の八九饒舌に發る、女子はとかく多言の失あり、出入る者下婢等とかく婦に向ひては姑舅の事を惡ざまにいへば婦の氣に入ると心得て大ていの御事に非ず御痛はしなど云ふに釣込まれてツイ讒りがま敷詞を出せば直と夫に輪をかけて姑舅に告らるゝ也恐るべし向ひて諂ふ者は背きて必讒す我に他を讒り聞かする者は其如く他に我を讒るや必せり、されば用事に託して其座を避るか、然も爲がたくば早く話頭を轉じて相手にならぬがかしこき也。



◎姑の氣に入了して家政を任さるゝとも猶老人を重んじて何事も其意を伺ひ、物毎に相談を持かくべし、然すれば一層信任

せらるゝなり、然るを我の信用を未得ざるに先だちて家政を掌握とし姑の老て眼耳共に疎く、爲に見誤聞違なとするを笑ひ、舊弊にして當世の事情を解せずと嘲り、之に一々かゝりては居られずと厄介視し聞べきをとはず、告ぐべきをも知らさずして除物と爲、さらでも僻み易き老婆をかく冷遇せば、誰かは怒り憤らざるべ



き、斯の如き婦又是に類するもの方今の女學校卒業生に殊に多く十人は十人ながらと云も過言ならざるが如し、稀には貞順なるもなきには非ざれど、雨夜の星もたゝならず、理哉親からして姑のなきのみ、擇ぶ世中なるをや。假令姑耐忍力強くして、表面をば克忍ぶとも、中心常に穩やかならねば、互に仇敵の思をなして、何

程の機會に破烈せでやはわるべき、もしか婦の悪運强くして破鏡の難を免るゝとも因果覿面に報ひ來りて、其身も又不孝の子孫に侮辱せられて、其時思ひ知る共遲し、老人に克撫恤仕へて我身先好模範を子女等に示しおけば、善には必善報わる事何の疑ふ處あらむや。

◎世に小心大膽といふ言わり小心とは心を細密に行屆かせるを云ふ大膽とは俗にいふ横着に非ず、心を大きくもちて總體の高を括りて其目的をだに愆たずば、餘事はドウデモよしと度量を廣くして小節に拘はらぬを云ふ、女子の他家に嫁して舅姑夫に仕へ、小姑公に交はるには尤小心大膽を要す、嫁として小心よく〳〵たらざれば常に誤ち多くして家人の誹謗を免かれがたく、又大量にして萬事を海容せざれば日夜に腹立事悲しき事絶ずして或は恐縮し、又は悲泣し、心の休まる遑わらず、かくて永の年月を送らるゝ物ならむや、耐忍すれば病となり、堪へきれねば離縁となるの二つわるのみ、されば前條に演るが如く自己を無にして曲從し、小六ヶ敷姑小姑公の意を採るには始より俳優の舞臺に登りて演藝する如き心持となるべし、彼俳優等が演ずる處苦しむも、悲しむも眞實ならねば、身を損ひ心をやぶるには至らず、然れども其演藝中は團菊左たるを忘れて其扮する所の人になり澄し、技藝眞にせまるが故に觀客を感動し泣涕せしむ、されば一家和合を目的として其爲にはいかなる事をも堪忍びて誠實を竭して其觀客たる姑夫を始め一家中の人を感動せしむべし、斯くも猶人の感動せざるは我伎の拙き故也と省みて、一層勉勵すれば其うちに自然と化せられて始はいやながら忍びて喰せし物も好と成り辛勞と思ひし事も馴ては苦にならず、終に姑の演伎眞となりて、人心を感動せしめ、意地わるかりし小姑も和らぎ六かしかりし姑も慈愛心生じて、一家團欒春の如き家庭となり、笑ひて日を送るに至るべし、かくて姑の意に協ひ、家政を任さるゝとも、猶老人を重んじて何事に附ても其意を伺がひ、物毎に相談を持かくべし、專斷せざればます〳〵信任せらるゝもの也、然るを我身未信用を得ざるに先だちて、家政を我掌に握らむとし、姑は舊弊

にして當世の事情を知らずと嘲けり、文盲無教育者也と侮りて自己より遙に世故に熟せるを思はず、神佛に歸依すれば迷信と笑ひ、家の爲を思ひていへばさる事は方今の間尺にあらずと反對し、舊弊人にかゝりては居られずなどゝ厄介視し、問ふべきをとはず、告ぐべきをも知らさずして除物となす、然らでも僻み易きは老母の常なるを、かく冷遇せられて誰かは憤り怒らざるべき假令堪忍強くして表面には忍ばるゝとも、心中穩やかならざるが積り〳〵ていつかは破裂せでやは濟むべき、終に爭ひを惹出して互ひに仇敵の思を爲す、嫁の惡運強くして破鏡に至らず、姑に勝おふせたりとも因果は覿面に報ひ來りて、其身も又不孝の子孫に侮辱せられて、其時思ひ知るとも遲し、老人の情を克く察しいたはり仕て我身先好模範を子女に示しおけば、善には 必 善報ある事何の疑ふ處かあらむ。

大膽にせよ俳優が演藝の心持になれと云ふをあしく取違へて、心中に誠なくとも表面を瞞着さへ爲ばよしと串様に聞僻め賜ふな、誠實を竭すべきは勿論なれど、其爲に心中常に悒々苦慮のみしては身體つゞかず、故に我とわが身を保護する爲に心を廣くもち譬へ何と云はるゝとも夫等を念とせず、期する處は和合して此家を相續するにあり、是式の事何かあらむと心中大膽にかまへてよし〳〵先が斯出るには彼請るが宜からむ、明日は斯してみむなど、彼俳優が伎藝に凝るが如く、其機を探る工夫をすれば、却に面白く興味ある心地さへ生じて、少しも身の害となる事なし、凡人は苦を樂しむものにて心身共に安く無事なれば、決して樂き事もなし、他よりみてあの如く骨を折、苦勞して何が樂みかと思ふ事も、其身に取ては其骨折苦勞が即ち樂しみの爲なれば、他より思ふ程苦にならず、頓着せねば身體に障らず、況て其目的を遂し得たる時の愉快は言にも筆にも竭しがたし、故に人は其好む處何か一つの目的さへ有ればいかなる苦にも堪らるゝもの也、昔より忠臣の君の爲に身命を抛ち、貞女兩夫に見へずの苦節を守るも其赤心を顯はすを潔しと好むが故也、あしき方に

ても色に迷へば常人の得堪ふ間敷事をもいとはぬは相逢ふを樂しみ好むが爲のみ、名利に走る人冒險を試る人皆心中好み期する所有るが爲に、萬難を辭せず其成功すると爲ざるとは、運命の有無にも依るべけれど兎に角艱難と戰ひて苦に勝つ者成功し、薄志弱行にては央にも至りがたし、もし高運にして僥倖するとも百折千磨して練ひ上たるに非ざれば堅固に保たず、程なく失敗するもの也、婦女子の他に嫁して姑舅の意を迎ふるも又斯の如きのみ、今文明の世となりて嫁にも又權理わりて昔程六かしからず、動もすれば嫁が巾をきかせて逆に老人を押込るさへ尠からず見聞す、我意を張るを文明流と心得たるには扨扨厭心爲がたき文明なる哉婦女たるの美德何處にかある眞の文明はさるものには非ざるべし。（完）

家庭日記

武藏　鳥居梅子

五月五日五時半起床朝の程曇り寒暖計は攀氏六十四度なれど風いと冷なり座敷掃除椽側拭く朝餉すまして後いたづら半分に養ひし三十匹許の蠶に桑を與ふ九時妹の袷縫ひ始む正午より雨降りしきり雷鳴きていとものすごし家の者皆々落雷のなき樣にとて年越の煎豆食べぬ四時半迄裁縫せしが夕餉の支度もあればとて立つ筍の料理いつも甘過ぎるとていいたく不評判をとりし夜は女學世界見ろ記事いづれも面白く今少し見まほしと思ひたれど母上に促がされて十時半床に就く

十日祖父君の庭掃き給ふ音に驚き出づれば昨日に引かへて朝日は眞赤になつて戸の透間より洩れていろ急ぎ雨戸押開けお祖父樣お早ふございますと挨拶すれば祖父君殊更に大そう早いの——と云われてゞときまりわろかりき掃除後例の如く蠶に桑を與ふ「今日よりは妹の役目」十時母上の實家より新茶屆く誰よりも祖父君の喜び給ふ昨日より縫かけの袷午少し過悉く出來上ろ明日は客人あれば久々にて床に花挿し幼き妹を相手に庭の草取りなどす父上より御褒美にとてゆで玉子二ツ頂戴しぬ妹のほく〳〵喜ぶ樣愛らし暮方次の妹とゆあみす夕飯後お向のお千代ちやん來られいつもの「兎〳〵何見てはねる」など遊戯していと賑しかりき

大阪　蒔子

五月第一月曜、起床五時半、晴、こん立は昨日作りし物に依りてす、

入時主人出勤、洗濯し縫物す、午後一時金子様諸ひ給はる二時前つる子様御入來、博覧會の品評などす三時頃二人共お歸り、子供軽き歯痛をおこす例の通り温めてたゝちに治す、主人例刻に宅食終へて主人と子供近邊を散歩、子供八時寢につく、小使帖記す胃ねんどう五合七錢五厘三日前より下落る事一升に付三錢、日記附し新聞讀み十時床につく。

火曜、起床昨日と同時、晴、主人出勤八時二十分、育嬰院賛成會の集金人來る、縫物少々す、午後菓子屋東雲堂來る汐干狩と第五回博覧會にちなめる菓子なりとて目籠に大なる蛤五つ松葉みあしらひて入あり貝にはみをづくし、大阪の紀章、波・卯花、蛇籠などの模様あり中身は羊羹一色つゝにて五色なりあまり感服は出來ず、裁縫す、夕方朝顔蒔く、主人歸宅イルミネーション見物に行かんとて早めて夕食を終へて六時宅を出づ、玉造驛より博覧會驛まで氣車で行くそうしよく電氣のうつくしさたとへんに物なし、歸途人力車、車上にて子供眠る、九時過歸宅、十時寢につく。

水曜、起床五時、曇、主人出勤八時、國元の實家より來書皆無事此間送りし昆布の菓子初めての品にて方々へ分け、來客に出しなどして珍らしがりし、名物の若芽小包として出せしなどとあり、哀れなるやもめ乳のみ子背負て針賣りに來るを今不用なれど哀れさに五十本もとめつかはす、涙を流してよろこぶ雛子に菓子とらす、午後は裁縫す子供の單出來上り前だれ一つ縫ふ、隣家の故陸軍大尉の滿中陰なりとて角形の小盆送らる襖の折枝にくつわの金蒔繪あり、主人例刻歸宅夕食にビステキ初めてよく出來たりと甚くよく賞めらる、食後手風琴奏す主人と子供不揃の唱歌をかし、子供寢て例の通主人讀書、我は昨日今日の日記小使帖をしるし、陽氣なる大町先生の婦女雑誌をよむ、すら〳〵として面白き中に交へたる歌あり再三よみ十時半寢につく、

東京 齋藤はな

十三日、天氣のどかに晴れたり、今日は暗き程に朝餉したゝめ晝けもちて裏の畑へ大豆まきにゆく、我畑の麥生ははや半ば實みたり去年よりも種付は余程宜しく嬉し。四時頃家に歸る、都にある弟より手紙屆き居れり。中に「……………姉上の御送金にのみよりて勉學致居候事はげにも勿體なき心地致し候へば新聞配達し幾分を御手助け致さんとも存じ居候……」とありければ「……さる御志し健げに候されど今年は殊づ上出來にて去年よりは三割以上增收の見込に候へば御前樣への仕送りも少しも苦になり申さず候へば此御心配は御無用に御座候母も姉も唯の願ひは其許の上達のみに候……」と返り事しやる序に袷一枚單衣三枚送る、弟は可愛き者よ。

十四日、曉ちかき頃、ふと屋根もる雫の顔にかゝるに夢やぶられて驚き起きいづ、雨の音さながら瀧など落ち來るやうなり疊はきあげ机もち來りなどす、母君歌あり

「とく起きていそしめよとか曉の
ゆめ驚かし雨のふるらん」

己れも「いましばし母よ待ちませふる雨を
よそにまどろむ家作りなん」。

あけ渡りてなほやまず朝げの后、雨を侵して走り半を堀りにゆき久助して市に持たせやる三時頃久助歸り來る問屋より今月分仕きり三十五圓持ち來る、々刻ふと見れば多年飼ひ馴したる雲雀斃れ居れり、いと口惜き心地す、小弟は一しはにてそを庭の片隅に埋め其上に齋藤家雲雀の墓。と書いつけゐる木片を立つ、なかしきは子供の行ひなり。

十五日、今日はお三日なれは畑仕事休む、午后村長さまの御宅に御不沙汰伺ひにゆく色色と御話しのうち奥様より細工玉子の法敎へ頂きたり、いがにも面白ければ覺ゐの爲め左に

先づ玉子を炭酸ツーダを入れたる水の中に入れ漸々に温め沸騰后十五分許りに引き上げ熱きうち丁寧に玉子の肌のきずのつがぬやう殼皮をむき兩指にて玉子の尖りたる方の兩端を押せば容易に平たくなり恰も林檎の如き形となる、かくなりたる時水にて冷し、后、薄汁にて煮て味をつけ、これに紅もて林檎の如き模樣をつけ、何にても少さき葉を上部にさせば一見眞物と見違ふ許りなり。

しげ子

五月二日、早う夕げをへて近きあたりを散歩せばやと母様のたまふにお供をなす老松幾千堤に横て風の音颯々條々としてよせ來る小波の彼方の堤に唱歌うたふ幼子が面白き節のせて岸にあたるなど思はしき名利を追ふ人の子が汚れたる心もともみに洗ひ去らるゝ心地す見渡せば々漸深うこめたるかなたの板橋來行の人の影は見えれど木履の音かすかに聞ゐて青柳のなびくあたり電燈の光り夢よりも淡し

五日、昨夜よりふり出だしたる雨日暮るゝ迄をやまずいといぶせきにまして風さへ加はりたれば戸障子の動く音騒がしく大路行く人影絶ゐて今日は珍しく傍の童も來らざりき常よりは早う燈火つけて昨日來し雜誌見もて行く内和歌の欄にてふと目にとまりたるは久しき前別れて居所さだかならざりし懷かしき友の名なり想高くしらべとゝのへる二首の歌には其道に時めき給ふ君が評其身ならずも嬉しき心地して何時の間にかく迄はとふがひなき巳が身のかこたれつたゞちに文かきて出す

上諏訪　錦織幸子

五月五日、午前五時出弊今日は空晴れて風もなし顏洗ひ樂なで靈壇に拜拜し次に爐に火を起こし茶戸棚の掃除す中にて嘉子目をさまし子守に頁はせ七時終る育の君起き玉ふ、居間書齋の掃除し朝飯終る八時出勤し玉ふ玄關に送り參らせて千代子「オ早クアン〳〵」としきりに辭儀す八時半まで襁褓て障子の破れ〳〵補ふ十時終る替代襦袢の袷かけ袖つけて十一時半午餐たうべ同五十分千代子嘉子子守につれられ歸り子守等午飯す二時まであとかたつけなどし溫泉へ行く三時半歸宅し干しもの入れてたゝみ衣服のほころびなほして四時半より座敷の掃除し居間の飾直して夕飯の事なす六時育の君歸り玉ふ子守等も歸る七時夕飯終りて夜なべに千代子の襦に毛糸きせてやりしに大に悅びて父チヤンとたはむれ遊び九時育の君宿直に

て病院へ行き玉ふ千代子眠る嘉子黄昏頃よりむつかりしに七時半よりいねぬ

中旬上絃の月いと美しく清らに鎧櫓の棟にさし昇り敖々蛙の聲夜陰をやぶりていとおかしきに雨戸おし明け西なる方仰ぎてたゞ一人祖母様母をおもひて

此日の調理

（朝）豆腐味噌汁　香の物

（晝）ひたし　鯛かす漬　筍うまに

（夕）玉子オムレツ　鶏肉スープ　やきとうふ

六日、曇天なり午前五時におき出てゝ髪結ひ子守二人にも結ひやりて吉田の姥さんに茶入れ進め二階の戸あけて前掛に洗濯なし六時嘉子起き子守に脊負はせ次て千代子も目醒ます顔洗ひやり子守と共に朝飯たうべさす七時病院より脊の君歸り玉ふ急き朝飯調じて進め參らせ直に出勤し玉ふいと忙がし七時半より張物なし十二時子守共に中飯終る引つゞき張物なす五時半脊の君歸り玉ふ茶入れて夕飯にす茶碗蒸の味よきとて大によろこばる千代子も「オイシイ〳〵と」舌うちぬ七時卅分脊の君病院研究會に出で玉ふ其のあとへ七年前の師の君なりし安達師の君不思議にも訪ひ玉ひぬ酒出しゝに肴あまりにそまつなりしかばいかに心苦しかりしかありし此の振分髮のなつかしきくさ〳〵師の君と語りしに十時頃歸ります明日は當地出發歸國の途につき玉ふと十一時半病院より歸り玉ふ月おぼろに君迎ふ袖垣の山吹にほひ芳しく

調理

（朝）わかめ味噌汁　香の物

（晝）うど白あへ　鯛の味噌漬　大根[illegible]し

（夕）なます　茶碗蒸　煮豆

食後　パイナップル

古　里

七日　快清朝の内記す事なし午後母君兄君前後して墓に詣で玉ふ妾も詣づる筈なりしが姉君訪問しとのたもふまゝ留守して後片付けなし夕飯の用意なし終へつ心なく椽に立ちて日を綠陰にそゝげば今しも松吉のまきし水の玉のごと光りを帶びて音高き風にポチ〳〵とこけ青き石の上に落ちてはくだくる樣如何にもすゞしき心地するものから二人の御歸りをまちて食卓を庭近く持ち出で妾の料理せし鰺の鹽焼と馬鈴薯のうま煮のみなれどいと美しうまいひして夕餉をなす

夜は致寸の給の袖を鼠食ひたるをつくろうなか〳〵面倒なりしが目立たずなりしとて母君はとゑみ給ふ妾も其時は嬉しくて

八日　今日も美しう晴れたり妾の師とも友ともたのむ女學世界來るうれしき事ねも云はれず先ヅ求めし絣りを裁ちて兄君の單衣に縫ふ午後四時出來上りしかば今朝の雜誌を出す母君笑ひ給ひていつになく早く縫ひ上げしはから的のありき爲なと先づ婦女雜觀より初むいつもながら感にうたれてかへり見る事いと多く中にも女子高等教育の一節殊に勇ましう嬉しくおぼへぬ暮れてよりも讀みづゝけしがみじかき春の夜の更たるも氣つかで十一時過床に入る

精神の修養

棚橋絢子

私共は靜坐を偶にして見ますが靜坐は坐禪とは違ひまして、閑思雜慮を取り除け、見るもの聞くものに心が附いて行かぬ樣に心を靜めるのである、坐禪は一旦何も彼も無くして後全く無いかと云へば、眞空でいない。有るとも認めず無いともいはず、其の呼吸は吾々には分らないが善知識に就いて修行すれば分りませう、わたくしが兩三年前に或る僧に扇と晒布に歌二首を添へて贈つた事がありますが、其歌は

扇

吹風もあふぎの風も天地のおのつからなる物にそ有ける

晒布

朝夕にさらせる布の白砂にみゆるはおのが心なりけり

するとその僧の言はるゝに是は實に禪意に適ふて居る、此歌の意をとくと味つて見るのになか／＼深い意味がこもつてゐると笑つて評されました、靜坐といふのはどういふ賑かな處でも、忙しい中でも心を鎭める事で稽古して置かねばいかぬ、靜かな所から動くのは誤りがない。けれども動から出た動は正でないと云ふ事が言つてあります、禪の極意は彼の建長寺の開山が賊に圍まれし時の名高い詩に盡くしてあるごとく禪一旦頓悟して後窮理し、儒は格物致知、一旦豁然として貫通するに至るので禪と儒とは悟入に前後の相違があり、道を見るにも各々異る所あるけれど、其の膽を練り、時に臨んで動せざるに至つては何れも同じ事の樣です、昔し或る先生は難船に逢ひし時神色自若として動せさりしと云ふが、是れ即ち平生膽を練りし功果でありませう、都て何によらず不斷修業した事は實地に施していかなる場合にも狼狽せないのが學問の眼目です。

家庭談叢

衣食住の奇聞

坪井理學博士

左に錄するは過般帝國教育會女子講談會に於ける理學博士坪井正五郎君の講演の大要なり元より博士の校閲を得たるものにあらざれば文の責は記者に在り

よく可愛い子には旅を爲せろと申しますが是は何故でありませうか、旅をすれば自然不自由をする、不自由をすると初めて親の恩を知る、つまり親の恩を知らせるが爲に可愛い子に旅を爲せるのでありませうか、若しさうであれば是は親の勝手であります、その位ならば親の手許に置て充分に親の義務を盡くして親の恩を知らせるがよい、自分に親の義務を充分にしないで一層不自由な思ひをさせてそして親の恩を知らせるなどは之は親の我慢であります。若し又反て子供の旅をした處が親の手許より面白く愉快な處であつたなら何うでせうか、反て益す親の恩を薄くするやうな結果になりませう。併し可愛い子に旅を爲せるのは決してそんな意志から出たのではありません。世間の文物風俗を知らせる爲、則ち世情を知らせる爲、廣く智識を求めて、他日世路に立つ時に方つて居住交際の便を得させん爲であります。

既に此の如き意味ならば、啻に日本國中のみならず、

進んで世界を回るの必要が起るので、所謂旅行の利益は此の如き點にあるのであります。若し自身に旅行するとの出來ぬ事情のある者は、書物に依て此間の利益を得る事に注意するが宜しい、殊に近來は新聞と云ふ極めて便利なものがありまして、一日にして千里の事情を知るとが出來るのですから、勉めて斯う云ふ點に注意して居たなら、利する處が尠くないであろうと思ひます。之は一二の例に過ぎませんが、去る年外國人が宮中の御宴に召された處が其時食膳に刺味が出て居つた、處がその外人はまだ充分に內地の事情に通じて居なかつたから、固より刺身の事も知らう筈はありません、で、見る處が膳の一方に青い細かく彫んだ物が盛つてありましたから、一箸口に入れますとそれが山葵をろしだつたから堪りません、併し場所が宮中の御宴でありますから、吐き出す事が出來ず、傍に見て居た人も如何ともする事が出來ませんでした、然る處其外人は更に側に黑い水が小さな壺に注いでありましたのを、葡萄酒と思ひ違へて一口に飲みますとそれが醬油であつたのです、山葵を一口啣んで更に醬油を一口飲んだのですから堪りません。これは外國人の話ですが我が國人にも以前歐米に旅行した者の中には隨分滑稽な事を爲たものがあります、或人――それはアイスクリームと云ふものが世の中にあると云ふ事を漸く知つた位の程度の人でありましたが、矢張宮中の御宴に召された處が、小な器に黃色の物を盛つて各自の前へ置いて行つたのです、處が其人はそれをアイスクリームだと思つて一匙口に入れると、豈圖らんやそれがバターであつて、非常に困つたと云ふ事です。私も曾て歐洲に遊んだ時、初めて佛蘭西のマルセーユに上陸した時でした、當時は書生の身でしたから總て儉約を旨とすべきであつたのですが、初めて歐洲の地を踏んだのですから、以後は以後として、マルセーユのグランドホテルと云ふ大きな旅館に宿る事にしたのですが、さて食事になると大きな皿に小さな花形のビスケットのやうな物を盛つて來たのです、私は只のビスケットだと思つてそれを五ッ六ッ取つてホークに刺して口に

入れると驚いた事にはそれがバターであつたのです。日本に居た時下等な洋食は多少やつたこともあつたですが、そんな上等な料理は知らなかつたもんですから、こんな失策を演じたので、丁度前の外人が山葵を食つて醬油を飲んだと同じ事なのです、是等はつまり廣く世界の事情を知らなかつたからで、若し各國の事情に通じて居たなら、こんな失策は演じないでも濟むのです。であるから吾人は成る可く廣く世界の事情を知るとが必要であります、彼の可愛い子に旅を爲せろとは斯う云ふ處から來たものであらうと思ひます、さて私の演題は衣食住の奇聞と云ふのであります、其中で人の意想の外に出る不思議なとだけ御話する積りであります。

北海道の土人　則ちアイヌ人種であります、之は我が國人でありますが、其風俗が甚だ相違した處があります。で、この土人は非常に酒を好む、そしてその酒を飲む時には一の篦を用ふるのです、俗に之をヒゲベラと稱して居ります。酒を飲むに篦を用ふるとは知らぬ人が聞くと一寸變に聞えますが、御承知の通り土人は髭が澤山生へて居りますから、酒を飲むに甚だ不都合であります、で、この（巾七八分長四五寸程のもので虎熊などの彫刻がある）篦を以て髭を搔き上げて置て酒を飯むのが習慣で、斯う事情が譯れば何の不思議もないのであります。次には土人の家でありますが之れは不完全ながら兎に角家の形をして居て別に御話する程の事はありませんが、同じ家の中で穀物倉は內地の人から見ると甚だ不思議な感を起させるので、何故かといふと椽の下則ち床の下が甚だ高くて少し屈むと人が步ける位であるのに、また其柱の途中に各一つの鍔が附けてあるのです。是等は何の必要から來たのかと申すと鼠の豫防で、穀物倉は鼠に襲はれる憂があるから此の如く床を高くし、且つ夫にも安じないで鍔を以て鼠の柱を傳つて上るのを防ぐ爲なのです。

次にナイル河岸に住居する埃及人の家屋は構造が極めて不思議で、恰も煉瓦の如き土を固めたもので積み上げてあるが、土人は之をトーピと稱して居る。そして

一層二層三層の造り上げ、二層は一層より大きく三層は二層より廣いのです。日本の家屋は下より上に行く程狹く小さく歐洲の家屋は上も下も略ぼ同じであるですが埃及人の家屋は上に行くほど益す廣くなるのです。且つ此二層三層の家は同一家族が居住するのではなくて、一層は一層二層は二層と各別種の家族が居住して居て元より上下の連絡はついて居ない。先づ第一の人が一個の家を築くと。第二の人が其上に材木を横へて下よりは廣く大きく家を作る、更に第三の人が益す廣く大きく作ると云ふ工風なのです、無論日本の如き地震の多い國では到底出來ない事ですが、幸にして埃及は地震が少いから、此如き家屋に居住する事が出來るのです。それから亞非利加の東海岸にパンツー種屬と云ふのが居住して居ります、之は黑色人ですが此處の風俗は又た極めて不思議で、家屋は圓く大きな椀を伏せた如きもので、村落も圓く丁度盆の周圍に椀を伏せたやうな工合に出來て、中央の空地を共同の牧場にして居る。土人は農業を主として居ますが畑には蝗が多く發生するので、往々作物を害することがあるのです、すると土人は何うするかと云ふと畑に行つて蝗を拾ひ之れを食するのですが、蝗は素と非常に多いのですから或は共食をしたり或は怪我をして落ちて居るのを拾つて來て、之を焦して食するのですが、その焦し方がまた餘程面白いのです、先づ地面に火を焚いて此の上に蝗を廣げて燒くのですが、さうすると羽も足も燒けて体のみ殘り適宜の食料になるので土人は野菜靑物の穫らるゝより反てこの蝗の多く發生するのを喜ぶ傾きがあります、猶土人は甚だ莨を好んで莨を呑む儀式まであリますが、それは我國の點茶に似たやうなもので、多數の人が或一ヶ所に會して莨の會を催はします。で、その儀式と云ふのは、甚だ穢い話ですが飽くまで莨を呑んで口中に一杯唾を溜めて一ツの管から之を垂らし、その垂らした唾を以て圖畫を畫いてその巧妙なのを誇るので、その圖畫は多く圓い家の形若くは村落の形に限られてあるのも奇妙です。

この外博士は南洋土人に就て又臺灣蕃人に就て種々有

益な話をされましたがそれは後日に讓ります。

洋行の話

巖谷小波

▲洋行の生活

いよ〳〵先方に着いたとして、是から洋行の生活……と云ふと語を爲さんかも知れないが、即ち外國に於ける邦人の生活の有樣を、實驗上から一つ話して見よう、

生活と云へば、まづ衣食住の三項を意味するのであるが、衣は云ふ迄も無く、首に洋服を用ひるので。それも郷に入ては郷に從ひ、平常着、外出着、及び禮服の一ト通りは、まづ備へて居らねばならない。

平常着は云ふ迄も無く、背廣が普通一般であるが、中には、モウニングコートを用ひる人があるが、一寸とした外出着には、矢張り背廣で事が濟む、書生流の散歩ならば、それにも決して及ばぬ事だ

訪問の際には、フロックコートが至當で、上位の人を訪ふ時とか、初對面の場合には、帽子もシルクハットを用ひ、手袋も成る丈新らしいのを要するのである。

こゝに禮服と云ふのは、日本で云ふ燕尾服の事だが、これは元來夜會服であるから、然る可き晩餐會、若くは舞踏會などへは、この服で臨むのが本當である。そして帽子も、此際は平たく疊めるシルクハットにして、そしてその帽子をば、常に手に携へて居るのが禮である。

其他訪問やら宴會やらの時には、髮も奇麗に撫でつけ、髭もその都度ちやんと剃つて置かねば成らない。またその襟、手甲、靴の如きも、汚れの無い樣に注意して置かないと、無禮者と見爲されるのである。

さて食事の方も、矢張り洋食たる事は云ふ迄も無いが、然し近來は大分進んで來て、日本料理を口にする事も、決して億却では無く成つて來た。

尤も住居の都合によつて、食事にも多少差あるが、まづ朝はコーヒ、牛乳、パンにバタ位ですまし晝は

スープ、魚肉、獣肉、野菜などて三皿か四皿、夜は冷肉に一寸したあぶり物が一品、それにチースとか腸詰とかゞ付く。

但し右は伯林での、而も下宿住ひの話であるが、倫敦では同じ下宿屋でも、大分食事の様子が違ふ。即ち倫敦では、朝からビフテキとかオムレツとか、又ベイコンなとが出るので、朝食をパンとコーヒの類で濟ますのは、伯林の他、巴里や維納でも行はれる事だ。

それから飲物も、國々によつて差があるので。まづ獨乙では、云ふ迄も無くビーヤが首で、やはり上品な食事には、ライン州産出の、白葡萄酒が用ひられる。佛蘭西では赤葡萄、英吉利ではヰスキイと、それ〲特有の飲物があるから、日本人の其地に在る者も、皆それ〲に釣り込まれて、獨乙通はビーヤ好き、佛蘭西仕込は葡萄酒贔負、又英吉利ハイカラは、專らヰスキイの徳を頌する風がある。

其他シャニパンとか、シエリイとか、コンニヤクとか云ふ類は、蓋し何所でも用ひられるが、然しそれは平常の事では無く、即ち特別の食事の時で無くては、あまり用ひない様に思はれる。

所變れば品變るで、食事にも服飾にも、國々に依つてそれ〲別があり、又嗜好も流行も、皆趣を異にして居るが、是等は必ずしも研究するには及ばぬので、なまじ下手に流行を趁うて、下手に通がりをすると、却つて人の笑草に成るから、まづ一ト通りを辨へておいて、出ず入らずの態度を取つて居れば、それで所謂る體面は、立派に保たれて行くのである。

さて次には住所の事。これにも種々風があるが、まづ之を大別すると、ホテル住ひ、下宿住ひ、同居住ひ、及借家住ひの四つに成る。

ホテル住ひは、只漫遊巡回などの爲めには、甚だ便利がよいけれども、其代り至つて不經濟なものであるから、有福な連中の他には、決して之を勸める事は出來ない。

尤も日本の旅館とちがつて、茶代と云ふ餘計な心配は入らないが、その代り、定規の部屋代 食事代の他、

給仕男、部屋付の下女、玄關番、靴磨きの面々に、それ〳〵心付を遣らなければ成らないから、どうしても余分の經費がかゝる。

下宿住ひとなると、ずつと又經濟的で、即ち一ト月部屋代食料とも、何程〳〵と初めから極まつて居るから、これを一日に割つて見ると、ホテル住ひの半分若くは三分一で上がる。

然し食事の際には、必ず定めの時間通りに、定められた食堂へ出て、定められた料理を食ひ、そして同宿の誰彼と、種々な世間話をしなければならない。それは土地の風俗を察し、言語を慣らす點に於て、大いに好都合ではあるけれども、亦多少窮屈な場合もある。殊に普通の下宿屋では無い、然る可き紳士の家に、同宿する場合などは、尙更我儘の利かない事があつて、更に窮屈なものである。

その段に成ると、同居住ひは氣樂なものだ。これは只部屋丈借りて、食事の時は便宜に外へ出て、料理屋で好きな物を誂へるのである。日本に居て考へると、甚だ不便の樣に思はれるが、實際やつて見ると、まとに便利なもので、又その割に經濟的である。

就中伯林などでは、此種の需要に應ずる爲め、極めて手輕な料理屋が、殆んど到る所に出來て居るから、腹の減つた時はそれへ入つて、好きな物で腹を肥やすのに、何等の遠慮も氣兼も入らない。

然し一得一失で、この同居住ひの、只部屋計り借りて居るのでは、宿の家族とあまり懇意に成らず、事によると二日も三日も、家内の者と顏を合はさない事さへあるから、何となく家が温かく感せず、偶々病氣にでもなつた場合に、大いに心細く成る傾きがある。されど、日本に居て、已に一家を爲した者は、その無聊に堪へ得ないで、その爲めにホームシックを起す類も、亦決して少くは無い。

それには下宿住ひの、同宿の友の澤山あるのや、又家主の家族と懇意に成つて居るのが、大いに氣が紛れてよいけれども、それにも亦弊があつて、なまじ友達の殖える爲めに、大切の時間を潰されたり、また家内

の者と馴れ過ぎて、却つて餘計な散財をしなければ成らぬ事がある。

たとへば同宿の友達が、何所へか遠足しやうと云ふ場合にも、交際ならば否とも云はれず、又家内の娘達が、芝居へお供がしたいと云へば、これは皆此方で賄つて連れて行つてやらねばならない。——否、成らないと云ふ事もあるまいが、若しかう云ふ事をしないで、いつも氣むづかしい顏をして居ると、甚だ評判が宜しくなく、隨つて其心が惡くなるから、つまりさう云ふ心得なら、寧ろ部屋丈借りた、同居住ひが優と云ふ事に成る。

さて借家住ひと云ふのは、自分で一軒家を借りて、萬事自分で賄つて行く事だ。

一體云ふと、此の生活が一番經濟的であるが、その代り一人では出來ず、又一年や二年では、却つて甚だ不經濟に成る、即ち公使館、領事館の役員で、家族同伴の者には、又此が最も好都合である。

例へば前に云つた部屋借りの主義で、一室二十五圓拂ふとすると、一年が三百圓に成る。然るに一年三百圓出せば、湯殿に臺所附で、總計四室斗りの家が、隨分借りられない事も無い。

序に伯林で、余が住んで居た經驗を話さう。

余は伯林に二年居て、その間に居を五度移した。即ち到着の當時は、四日ほどホテルに住ひ、それから、一週間計りは公使館に出て居る友人の所に同居し、それから自分で居を構へる樣に成つて、更に三度轉居したのである。

その初めは、一室五十麻克（二十五圓）の部屋を借りた。それは日本の十五疊敷程で、窓が一方に二つ列び、その間に大きな姿見鏡が立つて居て、窓の側にデスク一臺、椅子一脚、それについてソーハ。その前のテーブルを挾んで、左右に安樂椅子一脚宛、一隅には木造の寢臺があつて、それに列んでは衣服簞笥、その次が洗面器。ストーブの側に帽子掛が置いてあつて、その此方には繻絆簞笥があり、その他壁に二三面の額が掛つて居て、而もそれ等の家財は、皆部屋に附屬して

居るのであつた。
二度目は下宿屋で、食料共一ヶ月百八十麻克（九十圓）部屋は同じ位の大きさであつたが、南に面して大きなバルコン（椽側）があつた丈、夏向きは至極妙であつた。室内の飾付け、但し前のと大差は無い。
最後にはちと張り込んで、二室七十麻克（卅五圓）と云ふのに移つた、一室は居間で、十疊敷もあつたらうか。但し小さなバルコン付き。他の一室は七疊敷程でそれに大きな寢臺と簞笥が備へてあつた。
要するに此等の部屋は、彼地としては普通の造作であるが、それでも壁には模樣のある壁紙が貼てあり。天井の塗り方にも、多少意匠を施して、それから花瓦斯が下つて居り下の床は寄せ木張りで、上にちやんと絨段まで敷いてある、その體裁の好きは、我國に有りふれた西洋館に比して、所詮同日の論では無い。して見ると、日本なら七室八室も借りられる位な家賃を、只一室に取られたと云つて。必ずしも貴いとは云へないのである。

妻を求むる條件

鶴子

婦女雜觀の大町さんのお說は、温かなお情から出た女性の指南車とは思はれませぬ、無論雜誌上で被仰る位ですから、一丁字をも解さぬ長屋裏店の者と同一視なさる事はあるまいと存じますのに、假りにも相應な敎育あるものに向つて、皮肉な、野卑な、言語を敢てなさるのは、女子を侮辱する樣な譯だらうと思ひます、けれども今婦女雜觀の辯駁ではなく單に自己一身の考を述べる丈で御座ります、
夫で求妻條件ですが、昔は婿となる人も自分に細君を定めたのでは無く、父兄が交渉撰擇して、畢竟配がつた樣な譯であつた、勿論生活が異つて來たからでもあるが、現今では男子は大方自身に細君を定める樣になつた、つまり親が貰ふ妻ではなく、其人の貰ふ妻と云ふ事の分つたからです、所が　子は、未々親の被嫁時代で、自分に嫁くと云ふのにはなりませぬ、親が嫁くのではないのに、子よりも先父兄が先方の家柄身分を調べるのですが夫は父兄が自個の利害得失から見るので、親戚と成つて直接に迷惑は懸りはせぬか、耻かしくはなからうか、之が婿家に對して再考しなければ

ならぬ條件の第一です、貰ふ人は即先方眞人で、差縁のは父兄ですから、夫婦と云ふ點からは、妻たる人の意志よりも、父兄の意志に出づるのが多い。妻は精神上無勢力です、父兄の意志は前述の第一條件で定まるとすると、女子は口を入るゝ餘地の無い樣な譯です。夫で要求者は男子、應求者は女子とすると、男子の要求に應ずる丈の試驗準備がなければなりませぬ、應募者たる女子の父兄は、其試驗準備をさせまして、少しでも良縁を求めやうと考へます、其要たる資格を得る試驗問題は如何云ふ標準でせう、試に新聞などに出て居る求妻條件を見ますと、大体此樣ものです、

普通教育があつて裁縫も料理も一通出來れば、容貌の美醜はとはぬ

普通教育があつて相應な仕度を持つて來る美人

教育は小學教育位でも、裁縫が出來るか他に職業を持つて居て、万一の場合家計の補助をする人

第一が普通條件です、第二は口には出さぬが大抵の男子の望む所、第三は無理の無い注文、尤至極である、先一般男子の要求は此樣ものでせう、夫で父兄は之に及第させれば、其樣に心配する事はない譯です、畢竟父兄は婚嫁の條件として教育させて居ると云つて差支ありませぬ、容貌が醜るいとか仕度が少くては肩身が狹いとかで、多くは獨立し得る職業を授けて居ります。

男子の求妻條件を以上と致しますと、細君の資格は齊家の術に達してさへなれば足れり、所謂、給金のいらぬ、安心の措ける下婢とは此邊でせう、所が、同情があつて、向上心に富で居て、思慮のある、意見のある女子であれば、設令、齊家に就ては多少の欠點があつても關はぬと云ふ男子が世に有りませうか、前者は大町さんの所謂細君、後者は生涯の慰籍者です、之を求むる男子は殆無い位、多くの男子は斯樣に外面的物質的であつて、内面即精神的ではない、夫ですから父兄は意見あり主張ある女子を厭んで生意氣と云ふ一語に覆ふてしまいます、御覧なさい、滔々たる世間、思慮に富める女子が有りますか、父兄の命に默々唯々諾々の中に、生涯を男子に弄せられて終る惡運に逢遇する女子は世間に其實例が乏しくないでは有りませぬか。

男子の女子を待つ斯の如く低く、表白的である以上は、女子の周圍が、求妻條件に應ずべく教育の方針を取つて居るのですもの、決して女子に高尙な思想を求むる事は出來ませぬ、ですから世の男子は、今一歩進んだ考を以て女子を求めて戴きたい、需要供給は單に物品の上にのみ止まらない、が、恐らくは世の男子の思想の未甚幼稚であるのではなからうか、妻の父兄を手蔓に出世しやう立身しやうと、口にはまさか出さぬ迄も、根性の汚ない男子が少くない、之では輕佻浮薄な世俗も強ち無理はありません。

男子に對して求妻條件を一歩進めて貰ふと同時に、女子に對しても學術は如何に博く技藝は如何に巧でも、高尙な思想がなければ成らぬ、假りにも輕佻な人間は相手にせぬ――位に成つて慾しい、と願ふのです、さてこそ、社會の制裁は不眞面目な人間を許さぬ樣に成らふと思ふ。

史傳

會津戰爭と婦人

無名氏

會津戰爭は明治維新の際に於ける武家順逆の見解を異にせしより生ぜし活劇にして封建武士が忠君愛國の志を實地に顯はしたるものなり。封建時代三百年は天下泰平にして武人が志を顯はすの機會を得ざりしに三百年の後武門政治の末路に當つて端なくもこの活劇を見るに至れりされば、會津の戰爭は一小局部の戰に過ぎざりしと雖も、その精神は三百年間封建制度の下に養ひ來りたる日本武人の蓄積を發揮したるものにて、日本武權史に於ける掉尾の事業となすに足るべし、今茲に記する戰爭と婦人は即ち會津戰爭に於ける女性の活動を記するものにしてその壯烈、勇敢の狀想ふべし。

▲勇士の家族

明治元年薩長諸藩の兵白川口より越後口より、追々會津若松城に攻め上り、慶長の昔上杉景勝が德川方の兵を引受けし以來二百七十年此の度は德川氏の爲めに孤柱となつて天下の兵を引受け戰ふ事となつた。茲に當今の碩儒南摩綱紀先生の甥に同性彌三右衞門といふのがありました、開戰以來兄弟六人の內幼弟二人の外は悉く出陣して各所に勇戰しましたが、彌三右衞門の母は勝子といつて越後口を守れる、勇將町田主水の伯母で男勝りの氣性でしたが、彌三右衞門の妻房子は既に長男萬之進を設け、此の頃又一男子を擧げ、官軍城下に討入つた時分は分娩後二十二日目で尙ほ產蓐に居

りました又三弟莊司も白河口の激戰に左の股を擊貫かれ、家に歸つて療養して居ました、そこで姑の勝子は僕の清藏といふ者を相手として駕籠に負傷者の莊司を載せ、産婦房子は赤兒を懷にし、家の系圖を懷に收め、勝子は三人の幼兒を携へて主從共に家を出で急ぎ城中に入らうとしましたが、此の時城門は既に鎖して入る事が能ません、己むを得ず屋敷に引返さうとしたその途中駕籠の中の莊司は所詮助かる見込がなからうと見て自殺して果てました、その內に官軍の兵が迫つて來ましたから漸う村落を遁れましたが元より賴む所も無いから古寺や空屋などに宿り、食物も無く日を送つて居ましたが、其の中にも勝子等は彌三右衛門等の身を案じ、無事に入城したが、但しは討死を遂げたかといろ〳〵思ひ煩ひました、そこで清藏を城下に遣して樣子を搜らせました處が、彌三右衛門は負傷したれど首尾よく城中に入るを得、又弟數も無事に入城したといふ事が分りました、折柄町野主水の家族も同じく兵亂を避けて來るに出會しましたが、それは主水の母即ち勝子の姉以下婦人ばかり七人でした、これで近邊に町野の知人のゐるのを賴に其家に四五日潛んで居ましたが、其の內官軍が續々侵擊しまゐりまして味方の敗戰といふ事がしきりに聞えたから勝子は自害と覺悟を決めました併し又おもふには嫁の房子は南摩家の世繼を設け、尙ほ其の生みしばかりの赤兒を父にも見せず殺さするは無慘である、若し此の兒等が幸ひに生長したならば長く南摩家の祀をつゞける事が得られやう母子のみは何卒城中に入らしめんと思ひましたが、然し明さまに此の事を房子に告げたらば、必ず共に死なうといふに決つて居るから、よい程に欺いて城中に送るのがよからうと乃ち房子に對つて、御身達と共に城外に落ちてからもう十日ばかりを過ぎたけれどもまだ喜ばしい音信を聞かない、敵は次第に深く攻入つたから此の山中にもやがて鐵砲の聲を聞くやうになるであらう、さうなつた時には危險であるから、深く山奥に遁れて仕舞はねばならぬ、御身は産後の日も經たず、此の上山中に入らば、難儀の上の難儀であら

う、且つ彌三右衛門も傷を負うて城中にあるとの事であるから御身は此處を忍び出て城中に入り、良人の看護をなし、赤兒を見せて喜ばすがよからう、萬之進は南摩家の大切な世繼であるから必ず伴ひ給へ、妾等は是れから山中に入り復た來



る春を待たうから」と云ひました、房子は悲しみに堪へませんでしたが「是れまで御一緒に參つたものを、どうして今更お別れ申す事が出來やう何處々々までも伴うて下されと、言ひましたけれども、勝子は尙も之を諭して「御身若し萬一の事があれば幼き者は誰れを頼りに育たうぞ、南摩の家を思ふなら是非城中に入られよと斷つての言に房子も漸う納得して、萬之進及び赤兒を携へ、系圖を袖にして僕清藏を具し泣く〳〵別れて出ましたが、途中で淸藏を見失ひ、房子のみ漸う城中に入つて良人に面會する事を得ました、扨て勝子は無事に嫁を出し遣りましたから、もう心に掛るものはない、いでや最期の準備をなさんと翌朝早く町野家の家族と共にそれより又半里ばかりの山中に入り、赤毛氈を敷いて互ひに水盃を交はし、遙にお城の方を拜して、勝子は先づ懷劍を拔き放つて九歲になる壽を引き寄せ刺さうとしました、處が、壽は母の顏を見上げて、敵の手で殺されるは、本望ぢやけれど、母樣の手に罹るは殘念でござりますと云ひました、勝子は我子が健氣な志に感じて、懷劍持つ手も顫へましたが、斯くては果てじと心を鬼にして壽を刺し貫し、夫より四歲なる辛を殺しその刀で、己も又咽喉を貫きて死にました、これと前後して町野の母はおのが手にて自害をなし、妻女(二十八)は長男(六歲)を刺殺し、己れと同年の義妹と刺違へて死し、主水が弟と忠次郎の義母はその娘、二人を刺殺し、己も又自害をして果てました南摩家の一族十八人悉く勝方山の露と消え失せたのは何と哀れ至極ではありませんか殊に憐れといふべきは忠次郎に配はせやうとした娘は僅かに九歲でありましたから、其の生長を待ちてあつたのに、蕾の花の咲くを待たずして散り失せましたのは眞に悲慘の極みであります、房子の供をして往きました僕の淸藏は斯る事とも知らず、引返さうとして途中、此の事をきゝ山中に這入つて此の慘憺たる狀を目擊して、大ひに悲みましたけれどももはや詮術なく死骸を埋めて立ち去りました。

玆に又會津の猛將佐川官兵衛の母は當年五十餘歲の老

刃自で氣性雄々しく、勇者の母たるに耻ぢませんかつた、官軍が城下に討入つた時、妹と共に城に入らんとしましたが折柄雨降りで簾を被りて出ました、官軍の兵が早くも是を知つて後から抱き留ました母は大に怒り振返りさま官兵を抱き込み、手早く帶の間に挾んでゐました懐劒拔き取り、敵の脇腹を柄も通れとばかり刺し貫きました敵は不意の重傷に堪えずして其の場に倒れて仕舞ました扨て、城中の人々母の異様な風俗を見て之れを尋ねた處が母は少しも騒ぐ氣色なく今敵を殺して參りましたと答へたから人々は其の心膽の丈夫なのに、驚いたと云ふ事です、それから母は女ながらも官軍を拒ぎ見やうと、諸隊に混ヒつて奮戰いたしました。茲に又山川大藏（故陸軍少將山川浩）の妹操（現宮内省出仕）といふのがあるこれも家族と共に城中に在りましたが、髮を束ね義經袴を穿ち男裝をして居ましたから一見女子とは思はれませんでした、或る日お奥に行かうとした處を役人どもは男子であるといつて之れを拒み辨解をしたけれども聞入れない。

そこで操は胸をひろげ、乳房を示し稍く女といふ事を證明せられて始めてお奥に入るを得たといふ事でした、大藏の妻も城中に居ましたが、破裂彈に當つて重傷を負うて病院に移りましたが、妻は呼吸を引取るまで敢て苦痛を訴へず、又一言も良人の事を言はず、唯だ「お二方樣〱」と言ひ續けて絶命したといふ事です、お二方とは大守容保公と世子喜徳公との事である。

▲婦女隊

此の如き有樣でありましたから亦婦人の身で隊伍を組み、出で丶戰うたものが數多あります、中にも諏訪さち子といふ女の率ゐた一隊は官軍と戰うて大に其の手柄を現しました、さち子は家老諏訪大四郎の妻で籠城中は始終御前に侍し傍ら負傷者の看護長となつて監督を司どつて居ました、此の時官軍が讃岐門口に攻め寄せ來て。攻擊頗る急であつたから、君公はさち子を顧みて、讃岐門に趣いて偵察して參れとの仰であつた、

きち子は命を畏みて同志の婦人十名ばかりを率ゐ參つて見ると、今しも合戰酣といふ有樣で死屍相重り、流血淋漓、慘狀目も當られぬ次第官軍の勢猖獗にして城兵苦戰といふ實況でしたから、きち子は死骸を越え、血潮を踏みて隊長の元に至り、君命を傳へて夫より迂回して官軍の左翼に現はれ急に敵中に斬込みました、官兵は不意を食つて大に狼狽して隊伍亂れかゝると、城中の兵がこれを見て女に後るゝものかはと勇氣大に加はり猛然として擊つて出たので、官兵遂に利を失うて退き讃岐門口は安全となりました。此の時きち子、腰部に彈丸を受けましたけれとも、幸ひ鏡を帶の間に挿んで居つたから大傷を被らないでしまいました、此の時、又大鼓門に出でた三人の女子がありました其の中の一人は美波猛の妹千代女といふのである各々薙刀を小脇に掻い込み袴を小高く掲げ、鉢卷をなし、其の勢ひ勇しく見えたから、大鼓門を守りたる津田範三これを呼び止めて何れへと問うた處が、千代女等は口を揃へて、敵の砲擊強く最早是までと存じたから敵中に馳け入り死を遂げん爲めに參りましたれば御免あれ」といひさま門外に馳け出さうとしたから範三これを遮り「余主命を受けて此處を守る上は主命にあらざれば一人なりとも城外に出すことならず、御身達は何方の仰を蒙られたか」といつたので千代女等は顏見合せ、これはとばかり躊躇ひました、範三はこれを見て、今日はまだ婦女子の死すべき時は無い、無謀に命を捨つるより各々其の職分を盡すが忠義であらうと、懇に說き聞かせたので、千代女は是非なく本丸に引返しました、又御奥の女中で出陣しやうとする者が多かつたから、老女伊藤槇野といふのが切に止めて「今城中から女子が出るやうな事があれば、あれ見よ城中には戰士盡きて婦人を出したりと敵に笑れうから、必ずその樣な事の無い樣に」と言渡したので、一同これに承服して漸う出陣を見合せたといふ事であります。

▲奥女中等の看護

本丸の大書院、小書院、長局等は悉く病院に用ゐられて金殿玉樓血に汚され患者の呻吟晝夜斷ゆる時はありませなかつた此の時大守の姉君照姫は奥女中を指圖して甲斐々々しく傷病者の看護をなし、女中に向うて申さるゝ様は「男子は皆身命を惜まず戰場に出て戰ひ居るのであるから我々も安閑として居るべきに非ず女の身にて及ぶ限りは盡さなければならない」と大にこれを勵まされたから、女中等も姫の御心に感じて骨を惜まず立ち働いた、大奥にはすべて七八十名の女中がありましたが、照姫は是等の女中を總督し、老女伊藤槇野を總取締となし、若年寄野村松江、小室梅尾等之れを補佐し、大野瀨山、根津みね尾、高木時尾の三女をして表方との交渉を引受けさした、蓋し戰爭の際にもお奥と表方との區劃は頗る嚴重であつたから交渉方を設けたのです、又お奥の取締も少しも亂れず、戰爭中も奥女中に限り平常の如く髪を取上げ下髪となし其の容儀を崩さず、落城に至つて始めて髪を結うた、當時お奥に勤めて居つた女中の直話に「晝となく夜となく大砲の彈は處を嫌はず城内へ落ちましたけれども妾達は大砲に馴れて恐しいといふ心は起りませんかつたが、只だ湯に入る時と厠に行く時とは、もしも斯んな處で大砲に撃れては死耻を掻くと思つて何だか厭な心持がしました、しかも籠城中湯に入らん譯にも參りませんから後には思ひ切つて入りました」と婦女子の心情さもあるべき事です、さて奥女中等はそれ〴〵手分をして看護に從事したが、負傷者は日に益す增加して、長命寺の戰ひには一夜に百五六十人を送り來つたといふ有様、殊に官軍總攻擊の時には傷病者の總數五百餘人となつた、夫であるから繃帶の如きも最初は白木綿を用ゐたが、間もなく缺乏し後には御奥に秘めたる錦帶羅裳を取り出し、襟心或ひは帶心を解きて繃帶となすに至りました、又傷病者の更衣、夜具なども缺乏したので、照姫は女中等に命じお奥に秘藏したる珍重の衣服を取出して夫を患者に分ち與へました、故に賤しい兵士の身で御紋服を着し、むくつけき壯士の身で裾模樣の振袖を纏ふやふな奇觀を生じましたが

城の内外にある戰士等は之れを傳へ聞いて其の殊恩に感激し、軍氣が大に振うたと云ふ事です。

さて愈よ籠城覺束ない事となりましたから、大奥では照姫を始め女中等最早落城の覺悟をなし、白無垢を着し御部屋の四隅に柴を積んで今にも落城となれば潔く自害をなし火を懸けやうと準備を整へて居ました處が急に表方より御降伏と仰出されたと通知がありましたから、女中等は大に驚いて「さても殿方の腑甲斐なさよ、城を枕に討死をこそすべきに降參とは聞くも汚はしい、此の上は殿方を頼まず、妾等一同出陣し一戰して潔く死にませうと、息巻いたが、照姫は深く太守の御志を察し痛く女中等を制し、其の場で緑の黒髪を薙り謹愼の意を表されたので、女中等も深く姫君の御心中を察し參らせ、涙を流して思ひ留りましたけれども尚は或ひは自害し、御濠に投じて死する者もあつた、又開城の前夜 笄 を以て白壁に一首の歌をしるさる女子がありました。

明日よりは何處の人か詠むらん
なれし大城殘る月影

又城中降伏の白旗を製する爲め白木綿を求めたが、前條の如く城中の木綿は悉く負傷者の繃帶に用ゐたので滿足なものなく漸く斷片を集めてこれを綴つて一流つくり其の裁縫方を女中等に命つけたが、女中等はこれが降伏の旗であるかと思へば針持つ手も震ひ、紅涙潸々として禁ずる能はずで、爲めに白木綿の旗地は全く涙を以て濕さるゝに至つたといふ事であります。

ナポレオンの母

本多たづ子

蓋世の英雄ナポレオンの母は、さる伊太利貴族の末流から出た人で、コルシカといふ島のある市に生れました、容姿が人に優れて美しくありましたので、若き頃に早くも結婚の約束が出來て、十六世紀の頃、此島に移住した伊太利貴族のチャーレス、ボナパルトと云へ

る人に嫁ぎました。まもなく一人の男子を擧げましたが、是はジョセフと云て後に那翁の御蔭でスペインの王と成た人です。

當時コルシカは佛蘭西から征服されやうとしてゐましたが佛軍の來襲に逢ひて國民は大に駭きました、併し憖ひ戰爭して見苦しく破れるよりは内地の山間に退いて、嚴しく防ぐに若かずと評議を決めましたから、多くの貴族は擧つて立ち退きました。時に良人のボナパルトは熱心な愛國者ですから是迄度々の戰ひに花々しい働も爲ましたが、かう成てはもう仕方がありません他の貴族と共に一と先づ山地に退いて、茲に一同力を合せて、烈しく佛蘭西の軍を防ぎました、此時ボナパルト夫人も亦夫に従つて常に山寨に居りましたが、其間に身籠りたる男子こそ即ち、後世、世界に雷名を轟かした古今獨歩の大英雄那翁であります。



さしも勇敢なコルシカ軍が死を決して守りし甲斐なく、遂に佛軍に征服せられましたから、ボナパルト夫妻は、數多の貴族と共に再び市に歸りましたが、これからコルシカ島は全く佛蘭西の屬地となりました。

千七百六十九年の八月十五日、夫人は聖母升天祭大供養に詣でて式場に列しましたが、分娩のシキリが來て、座に堪え難う覺えましたから、急ぎ家に立ち歸つて、まもなく花氈の上に玉の如き男の子をば生み落しました。基督教の儀式で教父はローレント、ギコベヤ及びセルツルータ、ボナパ

ルトといふ二人でありました。さて其子の名をナポレオンと命じたのはその家の數代前にあらはれた父祖の名を受けたのです。

是より引續いて夫人の生みましたのは、ルーシエン。ルイス。ゼロムの三人と、エリザ。ポーリン。カロリンの三女で、尙他に五人の子供がありましたが、これは幼少の折失せました。即ちこの夫人は總て十三人の子を產みましたのです。

さて夫のチャーレス、ボナパルトは戰爭の後、コルシカ島の新知事と親友になりましたから、其人の周旋で貴族代表者の役に擧げられ、やがて佛蘭西帝ルイ十六世の朝廷に使命を帶びて上京しましたが、首尾よく命を果したので、コルシカ裁判官の陪審官といふ役に任ぜれら、多くの家内と共に豐かな暮をするやうになりましたが、間も無く二度目の役を帶びて佛蘭西政府へ使する途中で胃癌を煩ふて、千七百八十五年の二月に果敢なくなりました。

當時ナポレオンは知事の補助を受けて、ブリエンナといふ所の陸軍の學校に送られ續いてパリーの學校に移り、長女の方は他家に養はれて居ましたもの丶、家には尙は澤山の小供があつて、かよわい女の身空として僅二月前に生れたる赤子をさへ懷にしてゐたこの夫人の、此時の悲しみは什麽でありましたらう、貴族とは云へ殘れる財產のあるのでもなく、あはれや夫人は未だ老いたとも云はれぬ三十五歲の春の初めから、世にたよりなき寡婦の身となりました。

玆に佛國政府から命ぜられてコルシカの、陸軍總督となつたパオリといふ人がある、この人は英國に居た人で、佛國政府に從ふことを潔とせず、遂に英國の艦隊と謀つてコルシカ獨立の軍を起しました、此時ナポレオンは既に砲兵大尉となつて佛國の陸軍に職を奉じてゐましたが、母を訪はん爲に巴里から此島に歸省して會々此爭亂に出逢ひましたから、佛蘭西のため自ら一軍を起してパオリを打ち敗らうと圖りましたが、却て敵に打ち敗られたから、一家を擧げて島を遁出さねばならぬ事となりました。ボナパルト夫人は三人の娘

を、未だ幼いゼロームを連れて、暗の夜に家を出ました、此時の夫人の難儀はどうでしたらう、或は人目を避けて林の中に迷ひ込み、生ひ茂つた森を過ぎ、或は山を越え、谷を渡り、道なき道を行くほどに小さい子はほと〳〵空腹に弱りまして、其まゝ草に倒るゝのを脊に負ひ、腕に抱いて様々に劬りつゝ、あらん限りの困苦を忍んで漸々カルビといふ所に着きましたが、こゝで、不思議にもナポレオンの叔父ギユベャと云ふ人に逢ひましたので、地獄に佛の思をしました。それから我子のナポレオン及び他の人々に助けられて共々に海を渡つて、遂に佛蘭西マルセーユー港に行き着いて昔の家の榮えた折恩をかけて置いた人の許に身を寄せたのであります。それからといふものは幾星霜の長の月日を此地に暮して數多の小供等と共に貧と戦ひ、病と戦ひました。この夫人の辛苦はとても拙い筆には寫し出されません。

千七百九十九年、ナポレオンが埃及を征服して佛國に歸り、監督政府を轉覆して新政府を組織し、自ら其長となりて佛國の全權を握るに及び、今まで酸苦辛勞を嘗めつくした夫人は巴里に移り、こゝに初めて榮華なる暮しをする事となりました。けれど如何なる故か夫人とナポレオンと母子との間柄はどうも親しくありません、リユーシエンやルイス等が兄と爭ひをする時にも、夫人は常に、弟の肩を持ちて、いつもナポレオンの心を激昂させました。ですから平常は長男ジョセフの家にありて、ナポレオンとは同居しません。ジョセフが羅馬の使節となりて任地に赴いた時にも同伴して行きました、任滿ちて歸るに及び夫人も共に巴里へ歸り、前と同じくジョセフの家に住みました。かゝる次第ですから、ナポレオンとの間はいよ〳〵惡しくなりまして遂には再び巴里を出で、羅馬に行くやうになりました。これ恐らくは夫人の罪ではなくて、ナポレオンが專横の心から起つた事でせう。

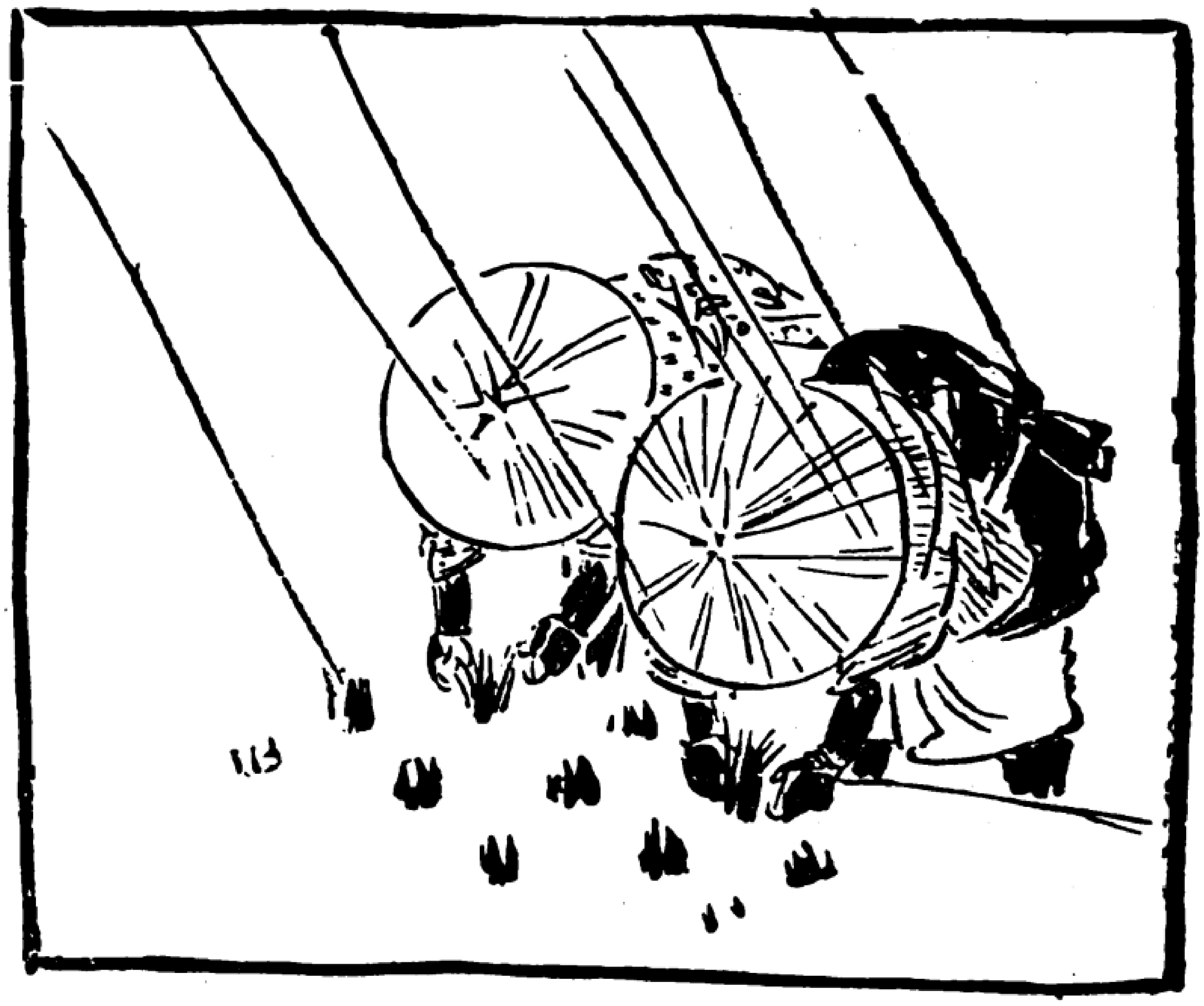
けれどもこの内にナポレオンも前非を後悔して慇懃に母を羅馬から巴里の都に迎へ入れて、マダムメレの稱號を授けて仰ぎ敬ひ、一萬六千圓ばかりを養老金とし

て毎年渡すことに定めましたけれど、夫人は不時の用に備へん爲め、專ら儉約して無用の費を省きましたから、世間の人からは其の儉德を褒められました。

夫人に就ての逸事はいろ〳〵ある中に若い頃から互に親しく交つてゐたアブランテス公爵夫人が、記したものゝ内にかういふ事がある。

「夫人がマダムメレとなられし頃は五十三か四の頃なりけむ。若き頃は驚ろくばかりに美くしかりき。今の娘御らもマリアナを除きてはさながら母親の若かりし頃に異ならず。夫人の丈は五フ井ート一インチ許りありて其姿はまことによき格恰なり。少し年とりてよりは肩のあたり肥えて廣うなりたれば丈は短かくなりたらんが如く見えぬ。足と手とは又いとよくつりあひて、特に足の小さくすらりとして、しなやかなる形は他に比すべくも覺えず。右手にある一つの缺點は食指の治療を施す時、筋をきり違へたれば曲ぐる事の叶はぬことにて、たゞ骨牌をもて遊ぶ時に扇をなすのみ。此頃に至るも夫人の齒は若き時に少しも變らず。はゝ笑む時は此家族の人々の持ち前にて愛嬌のこぼるゝばかり。容貌は活き活きとして才氣溢れぬ。眼はいと黑くして少し小さけれど、さりとて惡性の風をば少しも帶ばず。夫人は奇麗好きなる上、服裝には常に意を凝らして年齒と地位とに調和せんことをつとめしかば、何處とて非難すべき所もなきまでにいとよく似合ひて、たとしへもなく優雅なり。高き地位に昇りてよりは何事につけてもいとゞ氣苦しく思はるゝ樣なりしが、こは自らの性質の内氣なると佛蘭西語を巧みにあやつること能はざるとより起りたる感じにや、特に他人と對する時は内氣なる心より自らを他人は惡しく觀察する事はあらずやとの心配をなすが常なり。夫人は又、今迄知らざりし人にても一見すれば忽ちにして其人の性質を看破する尖き觀察力を有したりき。夫人が面白からざる生活をなしたるは、これ皇帝の罪にして、自らの心より起りし事にあらず、皇帝は母を愛せざりしにはあらざれども、之に仕ふる禮未だ盡せ

あとは云ふべからず、而して之をしも自ら感じ傲ら孤獨に甘んじて、一言の不平をも皇帝に告げざりしは全く夫人が心の倨傲なるによるなり。多くの大臣等が夫人を訪ふは新年の外甚だ稀にして其ときとても亦、夫人の地位に對し相應なる尊敬をはらふにあらず。要するに夫人は勢力を有せざりしなり云々
又ナポレオンは弟ルーシエンの才能あるを見て常に不安の情を懐きけるが、常に母のルーシエンに左膽するより、從つて母をも遠ざくるに至れるなりと云ふ者あり云々
去程に夫人は一七九三年に廣い世界に家もなきさすらひの身となつて數多くの小供らと共に彼方此方とさまよひましたが、六年の後には一變して佛國執政總官の母となり、而して十年の後には、百二十州を領地として北丁抹より南ナーブルスに至る一大帝國皇帝の母となり、多くの子供等も悉く榮位高官に昇りました。ジョセフは西班牙の王。ルーシエンは波蘭の王。ルイスは阿斯弗亞の王となり、エリサは多斯加尼の公爵夫人ポーリナはボルゲースの女后。カロヌンは獅子利の女王となりましたけれどこれから又五年の後は果して如何になりましたらう。時は一八一五年六月十八日、ウオータルローの一戰に、拔山蓋世の大英雄もあはれ果敢なく打ち敗られて、六月二十二日遂に皇帝の位を黜けられ、ついでセントヘレナに孤島の月を眺むる身とはなりました。あゝ、昨日の榮華は一夜の夢か。



是より後のボナパルト夫人の身は如何なりましたらう夫人は弟フエスチと共に羅馬へ退きましたが。今迄つとめられた節儉の効果はこゝに初めてあらはれて。昔の榮華にはもとより及びませんけれとも、夫人は侚取り付く島もなき家族の者等に助けを與へつゝ、美くしい宮の中にありて豊かに暮しを立てゝ行かれました訪ひくる人は己れの同胞己れの娘より外にはなけれとも、時には又夫人に面會するのを榮譽としてわざわざ訪ひくる貴人もあッて。ハミルトンの公爵なとはわきても親しい交でした。

ナポレオンがセント、ヘレナに流されてから六年の後遂に孤島の露となりて消え失せたとの報知を聞きましたときの夫人の嘆きは如何でありましたらう、併し夫人はまだ佛蘭西に殘ッてゐる那翁の殘黨が再び旗揚する日を深く心に期して居ましたが、一八三〇年七月の頃から重い病に罹りました、此時の狀況を公爵夫人が記載した所によれば。

「かくて夫人の容體はいよいよ惡くなり行きて、風前の燈火の如くなりぬ、夫人のはらから、夫人の小供ら及び娘の婿だち皆集まりて床のまわりを圍み居けるが最后の時なりとや思ひけん夫人のかすかに祈りを上ぐるに、人々はたまらず其塲に泣き出しぬ。

此時ゼロムは少しく後れて來りしが、此有樣を見るより心も心ならず、急ぎて床の側に行き

「お母さん、聞えますか」と耳に口を寄せてさゝやけば、夫人は靜にうなづきぬ。此日ゼロムは佛國の新聞紙にて、ナポレオンの立像再建の議が否決せられしとの記事を讀みたりしが、母の心を慰めんとの心より、

「議會は本日皇帝の立像再建の布告を發しました」と靜に告げぬ

夫人は一言のいらへをもなさゞりしかと、限り無き喜びは胸の中にあふれたるが如くなりき。夫人は兩掌をしかと合せぬ。眼は閉ぢられたり。云ふまでもなく夫人は祈りをなせるなりき。大粒なる淚――喜びの淚――は、ハラハラと頰を傳うて枕にこぼれぬ

かくて一時間の後、少しばかりのソップを飲みしがそれより病勢いたく減じて二日の後には遂に床を上ぐるに至りぬ。

されど皇帝の立像建立の布告が發布せられしとは、ゼロムが一時の慰め言にして、まことはいつまで過ぐるもおぼつかなきものなる事と知りたる時の夫人の嘆きは如何ばかりなりけむ。あはれ八十有三歳の夫人が涙は、絶海の孤島に埋もれたる英雄の枯骨にむかひて少しの感慨をも懐かざる情なき人々の心を動かすには足らざるか。そも皇帝の像を建つるに幾程の費をか要すべき」

其後夫人は娘ポーリナの別莊で病の床に就きました、看病人は一人の婦人の外にむかし那翁の旗下にわッた一士官が同じく病床に居て那翁が榮華に誇ッたむかしの記錄を病人の爲に讀みきかせてをりました。けれども夫人は佛蘭西や、皇帝の名や及び己が小供等の名を聞いて今にも消え行かうとする露の命をば僅かに取とめてゐました、當時夫人の周圍には尙美しい王の玉座の嚴かに飾られてゐッて、見へない眼の中に勇ましい英雄の面影の輝き渡るを見とめました、思ひ返せば昔は夢か、現か、廣い世界に夫人のごとく波瀾のある生涯を送ッた人は稀でありませう。

（完）

鄕人談

塚越停春

昔徳川家で天下を取つて居た頃は、上下の身分と云ふものがきちんと定まつて居て、大名の家に生れゝば馬鹿でも大名に成り、侍の家に生れゝば善くない人でも侍に成り、百姓の家へ生れはゑらい人でも百姓に成り、町人の家へ生れば悧發ものでも町人に成るより外はなかつた。其故天下の人材が下に屈して居て、無名の英雄とか、村落の豪傑とか謂ふ様なものが到る處にわつたのである。吾輩が見たり聞いたりしただけでも其人は決して少なくない。

關東の或る山里に市郎左衛門と云ふものがあつた。姓は某、名は義友と曰つて、祖先は相應に武功のあつたものであるが、時の不利なのに遭つて山里へ引籠り子孫は其儘百姓に成つて、今では七十餘戸に分れて居る。彼が家も亦其中の一つで、彼は文久二年に年八十七で歿したから、丁度文化文政天保頃を其盛時にして居たものである。

彼には二人の弟があり、早く父母を喪つた所から、父母に代つて二弟を養育致し、身を愼み業を勵むで、躬行を以て二弟を率ゐた。其間の辛酸と云ふものは實に一方ならぬことであつたと見えて、老後に至つて、彼は常に『自分は不幸にして早く父母に別れ、兄にも成り、親にも成らなければ成らないので、一時は隨分苦勞をしたものじや』と家人に話したと云ふことである。

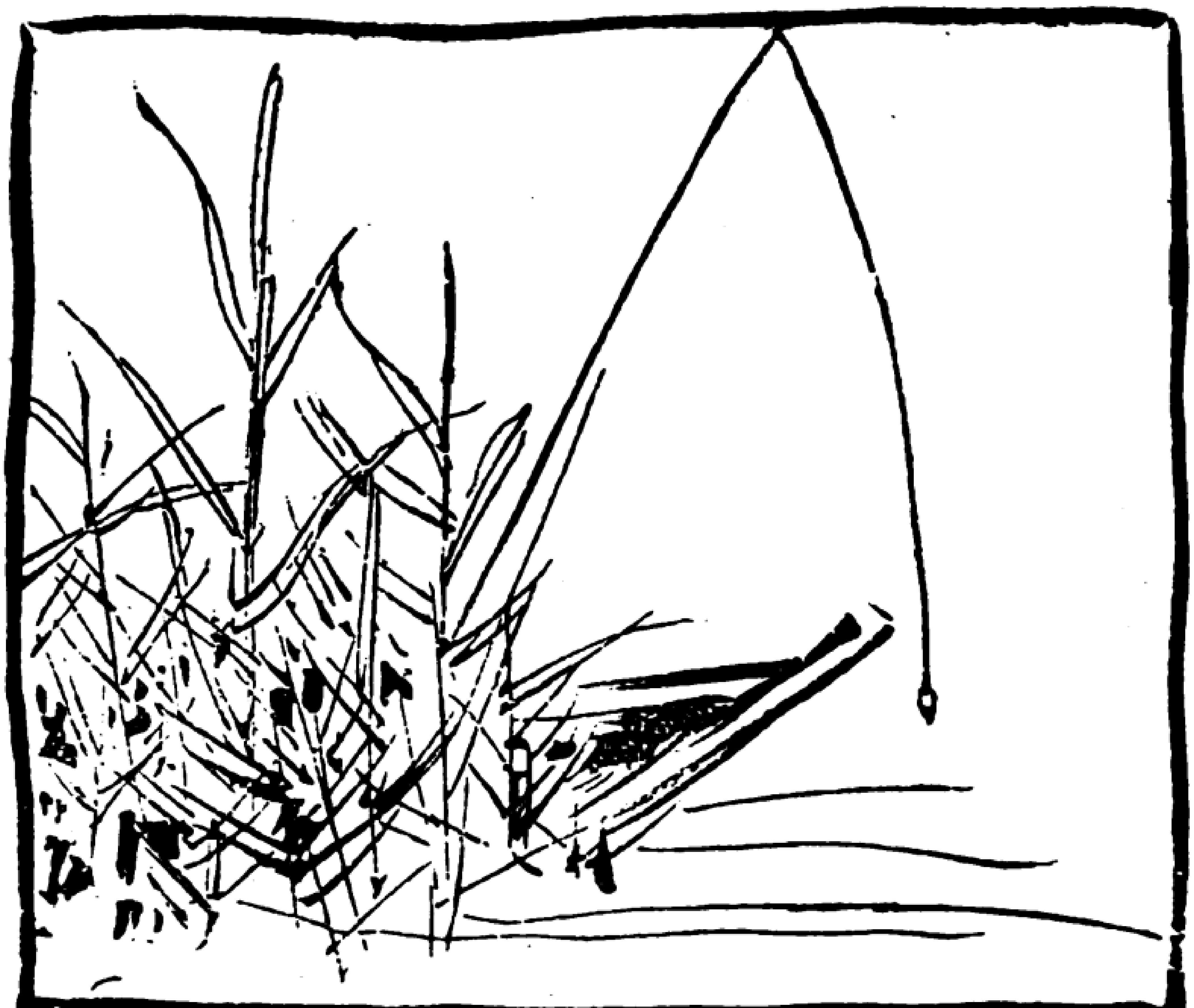
家は農家兼材木屋で、耕作の傍杉やら欅やらを伐り出して、之を江戸へ運送するのを其家業にして居た而して彼は頗る數學に長じて、測量術なども明かであつた所から、人は彼を『活きた指金じや』と曰つたと云ふことである。或時幕府の役人が來て彼を案内者にして深山に分け入り檢分をしたことがあつたが、途に一本の大きい欅を指して、『あれは何の位の圍りがあらう乎』と云ふたら、彼は直に『五尺七寸位はありませう。』と答へた。乃ち就て測つて見た所が、果して其通りであつたので、役人は何れも大に驚嘆したと云ふことである。此の樣な逸話は澤山傳へて居る。

彼は天性頗る弘毅なものであつたが、其頃信州松代の人で瀧右衛門とか云ふ心學者が來て居たので、一族の好道なと云ふものと共に其說を喜び學んで、遂に其說く所を躬行した。

天保中江戸城の普請があつて、幕府の勘定役遠山彌左衛門、普請役安藤彌四郎、永持寬之助、河島小七郎など云ふ人々が出張して、多くの大木巨材を伐り出したことがあつたが、彼は材木屋であり、殊に數學測量術などの達者である所から、之が監督を命せられ深山へ分け入つて欅の大木を伐り出し、數百の人夫を

指揮して之を江戸の官庫まで輸送した。其間の二年と云ふものは、全く家事を擲つて奔走盡力致し、毎に夜の明けない中に出て一日の規畫處置を案じ、夜に入つて始めて止むと云ふ工合で、其盡力の非常なのと其用意の緻密なのとは何れも驚嘆をした所であつたと云ふことである。

此の通りの次第で、彼は巨多の材木を一本の誤りもなく、幕庫まで輸送したのであるが、幕府の役人等は、其二年餘りも全く家事を擲つて、腰辨當で公事に奔走するのを氣の毒に思ひ『御用材と一緒に、少し竹材でも伐り出しては何うじや。』と曰つた。是は彼が商貢川の竹を御用材と共に江戸へ運搬させ、其れで幾分か彼の勞に酬ひ様と云ふ計らひであつた。所が彼は『承りました』と御請をして、直に夥多の竹材を伐り出し盛に之を輸送したが、彼は悉く之を官庫に送り込んで仕舞つた。幕吏等は之を見て呆れ果て、『市郎左衞門の無慾にも困つたものじや。』と曰つて、何れも頭を掻いて居たと云ふことである。



其れから此の御用材の伐出輸送が全く濟んだに就て幕府の勘定役は、彼を呼で深く滿足の意を語り『其方に於て何か望みがあらば何なりとも聞届け遣はすに由つて、遠慮なく申出でよ』と曰つた。然し彼は『人民の本分として當然に勤むべき國家の賦役を勤めたまで、別に何も望むべき理由はなく又望むべきこともない』と言つて何事も申し出でない底で勘定役は更めて『其方が誠意に盡力した段は、誠

に添けない。』と云ふ褒詞を與へ、幕府の名を以て、白銀若干を賜はつた。此等の事を見ても、彼が性行の一斑は推測することが出來るのである。又天保七八年の饑饉などにも、彼は大に賑恤に力を盡して居る。

彼が家は必ずしも貧いものではない。然しながら大に富めるものでもなかつた。謂はゞ中等の農家より、稍良い方であると云ふ位に過ぎないのである。唯彼が家は材木屋を兼業にして、江戸へ材木を出して居た所から、材木を江戸へ出して、其代金を收め、之を以て熊谷倉賀野邊で米麥雜穀など買つて來て、毫厘の利を收めずに之を販賣した。又貧者へは村内の富者と謀つて金穀を出し合せて、賑恤をした。從て彼が庭上は朝夕市を成したと云ふことである。又凶歳の事であつたから、其賣買をして米麥などの代價は、勿論多く收まらなかつた。が、其は竟に其儘にして別に催促も何もしない。

主人が此の通りであるから、家族婢僕の輯睦して居たことは言ふまでもない。一家を擧げて和氣融然として樂しく暮し。醇樸の行が優に近隣を風化して居た

又其弟の市太夫と云ふのは、後に產を分けて別家を致し、末弟の永次郎と云ふのも同く別家をするなり、何なりとさせ樣としたが、彼は『牛追ひに成りたい』と云ふ變つた志望で、色々に止めても何うしても聞入れず、遂に牛を買つて與へられた。底で彼は肥え太つた十二頭の牛を領して、自ら材木の運送を始め、遠く倉賀野熊谷邊を往還して中仙道の一名物男に成つた。

當時の中仙道と云へば、北陸東山兩道の往來が經由した所で、參勤交替の大小名も通れば、貨物の運搬も大分にあり、馬追ひもあれば牛追ひもある。就中長脇差とか上州無宿とか云ふものゝ本場であるだけ、雲助などには餘程の惡漢があつて、旅人などの辛い目に逢ふものも少なくなかつた。が、彼は此の間を一本の長い鞭を持つて、十二頭の牛を驅りつゝ縱横に横行をして居た。街道筋で彼を知らないものはない。雲助中の惡漢等も一人として彼に順從でないものはない。

彼は始めより非常な腕力家と云ふではなかつた。又好で喧嘩の場へ躍り出すと云ふ様なものでもなかつた唯彼は生れながらの俠客肌を謹直な衣服で裹み、精悍の氣が渾身に溢れて居ると共に、兄の感化が身に浸みて居て決して粗暴な擧動はしなかつた。が、彼は凌虐と不廉直とが大嫌ひで、何事も彼に托すれば毫厘の誤がないと共に、非理を以て弱い旅人を凌虐するものなどがあれば、彼は決して之を餘所に見ることが出來ず直に進で穩靜に之を救解した。穩靜に救解はしたが、斷じて一歩を引くことはしなかつた。のみならず、滿身是膽とも謂ふべき彼が意氣に接するものは、如何に穩靜な救解でも到底之に聽從しない譯には參らなかつた。



彼は中仙道の名物牛追ひに成るまでには、多分幾回かの喧嘩をしたであらう。多分幾回かの爭鬪もしたであらう。然しながら彼は萬止むを得ない場合までは、決して臂を張て起つと云ふ様なことはなかつた。彼は何時も下手に出る、穩和に出る、そうして理を盡して之を諭し、猶非理を言ひ募つて何うしても聽入れない時に始めて奮然として蹶起する、是が其常であつた。

多分彼は念流の劍客であつた歟と思ふ。此は吾輩が聽いて置かなかつた所であるが、彼の儕輩が何れも同流の劍客で、當時盛に練習をして居たのであるから、多分彼も之を學んだに相違あるまい。

後に彼は、兄市郎左衛門が江戸へ往來の途次度々意見をしたので、遂に伴はれて故鄕へ歸り、他へ養子に

行つて、後は同く郷人に成つて仕舞つたが、彼が名物牛追ひであつた時代は、多分幾多の小說らしい行爲があつたものと思はれる。惜い事には、吾輩は之を聽いて置かなんだ。

其れから話が兄の方へ戻つて、市郎左衞門の事に成り、其子供の事に成るが、市郎左衞門には三人の子供があつて、長子を一郎、次を松次郎、次を茂三郎と曰つた。其中叔の茂三郎は長じて一族の或る家へ養子に行き、性質が至て卒直なもので、人の非行を面斥して寸毫も容赦をしなかつたのを以て知られた。然し其言ふ所は全く至情に出で、毫も惡意がないので、面斥されても之を怨むものはなかつた。仲の松次郎は淳良謹厚の人で、終生兄と同居をして、專ら農業を勉めて居た。而して伯の一郎、是が眞に父の子たるに耻ぢない人であつた。

彼は父に較べると、弘毅とか遣手であるとかと云ふ點は多少讓つた乎も知れない。然し、德望は寧ろ優つて居た。名を好章と曰た。晚に桃翁と號した。

昔の詩にも、寡妻に刑り、兄弟に至ると云ふことがあるが、人の德行の如何を知るには、其家庭を見るより善いことはない。如何に善い人でも、其家庭が亂れて居る樣では、決して眞個に善い人と云ふ譯には參らないのである。然るに此の一郎の家庭と云へば、其れは實に美はしいものであつた。

彼が妻のいく女と云ふのは、極めて貞良溫淑の婦人で、舅姑に事へ、夫に隨ひ、子供やら婢僕やらで一家十五六人もあつた家事を一身で引受けて立働き、殊に弟松次郎夫妻も同居をして居て、家に依れば隨分不快の事も起り易いのであるが、啻に不快の事が起らない計りでなく、和氣滿堂、上下翕然と云ふ工合で、下男下女に至るまで深く悅服を致し、彼等は蔭言にさへ彼女の情深い事を稱揚して已まなかつたと云ふことである。幾夫妻も同居をして、居て睦まじく暮すと云ふのは、一寸思へばやさしい事の樣で、其實天下に是より六つかしい事は少ない。彼が家庭の麗はしさは、此の一事でも想像されるのである。又彼が人物の溫然た

る君子人であつたことも、此の一事で想像されるのである。

して、彼が家の郷黨に於ける位置は、組頭なるもので、彼が父市郎左衛門など彼が如き遣手であつたに拘らず、猶同く組頭たるに止まつた。是は大に理由のあることで、彼が家はもと同族中久しく名主をして居たもの丶屋敷地を買拂はふと云ふ時、名主の屋敷地を異姓の人へ渡すのは耻じやと曰つて、彼の祖先が之を買受け分家をして始めて彼が家を立てたので、其れと同時に名主の位置を奪はふと云ふ様な野心は、毫もないと云ふことを明す爲に、子孫へ『村の事には十二分の盡力をするが宜しい、唯名主に成ることは末代まで成らない。』と遺言をした。此の遺言に基いて、彼が家には決して名主に成ることは肯はなかつたのである。從て彼も矢張り組頭(天保六年)として永く村内公共の事に盡力して居た。然るに此の頃まで名主をして居たものが歿して其子は幼年で職に堪へない所から、村民等の懇請を辭み兼ねて彼は安政元年から名主後見役と云ふ名義の下に名主の事務を攝行して幾年月を過ぎた。其れから前名主の子は漸く長したが、彼は何分にも名主たるの器でない。底で、村民等は協議をして、寧しろ彼を名實共に名主にし樣として切に之を勸め、一村を擧げて幾日も勸告を續けて已まない。然し彼は何うしても之を承諾しなかつたのである。底で村民等は、『此の上は官に請ふて其就職を勸誘して貰うより外はない』と云ふことを決議し、既に一同官廳を指して出發し樣とした。彼も是に至て已むことを得ず、『自分の就職をしないが爲め、官府を煩はすのは憚りがある』と曰つて、始めて之を承諾し、祖先の靈牌へ對し香を燒いて、遺言を破る罪を申詫び、而して後に就職をした。此が明治元年の事である。

是から彼は全力を擧げて村治の改良を圖り、德行を以て衆民を化し、一村内が翕然として繁昌するに至つた。明治七年からは戸長と云ふ名の下に依然村治に力を盡し、同く九年に辭職をした。其間家に在ては、引續いて村内の兒童に讀書習字などを敎へて居たが、明

治六年學制の發布以來は、同く十三年まで全く無報酬で學務委員なるものに任じ、以て學事の普及に力を盡した。最初學校は隣村と共同をして居たのであるが、彼は非常な盡力を以て別に村内へ一校を創設し、之が建築維持其他に至るまでを處理した。

而して彼は、彼の父の時から村内に行はれて居た心學なるものに對しては、一層の力を用ゐ、文久元年から會友舍なるものを設けて、邸内へ講堂を建て、毎月數回村内の老幼男女を集めて道話を致し、以て村内の風敎を勵ますことを勉めた。彼が折々に口にして道歌なるものを見ても、其人となりと其學ぶ所とは分る。

おのが身のよごれをとれば其あとは、
　　生れながらの新玉の春。
身勝手を捨てたるあとの心よさ、
　　どちら向ても邪魔のなければ。
天地と名をつけてこそそれ〴〵に、
　　名もなきさきの事を尋ねよ。
いろ〳〵の病をおこすそのもとは、
　　私慾の鬼を退治せぬ故。
さわりなく流るゝ水の靜さよ、
　　障りがあれば騒がしき音。
かへり見よ身をつかふこそ安きなれ、
　　身につかはるゝ心苦しさ。
心とは形がすぐに心なり、
　　思案するのは心ではなし。
誠にも物の障りはなきものぞ、
　　障りのあるは思案とぞ知れ。
おつる子に手を出したる其時は、
　　本の心のあらはれにけり。

▲善は急げと云ふことを
あちこちと思案出でざる其先に
　　向ふ任せにすることぞよき。

▲性に率ふことを
それ〴〵にさしづの主はあるものを、
　　思案で身をばそこのふと知れ。

▲反省を

一言を吐くたび毎におのが身に
立ち返り見て事をはからへ。

▲究理正心を
雨の日は雨と云ふより外ぞなき。
照る日は照ると云ふ外はなし。

天地萬物一體といへども、人は萬物の司にして、一個の小天地なり天地と並ぶものは人也故に道の外に人なし。人の外に道なし。性の善なることを知らずむば、性に率ふこと難し性は天地人の體なり。體立ちて用行はる。其用は君臣父子夫婦兄弟朋友の五つなり是を誠にするを人の道と云ふ



道は天地に明なり。人々固有の性を知り、性に率ふ事を願ふのみ。
心なく見たり聞たりおのづから
事の足りたる身こそ安けれ。

▲學校生徒へ
誠なる教をうけて勵みなば、
心の花もいつか咲きなむ。

彼が善行良爲は一々擧げるも煩はしいから、之を省くが、一例を擧げれば、明治二年に彼が地方の饑饉であつた際、彼は村民の富者と謀つて賑恤に力を用ひ、官から賞賜せられた如きは其一である。又其村内の何某と云ふ惰者の屋根を葺替へた如きも其一である。元來此の何某と云ふものは身體が不具なる上に頗る怠惰放逸のもので、屋は

破れ、雨は漏り、其貧窶たる實に甚しいものであつた。然し隣人等は彼が怠惰に愛相をつかして之を顧みなかつたのである。然るに彼は之を見兼ねて、隣人等を招き、之に諮つて、『諸君が若し何某に贈ると思ふたならば、或は惜しいかも知れない就ては何卒之を拙者に贈ると思つて、彼の屋根を葺き替へるたけの茅を贈つて貰いたい、又其屋根を葺き替へる間の世話も同樣の理由でして貰いたい。』と懇に頼んだ。所が彼の隣人等も喜んで之を承諾し、力を協せて茅を刈つて來て、數日ならざるに屋根の葺き替へて遣つた。之が爲め何某の性行も大分に改まつたと云ふことである。又彼が毎朝佛壇を掃除して、香を燒き、祖先の靈を拜して、老に至るまで一日も怠らなかつたてとやら、村内の不良なものを敎化したてとやらは、今一々擧けるに遑がない。

　さうして彼は、明治十五年に年七十八を以て歿し、村民は其德を忘れ兼ねて、數年前に一の紀念碑を建てた。

　此等は終生郷人として世にも人にも知られて居ない人であり、又知られ樣ともしなかつた人であるが、其手腕と云ひ、德望と云ひ、決して世に得易いものではなかつたらしい。町村自治の美風が蕩然として地を拂つた今日、何となく此人が思はれる。

科學

梅雨の天地

佐藤禮介

梅雨の空　今はさみだれの時節となつた、藤、躑躅などの花も過ぎ野も山も目に見ゆる限り綠色を以て滿たさるゝ樣になつた、空は一面に薄墨を流せる樣に濃淡もない雲を以て一樣に蔽はれ雷雨の時に見る樣な異黑な暗雲を見ることもない代りに雲切れの間から蒼空を見ることも稀である、是れが即ち梅雨の空の特徴である如何いふ源因で斯樣に鬱陶しい時節が每年現はれるのであらうか。

我が國では、冬の時節に多く西北の方から寒風が吹き夏の時節には多く西南の方から暖かな風が吹くのであるが、梅雨の時節には丁度此の兩方の風が更代する時である、西北から吹く風は寒冷であつて濕氣を含むこと少ないが西南から吹く風は溫暖であつて濕氣を多量に含んで居る此の兩種の風が相混ずると西南風に含んで居る濕氣は冷されて小さい水滴となる、此の小さな水滴の集りが即ち雲である、此の雲をなして居る、水滴が一層冷えれば相固まつて大きな水玉となり重くなつて地上に落つる是れ即ち雨である。

斯樣に西南の方からは絕えず濕氣の多い風を送り西北の方からは寒冷な風を送り其れが空中で出逢つて雲となり雨となるのであるから、此の時節には每日々々小粒な雨の絕ゆる間がないのである、そうして四國や九州の南の方は最も初めに此の梅雨に出逢ふもので從つて梅雨の終るのも早いが東北地方や北海道の方は梅雨の時節の始まるのも遲ければ終るのも遲いのである、地方により斯樣に遲し早しはあるが曆に記載してある梅雨期は六月十一日（閏年では六月十日）から七月二

日までの二十餘日の間である、併し此の前後にも雨天が多く續くものであるから俗につゆ三十日と稱して居る。

梅雨季の家庭　晴間もなく幾日も降り續ける細雨には誰人も心結ばれて不快に感ずることであるが殊更氣をまぎらすべき場處に困るのは子供であらう子供は第一の遊び場たる庭や野山に出ることも出來ず、女兒は毬つき羽子突きとか男兒は隱んぼ智慧板遊びとかを爲るであらうが是れも直に厭きて仕舞ふから無聊不快の果兄弟の喧嘩も起るであらう、母にせがんで菓子や玩具をねだるであらう我國の家庭の樣に良い樂器を具ふること稀であり、又家族全體の樂まるゝ樣な適當の遊戲道具にも乏しい處では主婦の最も困るのは梅雨中の子供の取扱ひである斯樣に困難な事柄であるから梅雨中の子供の取扱ひ方は世の智慧ある敎育ある婦人方の考をを凝すべき好箇の題目であらうと思ふ。



家に棲む動物を見れば猫は春に生れたのが稍大きくなつて母猫の捕つた鼠を弄ぶ樣になり一方には兒童等の消閑の伴ともなるのである檐下を窺へば燕は最早巣を完く造り終つて第一回の雛は既に孵へて居る親鳥は曇れる空にも絶間ない雨にも滅げず飛去り飛來つて小さい羽虫を捕へ是を小さい黃色な嘴に入れるのである斯樣にして其の重く濡れたる翼を乾かす間もなく只其の雛の餓えることを恐れて勞れも厭はず終日飛び廻は

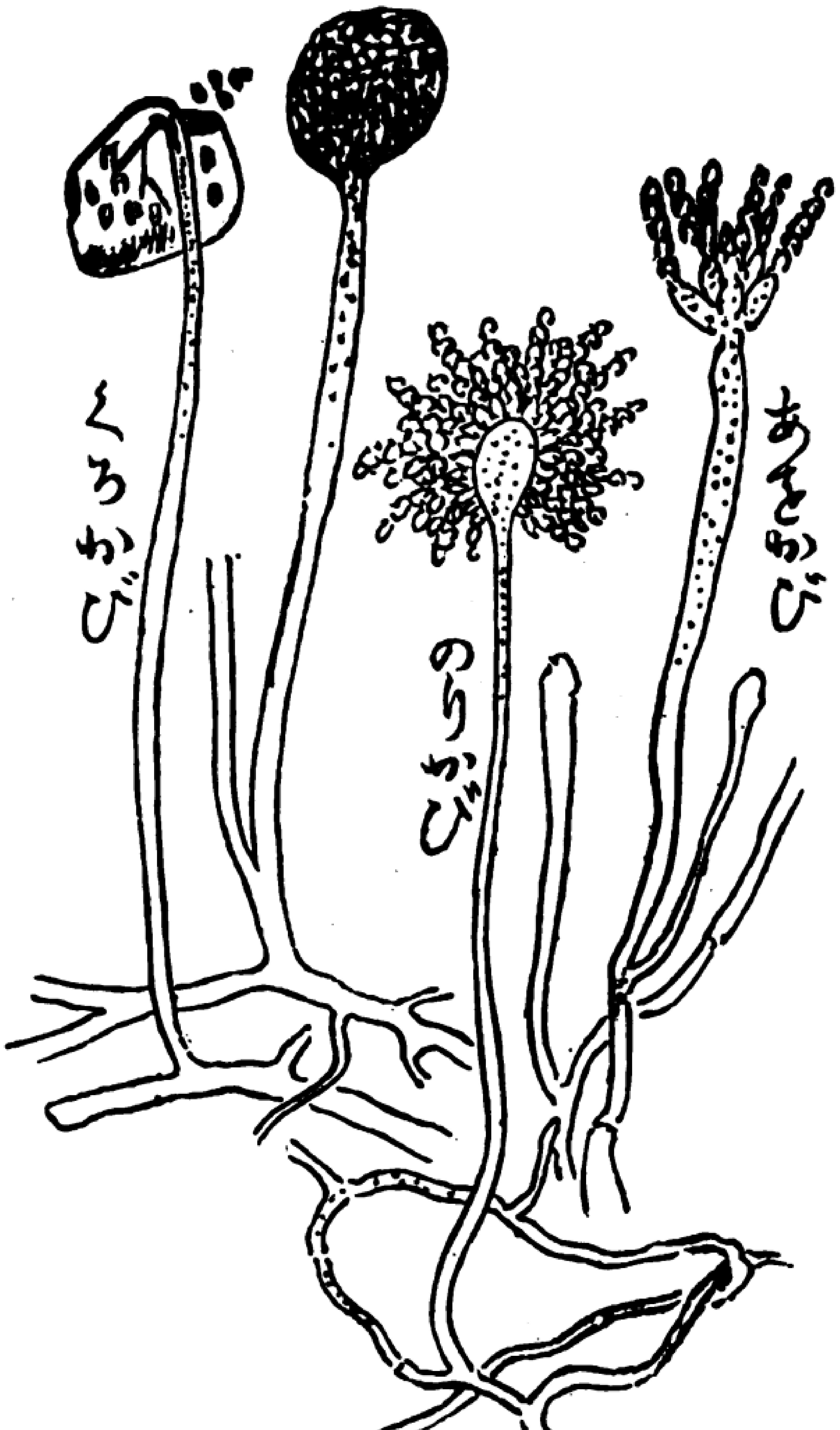
る健氣な振舞は實に鳥ながら感服の外はない。臺所を見れば數日の間掃除しなかつた火箸、鍋、釜の樣な鐵器を始め洗面盥や銅壺の樣な銅器などに至るまで多くは錆が出で居る、何故に斯く錆を生ずるかといふに梅雨の中は空氣に多くの濕氣を含んで居つて其の濕氣が銅鐵などの器物の外面に附き之を錆させるのである、

革鞄の樣な革製のものや、飯餅などの樣な食物には黴が遠慮なしに生える又平生使ひ古した冬帽子や、書物の表紙や針箱の隅や襟垢の附いた着物などにも處嫌はず發生する、元來黴は垢の附かぬ處には大抵生えぬが垢さへあれば何處にも生える今まで



では左程に垢が附いたとも思はなかつた處でも黴が生えた爲に垢の附いたのに氣の附くことなどがある若し譽めて云つたらば黴は吾々に垢の所在を知らせる忠告者である黴は何んであるかといふと是は松茸初茸などの樣な蕈類の植物であります黴の全體を顯微鏡の下に置いて廓大して見ると此の圖にある樣に體は細長い糸の樣であつて是が垢とか飯餅とかいふもの丶上に縱橫に蔓延し其れを黴の食物として殖え蔓るのである、餘程大きくなれば其の細糸から頭の大い棒が直立する、そうして其の頭の上に極々小さな球が出來る此の球は種子の樣なものであつて胞子といふものである形極めて小さく量も極めて輕いものであるから塵埃と共に空

氣中に飛び散つて居る其れで何處の空氣を採つて檢査しても皆黴の胞子が多少混じて居ない處はない、此の胞子は濕氣を最も好むものであつて濕氣のない處には發生しない適當な溫度のない處では發生しない一年の中でなせ梅雨中に黴が多く生ずるかと云ふに此の季節には空氣中に濕氣が最も多く氣候も相應に溫暖であるから只黴を吸ふべき養分さへあれば何處にも發生するのである、其れ故黴の發生を防がうとするには（第一）食物ならば充分乾かして水分がない様にしても宜しい、即ち餅、果物の様な黴



の生じ易すいものでも充分乾かして置けば決して黴を生ずることはない（第二）垢又は汗の如く黴の養料となる成分を含んで居る物には黴が發生するものであるから革具器物などは凡べて淸潔にして垢又は汗其他不潔の物の附着し居らぬ様にすれば黴の發生を防ぐことが出來る第三高熱と寒冷とは又黴の發生を防ぐの効があるゆゑ食物の如きは之を煑又は燒くか或は氷詰めに爲て置けば黴の發生又は腐敗を防ぐことが出來る。

梅雨季の庭園　霖雨打ち續ける天氣にも拘はらず時節

来ればとて花咲き始むる植物も少くない園の一方には橙が白色の花を開いて居る 橙の葉は通常の蜜柑類の葉よりも大きく花は五つの白い花瓣を具へ、芳ばしい香氣を放つて居る。花の底には甘い蜜がある、此の端麗雪白なる花瓣や芳ばしき香氣や甘き蜜などは何故に備へて居るのであらうか、云ふまでもなく蝶や蜂を招き集めて花粉の媒介を為さしむる為である若し橙の花が美はしき花瓣と芳香と甘蜜とを有せぬならば昆虫は訪ひ来らず花は受精せず實らぬものとなるであらう。其の花瓣には芳香ある揮發油を含んで居るから之を蒸餾して香油を製することが出来る。



庭の一方には花菖蒲や紅花などが咲いて居る。今是等の花を採つて解剖して見ると花菖蒲には大きい花瓣の様なもの三枚は垂れて居り小さい花瓣の様なもの三枚は立つて居る（此の二種の花瓣の様なものを花蓋と名づける）橙とは異つて雌蕊と雄蕊とはちよつと眼に付かない、しかし精しく見ると雌蕊は先端の方が錨の様に三つに分れ且つ外の方に曲つて居る、其の錨形の先きは凡そ二つに分れて居つて其所に雄蕊

の花粉が附くのである、雄蕋は三本あつて皆鎗形の雌蕋の蔭に隠れて居る、燕子花も花菖蒲と殆んど同じ時節に花を開くものであつて花の形や組み立ても甚似て居る、其れ故世間では往々花菖蒲と燕子花とを間違へる人がある、しかし此の兩種には著しい區別の點がある、花菖蒲の立つて居る花蓋は先きが稍圓いが燕子花の立つて居る花蓋は先きが稍尖がつて居る又花菖蒲の葉には本から先まで太い筋が通つて居る、此の筋は中肋と名づけられたものである、燕子花の葉には中肋がない、故に此の點で以て區別することが出來る、しかし花菖蒲を培養して居る所では花菖蒲と燕子花とを以て雑種を作つて居るから中々區別の出來ない程に混じた形を持つて居るのもある雑種を作らうとするには花菖蒲の花粉を燕子花の雌蕋に附けるか或は燕子花の花粉を花菖蒲の雌蕋に附けて受精せしむるのである。

梅雨の終り頃になれば園の一方に植えて置いた紅花も咲き始める、紅花は丈け三尺許りの草であつて葉は細長くある、莖と葉とには堅い刺があつて、ちよつと手折らうとしても中々困難である、花は莖の頂上に開いて紅色である、生長力甚だ強い草であるから今朝花を摘み取れば翌朝又新しい花を開く。斯様にして蕾の盡きるまで續くものであるから昔は此の紅花を末摘花といつた。（次號完結）

バクテリヤの話

とし子

「バクテリヤ」は腐敗の原因なり、腐敗とは有機物が分解する事にて、或は臭氣を發し、又は色を變じ、其形狀組織に變化を及ぼし、分解の極多くは水、炭酸瓦斯、アンモニヤ、等となるなり、此腐敗の作用を行ふ者は「バクテリヤ」なり、故に若し強き熱を加へて其中の「バクテリヤ」其他の生物を殺し置き、後密封して再び「バクテリヤ」の浸出を防げば、何時迄たつも腐敗する事なし、鑵詰は此理を應用したるものなり、其の時々腐敗せるものあるは、製造の時熱する事の足

らざりしが、或は密閉封の不完全よりして「バクテリヤ」の浸入を來せしによるものなり。

腐敗は誰しも厭ふ事にて、殊に夏期は「バクテリヤ」の繁殖盛んなれば一層烈しく行はれ、食物の腐敗よりして屢々惡疫を發生する事なれば、此「バクテリヤ」さへなくば腐敗なく、萬事清潔に惡疫等も少なかるべきと「バクテリヤ」を恨む人もあらんされど又一方より考ふればそも此の腐敗作用は此の世界の必要なるものにて、腐敗により無用の有機物分解してもとの簡單なるものに變じ、再び新しき有機物を構成する材料に用ひられ、かくて都合よく物質の循環行はるゝなり、例へば此所に一疋の犬の死體あらんか、若し腐敗する事なくば、犬の體を搆成する成分は其まゝに存するならん、然るに腐敗作用行はるゝにより、犬の體を搆成する有機成分は簡單なる無機成分に變じ、地中に入れば、植物體中に攝取せられて、植物の生長を助くるものとなるべし、即ち腐敗物が植物の肥料となるが如しかくて此成分を取りて生長せし植物はいつか動物にくわれて、動物を成長せしむ、即ち元犬の死體にありし成分は其動物の營養分となりし理なり、而して若し何時か此動物死して地に埋めらるゝ事あらば、又腐敗して分解したる成分は地中に入りて植物の養分となるべし、かくの如く腐敗作用あるが爲めに物質の循環行はれて萬有の事が都合よく成り行くなり、然らば腐敗「バクテリヤ」は一槪に厭ふべきものにあらずして、却て天然の法則を行ふ有益なる職工なりと云ふべし。又地中に一種の「バクテリヤ」あり、之を硝化バクテリヤ」と云ふ、此の「バクテリヤ」は何處の地中にも生活し、有機物の腐敗によりて生せしアンモニヤ鹽類を硝酸鹽類に酸化する作用を爲すものにて、即ち瓦斯なり、この瓦斯なるものは植物の生長に取りて最も大切なるものなり、抑も今田畑に有機質の肥料を施さんに、植物は直に有機物を吸收して養分となす能はず、茲に於てか腐敗「バクテリヤ」來りて之れを腐敗分解して「アンモニヤ」鹽類を造り、更に「硝化バクテリヤ」の作用によりて硝酸鹽類生じ、始めて植物の

養分となる、故に「バクテリヤ」は又農業に取りて缺くべからざるものなれば、農家は宜しく「バクテリヤ」大明神として崇信すべきものなり。

「硝化バクテリヤ」は硝酸加里の製造者なり、硝酸加里と云ふ藥品は煙硝、「マッチ」の製造其他種々の工業に必用なるものにて其製法種々あれど、すべて其法は動物臟腑、其他の有機物に木炭、木片等を混じて長く地中に埋め置かば、有機物漸々腐敗分解して、アンモニヤ鹽類を生じ、鹽酸バクテリヤの働らきによりて之れを硝酸に酸化し、木炭、木片中の加里と化合して硝酸加里を生ずるなり、かくて製造せし硝酸加里は多量の土砂を混じ居れば、之れを水に解して他の雜物を濾し分け、水を蒸發し硝酸加里を結晶せしめて取り出だすなり、此法は「バクテリヤ」の繁殖に都合よき熱帶地方にて行ふべきものにして、主に印度にて行はるゝなり、彼の地にては天然に地中に混じて多量の硝酸加里の產出する所あり、之れも元は「硝化バクテリヤ」の作用によりて自然に地中に生せしものなるべし。ゑんどう、そらまめ、等の荳料に屬する植物の根を見るに、多くの球の如き小塊の是れに附着し居るを見るべし、此の小塊の中には一種の「バクテリヤ」生存し、空中の窒素を取りて之と同化し、以て己れが寄食する母植物の養分となすなり。

近來「バクテリヤ」に關する研究の進むにつれ、種々の驚くべき面白き「バクテリヤ」は發見せられぬ、今其主なるもの二三につき述べんに、玆に「硫黃バクテリヤ」なるものあり、不潔なる溝渠、又は溫泉等の硫化水素の臭氣ある處に群を爲して生存し、其色白黃色を呈す、其少許を取りて是れを顯微鏡下に窺へば、糸狀のもの、群を爲し居るを見るべし、此の一本づゝの糸こそ各個の「硫黃バクテリヤ」として、其中に含む細顆粒は硫黃なり、さて如何にして其體中に硫黃を生するやと云ふと、此の者の生存する所に多量に硫化水素、又「鐵バクテリヤ」なるものあり、其形狀大さは「硫黃バクテリヤ」に似て全體の色褐色なるは、其體の周圍に酸化鐵の沈澱物を被むり居るによる、此「バ

クテリヤ」は水中に溶解せる鐵分を體內に取りて之を酸化し酸化鐵となして體外に出し、己れが細胞膜に是れを附着せしむるものなり、此ものも別に鐵を養分として取るにあらずして、之れを酸化せしむる際發生する力を利用して體力を養はんが爲めなり、「鐵バクテリヤ」は溝渠水田等に屢々見る鑛質の爲めに赤褐色を呈せる處に生存す、此ものは或時は水道の鐵管中に夥しく發生して水路を塞ぎて大損害を與ふる事あり、曾てベルリンの水道は此災害に遇て水切れとなり、又某會社は此害を被りて暫く同業を休み、爲めに大損害を受けたる事ありしと云ふ、

近來の研究により、食物が腸胃の中にて消化するは單に胃液、膵臓、膽汁等の作用のみにあらずして、胃腸の中に生存する「バクテリヤ」も又大に是れを助くるものなる事知られたり、或學者は尤も實驗し安き鳥類に就き其消化管內の「バクテリヤ」を檢査せり、其法は多くの鳥類を集めて、一々之を殺せる後、充分の注意を用ひて胃及び腸中の含有物を取り出し、其中に存在せる「バクテリヤ」の純粹培養を行ひ、以て是れを試驗せるにあり、其實驗の結果に依れば、二十四種の鳥の腸胃よりして總計八十八種の「バクテリヤ」を得たりと、吾人の胃腸の中には必ず是より多くの「バクテリヤ」の種類を含むなるべく、其各個の數に至りて幾億なるや未だ知るべからざるべし、さて此の消化に於ける「バクテリヤ」の作用は食物を醱酵分解せしめ以て容易に胃腸壁に吸收し易き狀體となすにあるなり、而して「バクテリヤ」の數は食物の異同によりて大に異るべく、前述の鳥類に於ける試驗によれば、食穀鳥類に最多く(六十四種類)食蟲鳥類之に次ぎ(三十五種類)而して肉食鳥類(二十二種類)尤も少かりしと、此結果より考ふれば、人類になりても穀物野菜等を常食とせる我日本人の如きには、「バクテリヤ」の數多く、歐米人の如き肉食人種の腸胃には「バクテリヤ」の數少なかるべし、されば日本人は歐米人に比して「バクテリヤ」の恩澤を蒙むる事多かるべし。

歴史の綱領（日本歴史の部）

若溪女史

鎌倉時代（文藝と宗教のつゞき）

又文章の方では鴨長明、吉田の兼好法師などあります長明は加茂の社人で琵琶の達人であッたが、時勢を恨んで出家の道に入り、都大原の里に草庵を結んで住ひ方丈記といふものを作ッて自分の境遇を述べました。西行法師と同じく又厭世思想を懐いた人であります、次に吉田の兼好法師といふのがあるこれも吉田の社司の子でありますが始め後宇多天皇北面の武士となり、伏見、後二條、後醍醐の數朝を歴て、足利の始めまで生存した人で、これも又一種の厭世家で、徒然艸といふのは此人の作であります、又此時代に頓阿といふ坊樣もありて歌をよく詠みましたが、王朝の末から鎌倉の始めへ掛けて、歌人で尤も靈妙な思想を蓄へたのは西行法師でありませう、西行は鳥羽天皇の時代に北面の士でありましたが、世態人情の變轉極りない處ろを觀念して佛門に入り。身を雲水に任せて諸國を歴遊し深く天然自然の景物、造化の妙機を味はつて。幽玄高遠なる歌詠を遺しました。

扨又此の時代には宗教が盛に行はれましてその鎌倉五山などの建立された時代であるから、宗教に伴ふた種々な工藝が興り、建築庭園の造り方など幽邃な風物を擬らへました。又宗教では禪宗が盛んで、名僧も輩出しましたが、栂尾の明惠上人は泰時の師で此時代の善知識であります、又鎌倉五山一たる建長寺を建立したのは時賴の丹精であるが宗の大覺禪師といふのが開山でありました、次で佛光禪師といふのが又宗から來朝して圓覺寺を開きました、又此時代に新たに宗派を開いた一宗の開山には親鸞上人、日蓮上人、一遍上人なとがあります、すべて此時代は兵亂の起つた前後で人心が安堵を得ずして隱遁などするものが多かつたから名僧知識が世に顯はれて新に敎門を開き、普く衆庶に安心の地位を與へやうとしたのであります。そこで觀

鸞上人は愚俗に入り易い他力本願の異宗を開き、一遍上人又の名は遊行上人、これは念佛一遍で往生安樂が出來るといふ、極めて單簡な宗旨を開きました、又日蓮上人は法華七字の題目を唱へる法華宗を開いて大に禪宗を誹りました、兎に角此の時代は歷史上稀に見る宗教の盛に競ひ起つた時代であります。

▲人物と事業

鎌倉時代は比較的に治世が永かつたから、宗教、文學工藝の側には隨分著るしい人物が多く出ましたが、其の代り武人には格別殊なつた名將もありません。初期の賴朝、義經は前時代の武將で此の時代に屬せず、又正成、尊氏も後の時代の武將で鎌倉時代の產物ではありません。けれども政治家とか、經世家とかいふ側には隨分人物もありました、大江廣元、三善康信、北條泰時、北條時賴。などは政治家として一流の人物であります、殊に廣元は鎌倉幕府建設の主謀者で、賴朝を助けて國家の制度を改革した著るしい人物、泰時、時賴共に此の制度に依つて國事を巧みに按排して行つた政治上の手腕は實に感服すべきものであります。中には青砥藤綱などいふ、名奉行も出て、北條氏の政治を補益して後世廉潔なる吏人の模範を示しました。

南北朝時代

南北朝時代といふのは、後醍醐天皇の建武中興(北條氏亡びて天皇の親政に復した時)から足利尊氏が將軍の宣下を受けて京都に幕府を開くに至るまでの間でその時期は僅かに二十年極めて短いものであります、尤も歷史上南北朝といへば京都の北朝と吉野の南朝とが相對峙して居た時期で南朝は後龜山天皇、北朝は後小松天皇に至つて兩統合一に至るまで其間五十七年となつて居ります、併し此時代は北條氏の終から足利氏の始めまで、即ち鎌倉時代と室町時代との過渡の時代であつて、其の時期は極めて短かいにも拘らず、鎌倉の滅亡、建武中興、新田、足利兩勢力の爭鬪、楠公の忠節、南北朝の合戰といふやうな、順序て短日月の間に極めて事件の多かつた時代で、日本歷史上尤も光彩あ

り、又尤も興味のある時代であります、彼の太平記といふ大部の物語は專ら此時代の戰爭討伐の有樣を書き著はしたもので日本歷史の花であります。

扨この時代は前條の如く、鎌倉の滅亡から後醍醐天皇の親政、足利尊氏の反亂、楠公の忠節、新田氏の苦戰南北朝兩派の各地の戰鬪、その間天皇の國步艱難に處し玉ひたる事柄種々なる事變が輻輳して居て、まづ一と口にいへば天下大亂の歷史であります。

それ故歷史を語る上にも鎌倉時代とは大に趣を異にして政治上の制度とか、民政の有樣とか、國民生活の狀態とか、或は美術文學の發達とかいふやうな事は槪ねこの戰亂に掩はれてその特色を見る事が出來ません即ち社會に秩序の定らなかつた一つの過渡の時代と見てよろしいのであります。併しその中に天下政權の移動が自然と歷史の上に顯はれて居るのであります、まづ北條氏の末世に當つて大覺寺派の天皇即ち前に鎌倉時代に於て述べました兩派の皇統中で大覺寺派の後醍醐天皇が御即位になつて北條氏の專權を痛く御立腹になつて、皇權回復の御志を旋らされ、遂に北條氏を亡ぼして政權を朝廷に御取還しになり、建武の親政で一時は政權が朝廷に歸しましたが、程なく足利氏の反亂から再び政權は武門に歸して天下の實權は長く室町幕府の手に歸して仕舞ひました。そこでまづ建武中興の次第から御話をいたしませう。

▲建武の中興

後醍醐天皇は日本歷代の至尊中でも取分け御志の大きい、御氣象の勝れた御方で、殊に英邁の御性質で、且つ事に當つて忍耐我慢の強い御方であつた事は歷史が明かに示して居る。治承の昔、源の賴朝が鎌倉に幕府を開いて天下の政治を沙汰するに至つてから海內の政權は全く武門の手に歸して仕舞つて、朝廷は唯國の飾りとなつて居るばかり、在れども無きが如き有樣となつてまして、承久の亂後北條氏國命を執つてからは京都の天皇は唯空しく虛器を擁するばかりであつたから、天資英邁の天皇は此有樣を御覽じて如何にも御不本意に思召して、如何にかして政權を以前の通り朝廷

に還しこ王室の規模を平安朝の昔に復したいものと御志を立てられた。當時北條氏は九代の執權高時で、この人驕慢の行多く、政治に荒んで漸く、天下の人望を失はんとして居たのを機會に朝廷の中で志のある者を集めて王權回復の御企をなされたのである。即ち當時、日野中納言資朝、同右小辨俊基などいふ有志の輩に密勅を授けて諸國の武士に遊說させられる、併し未だ北條氏の餘勢は熾んであり且つ朝廷は微力であるから誰とても應ずる者もなく、間もなくその企が洩れて二人は北條氏の爲めに捕へられ天皇は高時に迫られて位を讓られましたが、高時は承久の故例によつて天皇を遠國に遷し奉らんとしたから、遂に京都を御忍びになつて大和の笠置山へ幸になり。それからといふものは一天萬乘の身を以て風餐露宿の御難艱を遊はし、危い山坂を玉の御足に蹈みしだきて葎の宿に一夜を明し玉ひしなどの御艱みもあつて、遂には北條氏の手に捕はれ、隱岐の國へ遷され、遠島の憂目に遭されました。その間に皇子大塔宮の御忠戰、又楠正成の義兵の旗擧げ赤松則村、兒島高德の勤王などあり、大塔宮の家人村上義光の忠死、楠公の千早、赤阪の拒ぎ、いづれも歷史上花を飾られた美談、勇壯の事柄が多く此の際に顯はれた。間もなく天皇は隱岐を御遁れあツて、伯耆國へ御上陸になると名和の庄人長年が勤王の志を顯はし一族を具し兵粮を備へて天皇を船上山に奉じて、行在所を作り、近國の賊兵を防ぎました斯樣に近畿では楠正成が千早の城で關東百萬の大敵を防ぎ支へて屢々奇功を顯はし、又行在所の方では名和長年が義兵の旗擧をする。この沙汰が諸方へ傳はる、彼是するうち諸國に勤王の軍が蹶ひ起ッて北條氏に反抗するといふ有樣になり、遂には關東の名族足利新田の兩氏も亦北條氏に背いて、足利尊氏は六波羅（京都に在る鎌倉方の政務所）を攻め陷し、新田義貞は一族を率ゐて鎌倉に攻め入り、難く之を陷れて北條氏を亡ぼし、後醍醐天皇京師に御還幸になッて、玆に建武中興の業は成立つたのであります。

▲中興の失敗

斯る次第で建武の中興は後醍醐天皇の素志と、諸國勤王家の起りで鎌倉政府を亡ぼしたが。王政一統の世を見るに至らずして天下は再び武門に歸したのは、天皇の御素懐に照し如何にも惜むべき次第であります。扨て中興の業が何故に斯くも早く失敗をしたかと申すに、就てはむかしから種々歷史家の間に議論のある所ろで、大體まづ左の數個條に歸してあります。

(一)平安朝の末より王室の權威衰へて武人勢を得保元平治の頃より兵馬の權は全く源平二氏に歸して天下の武士は皆その隷屬となり、賴朝關東に幕府を開いて以來は、天下の人心源氏あるを知つて王室あるを知ざるの勢となつた、そこで建武の中興は一時唯北條氏の執權を倒したるまでにて天下武門政治を根本より倒したるにはあらず。既に根本より根を絕たざるものは再び芽を吹き出してその木の繁茂するは自然の理なり

(二)天下の武士王室を侮ること久しく實力さいあらば何時にても天下を横領し得べしとの觀念を擁かしめ、野心家の横行を制するものなき時勢となりたればなり

(三)武人が北條氏の善政に馴染むこと久しく王朝の繁文縟禮よりは質樸なる武人政治を喜ぶの致す所に出づ。

要するに封建の制既に成つて容易に動かす事の出來ない勢となつて居たから、一時勤王といふ名義の下に中興を見せたけれどもこれはほんの形式だけで精神はとつくの昔しに封建になつて居たから、今更とうする事も成らなかつたのである、建武中興の失敗は勤王家の恩賞その當を得なかつたに原因するといふ說もあるけれとも、これは皮想の見で根本は天下の大勢が武門政治に一致して居たからであると言はねばなりません。

▲建武中興の政治

北條氏全く亡んで後醍醐天皇伯耆より御歸洛になり。萬機を御親裁になり、まづ訴訟裁判を決断する爲めに決断所といふものを置き、又評定衆といふものを設けて公卿と武家とを之に任じ、且つ武者所といふものを

置き、新田の一族を之れが頭人として兵士を禁中に宿衛せしめ、地方の官を公卿と武士とに任じて守護國司となし、兵備と政務との兩方を兼ねしめ、且つ九州、陸奥の如き遠國にはそれ〳〵親王を遣はしてその地の押へとし。地方武士の間に直接に王室の勢力を植ゑるやうな方法を取ッたのである。この如く中興の業は旣に大成したやうであるけれども元來が兵事政事にかけては一向無經驗無資力な公卿が一時に跋扈して政事を執つたものであるから、賞罰その當を得ず、且つ戰爭の後人民の困難も察せず租税を重くして內裏を造營する等の事もあッて彼是れ政治の仕方が一般に甚だ亂雜を極めたから、日に〳〵人望を失ふて、天下は再び大亂にならうなどと人心洶々として安堵するに至らなかッたのであります。

▲足利尊氏の反

建武中興の政治を輔翼した發頭人は足利尊氏である、尊氏は關東源氏の名族で、北條氏執權の時代は兎も角もその旗下に從ッて居たもの丶元と源氏の統領であり且は關東諸國に在る同族の間で最も人望がありました北條氏の末に高時の命を受けて京都鎮撫へ出懸けましたが、此時旣に諸方に勤王の師が並ひ起ッて北條氏の天下も最早危いと見て取りまして、忽ち朝廷へ歸順の志を起しまして、其足で直に六波羅を攻め陷して天晴忠節を抽んじたその一戰の恩賞として武藏常陸、下總と關東三ヶ國の守護を賜はり高位高官を授け賜はつたのは單に後醍醐天皇が尊氏のみを寵幸されたのではなく、全く當時尊氏が關東武人の統領として名望勢力のあッた所から止むを得ずこの名望と勢力に酬ひて與へられた恩賞でありました。然るに尊氏の同輩に新田義貞といふのがあります、是も又源氏の名族で足利と同じく武人の重望ある家柄でありましたが、兩方の勢力が大概平均して居るだけに遂にその勢力が衝突を來す事になりました、尊氏は武人の勢力を恃んで征夷大將軍にならうとの企を起しそれが爲めに護良親王を斥ぞけやうとし、且つ關東八ヶ國の管領となッて新田氏の勢力を削らうといふ野心を起しました。（未完）

英　語　實　習

藤 生 貞 子

英和俗語俗諺の類似

Penny-wise and pound-foolish.

錢には賢く、圓には愚なり（英國俗諺）

一文惜みの百しらず（日本俗諺）

A right arm　右腕

A right hand man.　右手になる人。

日本俗語にて、"片腕"（かたうで）といひて股肱、即ち己の助けとなる友を言ふに似たり。

To pick holes.

To pick a hole in his coat.

他人の缺點をさがす。日本俗語に"穴をさがす""穴を拾ふ"といふにひとし。

A day after the fair.　緣日の後の日。

こは"後ればせ"といふ意、日本語にて"あとの祭"といふ。

Walls have ears.（英國の諺）

壁に耳あり（日本の諺）

Castles in the air.（英）

空中樓閣（日本）

空想にふけるをいふ。蜃氣樓などいふも似たり。

A little knowledge is a dangerous thing.

僅なる智識は危險なるものなり。（英）

なま兵法は大怪我のもと。（日本）

（以下次號）

熟語用法練習

ALL THE SAME.

(1) On foot or by *kuruma*, it is *all the same* to me.

歩きましても、車に乘りましても、私にはつまり同じことです。

(2) It was very fine yesterday; but I remained at home *all the same*.

昨日は餘程好い天氣でした、しかし私は、それにも拘らず家に居りました。

All the Same.........(1) 結局同一、つまり同じ事。

此場合には "all one" といふも同意なり。

(2) それにも關せず。やはり。

ALL TOLD.

There were nine books, *all told*.

書物が皆で九册ございました。

All told.........總計で、皆勘定して。

AS FAR AS

It is not the best means, *as far as* my experience goes.

私の經驗した限りでは、それは一番よいやり方ではありませぬ。

I am going *as far as* Nagasaki.

私は長崎まで參ります。

As far as——.........に至るまで、.........の程度にては。

AS GOOD AS

He could not breathe, and was *as good as* dead.

彼は息も出來なかつたです、そして死んだも同然でした。

As good as——.........と異ならず。まるで.........と同樣。

AS SOON AS.

I will go *as soon as* they come.

あの人々が來るとすぐに參りましやう。

As soon as——.........するや否や、.........の事あるや直に。(no sooner than; so soon as も同意に用ひらる)

AS WELL.

She speaks English, and French *as well*.

あのお方は英語を話し、また佛蘭西語も出來なさるのです。

As well—— また同じく、も亦た。

英文和譯練習

THE MILKMAID AND HER PAIL OF MILK.

牛乳屋の女と乳桶

——は　乳屋の女　ありましたから　よい　娘で　その上　注意深く
Dolly the Milkmaid having been a good girl, and careful
に　その　仕事　その　女主人は　やりました　この女に　一　桶を　の　新しい
in her work, her mistress gave her a pail of new
乳　の爲に　此女自ら
milk for herself.

乳屋の女ドリーは、よい娘で、その上、仕事に注意深くありましたから、その女主人は、此女(自ら)のために、新しい乳の桶一つを此女にやりました。

もち　桶を　上に　其　頭　——は　歩み行きました　快よげに
With the pail upon her head, Dolly *tripped* gaily
その　道を　へと　町　その處へ　この女は　行きました　ため
along on her way to the town, whither she was-going to
賣る　其　乳を
sell her milk.

其頭上に桶を持ちドリーは町へと其道を快よげに歩み行きましたその處へ乳を賣るため行きました。

で　此　乳　申しました　——が　私は　だらう　儲ける　一
"For this milk," said Dolly, "I shall get a
シルリングを　そして　で　それ　私は　つもりだ　買ふ　二十個　の
shilling, and with it I will buy twenty of the
卵　產みたる　私共の　近所の人の　よい　とりが　主人は
eggs laid-by our neighbor's fine fowls. The mistress
だらう　きつと　貸す　私に　一匹　牝鷄を　そして　見積て置ても　凡ての
will surely lend me a hen, and, allowing-for all
不運を　だらう　まうける　殆んど　十二匹　の　ひなを
mishaps, I shall raise a good dozen of chicks.
此等は　だらう　よく　大きくなる　迄に　次の　よい季節が
They will-be well grown before the next fair-time
再びめぐり來る　そこで　のは　だ　其時　雛　もつ
comes-around, and *it* is then *that* chickens bring
最高の　價を　だらう　得る　事を　賣る　其等を
the highest price. I shall *be able* to sell them
で　一　ギニー
for a guinea.

ドリーが申しました。「此乳で私は一シルリングを儲けるだらう、そしてそれで、私は(私共の)近所の人のよい鳥が產みたる二十個の卵を買ふつもりだ。主人はきつと私に牝鷄を一羽貸すだらう。そして凡ての不運を見積つて置ても(うまく行かないところが)、私は殆んど十二匹の雛をまうけるだらう。此等は次のよい季節が再びめぐり來る迄に、よく大きく

なるだらう、そこで雛が最高の直段をもつのは其時なのだ。自分は一ギニーで、それ等を買る事を得るだらう。

其時は　私は　ましよう　買ひ　あの　上衣　私が　見た
"Then I shall buy that jacket(that) I saw
で　村　先日　と　帽　と　リボンも
in the village *the other day*, and a hat and ribbons,
また　そして　時　私が　行く　へ　市　如何ばかり
too; and when I go to the fair, how
意氣な　私が　でしやう
smart I shall-be!

其時は私は先日、村で見たあの上衣と、帽と、リボンも亦た、買ひましやう。そして私が市へ行く時、如何ばかり意氣なでしやう！

——は　でしよう　居る　そこに　そして　でしやう　やつて來て
"Robin will be there, and will *come up*
それから　言ひ出す　事を　仲善くなる　再び　が　私は　ない積り
and offer to *be friends* again. But I won't
舊に返へら　そう　容易には　そして　時には　あの人が　たのむ　私に
come round too easily; and when he *wants* me
仲間を　に　踊　私は　つもり　かく　振る
for partner in the dance, I shall just *toss up*
私の　あたまを　をそれから
my head and———"

"ロビンはそこ(市)に居るでしよう、そしてやつて來て、それから再び仲よくなる事を言ひ出すでしやう。が、私はそう容易には舊に返らない(和睦せぬ)積り。そしてあの人が踊に仲間をたのむ時には、かく頭を振るつもり、それから…………"

そこで　——は　振りました　其　あたまを　ごく僅
Here Dolly *gave* her head *the least bit* of *a toss*
其時　落ち　桶が　そして　皆　乳は
when down-came the pail, and all the milk
こぼれました　上に　地
was-spilled upon the ground.

そこでドリーは其頭をごく僅か振りました。其時桶が地に落ち、そして乳は皆、地の上にこぼれました。

憫な　——　それは　でした　お分かれ　卵にも
Poor Dolly! it was her good-by to eggs,
雛にも　上衣にも　帽子にも　リボンにも　皆
chickens, jacket, hat, ribbons, *and all.*

あはれドリーよ、それは卵にも、雛にも上衣にも帽子にもリボンにも皆お分れでした。

(イソップ物語に在り、實物を手にいれぬ前に、空想にふけるを誡めし譬喩談なり。)

(完)

會　話

英　文　和　譯

How do you feel this morning?	今朝はおかげんは如何ですか、
Thank you, I feel much better than last night.	ありがたふ昨夜よりよほど宜うございます、
You must have a good rest.	よくおやすみにならなければなりません、
Yes I think so.	私もそうをもひます、
Who is your docter?	お醫者様はとなたですか、
Docter Satō.	ドクトル佐藤です、
Oh, he is a famous physician.	ヲーあのかたは有名なお醫者様です、
He is so kind and gentle.	あのかたわ御深切で柔和な方です
Well, I am sure you will soon get-well.	ヲーあなたわぢきよくおなりなさるとをもひます、
I hope so too.	ソーのぞんでおります、
Now, I think I better not stay long good by, take good care of your self.	サーあまり長く居つてはわるふございますからおいとまいたします、御大事になさいまし、

正　誤

前號和文英譯の始めに about cherry blossom. と云ふことをぬかせり、



小説

紅寶石

巖谷小波
高階柳蔭 合作



その四

脇坂朝彦は、戰場にわつて、比類なき手柄をして居りましたが、一日、斥候に出て多くの敵に出會ひ、奮鬪の後、馬も乘り倒し、其身も數ヶ所の手疵を受けて、到當敵の捕虜となつて、長く生死のほども知れませんでしたが、久敷つゞゐた戰爭も、和議がとゝのつて、再び平和の世となり、兩國各その捕虜を交換する事になつたので、朝彦も、本國へ送り返へされ久しぶりで、所屬の隊へ復歸したので、早速論功わつて、至大の名譽を受け、その上休暇を給はつて、古鄕へ歸つて參りました。

兩親は、死んだと思つて居た、朝彦が、歸へつて來ると云ふ、報知を得ましたので、大よろこびて、種々待受けの準備をして居りました、親子は久しぶりで無事な對面をしましたので、談しの切れ目もない位、まして母親は喜びのわまり涙をながしました。

さて、次の日、朝彦の知巳朋友を招いて、祝宴が開かれました、食事の間、朝彦を中心として、戰ばなしが

興に入つて、食事するのを忘れる位でした。

戰爭談が一仕切すんで、朝彥は、直ぐ自分の傍にゐた、藤田と云ふ判事に向ひ。

「時に、私の留守中、この近邊に何か變つた事でもありましたか」と尋ねました。判事は、

「サア、別に之と云ふ事もありませんが、一つ疑獄があります、もう大分長くかゝつて居ますが、未だに決着が付んのです、夫は寶石竊盜の嫌疑で、古谷町子と云ふ少女が捕つて居るのです」と判事は語り出しました。

町子の名を聞いた朝彥は、思はず顏色を變じましたが・判事は何の氣も付かず、その言をつゞけまして、寶石は羽仁元帥家の重寶なる事、町子がはめてをつた指輪を、和良井伯が見付た事、古井大尉の遺子と僞名をして居た事などを委敷談しまして、仕舞に、

「被告は妙齡の少女で、罪を犯す樣なものでない、至極淸らかな樣子ではあるが、何しろ有益な證據も、證人も出て來ないので、不便ではあるが、高價な貴重品竊取と云ふので近々死罪に處する筈です」と云ひました

席に居た一人は、

「死刑ですか、あゝ、可憐想に、法律の規定とは云へ、いくら貴重な品でも、金で買はれるもの、それに生命を取られると云ふのは、あゝ可憐想だ、前年、私も一度死刑の場に臨んだ事があるが、それも婦人で、百グルデン程の金をとつたのだそうで、引き出された婦人の蒼白な顏色、布で目隱をして、獄卒が容赦なく引きのばす頸筋、白く光る刀、滴る血、あゝ嫌だ、何年前の事であつたか、未だに其慘憺たる光景は、目の前に見へる樣です」と此談しを聞いた、朝彥は、最早、その坐に堪えぬ如く、ツと席を立つて、自分の書齋ときめてある室に入つた。燈もない眞暗な室を手さぐりに、一つの倚子を探りあて丶、とつかとそこに腰をおろした。そして自ら絕えられぬように身をふるはして、

「アヽ、町子孃、許して吳れ。そなたに長々そんな苦しみをさせたも、みんな私が惡いのだ。今日が日まで、少しも知らなかつた、罪も報もないそなた、さだめし私を憎いと思つてるだらう、何うか勘辨してくれ。」と朝彥は、自分の爲めに、淸らかな罪なき少女が苦みを受けて居るのを聞いて、今更後悔して切りにもだへて居りました。

朝彥の母親は、朝彥が不圖客間を出てから、いつまでたつても歸つて來ませんから、如何したかと思つて、わちこち探して、終に此室に入つて參りました。見ると、朝彥は燈もない室に、倚子に凭りかゝつて、腕ぐみをして何か考へて居る樣子ですから、持つて來たランプを机の上に置いて、吾兒の傍により、

「朝彥、お前如何かおしたか」と尋ねました、朝彥は、

「エヽ、今わんまり、いやな談しを聞いたものですから、少し心持が惡くなりまして、こゝで休息して居るのです」すると母親は、

「オヤ、左樣かイ、しかし、朝彥、お前も軍人で、しかも永らく戰場に居て、切つたり突いたりしたのを見て來たではないか、それに今の談しを聞いて、心持が惡くなると云ふのは、ちつと、阿母さんにはうけとれないねー、お前、おかくしだが、きつと、町子と云ふ、その娘を知つてお出でだらう」と云はれましたから、朝彥は、

「イヽエ、知りません」

「それでも、お前、さつき、町子と云ふ名を聞いた時に、お前の吃驚した素振、お母さんに、何も隱しだてをするには及ばないではないか、お前が、その娘を知つて居るなら、尙更、出來るだけ手を盡して、助けてや

るが能いぢやないか、事によつたら、お父さんのお力を借りたら、如何にか出來ないことはあるまいぢやないか」と、もの優しく云はれますので、そこで、朝彦も隱すことが出來ませんで、思ひ切つて、母親に向ひまして、

「阿母さん、實は、その町子に、指輪を遣りましたは私なんで、それから、寶石を他の石と換へたのも、みんな、私のしたことです」

「エッ、あの叔父さんの、大切な寶石を取り換へたのも、朝彦、お前かい、……まあ、大變な事をしておくれだねー、」と母親は吃驚しまして、そこの長倚子に仆れかゝつて、坐るともなく、腰をかけて、そして、少時無言で途息をついて居りました。朝彦は、母に向つて、

「阿母さん、私は全然お話しをしますが、一體世間の人は、私のした事を惡いと云ひませうが、私は、私は決して、惡いつもりでしたのではないのです、まづ、その寶石の事からお話しを致しませう」と朝彦は、次の如く母親に語りました。

彿仁元帥が、まだ都にあつた頃で、朝彦は始終、元帥の家に行つて居つたが、元帥も、取る年で、近々自分の領地へ引き込むと云ふ評判がありました、その頃、佛蘭西人の玉家がありまして、諸家へ出入をして居ましたが、或る時朝彦を訪ねて參りまして、さて、露國の貴族から、最上等の紅寶石を注文されて居るが、その注文に合ふ樣な紅寶石が見當らないので困つて居るので、先年元帥の紅寶石を見て、お讓りにならないかと、云ひました時には、元帥が、われはまだいけん、己の最名譽の勳章につけてあるので、己が大禮服を着る間は、假令何程、金を積まれても、讓ることは出來んと仰つた事がありますが、承れば、元帥も近日御退隱なさるさうですが、その紅寶石は如何かなりませんか、代金は五千グルデンで引取らして頂戴したいと申し入れまし

た、朝彦は之を聞きましたが、叔父元帥は軍人氣質で、五千グルデンは莫大の金にしろ、家に傳はる、しかも、名譽の勳章にはめてわる寶石を、手放すことは、よしんば話しをした處が、叱られる位の事でわるから、孰れその中に話しをして見ようと云ひまして、玉家を歸しました。玉家はそれから二三べん、催促に來ましたが、朝彦は面倒だから、毎時もいゝ加減にして居りました。それから、元帥は、とうとう領地へ隱退して了ひ、朝彦は、相變らず、暇さへあれば、ハインブル城へ行つて居つた。さうかうするうち、今度の戰爭になり、叔父と一所に都へ行くことになつた前日に、元帥から、寶石や其他の貴重品の入つてわる箱を依托されて、森の中へ隱しに行つたのです。其時に、朝彦は、ふと思ひますには、この貴重な品ものを、森の中に隱して置くのだが、實に勿體ない事だ。戰爭は何時まで續くか分らず。さすれば、一族の中にも困難する者も出來るだらうし、領民どもは無論のこと、それ等を救助する手當の必要は無論の事だ。それに第一、番人も付いて居ない森の中、萬一他人に取られたら仕樣がない、叔父は、平時から、自分を相續人として居るのだから、その相續人がするのだから決して惡い事ではない。まして、衆人の爲めにする事なら、非難をうけることはなからうと、自分で了簡して、箱の中から勳章を取り出して置いて、わとのものは、云ひ付けられた樣に始末をして、それから叔父元帥と一所に都へ上りました。

都へ着いて、早速、その玉家の樣子を聞くと、まだその旅館に居りましたので、すみやかに、談しが纏つて、寶石のわとには、普通の紅寶石をはめこんで、朝彦は、玉家から、約束の金額を受けとりました。そして、其金は、都の確實なる銀行に預けまして、爾來、利に利が加はつて、殖へるばかりで、大きな金高になりました。母親は、こゝまで聞きまして、

「お前、まわ、叔父さんに相談もせずに、よくそんな大膽な事をしましたねー、しかし、お前が何も他人樣の

ものを取つたと云ふのではなし、叔父さんから讓られてゐると仝前の物だから、そして、町子に、おやりの指輪といふのも、その時一所に出したのかい」

「イヽエ、それは、少しあとのことです。私が一番仕舞に、ハイプルヒ城に居た時です、度々銃獵に出かけましたが、森林監督の家で二三度、出逢つた娘がゐるのです、それは、叔父さんのお氣に入りの、老獵夫、古谷良三の娘なのです、そのあどけない無邪氣な、しかも利發で而して、美しいことゝ云つたら、都の淑女のうちにも、恐らくは、匹儔がない位で、つまり飾つてゐる石と、飾らない玉見たようなものですから、不圖私は愛する氣になりました。その翌日でした、丁度、古谷と獵場で、一所になつたものですから、種々談話の末、娘のことを褒めて、如何かあんな娘を妻にほしいと、それとはなしに古谷に、ほのめかしましたところ、古谷は大不賛成で、一体貴族の若さんなんかと云ふものは、一寸奇麗な娘を見ると、小兒が玩具を欲しがる樣に、やれ欲しい、それ欲しいと、騷ぎたてるが、私はそんなものは大嫌です、第一田舍育の素朴なものと、都育の浮薄な者と合ふ譯がありません、丁度鶻鷹が鳩を覗ふ樣なもので、私は、そんな鷹は一發のもとに仕留てやりたい位です、ですから春秋銃獵の時分には、お城へ御機嫌伺ひにもやらない樣にして居ます、と一酷者の古谷は私を睨みつけて、私に自分の家には來て呉れるなと、云はぬばかりでした、私は古谷の言に失望しましたが、城へ歸つてからも、何うも詮がつきません、もう一度町子に會つて見たいと思ひまして、其次の日、古谷は、叔父さんの用で、外へ行つたを知らぬふりして、森の中の家を訪れました。町子は家に居りましたが、かねて父から云ひ付けられてゐると見えて、近く出て來ませんでしたが、私は、何時もお父さんが迎ひに來て呉れるのに、今日は見えないから、誘ひに來たと云ひました。それから話しの口がけて、二言三言はなしましたが、私が貴族であることを知らしてはならないと思ひましたから、私は

商人の息子であると僞つて、結婚を云ひ込みました。しかし彼は、父の許諾を受けなければならず、それに父が歸ると困るから、今日は一と先歸つて呉れ、いづれよく考へて返事をするからと云ふので、倘念を推して歸りました』母親は、朝彦の言を遮りまして、

『お前、まあ、その娘に結婚を云ひ込んだのかい、貴族の後繼者ともあらうものが、獵夫風情の娘に、まあ、飛んでもないことをしたものです、指輪を取り出したより、此ことの方が、余程惡いぢやないか』

朝彦は、『まあ、阿母さん、そのあとを聞いて下さい』と下のごとく話しつゞけました。

それから、其次の日、都から、戰の使が來て、叔父と一所に都へ行きました。戰地へ行つてから、或時、朝彦の聯隊は、糧食運輸の任務を受けまして、或地方へ出發しましたが、その時、丁度、ハインブルヒ城の近傍を通過して、そこへ兩三日滯在することになつたのです。ハインブルヒ城には叔父は居らず、行つても仕方がないが、例の勳章を原の如く箱の中に入れておくには屈强の時と思ひまして、隊長には、此近傍の獵の友を訪問ると云つて、少時の暇をもらひまして、單騎森の中へ行きました。朝彦の心中には、最う一つ町子に逢ひたいと云ふ大切な用向があつたのです、勳章は人知れず原の箱の中に入れましたが、その時一個の指輪が見當りました、丁度町子に能い土産と思ひまして、懐中におさめ、あとを以前のとほりにして、古谷の家を指して出懸けましたが、途中で知つた人に出會ひまして、良三が在宿のよしを聞き、訪ねたくも、あの恐ろしい、一酷な親父が居ると聞いては、訪ねて行く勇氣も出ず、そのうち時間もたつので、殘念ながら又のことゝして隊へ歸りました。それから糧食運輸の任務をすましまして、一月ほどしてから、もとの道を歸つて參りましたが、今度も仝じところで舍營することになりまして、しかも二週間ほど滯在する命令がありました。朝彦は一日、暇を得て町子を訪ねましたが、丁度家に居まして、お父さんはと尋ねますと、町子は涙ながら、父は先達元帥か

ら使が來て、都へ上り、歸つてから、ふと病氣になつて、四五日前に死んだ由を、語りました、見れば成程、喪服を着て居ります、朝彥は、種々言ひ慰めて、さて、段々と聞きますと、別に親しい親族もなく、叔父はありますが、これも遠い處に居るさうなので、まことに便りないものですから、朝彥は愈不便に思ひまして、兎も角も、こんな淋しい森の中に居られるものぢやない、私の心易い極信切な老人があるから、暫時そこへ行つて居つて、それから引きとる事にしようと、共々手傳つて森の中の家を引き拂ふことになりました。

町子を預けようと云ふ老人は、丹野と云ふ、軍人出で壯年の頃には、武勇の名を得た者でして、羽仁元帥の部下にあつて、信任されて居た者でしたが、年老いてから軍籍を退きましたが、義俠の心強く、元帥の城へは絕えず出入をして居りました。朝彥も度々會つたり、また叔父からも談しを聞いて居りましたから、その人を思ひ出しまして、町子の事を打ち明けまして、保護を賴みました。老人は快よく承諾をして吳れましたので朝彥は大に喜び別れ際に、あの指輪を許嫁のしるしに、町子に與へまして、私は、その指輪に彫つてある通り脇田朝次郞と云ふライプチの商人の息子であるが、今軍人として、戰場へ行かねばならぬが、戰爭がすんだら直ぐ迎ひに來るから、それまでは淋しくも待つて居てくれいと。呉々も丹野老人に賴んで出發しました。

その後、丹野老人から、報知がありまして、自分の居る近村に、百合谷大佐の未亡人が戰亂をさけて、別莊に來て居るが、非常に慈悲深い人であるから、自分も取る年であり、且つは、町子孃の敎育しつけ等には、老人では仕樣がないから、百合谷未亡人に托することにした。それに、未亡人は軍人の遺子寡婦は殊更、よく世話をして吳れると云ふ事であるから、町子に云ひ含めて、古井大尉の遺子のつもりにして、未亡人の家へおくつた處、非常に氣に入つて、娘の樣にして萬端世話を受けて居るとの事でありました。それから後は、戰爭に紛れて何とも樣子を聞かず、今夜藤田判事の談しで、かの指輪のことから、町子が、思はぬ苦しみをして居る

の聞いて、朝彦の心中は、かきむしられる樣であるのでした。母親は一部始終を聞きまして、

「まあ、さうか。ほんとに可憐想な、何うか助け樣がありませんか」朝彦は、決然としまして、

「エヽ、私が自首して出て、町子を助けてやります」

「まあ、お待ち、それなら一應、お父さんともよく御相談をしてからにおし」と母親は、父親を連れて參りまして、一部始終を談しました。父親は、怒つて見ても仕方がないものですから、やゝ暫時考へて居りましたが

「自首して出るのが潔くつて能いが、しかし、これが、他人のものをとつたと云ふのではなしするから、一應、叔父の處へ行つて、顚末を話してお詫をして、叔父さんから、告訴の取り下げをしてもらつたら、一番能からう、判事の方へは、私からも依頼してやるから、明日、早速、ハインブルヒ城へ行つて、叔父さんにお詫をするがいゝ、私等も共々行つて、言をそへてやるから」母親も

「それが宜敷う御座いませう、その娘も可憐想に、永いあいだ、牢獄の苦しみ、定めしつらいことであらう。しかし、許嫁をしたことは、あとのことゝして、兎も角も、明日は早くから、叔父さんの處へ行くことにしませう」とこゝで、相談がきまりました。

さて、朝彦は、父母に連れられまして進まぬながらも、老元帥の居城、ハインブルヒへ參りました。元帥は久しぶりで、氣に入りの朝彦が、戰功によつて官位も進み、胸には數ある勳章をかけて、立派な軍人になりましたのを、見まして、非常な喜悦でありました。

朝彦は、叔父元帥のつねにまして、機嫌の能いのを見まして、いつもながら叔父の慈愛に感じましたが、さて、自分が、今日參りました用向を考へますれば、折角この能い機嫌を損ずることかと、思ひまして、暫時躊

暗して居りました。そこへ、朝彥の兩親は入つて參りまして、まづ挨拶がすんで

「さて、兄上、あなたに對し、まことに面目次第もないことですが、朝彥が」と前回に述べました、朝彥が、兩親に自白しました事がらを一部始終、元帥に談しました。

朝彥は、元帥が武人の一徹で、定めし激しく怒つて、非常な小言をうけること丶、覺悟をして居りましたが、案に相違して、元帥は、談しを聞き了りまして、毫も怒る氣色なく、

「さうか、代々家に傳はる寶石だから、惜しいと云へば、惜しいやうなもの丶、しかし戰爭で人民も疲弊して居るから、それらがその金でたすかつたなら、かへつて寶石は能い役に立つたのさ、どうせ私の身代はみんな朝彥にやる物だから、朝彥が爲た事なら、ちつとも氣にするには及ばんことぢや。」

朝彥の母は、

「ですが、兄さん、もう一つの指輪のこと、仕樣がないぢやありませんか、それを、町子とか云ふ、女にやつて、それと許嫁をしたさうですつて、その女は、兄さんの御領內の古谷と云ふ者の娘ですと」と朝彥の母親は、この許嫁に不服の樣でありました。之を聞いた元帥は、

「ナニッ、古谷、あの古谷良三の娘の町子、あれは能い娘ぢや。あれなら貴族の嫁としても、恥しうない。亡妻は非常に可愛がつて、町子と云ふ名も、亡妻がやつた名ぢや、それに笑子の友達で、品の能い、出來の能い娘ぢや、朝彥の嫁には適當なものぢや」と元帥が、切りに賞めますので、朝彥の兩親は烟にまかれて了ひました。

元帥は、朝彥に向ひまして、

「さう事が解れば、彼處の市長も典獄も署長も、皆私は心易いから、私の手紙を持つて、早く町子を、放免し

て貰つて來るが能い。今から直ぐに、厩から良い馬を出して急いで行つてやれ、御兩親は、おとから馬車でお送するから』

元帥は、急いで告訴の取り下げ狀や、手紙を認めまして、朝彥に渡しました。朝彥は、その中に支度の出來た馬に乘つて、町子の囚はれて居る、市會議場をさして、飛ぶが如く馳せ行きました。

その五

昨日とすぎ、今日と暮して町子孃は、はや一年を會議處の二階におくりました。初めはたゞ、麻の如く亂れ亂れた心の苦しみも、神を信ずるの念深きが故に、おのづから安らかになつて、今は、たゞ何となく、ふく風も、なく鳥も神の御心からわが身に與へたまふ福音と聞えるのです。

今日しも町子は、朝から、糸を績いでをりました。車の音は、極めて無趣味にきこえる筈だのに、今日はまた、どうしたのか、いつもよりは、何だか心うれしい。

『はて、今日は、どうしたのか、一しほ心が爽快だ』と思はず。町子は、ほゝ笑ましたが、『あゝ、かう胸の中が安らかに、一年の間、少しも慰めてくれる人がないのに、まだ無事で、かうやつてゐるは、ほんとうに神樣のおかげだよ』と獨言をいひながら、又も糸を卷んとする途端、戶外に人の足音がきこえて來る。

『はて、誰か來たのかしら』と糸卷を下に置く此時はやし、扉を開いて、這入つて來た一人の紳士は、

『町子』といふなり、近づいた。見るなり、

『ハッ』と町子孃。

『あなた』と飛ついて、淚も、とみには出ず。たゞ夢の樣でありま す

『町子。ゆるしてくれ。全く。私が惡かつた。よく、無事で』と朝彦も、おろ〳〵聲であります、
『神樣、神樣ありがたう御座います』
と町子は、たゞひたすらに、神に謝しました。
朝彦も、共々に、神に謝して、さてまづいふ事には、
『私が一時名を僞つた爲に、お前に、此樣な長き苦勞をかけたのだよ』とこれから、町子の父が、貴族が嫌いである事から、商人と僞つて、脇田朝次郎と云つた事、全く、自分は、脇坂朝彦と云ふ貴族であることを明しました。
此間、町子は、たゞ泣くばかりです。温き手はふるへて、其身は、朝彦にまかせてをります。
さうかうする中、再び扉があく、入り來つたは、朝彦の兩親で、
『町子孃。今日から、お前の親だ』とこれも涙です。町子は、
『ハイ。夢の樣でございます。神樣ありがたう存じます』といつて、兩親の前へひれふしました。
更に又扉があく。此時、典獄が這入つて來て、
『私は、みなさんの祝福を賀します。長き月日の間、偏に神を信じて、此一室に閉ぢられたる町子孃の忍耐を賞すると共に、今日の此慶事は、當然の事とはいひながら、實に世界の喜びを集めた物と思ひます。あらためて、此處に、町子孃に、無罪の宣告を與へます』といつて、一笑しました。
一室に春風ふきみちて、人の喜の花は、こゝに開きました。その中に迎のものは、馬車の用意が出來た、といふので、皆々下へ行きました。
飾りたてられた美しき馬車へは、朝彦夫妻、これに、典獄が乘つて、あとからは嬉しげに老夫妻が馬車をか

りました。

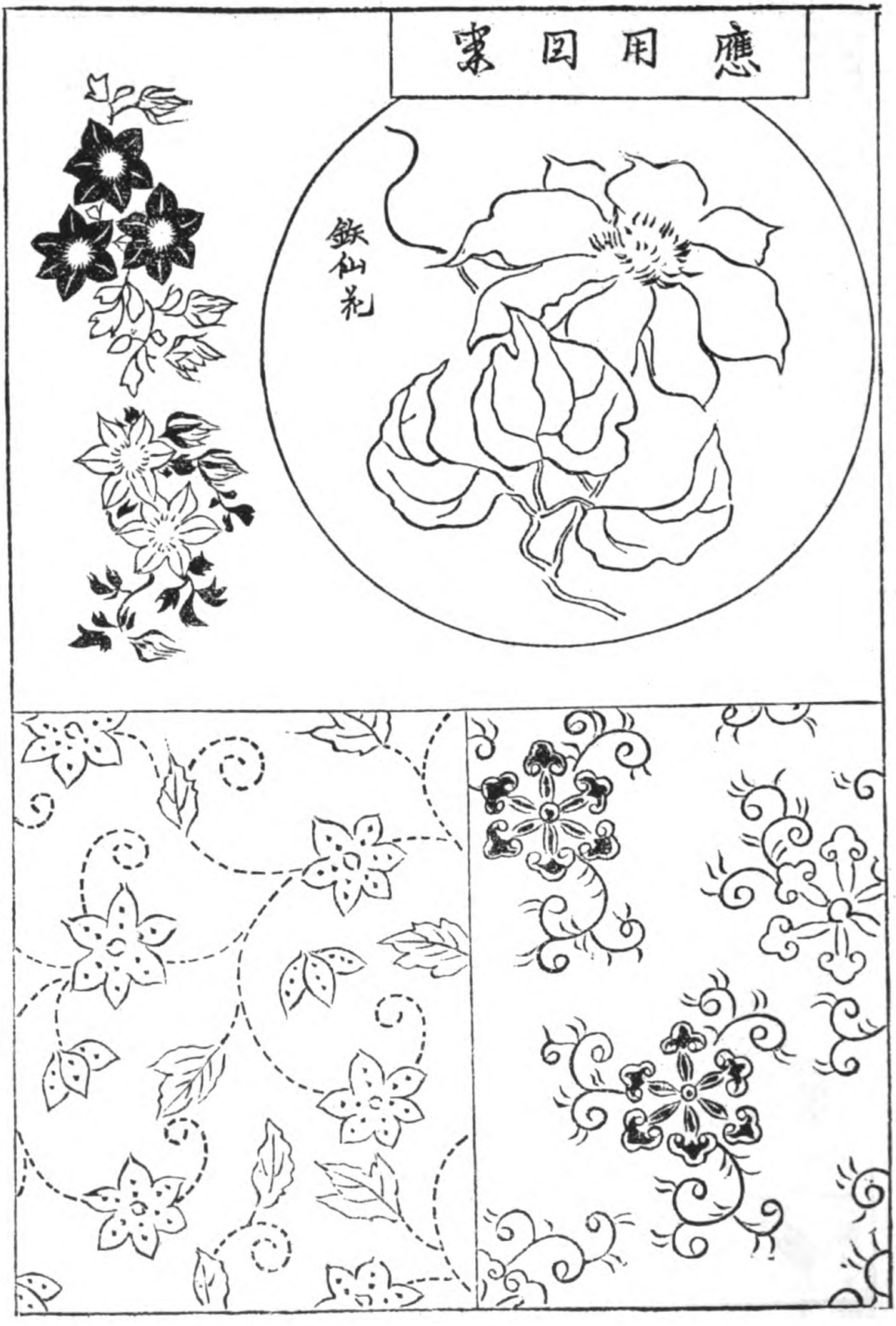
市人は實に大なる驚きと大なる喜びに、狂せんばかり、曾て此市に咲き匂ふ一枝の薔薇とまで賞へられた、天女の如き町子嬢は、わられもなき汚名を受て、一室に閉ぢられたと云ふのは、實に、此市の人々のすべてが憂の種となつてをつたのです。しかも、或は死刑になるかも知れぬといふ噂が市人の耳に、忌はしくひゞいてゐた時しも、今此美くしき馬車に、美くしき若紳士と同乗して、殊に、其人を罪せんとする典獄が、尊敬の意を表して陪乗してゐるのですもの、市人は馬車をとりまいて、拍手の聲はしばし止みませんでした。

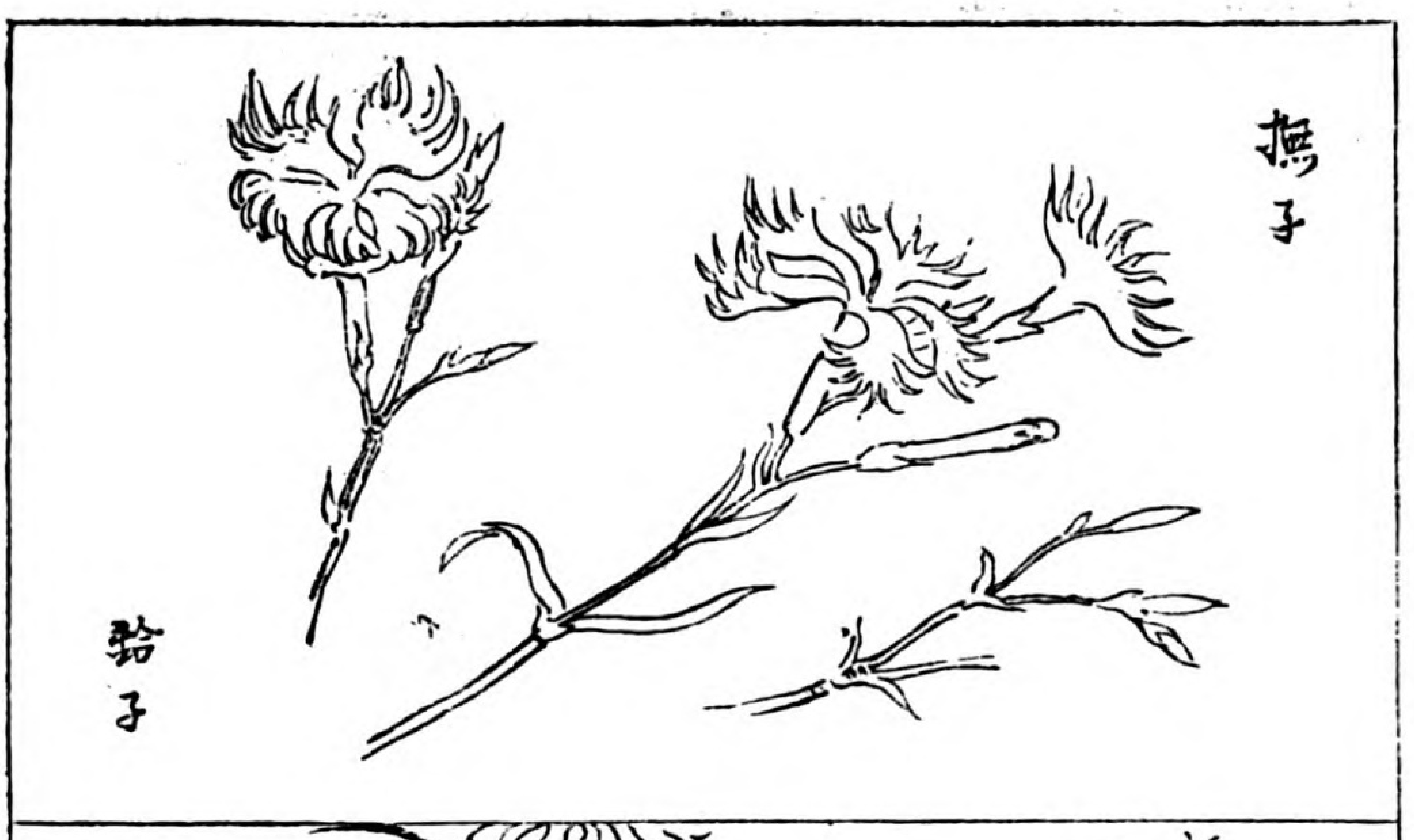
『町子嬢万歳』
『新夫婦万歳』
の聲を後に、二輛の馬車は、百合谷家の邸に着きました。百合谷未亡人の喜びは、いふ迄もありません。わが子の生き返つた樣に、町子嬢の手をとつて泣きました、其憂は、忽ちに、此喜ばしき結婚を生んだといふ事について、百合谷未亡人は。
『私も、十年若くなりました』といつて、喜びました。

これから、うちつれて、元帥の城へ馬車をかりました。待ちかまへたる元帥は、まづ徐に、神に謝して、やがて、町子に
『わしは、お前が、再び此世に出て來てくれたことを、神に謝す』と云つて、流石の元帥も、嬉し涙を流しました。

善は急げで、いよ／＼其日公然たる結婚の式をあげる事になりました。元帥は。
『老後の晴れだ、おれも、元帥の大禮服を着やう』と従者に命じ、大禮服を取り出させ、きらびやかなる服を

着けました。従者は、
『閣下には、勳章を御佩用になりませんか』といふと、元帥は、少し、すまぬ顔付で、
『イヤ、今日の喜びに、あの勳章を出すと、又朝彦がした事を、思ひうかべて、おれの心の興味をそぐから、止さう』と云ひながら、立うとするのを、従者はとめて、
『閣下、今日は、大禮で御座います、どうか、勳章は是非御佩用を』といふので、元帥は少し考へて、
『さうぢや。寶石は寶石として、勳章は君賜の御物だ。佩用しやう』とこれから、其箱を持つて來させ、取り出したのは、金光燦爛たる大勳章、其中央に眼を射るばかりにかゞやける、稀代の紅寶石。
『アッ、コリャ』と思はず、元帥は、勳章をとりわけ見れば、こはそも、兼て紛失したと思つた。かの傳家の寶石であるのです。
『こ、こりや』と元帥は、とみに言も出ません。従者は恭しく。
『定めし。御驚きでも御座いませう。その寶石は、朝彦様が買ひもとして、御はめになつたので御座います。玉屋が一旦露國の貴族とかへ、賣りましたのが、又拂ひものに出て居りましたので、御買ひもとしになつたので御座います、御前、御目出度、存じます』
元帥は、これを胸間にきらめかして、式場へ出で、一座をずらりと見廻して、満面に笑をたゝへながら
『朝彦は、私に、最后の紀念の喜びを與へてくれました。』
一座は暫時、喜びの聲に満されて、をりました。（了）


應用圖案
鉄仙花


撫子
鈴子





雜録

近世事始

石井研堂

(一) 演説の始

今日盛に行はるゝ演説會といふものは、西洋の文化を輸入したるに起れるものなり。

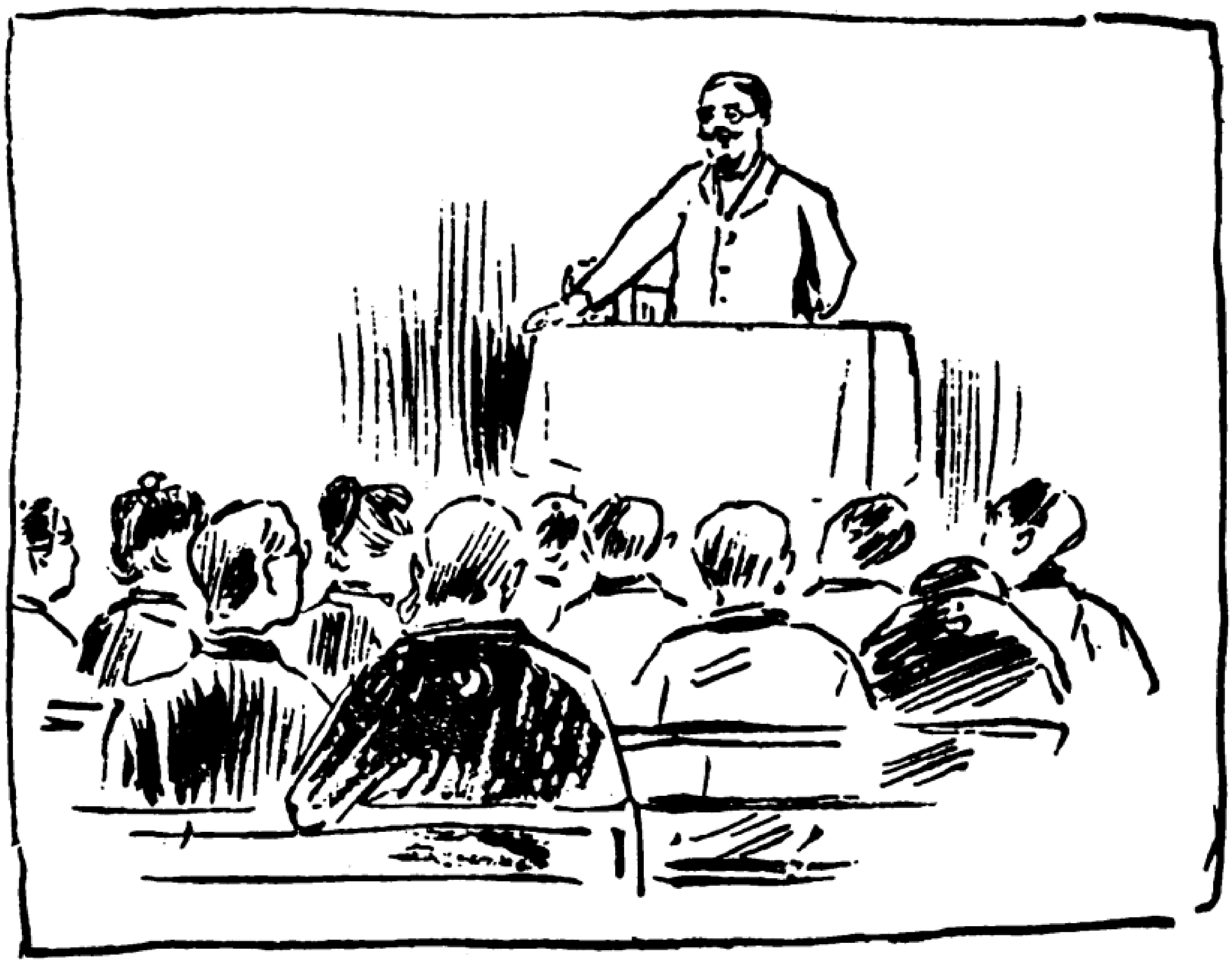
福澤全集緒言會議辨の部に云く、扨その飜譯に當り、第一番に、原語のスピーチュに當るべき譯字を得ず此時不圖思ひつきたるは、余が舊藩中津にて、藩士が一身上のことにつき、願にも屆にも非ざる一種の演舌書といふを呈出することあり、他藩には其例の有無を知らざれども、演舌の文字は、中津藩にて慥に記臆するがゆゑに、夫れより社友と謀り、舌の字は餘り俗なり、同音の説の字に改めんとて、演説の二字を得て、スピーチュの原語を譯したり、其他、デベードは討論と譯し、可決否決等の文字は、甚だ容易なりしが、原書中にセカンドの字を見て、之を贊成と譯することを知らずして、頗る窮したるは、今に記臆する所なり、云々。

夫れ是れ文字も略定まりて、譯書は印刷に附し、社友相共に此新事業を研究して、窃に實地に試み、或は拙宅の二階に集り、又は社友の私宅に會席を設くる等、熱心怠ることなく、明治六年より、翌七年の半に至りては、聊か熟練したるが如し。明治七年六月七日、肥田昭作氏の宅にて、余の演説したるは、口に辨ずる通りに、豫め書に綴り、假に活字印刷に附して、是を其まゝ述べんことを試みたるものにして、今日 幸に其活版の遺るものあれば、是を左に記すと

演說の効用等を、言文一致に物せる摺物あり、これ泰西風の演說の始なるべし。

其後明治九年の秋、福地源一郎沼間守一の二氏、下谷摩利支天の社内に講席を開き、佛律を講せしを公開演說の始とす。傍聽料は五拾錢なりき。

同十年の夏の頃、福澤氏、京橋鎗屋町に講談會といふを設けたるは全の寄席に同じく、木戸を置て、聽客より席費を收めたり。是より今の演說會の體裁とはなれるなり同年の冬に至り、松林伯圓など、其風を學びて講談するありしが、是は一時のことにて直ちに止みき其翌十一年の頃より、井生村樓の演說會始り、加藤弘之、福澤諭吉、中村正直、福地源一郎、江木諸遠外山正一等の諸



氏出て演說せり。爾來年ましに盛になり、遂に今日の大流行とはなれるなり。

(二) 華族の商業の始。

分厘の利を爭ふは、商人風情のことにして、縉紳は、錢貨を手にするさへ耻とせし舊弊も、明治の維新と共に革新せられたり。明治五年四月版新聞輯錄廿四號に、

商業開店屆

三男　中山信七郎

右者此度第六區小三區深川東平野町七番地へ移轉、材木商業致爲開店依之此段御屆申上候、

以上。

明治五年四月日

從五位　中山信徵

第三小大區戶長宛

の記事を見るなどは、この先鋒なるべきか。

開業式に酸漿提燈の始。

明治五年九月十二日、新橋橫濱間の鐵道開行式を行ふ夜に入り、鐵道館濱離宮等に、紅燈を以て、鐵道開行式の五字を摸出す。一字の大さ四間に三間ばかり。又四周の柵門館軒等に、疊々陳列し、又は高竿に連掲すること、夜をして晝ならしめ、實に剖判以來の奇觀なりと、日要新聞四十五號に見えたり。これ今日賣出し等に、紅燈を掲ぐる起原なるべし。

(三) 感化院の始。

無賴の少年を收容して、感化薫陶するもの、維新前にも在りしことあれども、今其詳なることを知りがたし。感化院といふ名にて設立せるものは、明治十四年九月、阪部寔、加藤九郎二氏が出願し、許可を得て本所區林町三丁目に設立せるに始れり。後ち十八年中出獄者高瀬眞卿の首唱にて、東京感化院を開けり。

(四) ウエブスター字書輸入の始。

萬延元年、わが軍艦咸臨丸、大使を載せて米國に渡る其歸るに及び、通譯福澤諭吉中濱萬次郎、各ウエブスター字書を購入して歸る。(福翁自傳)これ、本邦に、同字書の輸入されたる鼻祖なるべきか。

(五) 化學實驗天覽の始。

化學は、原語にて舍密學と稱し、安政元年ころ、長崎にて洋人に就て研究せるものは多かりし。こゝに記すは、天覽の榮を荷ひたるの始なり
日要新聞二十號に、明治五年四月、天皇東校に行幸あらせられし節、三崎文部少教授、直垂に襷をかけ、化學の試驗を做し、天覽に供へ、傍ら其理を講說すとあるこれなり。

(六) 洋畫モデルの始。

畫家が、人を雇ひ入れて之を寫生することは、明治七八年頃、工部大學に美術課をおき、西洋畫科を加へし時に始れり。當時は、裸體畫は稀にして、多くは着衣の姿、若しくは顔面のみを寫生したるに過ぎざりし。明治十年の博覽會に、同校生徒の出品せる洋畫の內、一人の男、袴を穿ちて片膝をつき、弓を滿月に引き絞りて、的を狙へる有樣を描きたるは、是れ正しくモデ

ルに據りしものなりしといふ。其後、洋畫は、一旦すたれて、モデルのことも餘り盛んならざりしが、二十九年九月、東京美術學校に洋畫科をおきてより、絶えずモデルを使用するやうになり、モデルの周旋業さへ出來るに至れり。

（七）漢字廢止論の始。

抑も、羅馬字を以て、我邦の文章を綴らんといへる説は、明治六年の比、廢漢字論と同時に起りたる説にて正しく明六雜誌にて見たる樣に覺ゆ。然るに其後、廢漢字論は立消となりたるにより、羅馬字令も亦迹形なくなり居たるを、近年かなのくわい起り、やんごとなき御方も、御賛成になりたるより、羅馬字論の古物も死灰又燃え、其會を設立することゝはなれりと、明治十八年六月三十日の朝野に見ゆ。

（八）寫眞術の始。

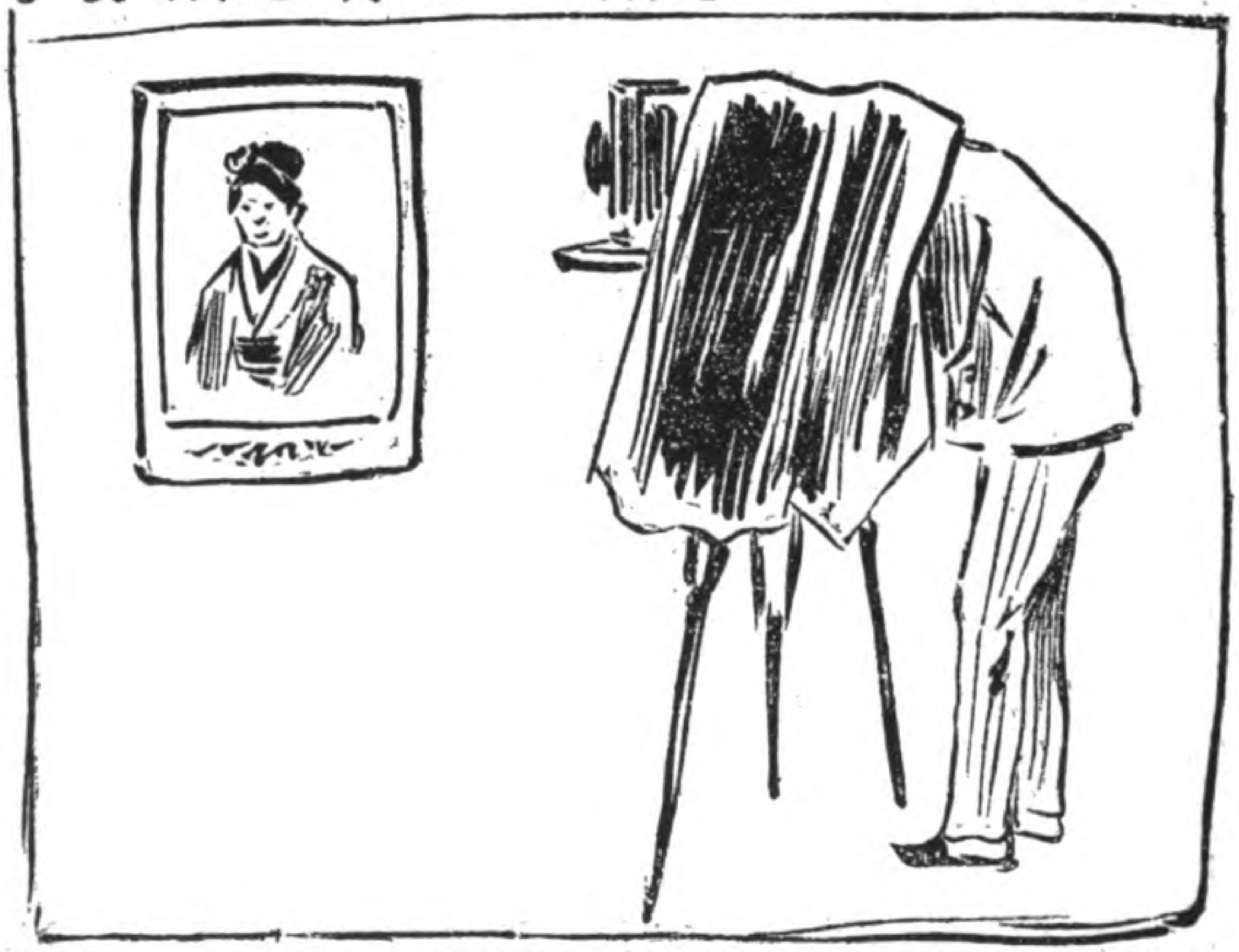
萬延元年に、わが國使に從ひて、米國に渡りたりし、中濱萬次郎氏（今の中濱醫學博士の父）、歸朝に臨みて寫眞機械と、裁縫機械とを買ひ來れり。歸朝後、この機械にて撮影の娯みせしが、當時、硝子とりの、感光面を裡にして見ることを知らず、之を表にして觀たりしかば、實物とは、左右反對の寫眞を得ることとなりし。よりて、撮影する時は、豫め、着衣を左前にし、脇差を右の腰に差して寫したり。その寫眞は、近年まで家に傳へたるが、右にいふ如く、常に感光面を上に向けて、露はになし居ければ、摩擦損傷の爲めに、見えざる程になれりと、中濱博士の語るを聞けり。これ等は、本邦寫眞術中の最も先鞭者ならんも、其系統を受けて大成したるものもなければ、惜いかな、元祖の榮を分つこと能はざるなり。

本邦の寫眞術は、長崎の上野彦馬、横濱の下岡蓮杖二氏の刻苦精研によりて、其端を開き、東西同時に輸入されたるが如し。

上野氏は、長崎にて砲術研究中、化學の書中に、寫眞の記事あるを發見し、同志堀江鍬次郎氏と非常の苦辛を重ね、双眼鏡のれんすを器械に充用して試驗することを得、後ち、文久元年、堀江氏と江戸に下れる時は

藤堂侯の望みにより、諸侯及び旗下の士の來客ある毎に、中奥に於て撮影するを常としたりといふ。而して長崎に歸り、自邸に一室を構へて寫眞業を開きしは、文久二年十一月某日なりといふ。

下岡蓮杖氏は、もと狩野派の畵工なりしが、安政六年後、橫濱なる米國商人ショーヤの家に寄寓し、日本の風景風俗畵等を畵くを事とし居けるが、この商人の家に寄留せるウンシンといふ宣敎師あり、同國人ラウダ女史、この宣敎師につきて寫眞術を受けたれば、下岡氏は、この女史につきて其秘法を受くるを得、ウンシンの歸國に際し、其の器械藥品等一切を讓り受け、凡そ半年程研究せしが、間もなくラウダ女史も歸國し、すでに調合されたる藥品は漸く使ひ切り、自ら調合せざるを得ざることゝなりしも、其割合を詳に習ひおかざりしを以て、五里霧中に陷りたり。



其後戸部に家して、一向藥液の調合、試寫等に從事せしが、得る所は借金のみにて、其額二百五十兩に上り、進退全く窮りしが、幸にして一枚の完全なるものを得しかば、これより又勇を鼓し、漸く一家を成すを得て、野毛に移りて寫眞場を開き、次で辨天通りに移り其門人にして江戸に開業せしもの亦各一家を成せり。

(九) 敎育幻燈の始。

我國に、古くより、寫し繪と稱し影繪と稱して、今日所謂幻燈同種のものはありしも、其製作粗にして、且つ其使用の目的の範圍も甚だ狹少なりし。

今日所謂教育幻燈の、本邦に輸入されたる始は、明治六年に、文部省の手島精一氏が、米國より歸朝するに際し、齎らしたるにあり。當時の映畫は、實に左の七十枚なりし。

天文　十七枚　自然現象十二枚　人身解剖二十枚
動物　二十一枚

十三年に至り、文部省にては、各府縣師範學校へ、奬勵品といふ名にて、之を頒布せんとて、當時、寫眞業者中、理化學の一端を解する鶴淵初藏中島待乳の兩人に謀り、其の模造を試ましめたり。兩人は、幾回の失敗を重ね、漸く成功して初めて上納せしは、同年八月(？)のことなりとす。

これより、文部省の命ある毎に、兩人にて製造上納し十六年、文部の經費缺乏にて、其事寢めり。この製造は、もと官用なるが上、一枚の價一圓位にて、市上の賣品に適せず、府下又は近地の學校より、拜借願ある時は、文部省より貸出しを諾する程のことなりし。

すでに、文部の依托製造止みし上は、如何にもして之を民間に普及せしめんと、鶴淵氏は、各所に幻燈會を開き、化學の實驗等を加へて興味を添へ、或は地方の教育會に出張して、其效能を目撃せしむることに勉めしが、其價高きがめ、購求者を得る能はず、幾多の資本と勞力を費せしが、明治十九年の八月に、福島縣白川郡役所より、一組の注文を受けて輸送せしは、民間にて、洋式幻燈を賣買せし始なるべしといふ。

(十)人力車の始。

人力車は、和泉要助(東京宿屋町住)の發明にて、明治三年三月十七日に出願し、同月廿二日に許可を得たるを始めとす。

和泉要助は、この出願を爲すに際し、獨力にては、萬事不便なるべきを思ひ、本銀町一町目高山幸助、呉服町(八百屋業)鈴木德次郎と、三人連署にて出願し、許可後は、三人共、新規營業者ある毎に、取締の名にて、發明權使用料を收めたり。

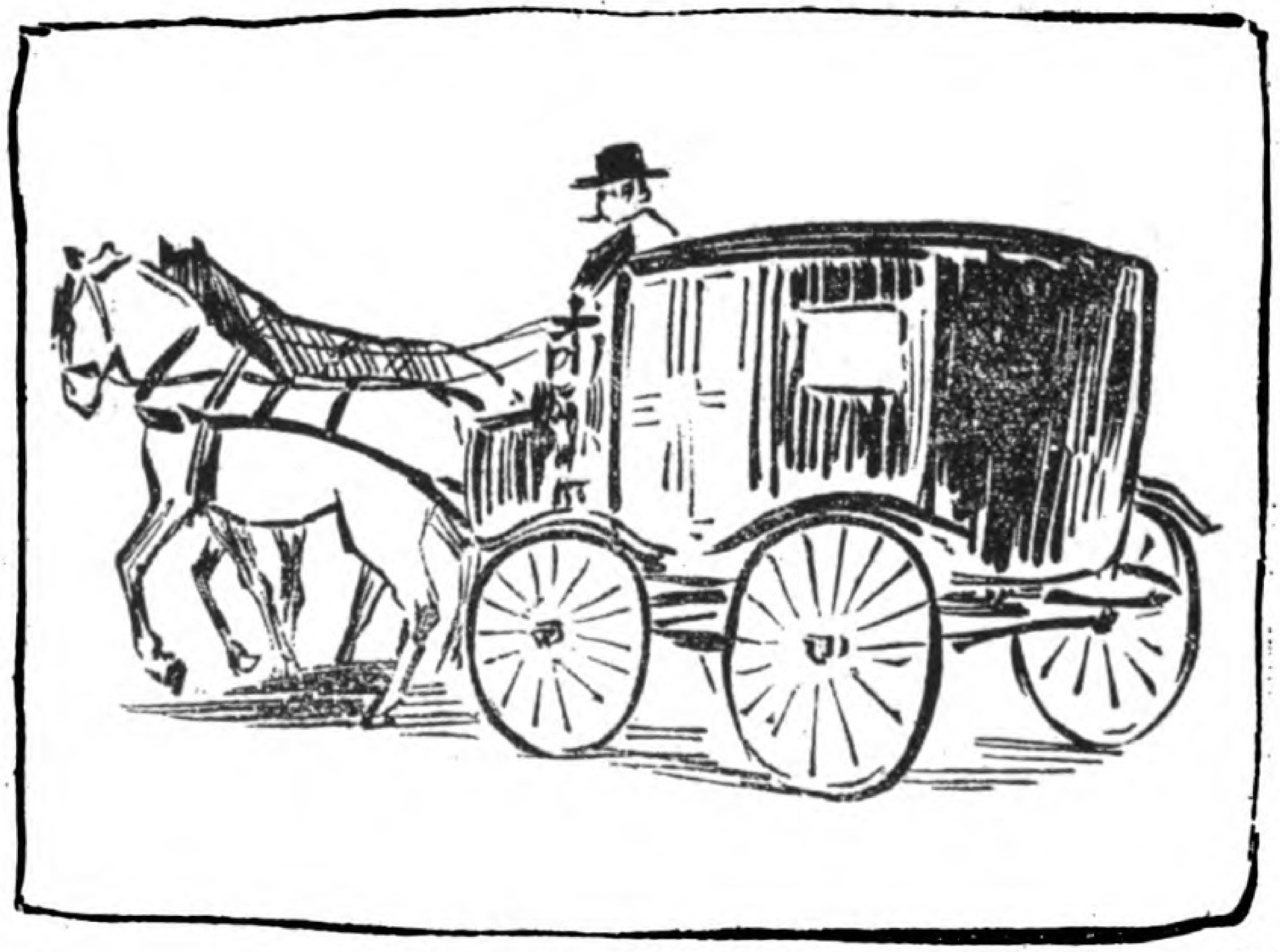
(十一)馬車の始。

本邦人が、今日の如き洋式馬車の營業を始めしは、明

治二年以後のことなり。尤も乘合のものと知るべし、武江年表二年四月の條に、芝口一町目西側家主久右衛門外八人、馬車渡世の事願の通免許せらる。内、二階つき馬車といふあり、危きを以て戌（七年）九月御停止とあり。三年三月出願の、人力車願仕法書の中にも、

馬車とも違ひ急迫の議に無之候間、間違等も一切無之儀に御座候とあり。

工藝史料に、馬車の始を、明治三年とせしは、年表の記事を見ざりし誤なるべし。



（十二）自轉車の始。

武江年表明治三年の條に、自轉車といふは、今年秋、本町邊の者より始りしが行はれずとあるは、文書に見えたる始なるべき。されども、六年頃の錦繪往來車盡しに、一人車とあるを見れば、自轉車・一人車など稱へしなるべし明治五年版日要新聞四十七號にある、東京府八月 中收稅調 の中に

自轉車一輌、日除車一輌、人力車二萬四千五百二十二輌、馬車百二十九輌

等の目あり。然れども當時の自轉車は、其名こそ同じけれ、今日の制とは著しく相違せし、幼稚のものなりしを記臆すべきなり。

泰西婦人風俗

三枝三葉

同じ日本の内でも、關東の產と上方の產とはその品形にも其の氣風にも相異の點を見出

すのであるから況んや國を異にし俗を異にするに於てをや、其の婦人氣質に國々の風あり、各々異つた特色の有るは、元より其の筈である、茲に擧げたる英佛米獨四ヶ國の婦人を見て、其の一長一短を知つたならば他山の石も亦た大に我國を利するであらう。

其一　英國の婦人

英國の婦人中、先づ勞働社會の女性を見んか、此の社會の御婦さんは處帶にかまけた所謂世話女房である、結婚前の處女時代は、或は奉公に出でゝ料理、作法、其他女子の心得べき事を見習ふものあり、或は料理方に傭はるゝものあり、或は小間使となるものあり、或は下婢となりて仕込むものあり、何れも一週十志內外の給金を貰つて居る、其柄彼等の良人を撰ぶや極めて丁寧である、先づ初め十六七より廿三四迄は是ぞと目星を付けた男子と交際し、よく〳〵相手の心を識つて後、之と婚を約し、次いで結婚す、中には十年婚を約して猶は結婚せぬものもある、結婚後の婦人は良人を信頼する事が頗る厚い、內の旦那程頼もしい男が又と外に在らうか、とは彼等が常に口にする所である、妻は良人より給金の大半を賄料として受取つてあるから、其餘は良人の心任せで、酒を飲まうと煙草を喫さうと敢て異議を申立てない、每日辨當の温いのを子供に持たして仕事場に遣り、一生子供や良人の世話をして、濯洗濯、御菜拵へ、縫針仕事、床の上下などして暮らすのである、彼等は宗敎の儀式を固く守つて、一通りは物事の理をも辨へて居る、子供は學校に出し年頃に成れば男は實業に就かせ、女は奉公に遣る、日曜には子供を着飾らして會堂に遣れと、自身に出掛ることは滅多に無い、行くとすれば大槪午後の時刻を撰ぶ、歸宅後は良人と連立つて近所を散歩したり隣家に談話に行つたりする、彼等は斯の如くして其の境遇に安んじ主婦としての職分を盡くして行くのであるから殊勝と言はざるを得ない、次に中等社會の細君を見るに、此は勞働社會の婦人よりも遙に品位立ち勝りて、槪ね風琴やピアノ位の素養はある、彼等は處女時代に

學校に修業した丈ありて學問も相當にあり、氣風は大抵快活の方にて、能く良人を愛し、家事を取賄ひ、生計費の許す範圍に於て家族の躰裁を立派にする事を勉めて居る、時には良人に代つて招持狀を認め、良人の朋友の細君を其家に訪問する事もある、良人の版土は帳場、妻の領分は客間と言ふ位であるから、社交は妻の主なる役目と成つて居る、彼等は餘り小説も讀まず詩も作らず、文學とか政治とかいふ側には至つて冷淡である、要するに此社會の英國婦人は質實眞摯、花は無けれど實を以て勝る方である、併し貴族社會に至つては大に其の趣を異にして居る、其の良人は金錢の自由あるに任せて、放縱自墮落の生活を爲した揚句である、彼等は家を持つ必要上より妻を迎へたのである故にその妻は美にして富めど、夫婦の間に愛情なし、彼等の時間は多く交際場裏に浪費さるゝを以て、互に顔を見合す機會少し、良人は其の志す所に行き、妻は又た己の欲する所に赴き、夫婦ははなれ〲に成つて、トゞの詰りは離婚裁判に至り着くのである、妻も夫も其の財産を分離し得たを喜び、昨日の夫婦今日の他人、双方笑ふて別るゝも、幾くなくして又た同じ事を繰返す、畢竟彼等に理想なし、愛するものは唯だ自己のみである、

其二　佛國の婦人

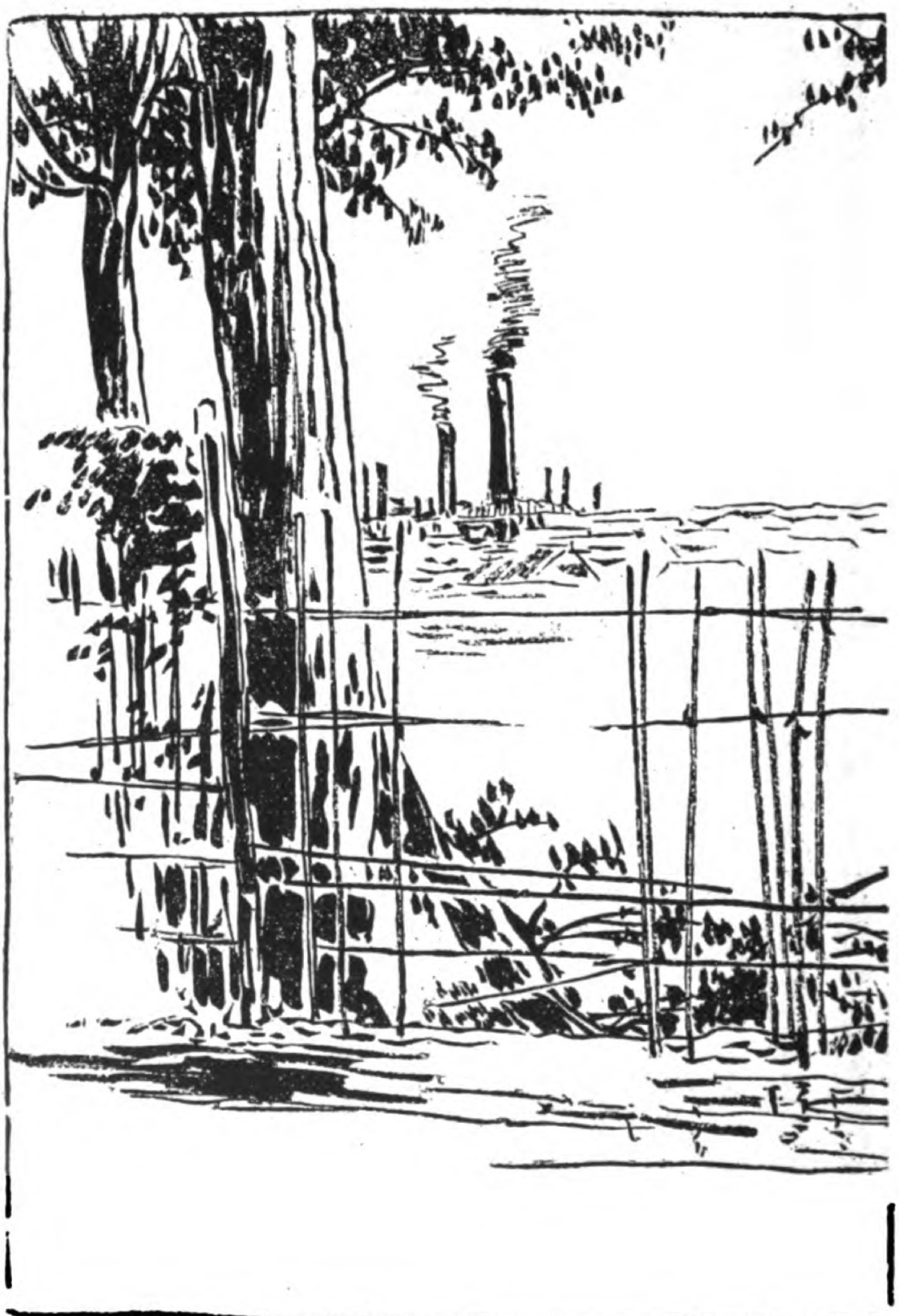
佛蘭西婦人の特色は優美なるに在り、都雅なるに在り上は尊き玉樓の淑女より下は卑しき裏店住の娘に至るまで、皆一樣に女らしく、滴る許の愛嬌あつて何處となく優美である、その科の輕くしなやかなのは花に舞ふ胡蝶のやう、實に彼等の一擧一動は優容なものである、袴の裾捌きサラ々々と音させて雨後の街路に蓮歩を運ぶさまの如何に艶にして立派なる事よ。彼等の美しき風采は什麽境遇にも四合と箝るものとみえ、卑しい身分の者でも貴婦人達と交際する時は、直に其の鋭敏なる觀察力を以て、そが起居振舞より物の言振までをも見て取り、其に眞似んことを努むるので、何時の間にか貴婦人生寫となり卒せて、何れが其と見分の

付かぬやうな事もある、總じて佛蘭西婦人は化粧に巧みである、よき意味に於ての洒落者である、其故少しくめかし過るの嫌はあれど、さりとて决して卑俗では無い、彼等の女は良人の爲にかたづくるといふ主義を實行して、良人の眼に常に好く見られんことを心掛るが爲、屢々衣裝を取替へて躰裁を整ふ、頭髪も時々結替へてリ



ボンを仕替へるとか、薔薇の花を翳すとかして、我邦の婦人のやうに十日も廿日も同じ頭をするものは無い愛情は些細な事にも改まるものだといふ事を知れるが故に、衣服の着付、髪の結ひ樣、指環の篏め方にも氣を注けて、常に愛情の新たならんを希ふのである。それから佛國婦人の他に異るのは結婚後の興味を解して居る事である英國等に於ては夫婦の興味、

は結婚前の約婚時代に在つて、結婚後は生活上の事に追はるゝにより、興味は其處に盡きて夫婦間は唯だ生眞面目一方となるのであるが、佛蘭西は爾で無い結婚は人生の始にして終では無い、是からが花も實もあるものとして、男女相識り、相解し、相愛するは凡て結婚してから後の事に屬すと信じて居る、故に彼等は結婚後、



良人の親友となり相談相手となり事業の仲間となり食卓の相伴となり、以て偕老の生涯を樂しむのである、從つて彼等は萬年新造である、我邦の所謂四十島田にして猶ほ愛嬌を堪へるのである、佛國婦人は又た郷土を愛する情が深い、餘りに郷土に戀々として一歩も他へ踏出すを欲しない、其故彼等は其の良人なり子弟なりの外征を否み、己の側にへばり着いて

居らせたがる風あり、彼の英國婦人の遠征的にして其の殖民地にドシドシ出掛くるが如きは佛國に於て見るを得ず、婦人の斯の如く屏息的なるは即ち男子をして外に力を伸張する能はざらしむ、佛國の他國に比して其の國力の振はざる所以も蓋し此邊に在るのであらう婦人の牽制力も亦た恐る可きものである。

其三　米國の婦人

米國婦人は恐らく世界に比類なき特色を有して居る、彼等は自由の國に生れて自由の空氣を呼吸し、自由の家庭に人と成りて自由の教育を受け、その小學校は男女合級で在つて、遊戯にかけても躰操にかけても女生徒は男生徒に負けないのである、その大學は全國到る所に散布して如何な高尚の學術も修業し得らるゝのである、生活の道は八方に開けて居て、大統領と巡査を除く外は、如何なる職業にても女子のたづさはらぬは無い、婦人にして市長の撰擧被撰擧權を有するの市あり、新聞記者の如きは少しも珍らしく無い、或者は探偵の職を奉じ、或者は醫師の業を開き、或者は大學に教鞭を執り、或者は商會に簿記棒を握り、婦人にして獨立自活する者新約克市のみでも何萬といふ數である、是を以ても米國婦人が如何に獨立自主の氣象に富んで居るかゞ解る、彼等は又た大膽にして男子も及ばぬ冒險心を有して居る、馬に跨るとか自轉車を走らすとかは敢て驚くに足らんが、世界を一週しては漫遊記を草し、毛皮に包まつては北極の冱寒を冒すものもある、其他射的を試み、撃劍を習ひ、遊船を操縦するなど、その所行は男子と毫も變らない、嗚呼タクサクする、今から一寸日本へでも往つて來うか、と言つたやうな調子で、世界を見る事宛然居間より勝手を見渡したやうである、萬事が總て此の調子で押通すから、ヌラクラした男などは其の足の下に踏み潰して丁ひさうな勢である、彼等は結婚に就ても自由であるから少し目に立つ程の才色ある者は恰も雨後の筍のやうに其から其と澤山の申込を受けて居る、『私は是で幾つ幾つよ貴孃のはお幾つ』などと其の多寡を比べ合ふ程である、

而して彼等は氣焰萬丈、側へも寄付けたものでない、併しながら亞米利加婦人とて、根が女の事であるから强い許りが能では無い、一度結婚して家庭を形造れば案外女房らしくなるのである、處女の間こそ隨分自由を振り廻はして野飼の駒のやうに氣儘に驅廻りもすれ一家の主婦と成つては何時か知らず識らずの間に奥様じみて來て昔の風は何處へやら行つて了ふ、貧乏の者は假しや氣位丈は高く持つとも手は孜々として其日の家業に勵き、富祐の者といへと仲々迂濶では無い、洗濯石鹼一個の細にも心を留め、學校で學んだ科學上の智識を家政の上に應用し、良人や子供の世話をする傍ら、自身の進歩を忘れないで時勢に遅れないやうと努めて居る、始終新聞雜誌を讀んでは世上の事に注意し宴會にも顏を出せば芝居見物にも行き、又たは避暑旅行をもする、中には小說を書くもあり、雜誌に寄稿するもあり、女敎師を勤めて居るのもある、彼等は家に在ては綿密にして經濟に長け、人中に出ては活潑にして世才に長け、常に活々として眼の醒めるやうである是等は實に米國婦人の粹といふべきである、

其四　露國の婦人

露西亞の女は槪して男勝りである、上は宮仕へする都の貴婦人より下は薪木こる田舍の賤の女までも押なべて心優しく、淸く、感情强く、意地强く、亦た辛抱强いのである、殊に彈丸雨注の火の中をも極寒西比利の氷の中をも辭せざる虛無黨の女など、來ては、凛乎として拔く可からざる氣象あると共に、妻女として將た母堂として優にやさしき女德を具へた者も少くは無い去れば露西亞の婦人中には女丈夫や女傑も多いのである、彼のカザリン大女帝の雄圖の如き、プラウアツキー女史の堅忍以て靈智敎を起した如き共に其の一例である、併し露西亞の田舍婦人程憐れな者はない、彼等の家は槪ね貧にして、其の室内にはテーブル一脚、椅子一基より外は、薄團も無ければ枕も無いといふやうな、淺猿しい境涯であるから、良人と共に野良に出では農事を手傳ひ、家に在ては家事を取締り、且つ又た大勢の子供を育てゝゆく苦心の程は一通りでない、而も世を怨みず運命を喞たず、其の境遇に安んじ、每朝壁上の聖像に祈禱を上げては孜々として一生を卒はるのである。

（完）

女子の職業

看護婦

▲女子の天職

看護婦は高尚なる慈善的職業なるのみならず、女子自活の方法としても又適當な好職業で、殆んと女子の天職と云つても可い位である。

我國に初めて看護婦なるものゝ起つたのは、明治十九年の頃。陸軍部内に看護婦の必要を感じて、今の赤十字社病院長たる橋本男爵（綱常）と、陸軍々醫總監足立寛氏との設計に依つて、看護婦養成法の設備が成立つたので、續いて二十年には萬國赤十字社へ加盟して、看護婦養成法は愈よ盛んになつた。

其の時。篤志看護婦人會と云ふものが出來て、三條公爵夫人や、毛利公爵夫人なとは熱心に、橋本足立の兩氏と大いに盡力された、赤十字社病院でだん〳〵看護婦が養成してゐる中に、大學醫院でも、慈惠醫院でも、爭つて看護婦を養成したので、それが何れも好結果を得て、遂に今日の隆盛を來たしたのであるが、其の給料も亦從來の内職や、有りふれた賃仕業に比べると、格外の收入があるので、個人の看護婦會と云ふものが續々出來て、諸方の要求に應じて出張するやうになつたから、從つて種々の弊害も起つたので、或ひは一口に、「看護婦」とて、一種の侮蔑を含まれるやうな次第とはなつたものゝ、相當の教育と、眞面目な考へを以てしたなら、女子が獨立自活の方法としては、無上の天職たることを必らず社會が認めてくれるに相違ない。

▲看護の責任

兎に角、看護婦の責任は尤も重大である。醫師と同樣に人の生命を托さるゝのであるから、矢張り相應の教育がなければならぬ。さもなければ自然自分の職業が何れだけの價値のあるものだかと云ふことが解らな

いから知らず〳〵自分の品性を破壊するやうなことが出來る。

無論それは各自の過失で、誰しも自から危害を招くものは無いが、詰り教育が無いと、たゞ賃銀と云ふことにばかり重きを置くやうになつて、肝心の職務を等閑にする。それが賃銀の高い安いは譯も無く解るが、仕業の價値はチョイと解らないから、ツヒ然ういふことに成るのです。けれどもだん〳〵世の中が進んで行くに從つて、何の仕業に依らず、自分のする仕業に對しては何處までも守ると云ふ約束と決心即ち德義上の覺悟が出來なければ成りません。



▲看護婦の試驗

さて看護婦の修業と云つたところで、何も大したことでは無いが、従來は赤十字社病院とか大學醫院とか或ひは慈恵醫院等に入つて、二箇年間實地と學科を研究して、其の附々の院制の試驗を受けて及第さへすれば、立派に看護婦として獨立して行かれたものだが、近來は産婆と同じく内務省の檢定試驗を受けなければならぬ。而うして其の試驗が是れまでの試驗と違つてチョッとした藥劑のことまでも知らなければ成らないやうに成つた。と云ふのは突然患者に就いて、直にこれは傳染病であるか無いかと云ふ見分けの付けられるくらゐの智識と、それから夜中など不意に患者に異變の起つた時。醫者の來るまでの應急法を施す場合に、例令ばこの患者は腦貧血だから冷しては惡いとか、或ひは充血性だから冷すとか云ふやうなことか、頗る必

用であるからで、決して重荷や餘分のことを背負せるのでは無い。

▲其の修業

兎に角學資と云ふ學資が無くても、相當に勉強して獨立自活の職業を得られるのは此の看護婦である。前項にも云つた通り、赤十字社病院や大學醫院へ志願して入るには、何時でも缺員さへあれば一文無しで入れる。而うして内務省の試驗を受けるまでの間は、相當の給料から被服までも貸與され、食料は無論醫院賄ひである。尤も試驗に及第したからと云つて、直に其處を出る譯には行かぬ。各規定年限のある内は外へ行くことは成らぬ、然し其の間に不品行とか、又は他の不正行爲に依つて解放さるゝか、自分から退く時は、最初からの食料等は無論支拂はなければ成らぬ。

次に市中に在る各看護婦會であるが、これも矢張り學資の無いものは相當の手續きを以て入會すれば、學力と實地の兩方を兼て勉強することが出來る。その代りに兩親の手許に何もせずにゐたものが、急に餘所へ行つたなら隨分辛いであらう。詰り女中代りに働いて其の餘暇に實地に就いたり、勉強するのであるから、夜分も遲くまで遣らなければならず、又外から頼みに來れば、夜が夜中でも起きて行かなければ成らぬ場合もある、然しこれは他の各病院へ入つたからとて同じこと、却つて然ういふ場合が多いくらゐだ、それが即ち勉強で、何をするにも、眠る目も眠ないで遣るほどで無ければならぬ。さて其の年限は、普通の人で二箇年も遣れば大抵内務省には差支へは無い。學力は最初から無教育では然うは行かぬが、高等小學二年級くらゐの學力があれば、赤十字社で出來た看護學や、大學醫院の講義錄は讀める。尤も大學醫院のは少し難しい理窟はあるが、それも見馴れたなら大して解り難いこともあるまい。先づ三年の苦學と思へば大丈夫だ。けれど、十分に學資があつて勉強するなら、例令實地は不熟練でも一年くらゐで十分内務省の試驗は受けられる、而うして又患者に附いて實地を研究するも可からう。

▲修業は一生

まア何に依らず、修業や研究は一生の問題、内務省の試驗に及第したとて、實地患者に就いて見ると大いにマゴつく、然ういふ場合に、主任醫が良い親切な人なら、一見してまだ此の看護婦はカイナデだと思ふと患者に知れないやうに、内所で克く細かに敎へてくれるが、若しそれが不親切な意地の惡い醫師だつたら、ポン〳〵患者の前で耻をかかせたり、ガミ〳〵小言を云つて、更に何にも敎へてくれないから、當人は萬事にドギマギする。患者は信用爲なくなると云ふ風で、了ひには附添ひを辭られるとか。或ひは自分から務まらなくて歸つて了ふやうな事が出來る。それも自分で確な心得があれば、決してそんな事はない。却つて主任醫師の氣の付かない事も、自分で注意することが出來る。詰り其の人の力量だ。如何に主任醫師が名醫でも、看護婦ほど絶へず患者に接近してゐる譯で無いから、自然見損ないや手落ちはありがちである。それを補足して看護するのが看護婦の責任である。で、夏場の非常に忙はしい期節に向つて、速成看護婦會と云ふものが克く市中に起るが、到底五箇月や六箇月で速成看護婦などが出來るもので無い。そんなものは無論話にならぬ。



▲信用が第一

何れも自分で獨立するとなれば、市中に看護婦會の看版を懸けなければ成らないが、多數の看護婦會が軒並に起ると勢ひ競爭になる。然う云ふ場合には、怎うしても信用が第一であるさて其の信用がなか〳〵呼吸

ものだ。詰り仕業の熟練は尤も必要だが、それは素人の目には見えないことで、信用は誰の目にも見易いものだから、其の見易い信用を求めるには、矢張り萬事親切が第一で、早く人の氣を呑込むと云ふのが必要である。例令ば病家の細君や女中達は怎ういふ氣風だかと云ふことを見るので、渾て氣サクに調子よく、決して患者に逆はないやうにする、けれど、それが餘程ムツカしい。餘り氣サクに遣り過ぎて、無暗其家の主人など、話し合つたり、患者の相談などにも、餘人を差置いて爲たりしては、何にしても女性のことだから、深く注意に注意を爲ないと、甚だ迷惑至極の嫌疑を受けて看護を斷はられることがある。其處の呼吸を呑み込むには怎うして一朝一夕の修業では無い。

▲辛い思ひ

まだ修業中の辛さも辛いが、立派に内務省の試驗に及第して、獨立に看版を懸けて行くには、生涯社會から試驗されつゝ行くのだから、これは又格別に少しの油斷も出來たもので無い。チョッと患者に就いたとてろで、自分の職務だけのことを心得て遣つてゐるのに側から素人が心得顔に、醫學雜誌など見て克くチョッカイを出すものがある。然ういふ時には醫師なら何の頓着なく拒絶することが出來るが、看護婦では然うキチンと行かない場合がある。若しそれを遣つたなら、直に生意氣だなどゝ云つて看護を斷はられるばかりで無く、他の看護婦にまで彼は生意氣だとか、何も知らないなどゝ云つて吹聽され、又は無根の惡評までも立てられて、それが爲に外の依賴者も減る。自然他の競爭者に壓倒されるやうに成つて了ふ。

それから傳染病患者に接近する注意と、器具の消毒法に就いても大いに考へねばならぬ。患者の側で食事することを嫌つたり、器具を一々別にしたりすると、直に其家の細君なり、女中なりの感情を害して、あんなに病人を恐がるやうでは、彼の看護婦はトテモ本當に出來ないから、早速取替へた方が可いとなる。其處で外から替つて行くと、前のゝ遣り方を噂されるからそれで素刈り呑み込んで、食事も患者と同室でする。

臭ひのする石炭酸で消毒したものを、無臭の薬品ですると云ふやうに成るから、これらはチヨッとした事だが、信用上――即ち職務上には多大な影響を受ける。尤も相當に教育を受けた人ばかりなら、然ういふ弊害も少なからうけれど、まだ日本の現社會では、上中下通じて如上の弊害は遁れられない。而うしてこの弊害が、何れの方面に一番多いかと云ふと、軍人と商人の病家に於て殊に甚だしいと云ふ。

猶困るのは、患者に依つて使用する、ガーゼとか、ダッシメンと云ふやうなものだ。是れも矢張り軍人と商人の側に於て、其の使用を惜むのである。一つは軍人は何れも薄給だから、自然經濟上からの感念で使ひ惜むのであらうが、又一つには軍人は凡て無頓着で、衛生上の觀念が淺いから、詰り其の細君までも何時か感化されて、そんな億劫なことを爲なくも、淺草紙か半紙でも使つて置けと云ふやうに成る。商人は例の商人根性と云ふもので、例令幾萬の財産家でも、多くは無教育もので、黴菌の説明をして聞かしても呑み込めないのだ。然し、軍人とても、商人とても、ズッと上流になれば決してソンナ事は無い。所謂中流社會が一番始末に終へない。



▲等級と賃銀

日當は詰り病狀に依つて等級と賃銀の區別があるので、例令ば傳染性の肺病、若くは癩病患者等に就くのは一等賃銀で、日當一圓。其の他内外科の重輕症に依つて、八十錢、六十錢、四十錢。又同じ傳染病中にも、ペスト、コレラ、チブス等の劇甚なる流行病にな

ると、東京市内ならば、一等賃銀に二割增しとなる、市外ならば、三割乃至五割增である。

普通の患者でも、熟練した看護婦と、未熟のものと而うしてまだ修業中――試驗を受けないものは自然賃銀に等級がある。

故に先づ或る看護婦會から或る患者に就くと成ると一等賃銀の内から二割五分と云ふものは、會の維持費として會主に納める規定である。その代り會から始終仕業を周旋される事となつてゐる、以上は看護婦の事情であるが、何に依らず、一つの職業を覓めるには如上の難行苦行は是非爲なければなりません。

園藝

苺の栽培

小畑いく子

花卉盆栽に付ての趣味は又家庭の娛樂の中最良好なるは此植物栽培にしくものはない、然し一般に植物といへば隨分廣く渉りて、其種類は實に夥多きものであるが、花卉草木樹竹苔藻に至る迄とり〳〵其趣を異にして樂しからざるものはない、然しこれらの多くは裝飾の一部に居るものでありますが、果樹、蔬菜の類は實用に供して其効、最著大なるものであります、就中果樹などに於ける趣味は大抵知らぬものはありませぬ、適〻庭園中に梨、柿或は橘類などの結果する事あれば、猥りにそれを採りて食する事は致しませぬ、商人より買ひ求めたのとは非常に尊さに相違があるやうです、而して其味に至りては遠く商店にあるものには及びませぬ、それすら惜みて容易に摘み採らないのは自ら其樂みの差が味の點より遙に優りて居るからであります、況やこれに適當の方法を施して良種、良果の誇るに足るものが出來るに至らば、如何ばかり樂みか知れませぬ、然しながら果樹の栽培は其剪定法などは隨分むつかしきもので、專門家の手を經ざれば出來ぬから、一寸婦女子の手すさびとしては難き點もあ

り且つ歳月を多く經ざれば結果を見る事が出來ぬものでありますが、蔬菜の方に於いては甚だ容易です、蔬菜と只一口に申せば、何か葱、大根などの類をのみ申すやうに聞えて、それらは日々出入する野菜やに依る方大に便だといふ人もありませう、なるほど日々用る所の蔬菜を悉く邸内の園圃に求めやうなと丶申す事は到底都會に住む者の出來得べき事にもあらず、又其必要はないのであります、只今述べんとするのは只其中の一部を、娯樂的、學術的、試驗的に培養せんとするのであります、

元來此蔬菜はいづれの國、いづれの民といへども、之を嗜まぬものはない、只其需用の多寡の差が國によりてあると申すまでの事である然しこれらも太古は只自然の野生に依りましたものですが、漸々と人口の増殖するに隨ひまして、天然を俟つのみでは不足を生じます所から、自然培養法も開けて參りました、それより次第に人智の進むに隨ひて、自ら美食するやうになりそれに伴ひて此蔬菜の培養法も種々に研究されて來たのです、殊に日本に於ては穀菜常食の國柄であるから、自然其必要を感ずる事も著き爲め、大に此業も盛になりて遂には農家の一大部分を占領するやうになりました、然しながら我國は一般に土地が豐壤にあり且つ氣候、風土なども秀で丶居りまして此蔬菜などは最も適して居りますから、格別勞せずして得らる丶所より、自ら農民が怠慢に流れ、少しも改良とか進歩の心を起さなかつた、今日に至て大に外國に向て誇りて輸出するなどの事は更に出來ぬのみならず、反對に續々輸入する其品を見て只あきれて居ると申すやうな次第でありまして、少しく文明的の生活をする人は勿論、それを見慣ふ人々は、一



にも二にも舶來品でなくばと申すやうな姿となりて居ります。

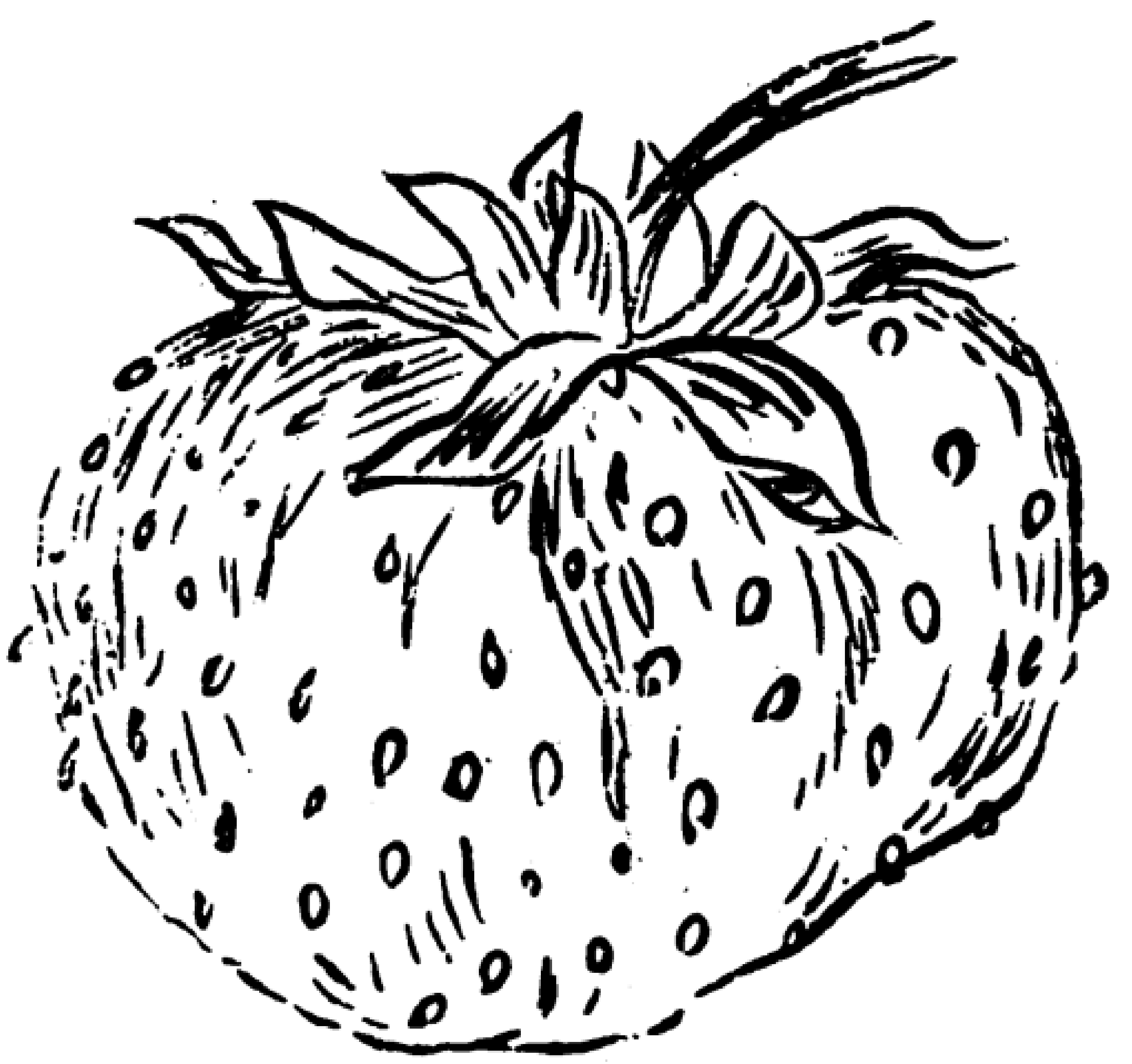
近來の如く、日に月に肉食の流行が其歩を進めて參りましては自然、蔬菜などの種類も昔日のとは趣を異にして參りました、そこで近來はそれ〴〵の專門家が出で、其道々に研究せられ、種子根株を遠く歐米各國に需めてそれ〴〵の方法を施して栽培するやうになりましたから大に得易くはなりましたもの〻、まだ〳〵一般には不自由の方であります。

扨また其西洋各國の土地がそれ程、蔬菜に適して居るかと申すと決して左樣なわけではありませぬ、佛國、英國などでは我風土に及ばぬ事、遙に遠きのでありますが、專門家の熱心と、學理の應用とがよく此良質を產出せしめたのであります、そこで天然の風土宜しき我國に於て、愈實地に學理を應用して增々改良を計りましたならば、彼に數等優る品を產出する事が瞭であります、然しながらそれらは專門家に望む處でありまして我々婦女子の手すさびとして栽培致すには其内の一二種を後園に移して、其成育のさまを見、且つ自ら調理して食膳に上せ、一家團欒の内に之を批評するなと實に樂みの極みです、そして此庭園的蔬菜にはまづ其形狀の美と、栽培法の簡易にして且つ用途の多きとを擇ばねばなりませぬ、白菜、蕃茄、蠶豆などは大に適して居りますが、季節のものですから苺の栽培法を少しく御話致しませう苺の栽培は西洋各國でも古くより行はれたものではないが、現今では歐米人の最珍重致すものとなりまして英國の或地方では、一人の園藝家で以て、百四五十町步の地に苺のみを栽培して居る者さへあると申すほどであります、

我國に此種子の渡りましたのは、いつ頃であるかと申す事は確に分りかねますが、今も猶、蛇苺、草苺の外にヲランダ苺と申す名が殘りて在るを見ますれば、或は德川時代に渡來した事であるまいかと推測せらる〻のであります、それは德川時代に於きましては西洋と交通を致して居りましたのは、和蘭一國でありましたそこでいづれの國產でも悉く、我國に輸入致すには、

和蘭の手を經たものでした、そこで其產地の如何を問はず總ての舶來品には和蘭何々と、必ず和蘭の名を負はせて居たので、現に和蘭燒と申す陶器などは隨分古き品は當今でも、古和蘭と稱して骨董家の珍重するものですが、其燒物に刻してゐる銘を見るに、伊太利とか西班牙とかいふ文字があります、されば決して和蘭製のものゝみでなかつた事は確であります、右樣の次第で、此苺も其時代に渡りたものと思はれます、然し市場に出づるやうになりましたのは明治の初年の事です、

西洋種と申しても元來別なのではありませぬ、我國の草苺と同じく野生のものでありましたのを、いろ／＼培養に注意を致して改良に改良を加へて遂に今日の如く種類も多く、美味を有して人の賞翫するやうになりましたそして種類も非常に多くあるのですから一々これを列擧する事は出來ませぬか其內の二三を御紹介までに、



元來苺は宿根性の植物で、其母株より蔓を生じ、地上を匍匐し、其端に節を生じて其節より、葉を生じ根を下して新しき一株となり、又其新株より蔓を生じて前と同じく延長して、卽ち第一圖の如く繁殖す、

扨其多き種類の內を大別して、大果苺、四季苺の二種とします、此苺は他の果物などゝ異りて其果の外部に種子を露出して居りまして、其食する處は種子を支ふる肉であります、其肉は實に柔かで舌頭に觸るゝと融解する如く、其味また甘き內に酸味を帶び佳香あり、殊に多量なるものであつて、人の珍重がるも道理であります、

大果苺と申しますは其果が非常に大く出來まして、其結果期は春一度で、之れは全體變種し易き性質を以て居りますから、實生をすれば必ず、母株とは全く別の

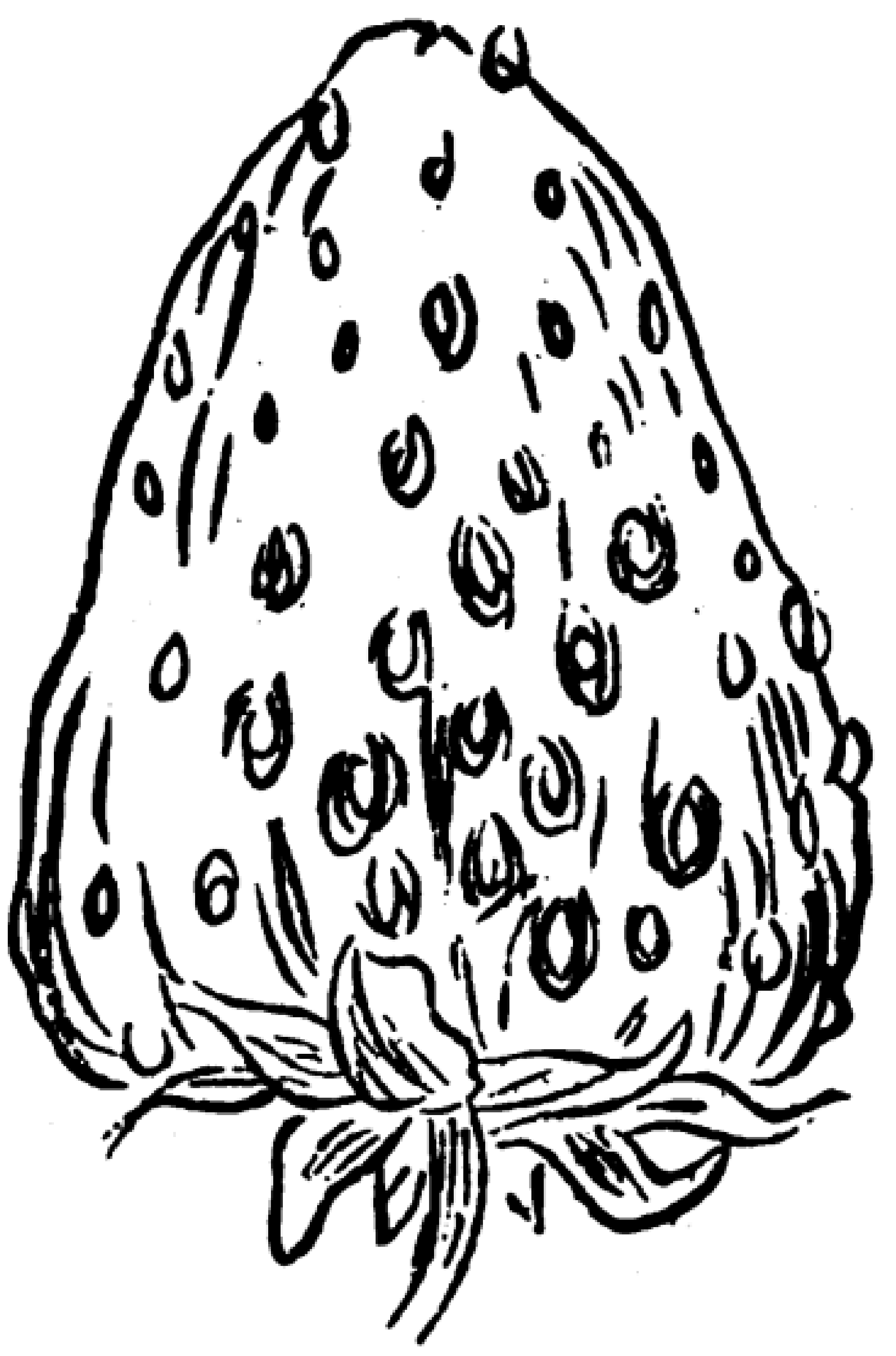
物になりますから、なるべく株分けをして栽る事として居ります、そこで園藝家は毎年春期に人爲交配をして種々なる變種を需め、其内より良種を出す事をつとむるので、それ故此大果苺に殊に種類が多い、扨此大果苺を栽培し、繁殖させんとするには如何なる土壤が適して居るかと申すに、肥沃の冷地、若しくは細砂の土地がよろしいが、たとへ、さる土地でなくとも少し培養に注意をすれば、土地の如何に關せず良種を得又相當の收穫を見るものです、

そこでまづ初めて栽培せんとする時は、夏の初めに當り、よく繁殖すべき性質の强壯なる苗を撰び、陽地に床を造りて、之を栽植するのである、晩秋の頃より、漸々寒氣の强くなるに隨ひて之を防ぐ爲めに、玻璃を張りたる木の框を其床の上に蓋ひ、極寒中は猶其上に藁を置きて寒傷を受けぬやうに、養護する、而して翌年に至り、梅の殘香全く失せやらぬ三月の頃に至りますと此苺も大に發達して參ります、そこで又他に堆肥を充分施したる床を作り置きてそれへ昨年より養護し置きたる苗を其根に多くの土を付したるまゝ根の傷まぬやうに堀り取りて、新床地に大約方一尺二三寸の距離を隔てゝ之を移植するのであります、而して其根元には藁などを敷きて乾燥せざるやうに注意を與へますすると五月頃に至り續々花を持ちます、そこで猶其年の收穫を見んよりは、まづ株の增殖を欲する時は、其花を悉く摘み取るさすれば非常に多くの蔓と新株とを生ずる、

七月頃に至り、其蔓を切りとりて其新株を大切にまづ假床に植ゑたる後、十分其成育したるを見て、九月頃防寒の備へある床地へ移す、さすれば翌年は大に增加して其結果も一年生の三倍は得らるゝもの・玆に一つ注意して置かねばならぬは凡そ三年間を過せば、必ず植ゑかへて同じ土地に久しくならぬがよろしい、それ故初の苗を植ゑ付くる時もよく其以前より同種に馴れて居らぬ地を擇ばねば、甚だ其結果がよろしくない、其大果苺の内に於て、現時良種として世にもてはやされつゝあるものゝ二三を擧れば

(一)「ドクトル、モレール」といへるは其果の大なる事直徑二寸もある楕圓形或は扁圓形で重量なども凡そ、十四五匁もある程です、其色は濃赤で、種子は少し黒色を帶びて居ります、其味は最甘味多く、香氣に富みて居ります、又性質も强健で、豐產する事は一年生にて三十五六顆乃至四十顆、二年目よりは其三倍程づゝ結果しますから、先づ大果苺中の良種であります、

(二)「ルブルタン」と申すは性質も强くまた豐產の方で形狀はドクトルモレールとは異りて少し圓錐形のもので、大きく出來る時は長さ二寸直徑一寸五分位にもなり、色は淡赤で、味よく殊に此果の特色とするのは早熟性でありますから、之に促成法を施せば最珍らしき季節に誇る事が出來ますから園藝家は爭て之を培養するやうであります、



(三)「ケーニッヒ」と稱する一種は大果苺中の最良無比なるものでありまして、其色は淡黃赤で其美味佳香を有する假令方もない程であります、其形はドクトルに似て其巨大なる事は直徑三寸長さ二寸以上と申す事であります、之れは晩生の方でありますが極めて豐產するもので、此他にも多くありますがこれらがまづ著きものであります兎にも角にも折角栽培するならば良種を撰ぶ事が必要であります、

四季苺の方は前に述べました諸種の如く巨大なものではありませぬ、普通水菓子屋にある如き粒のもので、種類もまた至て少い、色は濃赤が多く間には白色のもあります、香味共に佳良で三月頃より十一月若しくば十二月の初めに至る迄、不絕花を開き實を結びます、中にも春秋二季に多くの收穫はあるものでそれ故庭園内に栽培して最樂し、

此四季苺の種類の少きは變種し難き性質を有して居るからである、そこで大果とちがひまして實生をよく致します、其法方はまづ完熟したる苺をとりて之を碎きて水中に入れてよく揉みて其肉を去り種子のみを、よく〳〵洗滌して之を陰乾にするのであります、さすれば二三年間は發芽力を保存するものであります、扨これを播種せんとする時は三月若しくは四月頃、圃床にてもよろしけれど、なるべく攝氏十七八度の温床にする方大に成蹟がよろしいものです、既に發芽致した後は、前に述べたる苗栽の法方と異る事はありませぬ扨此苺と申す内には殊に大果の方に甚しきは果實の收穫後に於て多數の蔓を發するものでありますが、園主は注意して凡そ一蔓に新株二つ程を殘して他は悉く發生するに隨て摘除しなければ、母株の勢力大に衰へるものです、

總て其何種に限らず、此苺は日中に摘み採る事はよくないのでありますから朝夕の庭散歩に、小やかなる籠を携へ其成熟したるを擇びて之に盛り、生々したる葉を少し其上に蓋ひなどして、さながら卓上に備へて、食後の用に供するならば、實用、衛生を兼備したる最有益なる娛樂品でありませうと思ひます、（完）

江湖

癸卯園遊會の活人畫（口繪參照）

佐々浪子

癸卯園遊會の事は、今更由來を申さないでも、もう皆樣御存じでありませう。

其園遊會の餘興として、お歷々の奥樣やお孃樣方が御自分で活人畫や音曲や、又舞や謠などをなさいました。それに付いての評判も、もう諸新聞に見えましたから、今更私共が、遲蒔に彼是おしやべりをするのもほんとに後の祭とやらで、餘計なおせツかいに過ぎませんが、さうかと云つて、私も見物の一人に成つて、この珍らしい御趣向に、一日面白く遊ばせて頂きまし

たから、何とか御挨拶を致さないでは、どうも義理が惡いかと存じまして、持ち前のばりう言をちよびり。……何卒皆さん御免遊ばせ！

尤も普通の餘興に付いては別に何とも申さず、只評判の活人畫に付いて、一寸存じ寄りを申しましやう。

一體活人畫と云ふものは、繪畫と活人とうまく調和させてこれに光線を利用して、一幅の畫題を現はすのですから、これを演劇や踏舞と同じ様に思つては成らないので。つまり人間が人形に成つて、種々なヂオラマを見せるのだと思へば、大した間違は無いのです。

それに世間では、兎角今度の催しに付いて、歴々の奥様やお孃様が、事もあらうに俳優や藝妓の眞似をするとは、まことに怪しからん事だなど丶、惡口を云ふた連中もありますが、それはほんとに間違つた評で。前にも云ふ通り、演劇や踏舞とは全く違ふ、云はゞ美術的遊戯と云へる様なもの、随つて、これを本業とする藝人は何所の國へ行つてもありますまい。却つて今度の様に、貴婦人社會の催しとするのが、至當である様に思はれるのです。

私が伯林に居ります時分に、或晩見物した活人畫なども。矢張り貴婦人社會の發企で、主意は同じく慈善にあつた様でした。而もその時の演者、は皆上流社會の人々で、其上に男女混合でありましたが、若しさう云ふのを日本で見せたら、世間は何と云ふでしやう？ほんとにわからずやの多い事ねエ！

そんな理屈はまアお預りとして、それから此間の活人畫の、評判でも致しましやうか。

一番は高崎恒子さんの橘の妙媛。御容貌が好過ぎる爲めか、親を慕うて追ふと云ふ、憐れな様子がちと見えない様でしたが兎に角お奇麗な事には感心しました。

二番は朝吹稲子さんの清少納言、何か足繼ぎでもなさいましたか、大層な脊が高く見えましたが、それとも地體がお高い方なのでしやうか。始終全く後向きなのは、ちと物足らない心地がしました。

幕が閉まつて喝采の時、このお二方だけは、ちやん

と前を向いて御挨拶なさいましたが、これから後の方は、矢はり同し程の喝采がかゝつたのに、少しも答禮は無かつた樣です。これはするものならする、しないものならしないと、初めから申合せがあつて欲しかつたので、したりしなかつたりでは、何だかをかしく見えるではありませんか。

尤もこの答禮と云ふ事は、一寸愛嬌のある事ではありますが、何方かと云ふとちと藝人じみて居ますから矢張り爲さらない方がよいかと思ひます。

三番目は有間いよ子さんと高田糸子さんとの松下禪尼。此時は少し遠くから拜見して居ましたので、一層好く見えましたが、只城之助義景と、禪尼との、双方の視線が少し合つて居ない樣でした。尤もほんとに見合つたら、つひ吹き出してしまふと云ふ御懸念もあつたのでしやう。

四番目の、楠公夫人が正行の死を留める所、姿勢も意氣込も大層よかつた樣です、夫人は嘉納すゞ子さんと云ふ事ですが、正行を爲すつたのは何方でしたか、番組にはお名が見えませんでした。ほんとに好く出來て居ましたのにねェ……

五番目が、柳谷末子さんの奥村助右工門妻、城内を見まはる所は、何とも云へない好い圖でした。殊に月光が大層よく出來て居て、畵とは決して見えない位。われから見ると劇場の灯入の月なんぞは、ほんとに幼稚なものですねェ。

さて最後は秋色が、上野の櫻に短冊を付ける所。奇麗は如何にも奇麗でしたが、櫻がちと赤過ぎて居る上に、秋色の着附まで赤勝ちなので、何だか下品に成つてしまひました。その上秋色の姿勢が、あまりよく調つて居なかつた樣です。なんぼ畵題が畵題でも、何もさう本文通りに、短冊を花の枝に結び付けると云ふ、現在の動作を見せなくてもいゝぢやありませんかそれよりは、花を見上げて句を案じて居る所とか、短冊を付け了つて眺めて居る所とか、その動作を未來の過去にしておいた方が、却つて餘情があつてよかつたと思ひます、むかしこれは演者の罪でもありますまい

から、柳瀬光子さんとやら、何卒お氣にかけずに居て下さいましよ。

以上は第一日の番組で、二日目には、大葉子、赤染右衛門、尼將軍、伊賀局、山内一豐夫人、春日局の六番がありましたが、その日は急に差支が出來て、とうとう參る事が出來ませんでしたから、隨つて何とも申されません。然し後に寫眞で拜見した所では、大葉子と春日局が、一番よかつたらうと思はれます。伊賀局も定めし見物でありましたらうが、かんじんの勇婦の意氣組が、よく現はれて居りましたらうか知ら?

さて此度の舞臺の書割は、山本芳翠先生が、大いに腕を揮はれたのださうですが、成る程何れも結構でした。が、強いて小言を申せば、凡て遠景の割合に、近景がちと御麁末であつた樣です。

それから此の畫題の選定にて、多分下田先生が内々御指圖のあつた事と存しますが、何れも貴婦人方の出し物としては、此上も無い好題目に相違ありません。然し、元が畫として見せる筈の物ですから、成る可く目先の賑かな物がよいので。それには自然の景色の方が、家屋の内の有樣より、遙かに引立ちがよいのですそれも人數の多く出るものなら、又それで賑かに見えましやう。けれども今度の樣な、精々三人以上は現はれない仕組では、清少納言や赤染右衛門の樣な、家屋の内を見せる圖は、他の助右エ門妻や大葉子などに比して、どうしても喝采の聲が低く、演者に取ては五分の損があります。

それから今一つ申し度い事は、その活人畫の説明を只簡單な刷物計りにせず、寧ろ然る可き辨士が出て、その幕の間毎に、面白く辨じて貰い度かつたのです。辨士と云つても、決して講談師などの事ではありません。即ち然る可き學士、文學家を聘す事です。伯林で見た活人畫會には、ショルラアと云ふ有名な作家が、わざ〳〵幕間毎に壇に登つて、廿分位宛說明の勞を取り、大いに興を添へたのでした。

かうすれば、幕間に退屈する心配も無し、且つ畫題が一層よく解つて、見る者には何れ程便利に、又面白

いか知れません。その上、若し出來るならば、畫題に相應した音樂を陰で演じて聞かせたら、更に妙でわらうと思ひます。此等は皆様が、又此次に爲さる時分の、御參考にもと思つて申したのです。兎に角此度の御催しは皆様の大奮發だけあつて、大評判であつたり、大受大當事は、今更申すまでもありませんが、斯う云ふ事は私共の、大賛成を致す所ですから、何卒皆さん、下らない世間の陰言を氣にかけず、かう云ふ面白い物を、度々見せて下ださる様に今からお願ひ申ますよ。

四季のよそほひ

観風子

○單衣

贅澤なる向を云へば友仙染縮緬の單衣なるが、本年流行の色合は栗梅、鼠、藤鼠等に限れるが如し、模様には卯の花垣、撫子に流水、雨中の萩等あり。染方は地落しの際ボカシにて墨繪仕上の物流行す（此代價十六七圓）又た透き模様といひて上着を透屋又は明石にし、襲を絽にしたるもの、即



ち上着の模様には流水に芦の圖を描き、襲には鷺の飛べる形を書きたるものなどは誠に涼しさうにて、高尚優美の品なり（此代價三十四五圓）

○帯

夏の丸帯には綵羅織絽朱珍、幽谷織等行はる。一重帯は清涼織、朱雀織、明珍織等専ら行はるゝが、中にも朱珍地博多織は裏表模様變りなるが故、好み手多し、その色合は媚茶、藍鼠、御納戸の内にて、磯洗ひ芦の圖又は螢に露草をあらはしたる模様などは殊に宜かるべし（十六圓以上二十圓以下）



紗かち絽織丸帯　金銀色糸縫模様　紅葉と觀来之図

尙は又た本年の新流行品としては紗の絽織といふものを見受けぬ金銀の色糸にて蔦水磯貝、紅葉と觀世水などを繡模様したるものなれば高雅にして清楚、夏向の帯地として上乗の品なり

○夏着の新柄

三井呉服店樓上陳列の新柄中最も新奇なるものを記載せんに

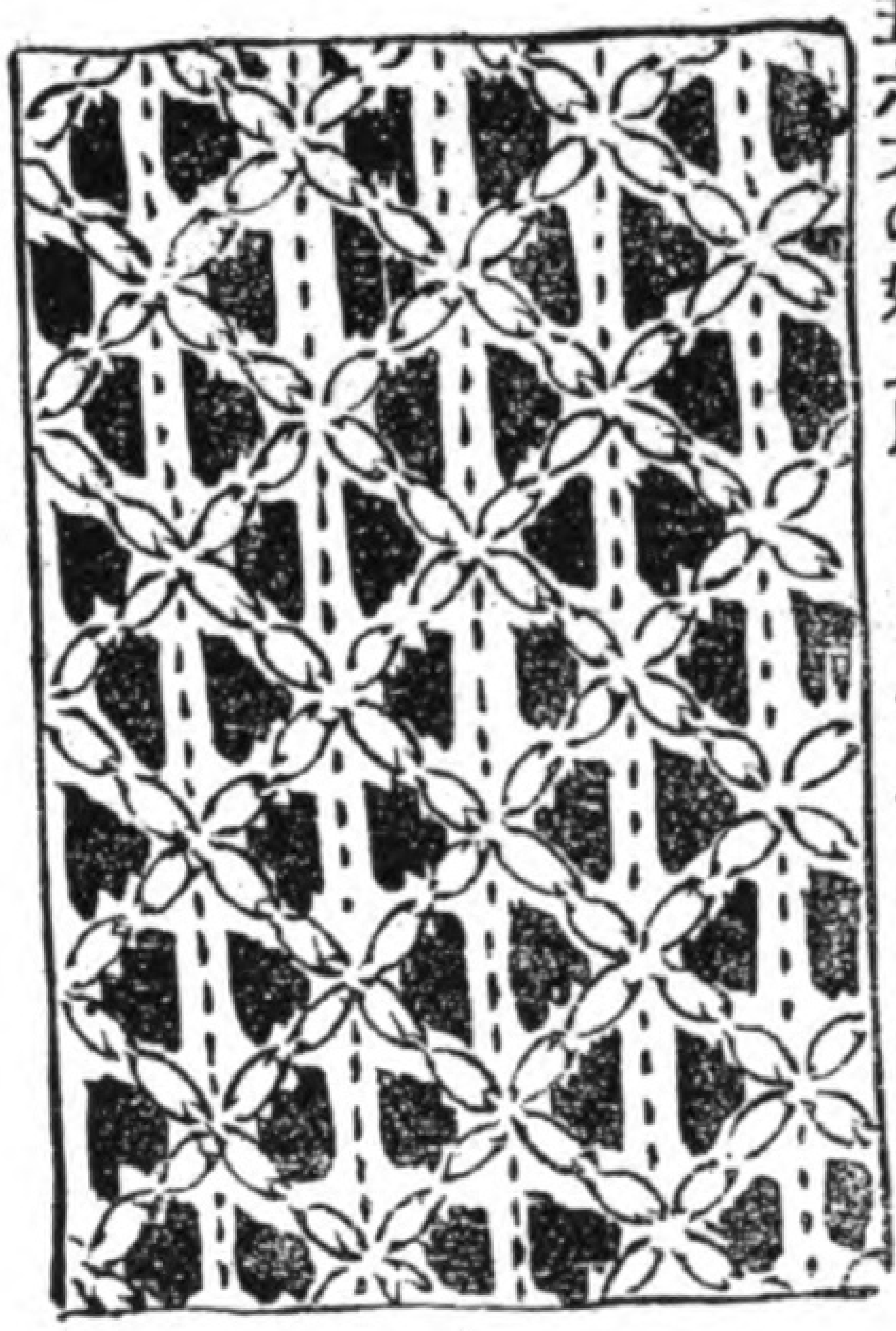
▲絽風通　（十九圓）

薄葡萄地に鼠をもて光琳の水を織出し、其の陰と陽とに菊の花を白糸にて織出したる上品の柄なれば十六七才の令嬢向として申分なし



▲紋御召（十八圓）

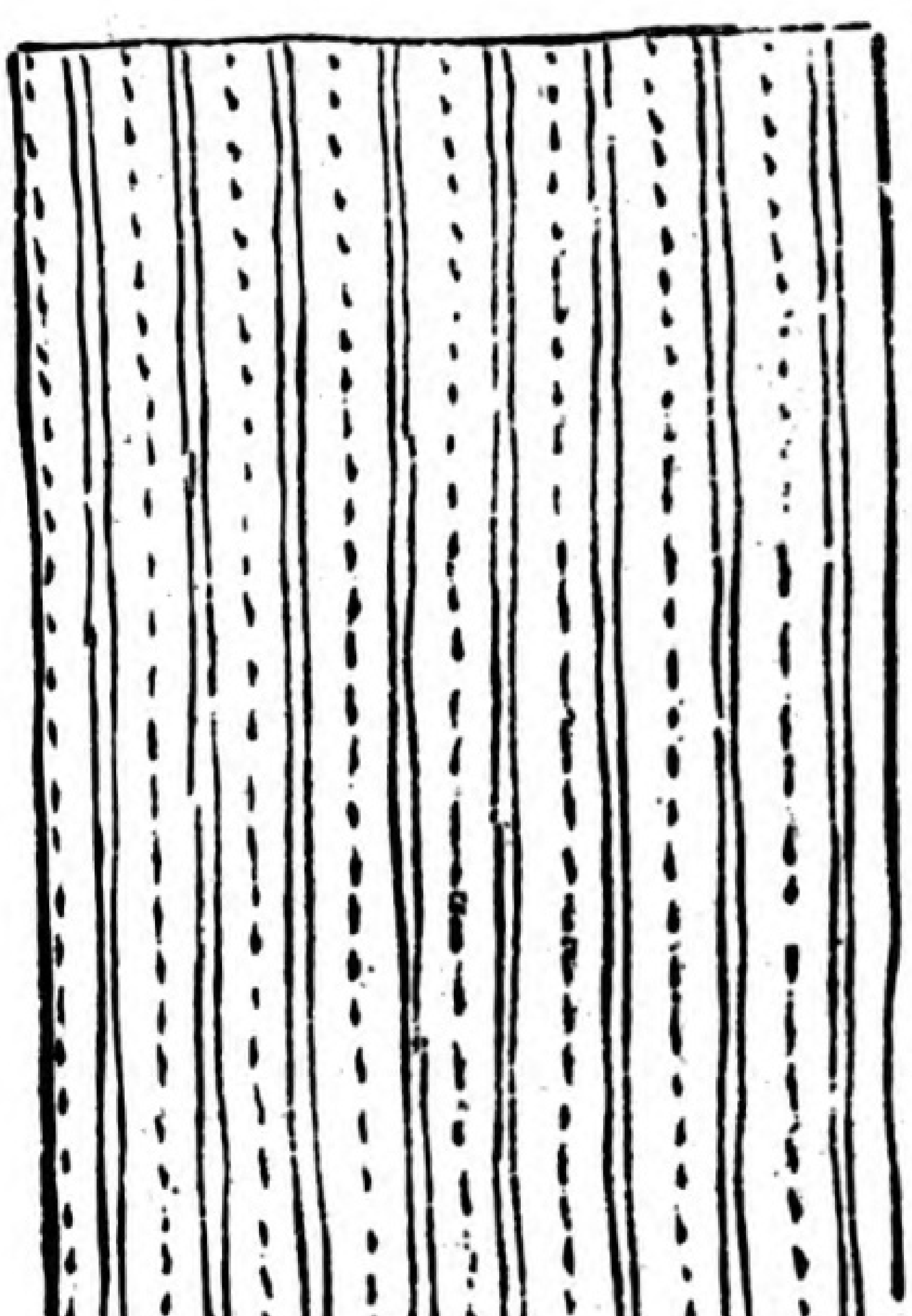
地色栗梅へヨゴシ糸をもて珍七寶を織出し、其の間を竪に茶と白の糸にて吉野を織したる高尚の品にして二十五六才の婦人用として最上のものなり。



▲風通御召（十六圓）

濃葡萄地へ白糸にて小さな丸を置き、其の間に水玉を散らし、更に其上に尾花を陰と陽とに置き、武藏野の月の意を寓したる、是亦た上品のものなれば、二十才前后の令孃令閨孰れにも適す。





▲玉川織（十一圓五十錢）

銀鼠の淡鼠の變り格子を織り出したる清楚の柄なれば男子の單衣としては着心宜しかるべし。

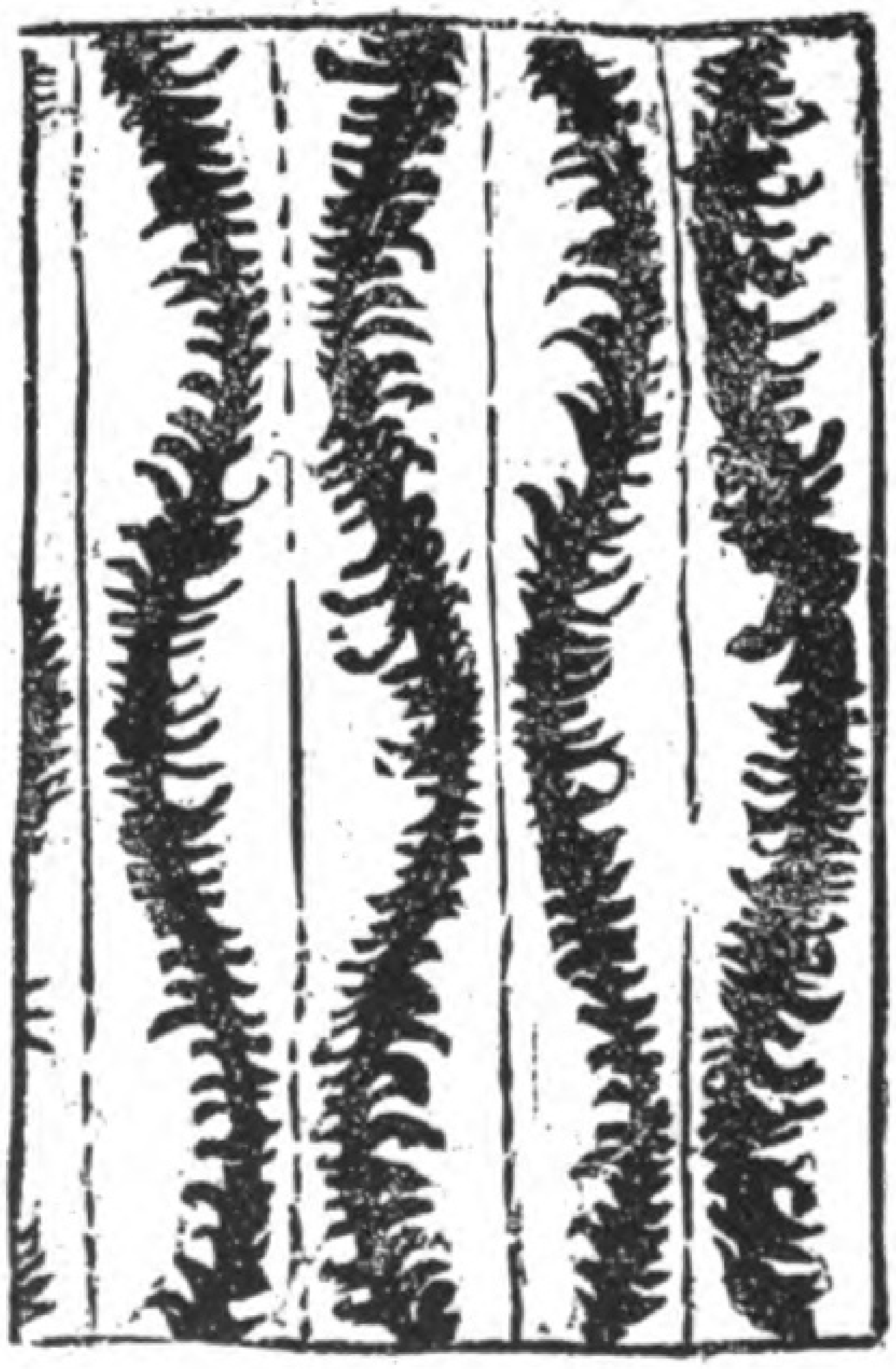
▲朱珍の丸帶（三十八圓）

地色白茶と紫紺地の段織にして白茶の所には銀鼠と金茶と茶と藍鼠と臙脂色とにて櫻と紅葉に光琳水を織出し、紫紺の處には利久鼠と臙脂色と白茶と金茶と白糸を以て櫻の丸に紅葉の丸を織出したもの、十六七の令孃に適す



▲朱珍の丸帶（二十五圓）

葡萄鼠地に金茶をもて波立枠を織出し、立枠の中央に赤糸を以て縱筋を織り出したるもの、是も亦た十六七の令孃向なり



▲厚板の丸帶（五十五圓）

地色柳鼠に斜の波を焦茶に茶に利久鼠とにて織出し、輪廓を白糸にてとり、其上紋に白糸と金糸にて雪村の鶴を陰に飛ばしたる至極意氣なる丸帶なり、二十五六の婦人に適す

夏向の家屋

入梅から土用の來るのはもう間もない事ですからこゝに少しく夏向の住居に就て申して見ませう盛夏三伏の毒炎を濱風松風の涼しい地に避けて一家自炊の樂しい日を送るのは近年一般の流行となつたが或人は之を現制家屋の不完全なためだと言つてゐる家屋改良の問題は何れ喧しくなる日がわらうとは考へられるが東京は所謂土一升金一升こゝに地所を所有してゐる者の多くないのは當然だが家屋を所有してゐる者も亦極めて少數で大概は皆借家して住んでゐる其を奇貨に慾の深い家主は月に年に柱の細い瓦の薄い吹けば飛ぶやうな借家を建てゝは眼の球の飛出るやうな高い家賃を貪つてゐる私民家屋の制の改まらない今日



では唯もう心外ながら家主に頭を低げて是へろ／＼小屋を城郭に頼まなければなりません住所の選定だの屋室の配置などいふ贅澤な熱は到底吹けぬ不便利だらうが不經濟だらうが不愉快だらうが衛生に適しながらうが如何も是非なしと諦めなければなりません唯疊建具や室内の装飾や庭園の剪裁だけは借家人の隨意にならうと思はれる疊建具の不潔なのや室内の不整頓なのや庭園の荒れてゐるのは春と秋と冬は我慢も能きるが夏ばかりは如何にしても忍べない避暑に行くことの能きる人は格別夏を東京で送る借家人の力の及ぶだけ不便利な借家を便利に不經濟を經濟に不愉快を愉快に不衛生を衛生にして住はなければなりません。

それで先疊から言はうなら遮莫もう借家のことである

から良いのが敷いてある理がない琉球でもあるまいが其に毛の生えた位の品に違ひない所々には先代の名殘の吹殼の燒痕も存してゐやうと思はれる之を淸潔にする爲濡雜巾などで拭く人が有るが彼は疊の目へ塵を湍めるやうなもので空氣の流通を惡くする殊に梅雨の季節などには黴菌の發生を促す然かといつて新疊なら日光に曝すのも不可ない淸潔にしたいと思ふなら晴天の日に十分に埃を打いて半日も日陰へ干すのが一番です

それから建具です建具といふと襖、障子、板戸の類ですが襖には雲母を引いたものや泥紙を貼るのは已むを得ない事情に由る他は不可ません夏冬ともに可いのは稍直段は張るが模樣のある白つぽい紬、太織、葛布などいふ布類は極安物でも泥紙には優ります。

其次は障子だ夏向きの障子といへば先づ多く葭障子ですが家に依ると津綟子などを張つてゐる向もある外觀上決して惡いとはいはぬが之は如何かすると嫌味に流れ易いのみならず經濟上あまり宜しくない最も可いのは硝子張だ硝子張の障子は紙や葭に比べて重いのと破れ易いのとで西洋建の家或は西洋建擬ひの家の他には多く用ひられてゐないが普通木造の日本家屋でも開閉の烈しくないところは硝子張に限る冬は暖で夏は陽氣だ殊に日本風の四面開放の家は硝子張の全部透明でない上下を磨硝子にしたのを嵌めるのは上品でもあり衞生にも適してゐると思はれる近年貴紳の邸宅などの座敷向に紙張の障子が少くなつたのも偶然でない借家してゐる人には全部を改めることは能きまいが座敷の一部又は書齋だけ位は硝子にしたい硝子張障子は案外日本家屋に似合います。

もつとも硝子障子は汚れ易いやうにいふ者があるなぞはと硝子も紙のやうに汚れるが破れたときの他は貼り替る世話はない掃除するには石鹼を布片に塗つて拭く歟又は燒酎石油などに浸して拭けば奇麗になる然し拭いた跡を更に乾いた布片で拭かなければなりません。

夏の雨戸これは場所に依り用心の惡くない程度まで上部を一尺許も欣障子にして置くのも可い然し之れも借家では言ふべくして行はれ難い。

次は壁、壁に無論夏向などがある理はない土壁、板壁、貼壁いづれも夏になつたからといつて變更すべきではない但し土壁の上塗は其人の好みにも依るが砂塗といふのは鴨居、床、床脇の他は如何も感服が出來にくい客室や居間は成るべく黄大津などにして欲しい昨今のやうな梅雨の季節には明るいし何となく室内が清潔であるやうに感じられる普通の貸家には泥大津などが多いやうだ之れで塗れば直段は安くつて出來やうが那の薄黒い鼠色が如何も面白くない稀には白壁を尊ぶ人もありますが夏は日光の反射が强過ぎるのと汚れ易いので普通の家には不可ない貼壁は一寸くすんだ色なら冬は暖かに見えて夏は涼しからうと思はれます

猶このほか夏向の器具庭園に就ても逐一こまかい注文がありますけれど徒らに長きに失する嫌ひがあるから今は唯避暑に適する家屋に就て近年流行のもの二三種を記して見ませう。

「避暑に適する家屋」これは却々むづかしい注文で上流生活の人でなければ縱令設計してみたところが建築することは覺束ない然し參考までに記さうなら第一「四阿折衷のもの」第二「普通平屋にして重に夏時に適するもの」第三「二階家にして寒暑共通のもの」位です。

まづは「四阿折衷のもの」これを住居とすることは能きぬが富豪の庭園内などには往々みかける建物で其構造法は四谷丸太を四方に建て屋根は萱コケラ、檜皮なとで葺き棟は晒し雄竹にし桁は杉丸太と晒し雌竹とを取交せ藤蔓で締めて置くまた屋根裏には葭簀或ひは編竹様の物を用ひ竹椽に細丸太などを取交せる其れから廣小前即はち四阿の前の庇様のものには小前竹と稱する雄竹と雌竹とを取合せ藤蔓などで結ぶ中央には圓形又は角形の卓子を設け其周圍には孟宗竹の腰掛臺又は伐株などを据ゑて椅子に代用するそれで附屬の小建物には二疊位の小座敷を作へ四方より風透の好いやうにして爰には茶器、莨盤、硯箱、料紙、枕位を置くのです。

それから「夏時に適する平家」とわれば家の向は東南

でなければならぬ屋根は瓦より戸田茅沼茅などが宜ろしいが若し瓦を用ゐるとすれば天井を高くする必要がある壁は根岸土、大阪土、西京北山產などの鶯茶又は松葉色などが最も涼しさうだ椽は廻り椽とし東より南へ南より西へ附け西を行止りとして爰に厠を設けるが椽の用材は家の柱が丸太とすればツガ又は晒し雄竹、厠は普通三尺位だが昨今の流行は三尺五寸以上四尺位で二方窓又は掃出し口を附ける椽と座敷の中仕切の上の欄間は杉の柾目に竹などを刳りぬいたもの又床は床脇を取り違ひ棚を嫌つて通し棚を喜びます。

終りに「寒暑共通の二階家」これは市内の人家稠密の場所にもある要するに寒中は多く下座敷を用ひ暑中は二階を用ふる建方で前の夏向の平家建とは大いに趣きを異にする先づ家の向と間取を見るに西を背に床を設け東は壁として中窓を開け中窓の下には其間の長さだけの掃出し口を附け南と東に向つて座敷を設ける爰には二尺の濡椽と小い欄干を設け度敷と濡椽との間には稍小高い段を附け其仕切へ窓形の障子を嵌める又床と濡椽との角に戸袋を附けて置けば夕日を防ぐとも能きる其から北の一方には襖を堺に四疊敷位の横の間を取つて北窓を拵へ此間と床の北角との處に梯子段を取つけて上下の便を圖るです。

以上は極く大體の御話ですが、家政一部の參考ともなれば幸甚です。

天井、これも夏向といふ譯にはゆきませんが板張や塗天井は如何することも能きぬ貼天井にしてからが白色は客室などでないと汚れが目立つ借家では自由なことも望めないが唯なるべく高くないと夏冬の鬱陶しい日に不愉快極まる。

床の間には右床も左床もある正式といふと床脇の上に袋戸があつて中央に違ひ棚のあるのですが普通は那麽叮嚀なとはしてない何にしても一家中の最も神聖な座一本も殘して置くべきところでないから爰だけは必ず丁と整へて置て欲しい花瓶の花も絶やしたくない折角活けてあつても凋れたしみつたれた花なら無い方が優しです。

押入は大概後敷横か壁で二階でない限りは多く日光の屆かぬ濕めつぽいところにあるもので昨今のやうな天氣には衣類や蒲團に黴が生える隨つて衞生上頗る宜しくない此濕氣を防ぐのには押入の周圍と床板へ新聞紙などを貼る人もありますが之では根本的に防ぐことは難しい。

まづ床板から改良しなければならぬ床板が少しでも隙いてゐたら却々新聞紙位で濕氣の防げるものでありません。

床板改良の必要は獨り押入の中ばかりでない家中の床板を張換へて毫でも椽の下から濕つた空氣の侵入して來ぬやうに爲ねばなりません此點に注意しないで私の宅は方位が惡い其だから病人が絶えないとは往々人の說く所ですが間違つて居る病人の絶えないのは其家の向や空氣の不良なのや或は又光線の投射の宜しきを得ないには原因するが一番恐しいのは疊の濕けるのである。

斯述べて來ると無論椽の下の掃除が必要です東京では淸潔法施行で一般に石灰などを撒たが平生椽の下の空氣の流通が惡くつては何にもならぬ奇麗に掃除した跡へ粉炭などを撒いて好く空氣の通ふやうにして置くのも濕氣を防ぐ一法だらう市内の家屋の床は一体に低きに過ぎるです。

さて之れから家内各室の夏に適する注文を述べてみませう。近年は安普請の小さな家でも玄關などを作ることが流行るやうであるが苟くも玄關のある家に住むほどの人は夏向應接の間か何かに鏡と洗面器を備へて置くべきだ「暑氣見舞せなかを見せて此通り」などいふ川柳もあつて暑い日に汗になつたのを拭ふ間もなく主個の人と然やう然らばの挨拶するのは隨分くるしいです。

玄關の次には應接の間に就て述べてみる爰で面談するのは來客の中でも平生ふかく交つてゐない人歟さなくば先を急ぐ人である和風洋風何にてもよく最も掃除に注意を要する應接の間の汚いのは來客に不愉快を感じさせること一通りでない卓子があるなら新聞紙又は不

健全でない新刊の讀物位は載せて置きたい。猶この他に座敷、二の間、小座敷、書齋、部屋、居室、寢室、茶の間、臺所、化粧部屋、茶室などもある裝飾は主個の好みもあることだから敢て喋々することもないが湯殿の窓は何處でも大概高いやうです、那は外から見えぬやうに故意と高くしたのではあるが夏向は薄くらいのと暑いのと蚊の多いに閉口する下の方へ鐵格子の細長い窓を開けて簾でも懸けたら涼しからうと想はれます。

新刊紹介

▲小波洋行土產(下卷)

本篇の小波山人が洋行中の見聞雜記を蒐錄したるものを輯して洋行土產といふ。其の上卷は旣に幾多の珍事奇聞を讀書界に與へたるに今やその下卷出版せらる、上卷はより多く少年趣味なりしも、下卷はより多く大人趣味なれば却つて此の方興味多きが如し。本卷收むる所、船中ゆれ〳〵草、大陸鐵道かたくり毛、伯林まごつき毛、伯林見物記、白佛來H記、伯林片信、居た伯林、其他數項あり、孰れも山人獨得の平易流暢の筆を以て其の周到なる觀察を殘る隈なく寫したるもの、讀み去り讀み來る間に彼の地の人情風俗躍如として紙上に浮び出づるの觀あり。實に維新以來洋行者の數は夥で擧ぐ程あれど、斯の如く價値ある土產話を齎らしたるものは著者に於て初て之を見ると謂ふべし。而かも其の製本は獨乙最新式の裝釘に則りたれば外觀の優美なる未だ曾て見ざる所、內容の多趣味と相待つて机上の珍となすに足る、別けても眼を海外の風土に走らし、耳を世界の話に傾けんと欲する者にはこよなき師友たるべし。(定價一圓二十錢)

▲應用理科家政心得草(婦女文庫第一編)

一家を切盛りする細君方に家政上の智識を敎へる目的で、着物、庭道具の事から、洗濯の法、蠹魚除けの心得、飮食物の事、勝手元のおきて、掃除、消毒、住居、燈火、爐火、衞生、美粧等の事柄を一々學理に照らし應用に鑑みて、親切叮嚀に辨へてありますから婦女の爲には至極重寶な本で御在ます。(河西璞氏著獨立評論社發行)

▲嗚 有 情(フランツホナイセン原著)

本書は婦人、戀愛、婚姻の三者に就ての美的思想を古今東西の載籍中より拔摘したるものなれば、古來女性に對する先哲の觀察を伺ふべく、又た少年少女が自己の理想を高め品性を養ふよすがともなるべし。(齋木仙醉譯東華堂發行)

▲和英對照日本歷史櫻とばら

日本歷史中特筆大書すべき事項四十八章を和英の兩國語にて對譯せしめたるもの、行文頗る平易、英文研究者の好伴侶たり。(谷口實華著文誠堂發行)

才媛詞藻

大町桂月君撰

(天) 港　岐阜　なでし子

ひれふりて泣くらん人もわらぬ身を
送るに似たり港江の月

(地) 港　麹町　神谷よし子

帆はしらのひまより月は出てにけり
君をおくりて去りかぬるまに

(人) 港　小石川　佐々木まさ子

暮のかねみなまできかで舟出しぬ
港入江は月となるらむ

秀逸

港　京橋　吉田竹子

わら鷲の羽風にたえず浪立ちて
月さだまらぬ旅順口かな

港　信濃　竹鼻はる子

君のせて港をいでゝゆく舟の
氣笛かなしく日は暮はてね

足利尊氏　廣島　和知廣子

さくら花散りしく夜半も吉野なる
丸木の御所を思はざりしか

苗代　下野　はな子

蓮華草匂へる小田のせゝらぎは
かゝしのもとの苗代にゆく

足利尊氏　京都　赤尾こう

一すぢにつくす心を射たかへで
世にわしかゝの名をぞとゞむる

港　岡山　有本開子

遙かなる磯の松原雨はれて
港のわたり霧うすれゆく

苗代　下總　大矢泰子

賤の女が水堰きいるゝ苗代に
　砕けて淡し夕月の影
　　港　　岐阜　岩間文子

ウラジオの港のわたり船うけて
　月に心をみがく夜半哉
　　港　　埼玉　羽鳥松子

舟出せし君は歸らず港江の
　葦に音なく春くれて行く
　　港　　大阪　島君代

うき事もたのしき事もこきませて
　みなと〳〵の舟人の夢
　　苗代　　相模　雲井花子

虹たちて小雨はれゆく苗代の
　みどりにそよぐ夕暮の風
　　港　　牛込　近藤花子

三保の松富士の白雪かすみけり
　清水港の春の夕暮
　　足利尊氏　　岐阜　山内ゑい子

かりそめにたてしいさをゝはてりかに
　このてかはしはとうらかへりけり
　　足利尊氏　　北足立　三上常子

南北風さだまらす大君の
　御代吹みだす醜の尊氏
　　港　　茨城　田村源子

外國の舟の入るたび棧橋に
　たゝずむ乙女誰をまつらん
　　港　　周防　渡邊千代子

十反の白帆に赤き夕日あびて
　由良の港を出づる大船
　　足利尊氏　　肥前　松浦かね子

時ならぬ浮雲いかに葢へばとて
　葢ひつくすべき日の光かは
　　足利尊氏　　西多摩　米仙女史

楠木のかれし園生に山おろし
　心のまゝに吹あれにけり

佳調

港、苗代、足利尊氏　　小石川　犬飼三枝子

ふる里の港の月に船はてゝ君きくらむか愚き子の歌

●　　芝　すみ

霜つみすゝこゑ靜まりて湊江の更けゆく月に千鳥なくなり

●　　駿河　菊地武子

山吹の花ちる小田の苗代に夕日かたりて蛙鳴くなり

● 芝　川井喜久子
藪椿ほろ〳〵落つる山のべの苗代小田に蛙なくなり

● 播磨　中村やち子
引きはへししめなは重く雨ふりて苗代水に蛙なくなり

● 茨城　菊地峯子
若苗を枕によせて病む妻の苗代水をかこつ雨の夜

● 宮城　庄司よしの
わざなりてかへる兒ざまみがゝれて千賀の浦のたゝにうれしき

● 下野　清水ちか子
舟人のこゑものどかに耳なれて事なくつけり國のみなとに

● 河内　大矢たれ子
たらち根の親のみくにをはなれ来てはじめてつきしさんふらんしすこ

● 山口　本島みわ子
白髪の妻今日も亦来て打眺め打ち笑みて去りぬ小田の苗代

● 駿河　林すぎ子
千代かけて光りかはらぬ天つ日をおほひし雲のいまはしきかな

● 青森　淺田壽子
この秋の美のりを祈る心地して苗代小田に蛙鳴くなり

● 群馬　入澤芳子
み墓を仇に返して吉野なる盛の花を散らしけるかな

● 伊勢　和田正子
暮くれぬ青みわたりし苗代にはなちりかゝる夕くれのそら

● 長野　山本こまつ
苗代の日毎に青む色見れば田を持たぬ身も打笑まれつゝ

● 信濃　木邑綾子
芳野山北風つよくふきあれて花たちばなも吹き折られけり

● 函館　横川とめ
山の端に月は眠りて港江に涼しく見ゆるいざり火の影

● 佐賀　西江しづ
夕暮を一人埠頭に佇みて浪のしぶきに袖をぬらしつ

● 讃岐　丸山匡子
大船の眞帆に夕日のさしながら浦の港に五月雨のふる

● 和歌山　米田時子
舟はなく月影ふけしあれ港の白浪がくれに千鳥なくなり

● 下總　石渡常子
演習の終る即ちいくさ舟よりて集ひて港に入るも

● 遠州　鈴木恒子
いとし子を木影の籠に入れおきて時々見つゝ植うる苗かな

● 堺　深井ぬい子
大君の御幸かしこみ濱遠津の三つの濱邊に祝砲響く

● 讃岐　人不知
音もせて夜半に春雨ふりけらし苗代水の今朝はにごれる

● 播磨　中村やち子
戦船數をつくして御幸待つ神戸港の春の曙

● 小石川　渡邊すみ
風なぎし鳥羽の港にあけかたにふな歌うたふ聲はるかなり

● 下總　千葉秋峯
うちよする波に黄金の色見せて出船入船數も知られず

● 陸中　伊東つき子
林なす帆柱靜く日は暮れて海面はるかに見ゆる大船

●河内　矢寺はぎ子

賤の男かしめ引はへし苗代のかけひの水に夕日てりそふ

●高知　北川すて子

港口にむかへますらむ母君にあすはまみねん十年ふりにて

●美濃　向井富士子

いぬる年別れをしみし此港今日は樂しく君を待つなり

●神田　高塩ふさ子

何となく物めすらしく覺ゆかなしめ引はへし小田の苗代

●大阪　田中瑜璉子

濱花鳥なきて送りし兄君をいつとせぶりに笑みてむかふる

●下總　梅の家都子

せきいるゝ苗代水のひとすぢに秋のたのみをかけてまつらむ

●京都　三の宮露子

故郷にあらぬ物からなつかしきともの港に船ちかづきぬ

●佐世保　山本秀子

蒸氣たく昔にかはる佐世保浦花の港になりし今日哉

●千葉　小出ひで子

打けぶる苗代まもる賤の夫のかゞしに似たり雨の夕ぐれ

●神奈川　川井あさ子

港江の葦の葉白く霜さへて千鳥鳴くなり寒き朝けを

●八王子　佐藤幸子

ひき入れし水さむからずなりにけり入日さし込む小田の苗代

●福岡　宗像かれ子

棧橋は船の烟につゝまれていでいる汽笛なみに響くし

●周防　志摩子

百船の眠れる春の夕まぐれ由良の港の波靜かなり

●大阪　井上貞女

漁帽折り笠うち並べて早苗とる小田の苗代あめしづかなり

●長門　清邊雪

夕ぐれの水すみわたる苗代にうつるも淸し三日月のかげ

●日向　紀藤榮子

和田の原ゆきかふ船のいかりおろす港ぞ國の寶なりける

●岐阜　志波田淸子

外國の船も港に集ひ來て交り結ぶ御代ぞうれしき

●美濃　莊加ふよう

くち果てしいかりの綱の跡なく人なき島に港たづぬる

●長門　原田糸子

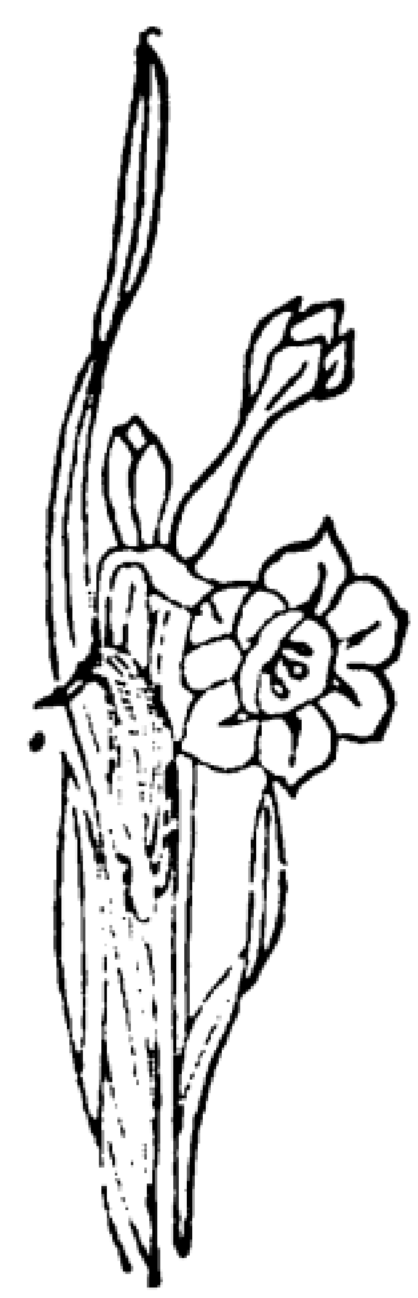
父君の船出送りて佇めば港を照らす有明の月

●足利　黒澤宗子

帆ばしらの林をぬうて蝙蝠のまひかつめぐる夕月夜かな

●伊勢　白井きの子

さらにまたいそがしげにも乙女子の泣く子の方に植へつゝぞゆく



鎌倉右大臣の夏の歌

○三月盡

惜ひともこよひ明なば明日よりは
花の袂をぬきてかへらん

○子規

子規きくとはなしにたけくまの
まつにぞ夏の日數へぬべき

○菖蒲

五月雨に水まさるらし菖蒲ぐさ
うれ葉かくれてかる人ぞなき

○五月雨

五月雨に夜のふけゆけばほとゝぎす
ひと山邊に鳴てすぐなり

○蓮露似玉

さ夜更てはすの浮葉の露の上に
玉とみるまでやどる月かげ

○螢火亂飛

かきつばたおふる澤邊にとぶ螢
かずこそまけれ秋や近けん

○蟬

夏山になくなる蟬の木がくれて
秋近しとやこゑもをしまぬ

○夜風冷衣

夏涼みおもひもかけぬうたゝねの
夜のころもに秋風ぞふく

和歌兼題　(〆切六月十五日)

螢
濱
源實朝

才媛詞藻

▲家庭日記
▲寫生文　(〆切六月十五日)
▲雜文

▲各地料理　(募集)

投書規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折(和歌は端書に限る)の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴ろべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛させらるべし▲投書原稿一切返却せず

學びの園

小西雅子

春のかたみの山吹ちり藤散りて佐保姫が花染衣はいつしか青葉と衣のぬぎかへられぬ、わが學びの園生も海棠の若葉すゞしく、きのふ紅の小き芽をふきたりし芍藥もはや美しき花さきみだれたり、青き小き玉、絹糸につらねたるやうなりし柳の、やう〳〵こまやかになれるかげを少しはなれてかきつばた、ゆかり色こく二ツ三ツさき初めぬ。其けだかき姿をしたひよるもあればすゞしき青柳のかげにいこふもあり、かしこにはテニスに汗をながし鬼ごとに黒がみの亂るゝも知らざるあればこゝにはダンスに誇ひるがへすありてひるのやすみはさまざまなり、氣もさえ渡るピアノの音をきゝつゝ己れはひとり薔薇の花かげにいこひて思ふは友の君が上なり。わゝなつかしきつぎ子の君、ゆき子の君、ひるのやすみにはもろともに六つの袖をつらねていとも樂しくあそびたはむれし君たちはことしやよひの頃卒業の榮をかよはき肩にゝなひて學びやをいでられしなり。其別れの折よ、ものをも云はずうつむきてぞ泣きし。思へば悲しかりしよ。

ゆき子の君、詩の神の愛ふかくして御歌御文にひいで給ひ才ゆたかにおはすこそ羨ましけれ。遠く田舍の學びやに敎鞭とり給ひつゝあるつぎ子の君、小さき先生愛ふかき先生となりて無邪氣なる里の子等をみちびきたまふらむ、かの地は景色よしときくを御歌やいかに多からむ、愛らしき御おもわに笑たゝへられつゝピアノにつれてダンスしたまふ時はげに天眞爛熳エンジエルのやうなりしなど思ひつゞくるほどに時を報ずる音たかし、おどろきて立ちあがれば若葉をわたるすゞ風さとかほりて雪より白き花びらはら〳〵と袖にこぼれぬ。

女

なてしこ

男子ならばよきにと生れ出でしより本意なう思はれたるも、日にまし愛嬌づきてはなか〳〵に手の内の玉ともてはやされつ、早や歩むやうになれ、箸もつやうになれ、學校通ひするやうになりたらむにはなど、引延すやうに可愛がられて、寢覺の乳も温かき母の懷に、呂律もわからぬ片言云ひて彼よ此よとむづかりしも暫時に

て、軈ては紙雛抱きての母親氣質、美しき家庭の影の小さき胸に宿るもうれしや、かくて學校に入るやうになりては、筆よ、紙よ、紅き帶よ、毛糸も欲し、簪も欲し、隣の美代樣と同じの改良服、夫れに牡丹色のリボンと袴となと、家政の如何は平氣に注文して、男の子と違ひてと呟やかれつ、高等小學に入り、女學校に入りてよりは、年一年に身作りを改め、當世流行のものならではと氣高う搆へて、鏡に向ふ心もいつしか濃やかに成行程、莟の花も三日見ぬ間に綻び初めて、鬼も十八の年頃になれば又一入、親は行末の幸運を祈りて、よき良人を、美しき家庭をとより〳〵の相談、襖のかげにて夫れと洩れきいては少女心の胸は早鐘、只恥しさと怖ろしさに上氣して顔は火のやう、見る人はなきかと氣がねする間の袖屏風、いつか是非にと相談は纏りて今更らしき兩親の宣告、一夜を恥かしの盛典に願ひしは夢か、嫁ぎし家には舅姑の頑丈なるがましませども思ひしよりはお優しき方なるに、良人は反つて心強うて、万事に快よからぬ素振ばかり、若し我身を飽かれてか、不行届を厭はれてかと寢られぬ夜半を泣き明かしゝ事も有りしが、一年思はぬ大病に罹り給ひて漸う命拾ひをし給ひてより以來、全く別人のやうになり給ひて愛の光の至らぬ限なく、可愛きものゝ二人あるを手の内の花といつくしみつ、時々はピアノ月琴なとの音を弄びて、老ひたる兩親を慰めしも短かき間にて、あはれ、此世を子孫に讓りて浄土の空に旅立ち給ひぬ、夫れよりは誰に憚りなき代りに凭れかゝる人の無きまゝ、俄に人知らぬ苦勞を覺えて、「理想」の「空想」のと濟し込む暇も無く、内治外交を一身に集めての大立廻りも、思へば面白の浮世の舞臺やな。去る程に子を持ちて知る親の恩、たゞうか〳〵と無理云ふて過ぎしが今更に恥かしき身の上花の色はうつりにけりなと徒らに呟くも奈何にせむ、子は早や親と脊比べする樣に成りて、徴兵檢査に一苦勞するも忽體なく、縁談の口がゝりては女丈に相應の仕入れを心配して、夫の知らぬ遣繰に着類の一枚も殖してやりたきが親心、漸く兄妹の落付を定めては、安堵の胸を寛げての隱居住居、鄕に入りては鄕に從へとやら、いつしか其道に心を寄せし念佛三昧も、強ち後世の爲のみにはあらず、物見遊散の折々にも若い夫婦の機嫌を伺ひて姑の嗜さを立てられまいの氣配りもなみ〳〵ならず、只々我が子の可愛さと孫の愛とに日を送りつ、翌日をもしれぬ梅干婆の、昔の春を語り出づるもをかしきに、一つ違ひの夫が赤い衣裝を祝着につくるよりは、長

暮の兆か、耳稍遠くなりて浮世の事はよそ吹く風と聞き流せと、何やらおもしろからぬ話の時々耳に入りて、心淋しき寝覺の夜もあるものぞかし。

思へば、僅か五十年の人生を、よし十年二十年生き過ぎたれば迚、娑婆塞げの厄介扱ひに澁面作るが通り相場、不老不衰の藥にても服まば兎も角、さなくば女に生れともなき浮世にぞありける。

山遊び

静岡　栗田よし子

四方の景色あまり長閑なれば、破窓の下に空しく暮さん事の本意なくて、三人四人の友と愛鷹山の麓野にワラビ折りせんと目ざす山に昇りて先見渡せば、東西北何れも高き〱山々連なりて南の廣々たる海面はぱつとして水天定めがたく漁舟は三ツ四ツちら〱と見へ伊豆の岬ははるか西には三景の一とも數へられたる三保の松原はかすみの内にほの見へて恰も名畫の薄墨にぼかしたる如し、あら此景色を寫生畫の手本ともなさまほしう思へり此處彼處の草花には金銀の胡蝶戯れ遊びて手折らんワラビは一面にすきなく生ひ居たり、山間を流るゝ水は水晶の如く岩に當りて花と散雪と碎けて物凄き迄にザア〱と音高く振はし峯にて唱歌うたへば下行く川音岸の松風、鶯、雲雀諸共に自然の友と調べ合う面白さ、げに得も云はれぬ心地せり、山里は常に淋しと云へども夜とても峯の松風、音樂つたへ折り〱の眺めも又美はしく、青葉の梢、錦の世界、何れも業繁き都には得られまじ眺めぞかし、げに氣高きは山にこそ樂しきは山里にこそ。

割烹の一時間

横濱　吉田辰子

日うらゝかにはれ野山の景色もすみ渡り咲くをまち落るを惜しみみし山の櫻もなごりなく失せし昨日今日こゝ平沼高等女學校の運動場に天眞爛漫と遊びみだれし我等は今しも午後授業始の鐘なりしより一同整列して學び屋の方に行きぬ此時は恰も我等はじめての割烹實習時間なりしなり室に入ればはや師の君は來居給ひて、きやらこの割烹着めさせ我等をまちうけゐ給ひぬ皆かたみに助け合ひ上着をきをへし時師の君は一株の大根とり出し

給ひよき程にきりそを一同にわたへ細かくきざめよと命じ給ひぬ常々家にありて下女が仕事見ける頃はたやすき事の樣思ひしを扨も手にとれば思ひし如くにはゆかぬものよ。まして友人の中には數多のはしため使ひ給ふ雛樣あるにかゝる事ははそのをとりてより始めての事なるべし。我さへかくあるをといたくも感じぬげにおもしろき此時間開け行く御代のうれしさかゝる事までをしへ草のうちにまじへのこるくまなく導かせ給ひやがて人となりわはれ女學生ゐがりよと世の人よりのもの笑ひとならざる樣とのみめぐみ謝しまつりてもあまりあることにこそあまりのうれしさ且つは有がたさの極と思ひてこゝに筆をとりしになむ

雨後の庭

富山雲子

降りつゞきしさみだれの空も、今朝はなごりなくはれ渡りて、さながら目覺めし心ちになりぬ、さても雨後の庭の愛らしき事よ、我めづる庭は殊にせまきに、大きやかなる泉水をめぐらして、めぐりに綠ふかき松を植ゑこみ、そが中に、いともいとも愛でたき紅葉一本あり、春の芽葉より、色赤くして、美くしきを、まいて、二三日の雨にくちぬれ、一しほの色をますに、又泉水の水も、いと清くすみ渡り金魚等の、よろこび麩を食ふもをかしく、雨の音に、さいぎられし噴水も、今ははてり顔に、高き音を出すもをかしく、綠の松をくれなゐよかきもみぢと共に、青く赤く清くすめる、泉水にうつりあふ景色、立田川ならねと、にしきを、織りなす如しげに庭のながめは、雨後にこそ。

寢顔

なてしこ

永の日の退屈さに玩弄遊びも飽たのであらう、いつになうめそをかいて、たんかをきり出してはなか〳〵一通で得心せず、乳だ〳〵と縋り付いた膝の上に、早やうと〳〵と睡みかけては、をり〳〵乳房を探つて慰むで居るので。

そッと抱き直して、室内に釣つてある釣床の中へ、美しい我が子の寢姿を移すと、輕う揺れ出した機會に、眼

を覺さうとして二三度身動きをしたが、つい其儘すや〳〵と寢入つて了つて、樂しい夢路に遊ぶのであつた。
あゝ、其罪ない我が子の寢顏の、いかにも神々しうて露程も汚れのない、尊い、美しい、眼鼻立ちを眺めては、あらゆる苦悶と不平とを忘れて了つて、只、熱誠な愛の薫りが温かい血の花から溢れ出るばかり、遂には其豊かな薔薇色の頰に接吻して、いふに云はれぬ總しさを感ずる、ともう何がなしに可愛くつて〳〵。
思ひ出すと耻かしい我が身の運命、ふとした緣から花嫁と仰かれた當座には、子と云ふ言を聞く度に顏を眞赤にして、胸を動悸つかして、那麼ものをと口籠つた內にも、愛の精塊を互の情から造り出す時が有つたなら、其愛の精塊から發する光明が、いかに此の平和な家庭に色彩を添へるであらう、かねての希望を滿たして男の子を生むだなら、とのやうに喝采の聲が揚るであらうか、女一生の大事たる初產に成効して、喜びの歌を口誦された其時は、甚麼愉快を覺えるであらう！と他愛もない事を思つて、獨笑みを洩らして居たが、時は恰も端午の節句に、勇ましい初聲をあげたのは此男子である。
けれども、此の神の樣な子を抱ていつ迄も〳〵平和な家庭を持續して行かれるだらうか、魔の手に捕へられて居る夫が、迷ひの夢の行末が怖しうて、遂に不幸の子とならなければ可いが、とつい僂ない心配までせらるゝわりなさ、あゝ、若、夫が無情に偏したなら、我が身も此の子も、實に冷たい運命に泣かねばならぬ、と人知らぬ煩悶をたえず小さい胸に漲らして、果は、時鳥の忍び音に、血の淚を絞る時もある此頃。
事、此の子か無かつたなら、と例の愚痴をこぼしても見るが、我が子の無邪氣な思ひを汲むでは、何で那麼事を、と胸撫下し、たとへ如何程な苦痛を受けやうとも、女の道を破つてなるものか、こゝが大切な訓戒だから、と切ない位置に狹つた我が身の、且夕神佛の袂に縋つて、祈るは夫の覺醒と、我が子が健全を祝するの二つである、それを二人は近き將來に於て、其百分の一なりと感謝して呉れるだらうか。
かく樣々の空想やら理想やらを描きながら、眤ッと瞶めた子の寢顏には、万朶の花のそれよりも芳はしい、神の靈氣か迸ばしるかのやうに、莞爾笑つた唇の美しさ‼、我は再び接吻せざるを得なくなつて、矢庭に手を延ばした刹那に、蝶が一つ、ひら〳〵釣床の上に舞ふかと見るうち、いとしや我が子の胸にとまつて、何やら神

秘を囁くのであつた。

花嵐

東駿　栗田芳子

月日は水の流るゝが如く行きて再び返らざらんこそ悲しけれ梅花の頃もいつしか過ぎて待ち〳〵し櫻花も今日此頃の吹くとしもなき春風にそゝのかされて四ッ五ッと咲き出でゝ行き來ふ人の袖にも敷島の千代の香りを送る木陰に遊びてあかぬ眺に日のくるゝも打忘れぬわたり小鳥のねぐらを急ぐ時入相の鐘は野邊の霞を通り來て沈々と花の梢を渡ればいたく時の移りたるに驚きて心忙しく夕餉の手傳を成す内に日は暗々と暮れ果てぬ明日こそはと樂しく結ぶ花見の夢も破られて夜半の嵐の音高く物凄さは秋の狂風にも似たりあゝ如何にせん未だ笑み初めし計りの蕾の花をむげに心無の風に散す口惜しさ胸痛ましう曙告るを待ちにけり夜はほの〴〵と明けぬれば疾く起て花の姿や如何なるらんと庭を眺むれば哀れ芳野櫻の愛らしき蕾はあまたもぎ取られしを如何にせん未だ幾日も永き盛りもまたずと我さへ一方ならず悲しく思ふなるを花の心やいか計り恨めしく本意なくも思ふらんとつぶやく間に今迄吹すさびし鬼風は今や何處の花を荒すらんと思ふ如く物靜かになりぬあな嬉やと云ふも敢ず曇りし空より春雨はしと〳〵と降りぬあらと力なくイめば袖に天ッ神さへ哀れと思ぼすにや涙の露か二ッ三ッされど〳〵さ迄になげく事なかれ明日は長閑けき天津日の差し出でゝ優しき神風も音信るならんを待てかしやよ花よ

山家の梅雨

周防　中谷登刕子

咲きぬとて花をや風の誘ふらん。嬉しき春も夢の間に過ぎ行きてはや物わびしきさみだれの空とはなりぬ。はれ間なくふる雨に汀の水さえ溢れいで。「あやめやかきつばた」のあぶるゝ水に漂ふ狀いと哀れなり。「さみたれに澤邊のまかきも水こえていつれあやめとひきそわつろふ」と古人の詠じ給ひしも斯る景色にやあらん。さらぬだに問ふ人稀なる山里に增して今日此頃の梅雨に言問ふ人は影だに見えず。園の垣根に卯の花の降りし

ぎる雨に惱まされし性らしく二ッ三ッ咲き殘りたるはさながら幸なき我身のうへにも似たる心地していと哀れなり。音のふものはたゞしと〳〵と軒端をつたふ玉水か或は幽に哀猿の叫ぶを聞くのみ。淋しさいとゞまさり行きつ何となく世に捨てられし心地して物悲しき折から不圖思ひいづるは都にものし給ふ登美子の君なり。ゐ彼の君は幸多きかな羨しきかな。かの君と妾は無二の友なりしが思ひ出だせば三年の前櫻の花のちらほらと咲きみだれたる下かげに互に四つの袖つらね惜しき別れを涙と共につげ給ひ遂に遠き都に文學ばんとてものし給ひぬ。君には常の望もとげはて丶錦の袖を古郷に飾り給ふ事も程遠からずなりぬ。されど妾は益々失望のふちに沈み物わびしく此山里に貴き光陰を空しく過しつ丶在る身には文の便りてそこよなき樂しみなるをされど彼の君にはたへて久さしく文さえ給はらぬは定めし花の都に心うつりて妾を見捨て給ひしかはた忘れ給ひしにやゐらんと、そゞろにゐりし昔のしのばれて思はずはら〳〵と落つる涙に衣の袖をぞぬらしける。折しも玄關の彼方に誰やらん人の氣合せしに妾は人懷かしき折からとて急ぎ走り出でたれど誰しも在らず、いぶかしさにゐたりキヨロ〳〵と見廻せば。ゐな懷かしの彼の君より玉章のゐりたり。ゐ丶此時の妾が嬉しさ何にたとへん秋の枯野に花にゐい。雪の深山に鶯の初音をきゝし人心それにもまさるよろこびぞかし。

岸邊の夕暮

横山いわ子

千山に咲き亂れし花の降りしきる春雨の度毎に漸〳〵色褪せてやがて吹き立つ一陣の春風に散らされてむなしく世は夏の神の御手に抱かれて四方の山々も綠濃き美の神の御衣となり變りぬ

夕陽の斜光に送られてわれ等が乘れる馬車は今しも玉津が濱一里の長堤を走らんとす

折りしもわれや西に沈める日のかげの今はの光さやけく將に影を遙翠滴らんとする彼方の錦が岳に隱さんとして岳頂燦爛たる豊旗雲を搖曳し五彩冷かに小波を漂はして鏡の如き玉津が海に金箭を斜に投げかけて百里一望輝く黄金の海の如く白帆の二つ三つ金波をうけて此方へと來る恰も是金盤上の銀碗全然神の靈筆もて描き出されし如し。馬車は進んで愈々一里の堤上を走る今しも日のかげの漸くうすれ闇のそこにと行きて僅かに玉津島

頭日の夕殘をかすかに殘して今日の別れをかなしむがごとし時しもかなたより漕ぎ來る一艘の漁舟島の間を縫ひつゝ鏡の如き水面に一條のうねりを殘して深く沈んだる夕暮の大氣に磯節の一曲漂はして來る歌は愈々明らかに聞かれぬ

君と別れて…………

松風につれて低く高く或時は近く或時は遠く嫋々たる餘韻が寂寞たる天地に澄み渡りて抑揚の調を恣にし居る心憎さ

後は磯打つ波のこう〳〵たる聲と自然に歌ふ松風の調とに遮られて聞へずなりぬかしこの單純なる生活に安じて安々と日を送る彼等はこゝに一日の報酬を得てその小希望を滿すべく安息を誘ふ光明に向て勇みの聲を揚ぐるならんか實にわれも一日のかれたるを願はざるを得ざるなり櫓の聲は愈々遠ざかりて遂に綠ふかき磯垂れ松の陰にかくれて見へずなりぬ

ふと沖の方を見やればいづこの間にか出で來けん玉津が町の皈帆連りて一帆去れば又一帆生じ各先を爭ふは果して如何なる善びの土產を妻子に急ぐなるか

日の漸く落ちぬれば玉津島の藍深き頂漸く色褪せて麓に見ゆる漁家の燈火の三ッ四ッ五ッ又もつゞきて六ッ七ッ寒き空に温き情ある家庭の光をわれ〳〵に送る磯の松原蘆家の間をちら〳〵と趣ある漁火の隱見する雅趣は實に自然の畵

日は全く暮れ果てゝ蘆荻の戰き魔の如くみ空に匂ふ星の花のあはれむべき人の子に希望ある光を送つて輝き初めぬ

別れて久しき友のもとに

米澤　神尾くに子

停車場に袂をわかちまゐらせしは軒より高く雪の積りし冬の頃に候ひしをひまゆく駒の足早く夢の間に年さへ改まり花咲く春もすぎ五月雨くらき夏と相成り申候處如何御暮し遊ばされ候やたへて御便りも申上げず御わび

の言葉もこれなく候さりながらこれとてもさら〳〵御忘れ申上げての事ならねば御許し下され度候當地に御住居の時さへ一日御目もじ致さねば何となう物たらぬ樣覺え候ひしをかく遠く御離れ申し候てよりは夜毎の夢のはかなきもおるひはとたのみ雲間の月に鳴く時鳥の聲聞きては御地の空はるかに忍びて此月いかにながめ給ふらん此時鳥いかに聞き給ふらんと種々の思ひにかきくらしふる五月雨に袖ぬらし居り申候これに付ても御別れに御願申上候御寫眞彼方につきなば都にて寫し贈らんといひ給ひしにそのまゝに遊ばされし事いと〳〵うらめしく存じ上候半年あまり都の風に馴れ給ひし玉の御姿拜したく候へば此方の心をくみ給ひて一日も早く御惠み下され度願上候妾がみにくきをもかへり見ず近ごろの寫眞一葉御贈り申上げ候よしやひなの住居のいやしきも昔ながらの姿と御思し召給ひてよ申上度事積の眞砂の數つきず候へどもあまり長く相成候故後に申上げ候あなかしこ

夏の朝

池永ふせ子

曉の鷄の聲に安らかなる夢を破られし折しも曉つぐる鐘の音は未だうす暗き朝霧の中より、かすかに響き渡りぬ、床を蹴て手拭肩に天戸をくり庭に出づれば、夜の守りの明星の光りうすれて、小狐の鳴く音かすかの山の上に、殘る鎌月短夜に取りのこされし風情いとをかし、しのゝめの空やう〳〵しらみゆく頃立こめしもやの奥より、馬追ひの歌に鈴の音の交り聞ゆるも面しろし、納屋より出し鷄の羽ばたきして勢よく歌ふもうれし、住居の内にては去年蒔きし姫百合源を得て時をえ顔に袖垣のほとりに頭をもたげて、斜に咲きたるを隣家の朝顔姫百合をうれひてか、垣を越えて蔓を出し葉隱れに三つ四つ二つ咲きたる他所の物ながらゆかし、さと吹きくる朝風に蓮の香を送りきて露を葉より落したるなどいとおもしろし、

恒根越しに見渡す限り青々たる水田には鳴き殘る蛙の聲の喧しき響を朝霞の中に洩し、畔道を繞ふて右に左に頬冠姿の朴々たる影より野良歌の或は遠く或は近く、囀る小鳥の音に合ひていとうれしく朝の風のそよ〳〵と髮を吹く心地よさ、右手の叢より遲れ咲きの林檎の花の紅なるが風の爲めに葉陰よりあらはるゝなど映ずるも

の響くもの皆やさしくたのしく感ぜられぬはなし、げに夏のあしたの空なかりせばいかで暑さを凌ぐ可き、朝こそ夏の命なれ
されどそれさへたゞ時のまにて、やがて露もきえ、花もしほれ泣く蟬の聲かまびすしくなりてうちはの風さへ暑さを帯ぶるかと思へばいとわびし

在京の友に

神戸　岡田美和代

私の家が昔に異つてどんなに荒れ果てたかは、昨日御報申上ましたから今頃御披見の事と存ますが、悲惨の狀態は日に増してつのるばかり、年老いた父母が終日を田の草とりに糸繰りに汗になつて精を出されても、人なみの事も出來ず三度の代にも困るといふに、どうして私ばかり學校に遣つて下さいと言はれませうか、私は今燃ゆる希望を抑へ、磐のやうに堅い決心を固して、犇々と込み上げる胸の苦痛を押し鎮め、縺糸の様に紊れた心を押しかくして、筆を鍬に持ちかへる可く悲しい運命に漂て居るのです、それを浮世の風がいかにふき荒むかを御存じない貴嬢には、代數の難間もなくヒストリーの暗誦に頭をなやます事もなく、氣樂に遊んで居るかと思はれて、薄志等と腸をゑぐる諷刺の言葉を送られたのでしやうが、春の野に咲いた菫がいたづらの兒に摘みとられたそれの様に、いつを限りともない悲境に沈むひとりのゐるを覺へて下さい、さよなら」



田守の里

日本橋 岡田照子

楽しからずや山ざとは、
山あり其所に薪木あり、
谷あり其所に清水あり、
田には稲あり野菜あり、
里には安き快楽あり、
家には清き團欒あり。

あした奨励の神は告ぐ、
ほの〴〵明くる有明の、
のこんの月は影あはし、
とく務めよや今日の業、
田うち畠うち鍬とりて、
秋の實りを待たん身は。」

亂れし髪もかんばせも、
流るゝ汗もかへり見ず、
種下したるうましいね、
みどり榮ある田の裡に、



あかき襷のほの見へて、
鄙のうたひはいや高し。

ゆうべ慰安の神は告ぐ、
「夕榮のこるおほそらに、
早や明星はきらめきぬ、
いざ打つれて休らへよ、
老にし父のこゝろある、
にほひ床しきこのめ煮て」。

美妙のうたは平和なり、
瑞穂のなみは豊饒なり、

＊　＊　＊　＊

嗚呼ねがはくは里人よ、
塵埃しげき世に處せど、
長久に神世の人となり、
報酬の秋をうたひてよ。

友を懐ふて

肥前 淺山康子

高き理想を捕えんと

都に君の去りにしは
花咲き匂ふ三月の
月も朧の宵なりき。

世の交りを人はしも
薄き氷と云ふめれど
君とわれとの交りは
アヽ管鮑のそれなるぞ。

才なきわれを愛しむ
君をばわれは姉とよび
われをば君もいもをとヽ
いとやさしくも宣ひき。

冬の木枯身にしめど
君とわれとの間には
軟かく又わたヽかき
春の風こそ吹きにしか。

かヽる親しき君と我
よし隔つとも怨みんや
定めなき世はなかく＼に
別れたるこそ望みあれ。

よべ雁のもたらしヽ
君がみ文を手に持ちて
花咲き匂ふはるの野を
さまよひ乍ら君懐ふかな。



蓮

横濱　増田泰子

一、短夜の　とばり落ちて
うす墨の　森の上に
きらめきし　水色の
明星は　西に斜め。

二、朝露ぞ　はの白う
稲の風　薫りきて
濃綠りの　池のはちす
ゆらひでは　露ちりぬ。

三、灯きえし　池殿の

おばしまに　倚りて見る
水の面の　星の影
わらじ是れ　螢なり。

四、水馴棹　浮艸を
かきわけて　舟に聞く
蓮の音　絶えてはた
鯉おどる　一しきり。

月の君

山口　井川ふい子

おぼろに霞む花の蔭　優しの人に手を取られ
問つ語りつ嬉しくも　戀路をたどる我影を
浦耻しくてらしたる　其夜の月も君なりき」
綠凉しくしげりあふ　柳の下にふねとめて
夏をよそなる睦び言　ぬしは笛とり我は琴
樂く歌ひて明したる　其夜の月も君なりき」
いつしか秋の風立て丶　ながめ淋しき夕間暮
病の床にふす人の　傍へに侍り看護して
絞りし袖に宿りたる　其夜の月も君なりき」
幾世を掛て變らじと　契りし事も仇となり



戀ひしの主は僂くも　落葉と共に散り失ぬ
我思ふ人の奥つきを　照す今宵のつきも君」

＊　＊　＊

あゝ戀人よ月かげよ　我を見捨て入にたる
月の宮居は何處なる　いほを結びて獨住む
今の我身を知るや主　言づてせよや月の君」

姫百合

尾道市　岡田梢

憂世のちりをよそにして
ひとりさびしき谷かげに
さよくさきけり汝が姿
げにひめゆりよ姫百合よ
汝れがうなじはひくゝたれ
世に謙遜を示しつゝ
汝れが色香は潔白くして
心のさまをあらはせり
汝れが姿のやさしさよ

汝(な)れが姿(すがた)のやさしさよ
汝(な)れが心(こゝろ)の氣高(けだか)さよ
名(な)もなき花(はな)も誇(ほこ)る世に
あゝひめゆりよ姫百合(ひめゆり)よ

夕暮

三河 都筑露子

黄金の征箭を空に射る
夕の雲を眺むれば
けがれ果てたるちりの世に
狂へる人の小さき哉。

翼もかろき白鳥の
行くへ見送る人の子の
胸にひそめる夕ぐれの
つらき思をいかにせむ。

若き羊の群追ひて
歸りゆく子が草笛の
自然の曲にさそはれて
あだし望もなかりけり。



許せ若者小羊の
愛にかゞやく眼もて
人こひしげにより添ふを
胸に抱きて歌はむに。

花賣女

東京 旭 賤女

露まだしげきあかつきの
野に出きて摘めば草ばなも
今はやかごにみち〳〵ぬ
いてや巷にうらむかな。

思へば神のみめぐみに
罪なくさける野のはなを
利慾のためにつれなくも
手折る我身ぞあさましき。

あゝ花びらのぬれたるは
やさしかるべき少女子に
似はしからぬこゝろもつ
姿をうらむなみだかや。

さはれゆるせよ花のきみ
病める母をばやしなはん
糧(かて)うるすべになれをうる
めしひの我とあきらめて。

あゝなさけあり涙ある
世のわかものよ少女子よ
花とわれとをあはれまば
とく買ひ玉へこのはなを。

花もめしひの手にありて
空しく散るを待たんより
まなこをもてる人々の
なさけうくるを願はんに。

やみふし玉ふはゝ君は
われの歸りをまちわびて
いとゞくるしきおん胸を
いため〳〵ておはさんに。

新妻

なてしこ

華燭まはゆき花の間に
朱のさかづき重ねては
若きを羞づるおもざしや。

血潮なみ立つ瞬間を
高くも謠ふことほぎの
唄の一ふし身にしみて。

情にふるふや胸の
清きひゞきをもらす時
神や「熱誠(まこと)」をさゝやかむ。

雌蝶雄蝶の香に醉ひて
深くも匂ふほゝゑみの
愛の泉はあふれたり。

されば今宵を新妻の
君はたふとき星の花
天つみ國や夢むらむ。

幸の光を身にそへて
明日の『つとめ』を思ほえば
君よ、えしらぬ笑みあらむ。



女學世界　定期增刊夏の卷

第三卷第八號

ひめゆり

初夏の新天地を飾るもの、初はる樹々の若葉の光より、山ほとゝぎすの聲の妙なる、初かつをつゝじの紅なる、いづれか初夏のいさましき、女學世界の景物ならざらん、いまや世界の増刊姫ゆり、初夏のころもを裝ふて我才媛の詞壇にあらはれんとす、當代閨秀の手になりし綺葩瓊章集めてこの裡にあり、されば牡丹芍藥の雨に傷める、若楓の緑滴るごとき、美人草の艶なる、藤の紫々たる、風情一々いふまでもなし、また是れ初夏の天地を飾る景物ならずとせんや。

▲福翁世帶の話……記者
▲時代風俗のぞき　山東逸人
▲新派女歌人　與謝野晶子
▲寫生の花（小說）　田山花袋
▲花あふぎ（史傳）　糸南泉
▲鎌倉の旅（紀行）　村松すな子
▲西洋姫ゆり　國府しが子
▲にごり水　白魚女史
▲若葉のひかり　玉簾女
▲衣通姫（史傳）　栗島とみ子
▲支那の少女　長谷川天溪
▲時代風俗畫がたり　畫界秀才

時代風俗には▲上古（鮨崎英明）▲奈良朝時代（池田輝方）▲王朝時代（鏑木清方）▲鎌倉時代（川合英忠）南北朝時代（大町懈方）▲室町時代（片山春帆）戰國時代（山中古洞）▲舊幕時代（篠崎竹舟）▲明治時代（村松月舟）

六月十五日發行

彙報

◉華族女學校春季運動會

華族女學校春季運動會は去月十六日午前九時より同校長廣庭に於て擧行したり各級生徒の唱歌、ホロチーズ、徒競走、遊戯、テザーボール、綾競、鐵啞鈴體操、體の脊伸、觸滑運動、平衡運動、螺旋運動、方形運動、花盗り、舞(「春遊」「小鳥」「孔明」)投球競爭、棍棒體操、軀幹及下肢の運動、ローンテニス、繩飛び、綾霰競走、拂坊障礙物競走、綱飛び數種、進行、柱廻り、器械体操、回旋運動、蛇行進、矯正術、炎出體操(春野の球打及び虹)野戰繃帶競爭、ホワイトリー氏體操、綱引等二十餘番の運動あり最後に君が代の唱歌を唱へ午後四時四十分頃散會せりと當日常宮、周宮兩内親王殿には佐々木御養育主任以下侍女を隨へ午前九時より富美宮、泰宮兩内親王殿下は林御養育主任を隨へ午後一時より同校に成らせられ運動を御覽相成り華頂宮妃經子、梨本宮妃伊都子兩殿下は午前より御參校あり島津公爵夫人以下貴婦人并に生徒の父兄保證人及學習院生徒六百餘名の參觀ありたり

◉露國女學生の擾亂

露國學生の職員並に政府に對する抵抗擾亂は毎々聞く所なるが本年春聖彼得堡の女子醫學院に於ても亦抵抗騷亂を醸したり官報の報告に依るに三月初旬女子醫學院の進級試驗執行手續規則の發表せられたる爲め六百名の女學生校内の解剖室に集合しその爲め敎師の說諭を受けたり校長は右首謀者と見做されたる二十八名に懲戒處判の宣告を言渡したり

●文部省夏期講習會

七月より開始の文部省夏期講習會は左の如く確定したりと

△東　京

國語學(自七月二十五日至八月十四日)(資格師範學校中學校高等女學校教員)(講師文學博士上田萬年、保科孝一、新村出)體操(同上)(同上男教員に限る)(講師坪井玄道)小學校教授法(同上)(師範學校教員及道廳府縣郡視學)(講師森岡常藏)教育(同上)(師範學校高等女學校の女教員(講師下田次郎)圖畫教授法(同上)(師範學校中學校高等女學校教員)(講師白濱徵)普通體操及遊戯(同上)(師範學校高等女學校の女教員)(講師井口あぐり)手工(同上)(師範學校教員及道廳府縣郡視學)(講師岡山秀吉、上原六四郎)鑛物界(自八月七日至八月廿日)(中學校教員)(講師神保小虎)

△京都に開設のもの

生理衛生(自七月廿五日至八月十四日)(師範學校高等女學校教員)(講師醫學博士坪井次郎)

△仙臺に開說のもの

數學(同上)(師範學校中學校男教員)(講師第二高等學校教授河合弟二)國語(同上)(同上)(講師第二高等學校教授岡澤鉦次郎)

△金澤に開設のもの

物理(同上)(同上)(講師第四高等學校教授西英盛)

△熊本に開設のもの

動物學及植物學(同上)(同上)(講師第五高等學校教授會田龍雄)(鑛物學(同上)(同上)(講師同上篠本二郎)

△岡山に開設のもの

物理)(同上)(同上)(講師第六高等學校教授瀨戸虎記)化學(同上)(同上)(講師第六高等學校教授松井元興

裁縫實習

女子職藝高等學院長　小出新次郎

●三つ身被布

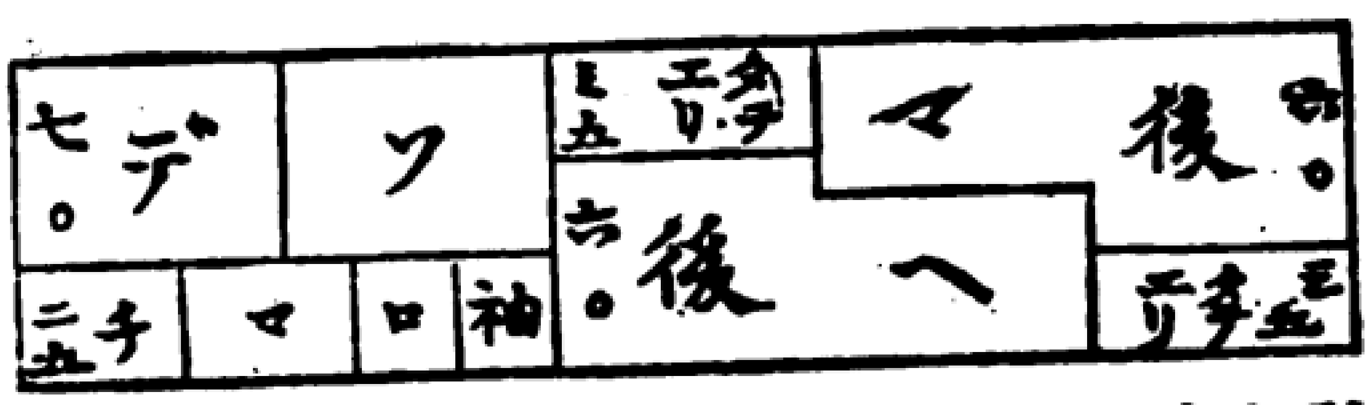
此の三つ身被布なども皆さんが能く御承知の種類であるが併しその方法には種類の差別もあれば可成完全な方法を研究せねばなりません殊に小衿の如きは丸みのつけ樣衿の附方等に於て出來揚りの上に非常の差を生ずるものなれば充分心ろして研究するの價値がある殊に是れまでは衿肩を操るにも一定の割出方法を採る人が少ない又小衿のなりを附けるにも同樣の有樣である故に十人の人が仕立て十枚十樣に出來ると云ふ不都合を生ずるのである。

又小衿の附樣とても私しは從來とは少敷異た方法を自ら考究して當校の生徒にも其の方法に因て敎へて居るが從來に比較して餘程遥り工合がよいのである故に兎も角も夫れ等の方法を説明する考へですからどうか充分心を入れて御調べください。

▲三つ身被布積り方

並巾用布一丈四尺を以て袖丈一尺四寸身丈四尺を以て袖丈一尺四寸身丈一尺八寸揚りの三つ身被布を造らんとするには裏布何尺を求むればよいのであるか。

先づ袖丈一尺四寸五分の裏表で八倍とし之れに小衿八寸を加へ次に身丈一尺八寸五分を六倍し夫れ夫れに下り及胴はぎ縫代七寸五分を加へ其の双方を合して其の内より表用布一丈四尺を引けば殘りが出るそれが即ち裏布の丈尺である。



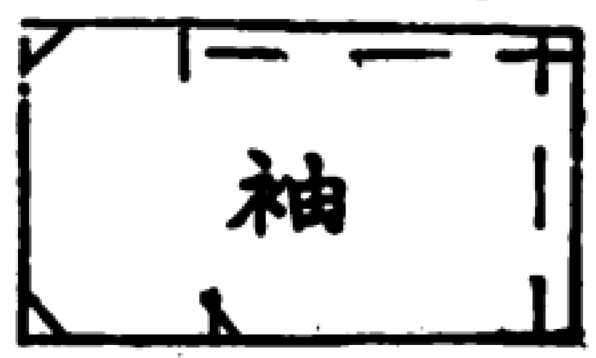
▲同裁方

裁方は先づ袖丈を四倍採り次に小衿八寸をとり殘りを横に三つ折りにして普通三つ身と同一の方法により裁切り又袖も同樣七寸巾位ゐにして缺きとり殘り二寸五六分巾の裂を裾袖口にとるのである。

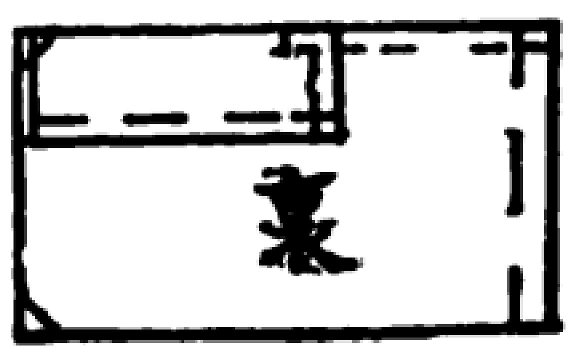
●肩へら附

先づ表袖を各一枚宛中表に折り二枚重ねて正敷置き第一圖の如く袖丈及び向ふで袖口手前で袖附と又左の輪の向ふ前に山篦を附けるのである次に裏袖を表同樣にして正敷をき其の左の向ふの處へ袖口きれを一枚宛折り二枚重ねて正しくして第二圖の如く袖の輪より一分去らして正しく乘せ夫れより袖全體の篦を附けるのである

第一圖



第二圖



次に表身頃を中表に重ね前身を右にして第三圖の如く正敷をき其の右のはしより二寸と篦を附け其の篦の處へ左の後身のはしを第四圖の如く折り返し左の輪の處に正敷折り印をつけ更にひろげて第五圖の如く今の折印の處の向ふ前へ針を刺し衿肩とするのである次は中間の衿肩の針より左へ後丈一丈八尺五寸と身丈の篦を附け其の篦より折返し布はしの向ふ前へ第六圖の如く針を刺し更に前身を衿肩の針より右へ後丈に下り八分を加たる即一尺九寸三分と向ふ前に篦印をつけ其篦より折り返し第七圖の如く布はしの向ふ前に針を刺し右左を正敷して其の上に裏身頃を乘せ更に第八圖の如く左右の下なる針を裏布の上より刺し換へ夫れより胴はぎの篦をつけ更に引返して第九圖の如く表を出し向ふの衿肩の針より右へ圖の如く前巾同樣の篦印をつけ次に衿肩操りの剞り出しの爲め衿肩の折りと前巾の篦とに渡り八分と尺度を斜に渡し其の尺度の渡りに習ひ篦をつけ其れより第九圖の如く出を亘りの三分の一即ち二分を出し夫れより其の篦にならい操りの篦をつけ

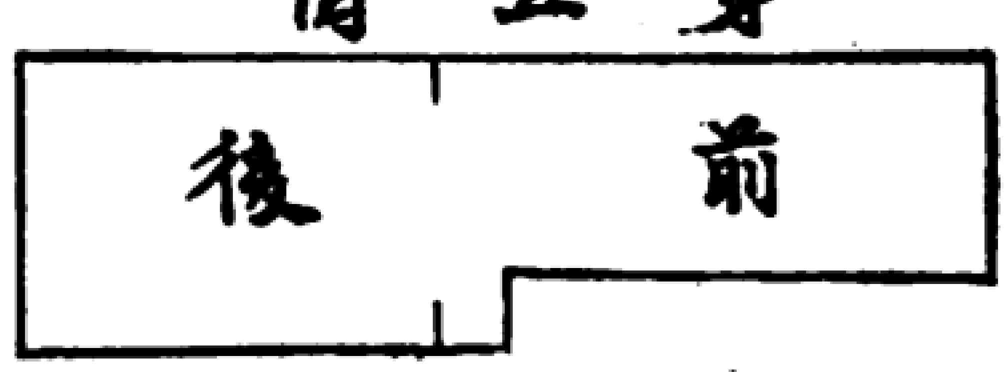
第三圖



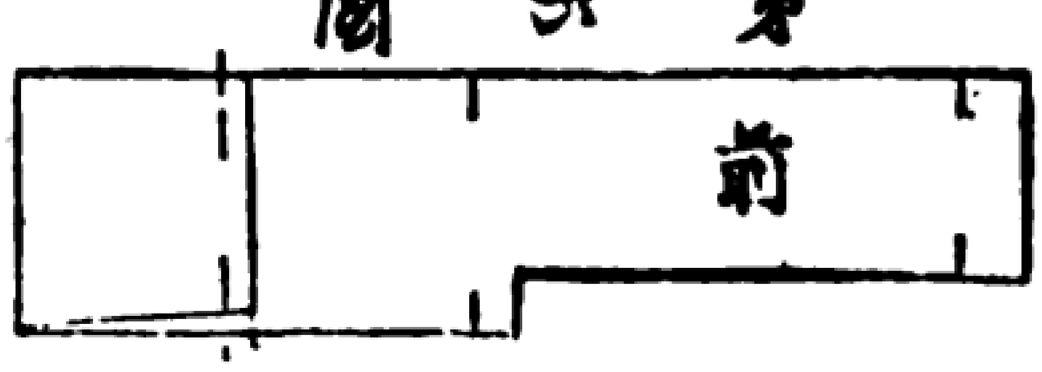
第四圖



第五圖

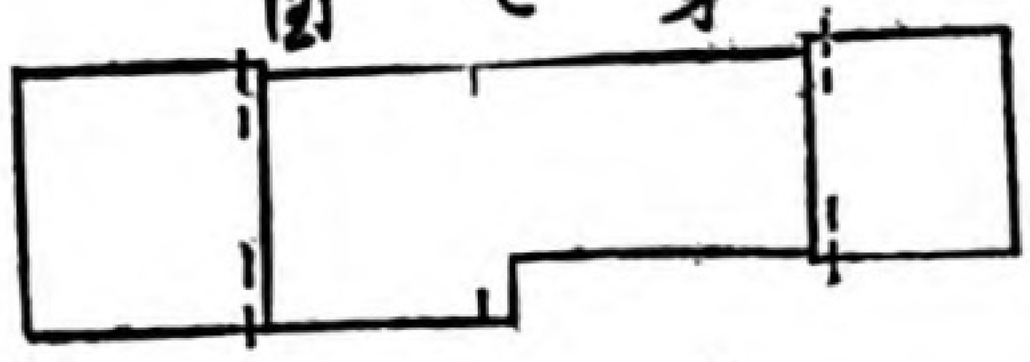


第六圖

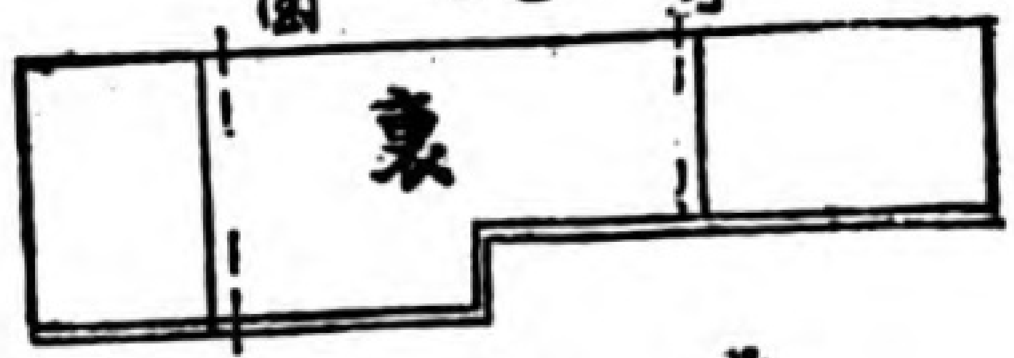


其の箆より缺きとる。
更に手前へ引き返し裏を上に出し第十一圖の如く左の後身を右の前身の上に折返し正敷して夫れより背縫袖附下八つ後巾前下り山箆等の箆印を附けるのである其の内最も注意すべきは前下りの箆を附けるに當り向の一分の明き箆を後巾の箆の處にてする。

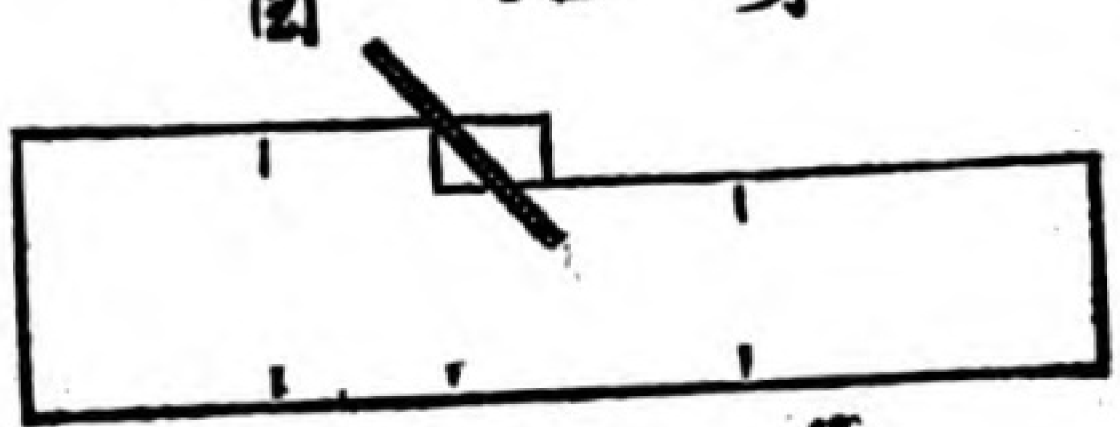
第七圖



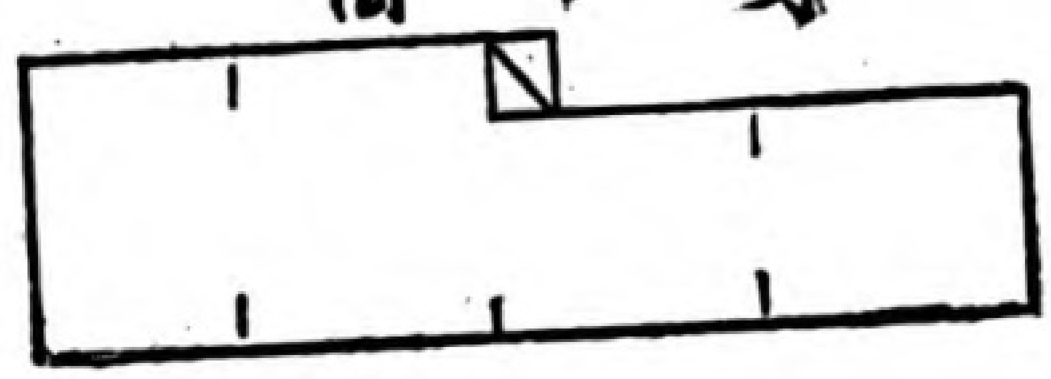
第八圖



第九圖



第十圖



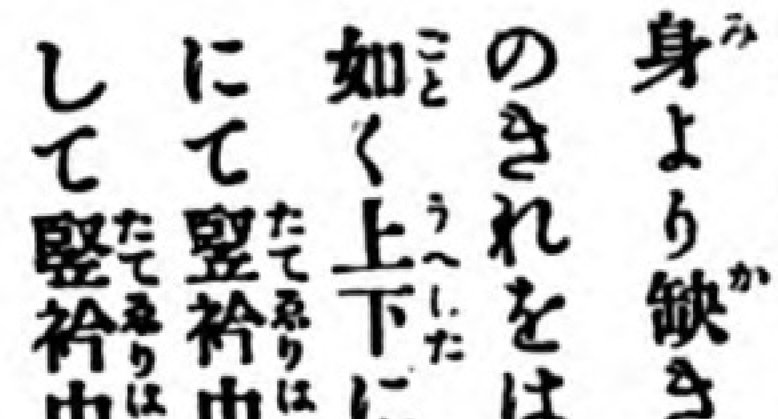
夫れより一應褄丈を計りおき第十二圖の如く後身を左へ除き右に殘れる前身の手前にて衿肩より竪衿下り三寸五分と箆印をつけ又前巾を一ぱいに極めて各處に箆印をつけるのであるそして裾より竪衿下り迄の間を計り見て竪衿だけを知るのである。

次は竪衿の箆附に移るのですが其の箆附を始る前に後身より缺きとりたる竪衿きれに裏竪衿のきれをはぎ附け夫れより第十三圖の如く上下に縫代の箆をつけ夫れより裙にて竪衿巾をきめ又上にて三分つめにして竪衿巾をきめ次は小衿の箆附である。

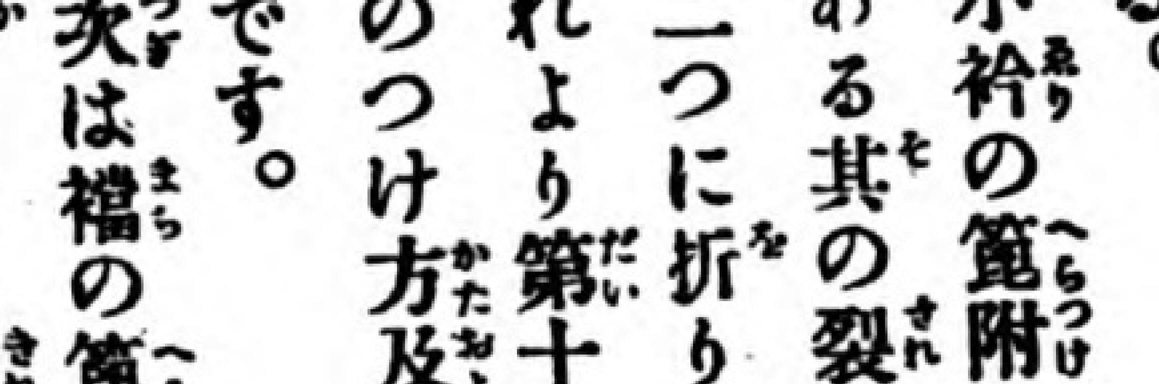
小衿の箆附は先に並巾八寸だけ裁切りある其の裂を横に二つに折り尚ほ縦に二つに折り第十四圖の如く正敷をき夫れより第十五圖の如き方法を以て丸みのつけ方及び缺き落しの箆をつけるのです。

次は褄の箆附であるが褄裂は袖巾より缺きたる裂に褄裏をはぎ附け外表に折りて正敷をき夫れより第十六圖の如く褄丈の箆をつけ次に褄巾を極むるのである褄巾は右の手前にて三分と

第十一圖



第十二圖



縫代の箆をつけ夫れより向へ一寸三分と褄巾を極め次は褄丈の處にて前と後ろの差を定むるのであるが前後の差を見るのには下の如き算術を採りて其の差を知るのである。

褄巾　明　　　縫代
(130−40)＋3＋30＝60分

そして算術の採り方は始め褄巾一寸三分の内上の明き四分を引殘り九分を三つに割る時は三分を得るそれに手前の裾の縫代三分を加ふれば三分となる故に左の手前より向ふへ六分と箆印をつけ其の箆より向ふへ四分とおきの箆をするのである、故に後前の差は後ろ三分の一前三分の二である故に、褄巾の廣き狹きに關はらずいつもながら此の方法によりて後ろ前の褄の曲り方を定むれば決して大なる過ちは生ぜざるものなれば裁縫熱心の諸君は充分とくと考究せられたきものである。

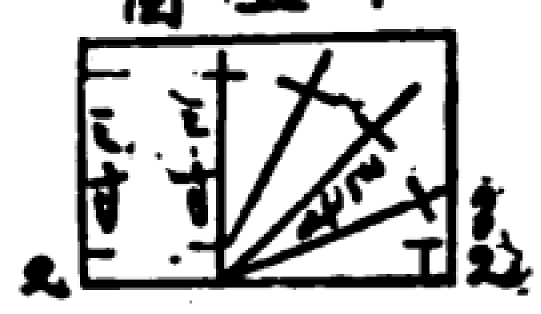
十三圖



十四圖



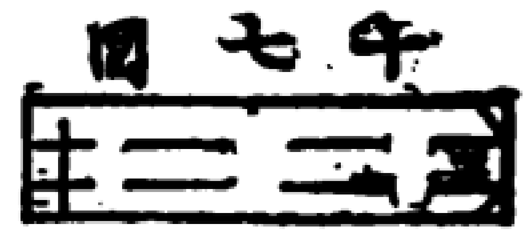
十五圖



十六圖



十七圖



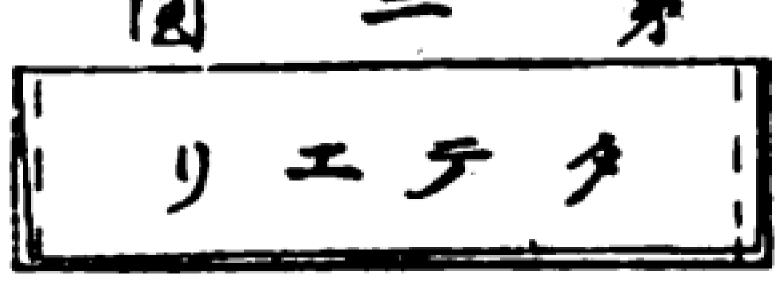
▲同縫方

縫方は先づ第一圖の如く袖口きれの方少しつらして裏袖に袖口きれをかけ、夫れより表裏兩袖四つを造り次は竪衿を造るのであるが竪衿は先づ縦のはぎをはぎ合せ夫れより上下を縫ひ折目は裏の方へ返しそれより眞を竪衿丈けに造り綿を兩面にきせ眞造りが了りたれば竪衿の折目の上にのせ、第二圖の如くとし附け引返し表を上に出し正敷をくのである、次は小衿であるが小衿縫方は先づ第三圖の如く折表は箆に習ひ折り裏は箆を二分ほど外に出して針を刺す、故に表のたるみは圖の如くに左右の丸みへいせ込む様に針を刺すのである、そして待針を了りたれば表の箆に習ふて縫ふのであるそして又な

第一圖



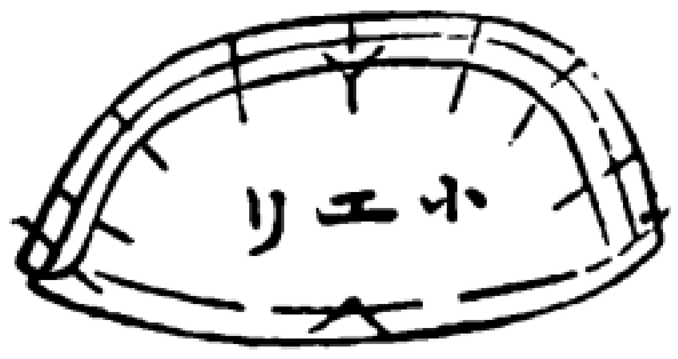
第二圖



りを附ける爲に再び其の外をザク〳〵と縫ひ其の糸を引きつゝ折りを裏の方へ返し第四圖の如くなりをつける。

それより其のかたちに習ひ眞を造り綿を兩面にきせ其の折りにとじつけ引返して第五圖の如く正敷するのです。

第三圖



第四圖



第五圖



次は身頃の縫方であるが身頃は先づ前後四ヶ所の胴はぎをして（其の胴はぎには必ず内びつけをするのである）それより背を裏表別々に縫次に左右の兩脇を縫ひつけ折り目は身頃の方へ返し夫れより裏表の兩袖を縫ひ附け夫より綿を入れ返して正敷爲し夫れより竪衿下りの箆より上の一寸五分程の間を二分位つゝくけ代として折り込夫れより前身衿附の全體に假りとじをして夫れより竪衿を表より附け裏にてくけるのである、次は小衿の附方であるが此の小衿の附方は左に述ぶる方法でなければ到底完全に折りは返らぬはづである。

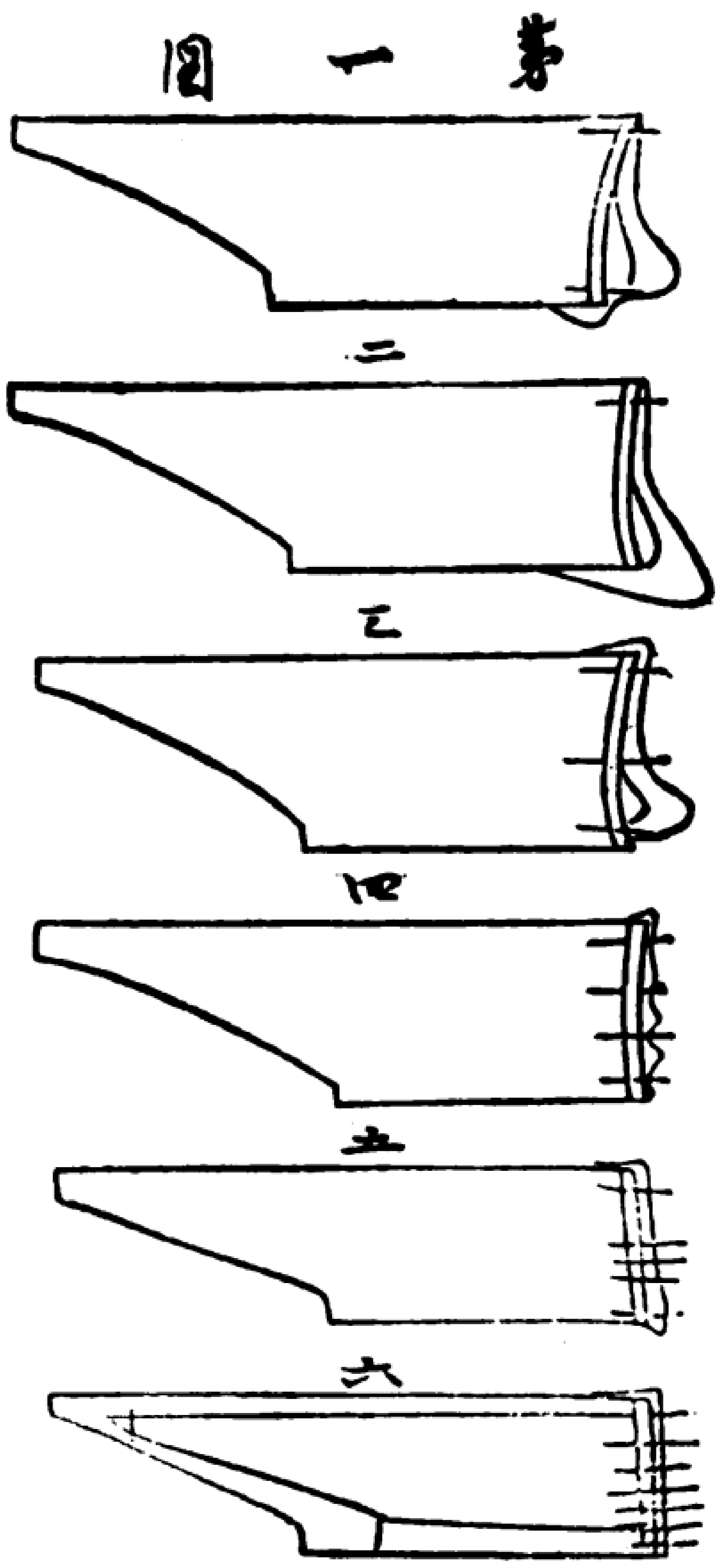
故に茲に其の方法を説明する積りであるが其附方の肝要なる點は折り表は從來の通り折目を小衿の方へ返しそして折り裏は從來の反對に身頃の方へ返すのであるからして左右の表小衿の先を殊更に身頃の方へむりに押し出すのであるが、此の方法は實に書にかく事の出來ぬ困難の處ゆゑよく〳〵熟讀して其の精神を自覺してください。

先づ其の附方は小衿の折り表一枚を身頃の裏一枚に縫ひつけ殊更折り代を深くして小衿の方へ折り返しそして又其の折り返したる折込の先を敢て殊更に身頃の方へ「ぎやく」に折り返し、夫れより折り裏の方を正敷して眞と共に餘程つる樣にとじ附け、夫れより表身頃をかぶせくけつけるのである次に左右の小衿下をくけ

るのである。
次は兩袖に及兩やつ口等をくけるのであるそして又袖口は表を手前に見てくけるのであるが八つ口ふり等は其の反對で裏を手前に見てくける。
之れにて縫方は了りたれば綿のにげざる樣裾に假りとじをして總てを正しくなし火のしをつかひ正しくして夜具たゝみの如くたゝむ。

◉褄待針刺方及縫方

褄の造り方は先づ前項の如く衽全體の篦を了り（五寸四分の縫にて部分縫を爲す時は褄篦のみとす）たる後ち第壹圖の如く、裏表脇縫代の篦と篦とを合せ第一の針を刺し次に第三圖の如く脇縫代の方より表衽いせ込の處迄裏表双方を正敷して來りいせ込篦の處に第三圖の針を刺すのである。



次は第四圖の如き褄先といせ込篦の處との間の裏布のたるみを左右へ平均に指にて振り分け、第四圖の針を刺し、次に第五圖の如く第四の針の左右のたるみを各各左右へ振り分け、第五第六の針を刺すのである。
次に第六圖の如く總て前同樣の方法にて針と針との間に裏表のたるみを左右へ分け、尚ほ四五本針を刺してそれよりいせ込と脇縫代の間に二三本針を刺すのである是れにて全體の待針を了りしを以て、次の縫方に移る。

▲全縫方

縫方に至りては一般婦女子の了承し居らるゝ通り、總て表を手前に見て縫ふべき者なるを以て、一方は裙先より縫ひ、又一方は脇縫の方より縫ひ、始むるのである、而して縫方の注意には待針を一々引き貫かずして縫ふ方尤もよしとす、然れとも縫ひ惡き感あらば縫針の屆きし分は貫き採るも差支なし。

次號記事豫告

（第三卷第九號七月五日發行）

▲米國の家庭教育……井深花子
▲毛利公爵母堂の平生……羽仁もと子
▲體育の話……川瀬元九郎
▲家庭と植物……櫻田女史
▲家政と小言……塚本はま子
▲寺子屋教育……管原雅輔
▲小宰相局……小畑いく子
▲近世事始……石井研堂
▲紫式部日記……鷹野止水
▲源氏物語解……尾上文學士
▲女先生……須藤求馬
▲一日醫者……糸左近
▲石炭瓦斯の應用……研堂野史
▲支那人の婚禮……楫江生
▲撫子の色……德田秋聲
▲婦女雑觀……大町桂月
▲洋行の雑話……巖谷小波

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…	金二十錢
四册（三ヶ月分）……	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……	前金二圓八十錢

內（定刊數……十二册／增刊四回…三、六、九、十一月價格同一）

郵税　一册　二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	四十四錢	三十六錢	二十九錢	
半頁（卅二行）	十四圓〇八錢	十一圓五十二錢	九圓二十八錢	
一頁（六十四行）	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置／切日等御照會次第御報可致候

注文規略

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ。

明治三十六年六月五日發行　第參卷第七號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

第五編

修紫田舍源氏

博文館編輯局

源氏物語の古雅なるを俗化の美文圈中に一新機軸を開きたる柳亭種彥の傑作たる田舍源氏は行文艶にして趣向優紱實に時代人情の機微を發揮せるもの原文は總假名なるを校訂して本書とせり蓋し江戶文學の粹なり

第六編

竹田出雲淨瑠璃集

水谷不倒校訂

●小町炭燒深草土器師七小町 ●加賀國篠原合戰 ●男作五雁金 ●大塔宮鎧 ●大内裏大友眞鳥 ●南朝正平四年北朝貞和五年太平記菊水の卷 ●三荘太夫五人孃 ●甲賀三郎窟物語 ●小栗判官車街道 ●蝶雙々曲輪日記 ●菖蒲前操弦 ●右大將鎌倉實記 ●諸葛孔明鼎軍談 ●時代世話新薄雪物語

第七編

朝夷巡島記

博文館編輯局

朝夷巡島記は八犬傳弓張月と共に馬琴が三大著述の一なり剛邁快活なる朝夷三郎を假て北條氏の奸曲を罵倒する所壯絕快絕に堪へさらしむ綠蔭晴窓の下好個の讀物

第拾壹編

太平記

博文館編輯局

北條氏の末路より足利氏の初に至り南北朝の事蹟記し盡して遺漏なく楠公父子の忠義は論者時に筆力を極めて寫し出す滔々數萬言流麗の文章自ら一大活小說たり

第拾貳編

紀海音淨瑠璃集

水谷不倒校訂

●末廣十二段 ●忠臣青砥刄 ●賴光新跡目論 ●曾我姿富士 ●鎌倉三代記 ●鎭西八郞唐五船 ●東山殿室町合戰 ●難波橋心中 ●新百人一首 ●八百屋お七 ●本朝五翠殿 ●花山院都巽 ●義經新高館 ●矢越軍談 ●玄宗皇帝蓬萊鶴 ●小野小町都年玉 ●殺生石 ●三井寺開帳 ●傾城國性爺 ●甲陽軍鑑今樣妊 ●神功皇后三朝貢 ●心中二ッ腹帶 ●傾城無間鐘

第拾參編

續近松淨瑠璃集

水谷不倒校訂

●百日曾我 ●天神記 ●蟬丸 ●本朝三國志 ●曾我扇八景 ●津國女夫池 ●今宮心中 ●吉野女楠 ●長者女腹切 ●曾我會稽山 ●心中二枚繪草紙 ●井筒業平河内通 ●卯月の潤色 ●心中宵庚申 ●源氏烏帽子折 ●娥歌加留多 ●用明天皇職人鑑 ●傾城島原蛙合戰 ●戀八卦柱曆 ●信州川中島合戰 ●百合若大臣野守鑑

第拾四編

近松半二 淨瑠璃集　水谷不倒校訂

目次

●役行者大峯櫻
●山城國畜生塚
●蘭奢待新田系圖
●三日太平記
●萩大名傾城敵討
●道中龜山噺
●時代織室町錦繡
●奥州安達原
●お花半七京羽二重娘氣質
●小夜中山鐘由來
●傾城阿波の鳴門
●東海道七里渡
●新版歌祭文
●譬喝歌系の時

第拾五編

後太平記　博文館編輯局

附北條五代記

太平記の後を承けて足利氏の末造應仁戰亂の時代を描き出す群雄四方に割據し天下亂れて麻の如く一仆一起小兒晴中に鬪ふの幕は玆に信長豐吉に賴て打破せらるゝの光景正に太陽東に出て百鬼を藏すの觀あり

第拾七編

京山全集　博文館編輯局

目次

●腹佐話鷄鳴八藝
●復讐熊腹帶
●小說女楠樹
●江島御利生對菅笠
●化粧女敵討
●化粧坂懷忠龜鑑
●三國小女郎物語
●梅若松若竹取物語
●高尾な
●孝行酒屋塞劍發
●女六部仇な字津谷
●窒讚傳記桃花流水
●早引說要集
●五人女都の紅粉筆
●高尾丸劍の粧妻
●奴勝山愛玉丹前
●隅田春藝者容氣
●煙草二抄

第廿壹編

一九全集　博文館編輯局

●三浦離波復讐●新製交島廻●仙術獨稽古●木曝杜野狐復讐●擧家安全鼠山入●萬物遺帳●松山稻荷御利生新話●銘正宗刀珍說●北島女敎訓●鷄娘●善惡附込富座帳●忠信老婿餅●滑稽しつこなし●戀の川乘合噺●落咄彌次郎口●串談しこなし●福助噺●落咄見世びらき●御年玉の春●新吹●通俗巫山夢●復讐奇談天橋立●天橋立續編●方言修行金草鞋

第廿貳編

漂流奇談全集　石井研堂校訂

●韃靼漂流記●無人島談話●臺灣漂客記事●土州長平漂流日記●阿州船無人島漂流記●無人島漂流口書●日州船漂流記事●松榮丸東國漂流記●蕃人打破舵漂流記●馬丹島漂流記●德永丸漂流口書●遠州船無人島物語●松前人韃靼漂流記●竹內德兵衛魯國漂流記●漂客加察哈出奔記●志州船蓬瀛漂着話●督乘丸露國漂流記●天竺物語●永壽丸魯國漂流記●南海新話開●薩州漂客見聞錄●常州人安南國漂流物語●ベラホ物語●奥州人安南國漂流物語●漂客壽三郎手簡●薩州人唐國漂流記●亞墨新話●神昌丸魯國漂流始末●漂客奇談●鳥島物語●紀州船米國漂流記●山田仁左衛門渡唐錄●ジャガタラ文●天竺德兵衛物語●阿蘭陀日本婦女の文

第廿參編

邯鄲諸國物語　博文館編輯局

附 續種彥傑作集

●近江の巻●出羽の巻●大和の巻●播磨の巻●伊勢の巻●遠江の巻●攝津の巻●水木舞扇猫骨●忠孝兩岸一覽●柳糸花紅交●南色梅早咲●三虫梅戰●忠孝義理物語●合三國小女郎狐●淺間ヶ嶽烟の姿繪●堀川歌女猿曳●操鼓三人女

(後付の四)

第拾八編

落語全集

石橋思案校訂

目次

●醒睡笑●落語笑嘉登●鹿の巻筆●輕口春の山●曾呂利話●田舍芝子●曾呂利狂歌咄●壽々嘉羅升●臍の宿替●獨樂新話●初音草大鑑●かろくちばなし●俗談今歲花時附錄口拍手●河童の尻子玉●商賣百物語●噺物語●輕口噺●輕口浮瓢箪●品の開帳●落噺六義●新作落語口拍子

第拾九編

並木宗輔 淨瑠璃集

水谷不倒校訂

目次

●道成現在蛇鱗
●七條河原釜淵雙級巴
●日蓮記兒硯
●北條時頼記
●安倍宗任松浦簦
●後年奥州軍記
●軍法富士見西行

●苅萱桑門筑紫𨏍
●一休蜷川本領特山
●楠昔噺
●那須與市西海硯
●丹生山田青海剱
●攝津國長柄人柱
●一谷嫩軍記

第貳拾編

紀行文集

故大橋乙羽校訂

目次

●東遊記
●西遊記
●東遊記後編
●西遊記後編

●日本行脚文集
●筑紫紀行
●諸國里人談
●奥の細道

第廿四編

校訂 續紀行文集

岸上質軒校訂

目次

●高倉院嚴島御幸記●海道記●熱海紀行●小島の口すさめ●東行筆記●富士紀行●秋山の記●廻國雜記●踏ふくろ●東路の津登●佐渡日記●高野參詣日記●見た京物語●あづまの道の記●椿詣の記●武藏野紀行吉野詣記●香取の日記●富士見道記●君のめぐみ●九州道の記●あがたの三月四月●平安紀行●吹元紀行●九州の道の記●杉田日記●丙辰日記●苗墟山に遊ぶ記●東遊り●中空の日記●野さらし紀行●磯つたひ●伊勢紀行●常陸紀行●西北紀行●みるめのさら●椎の葉●登勝日記●甲戌紀行須磨日記●富士一覽記●十勝日誌●葵遊稿

第廿五編

續水滸傳

田中從吾軒 三木愛花君 校訂

水滸傳は夙に支那小說中四大奇書の一として廣く世に行はれしも續編に至ては或は其名をすら知らさるものあり本書は近世の大儒田中從吾軒翁の譯なれば其精確にして譯文の婉麗優倘なる彼の曲亭に讓らざるなり

第廿六編

傾城水滸傳

博文館編輯局

曲亭馬琴翁水滸傳を飜案して婦人世界となし艶虎嬌龍を出して大に伎倆を鬪はしむる結構の奇文辭の妙讀者をして一讀再讀飽くとなからしむ

第廿七編

文耕堂浄瑠璃集

水谷不倒校訂

目次

●河内國姥火 ●佛御前扇車 ●三浦大輔紅梅靮 ●信州姥捨山 ●鬼一法眼三畧巻 ●須磨都源平躑躅 ●車還合戰櫻
●應神天皇八白旗 ●敵討襤褸錦 ●行平磯馴松 ●今川本領猫魔館 ●將門冠合戰 ●伊豆院宣源氏鏡 ●敵討御米大鼓

第廿八九編

白縫譚 上下

博文館編輯局

本書は柳下亭種員柳亭種彦晩年の傑作なり大友宗麟の孤兒若菜姫妖術を以て仇家菊池家を倒さんとし菊池家の四勇士臥薪嘗膽主家を保護するの苦忠讀者をして百喜千憂に堪へさらしむるもの蓋し稗史の巨擘といふべし

第參拾編

北雪美談 時代鏡

博文館編輯局

かゝみ山は悲劇中の傑作として久しく行はるゝ所なるが更に潤色を加へて麗はしき文章としたるもの本書なり全編四十餘卷正邪相鬪ひ善悪相搏ち千變万化其妙其快蓋し亦稗史中の魁と云ふべし

第卅四編

黄表紙百種

幸堂得知著

目次

●金々先生榮花夢●夫從以來記●世上洒落見繪圖●高慢齋行脚日記●此奴和日本●盡用而二分狂言●鼻ケ峰高慢男●浦山太郎兵衛瀧宮巻●京鹿子娘泥鰍汁●桃太郎後日噺●八代目桃太郎●貧[illegible]見臺萩●親敵討腹皷●壽御夢想妙藥●唯心鬼打豆●親敵討●紅皿缺往古噺●莫切根金生木●桃太郎發端話說●三幅對紫曾我●江戸生浮木蒲燒●山入桃太郎昔噺●辭鬪戰新根●元利安賣鋸南賣●内世操九面十面●於竹大日開帳由來●大悲千錄本●白髭大明神御渡申●通晃寐子美女●総句線香●其他七十三件

第卅五編

俳優全集

校訂 博文館編輯局

●枝鶯蝶京打絆 ●旅行歌川船合奏 ●其俤夕暮譚 ●蝶雙春花鐵 ●風俗女三國誌 ●娘客意氣地 ●和歌三神由來
●色三味線 ●開勇八幡祭 ●向人廓山彦 ●春の曙 ●杜若紫再咲 ●伊達姿辰巳八景 ●狂言袴
●三日月おせん ●いろは假名娘席書 ●めしや誂問白藤 ●傾城が嶽 ●髮梳天網島 ●尾上松録 ●手前味噌

第卅六編

俗曲大全

校訂 長井金升君校訂

長井金升君の斯道に精通せるは世既に定評あり今回我邦に現存するあらゆる俗曲を大集して以て一卷に收む然れ共義太夫の如き其番々悉く之を掲くること紙數の許さる所なれは其中の精華を抜き又一中節、江東節、富本節、薗八節、清元、新内、常盤津、長唄なども其例に依りて名作を集む我邦の俗曲は悉く此册中に收めたれは通人雅客は必ず一本を坐右に備へざるべからず

第壹冊編

常山紀談　江見水蔭校訂

本書は有名なる湯淺常山先生が其逹絕の讀書眼を以て古今の史傳に渉り本朝の有ゆる名將勇士の逸話珍說數千種を輯錄せられたるものにして當時多く世に行はれしが世の變遷と共に多くは散逸せり江見水蔭氏之を校訂し世に公にす亦一讀の價値ある奇書とす

第貳冊編

萬物滑稽 合戰記　石井研堂校訂

堅く言へば生存競爭平たくいへばせち辛き浮世の眞相の古來の文學者の筆に華さける抱腹絕倒の合戰記なり全編悉く奇談珍說ならざるはなし是亦文庫中の珍冊といふべし

第参冊編

續一九全集　博文館編輯局

目次

●深窓奇談●廓の意氣地●塀の内證●雑司ヶ谷●しめた發賣●不動丸●濱邊男●女諸禮綏●花顔草紙●風流田舍草紙●義經越路松●三國太郎再來傳●初時雨矢口渡●吉原談語●金儲花盛坊●竹生島琵琶湖水●諸國修業金草鞋

第七冊編

續々紀行文集　岸上質軒校訂

遠くは鎌倉時代より近くは德川時代の末に至る學者文人の紀行文中最も趣味ある者數十編を集む艱難なるあり壯快なるあり風流なるあり一篇自ら一の妙味を具へ而も通觀すれば亦た風俗志尚の轉變を見るを得べし

第八冊編

續馬琴傑作集　博文館編輯局

我國近代の文豪曲亭馬琴の作中曩に一卷を刊せるも尙名作の遺多きを以て玆に其續編を公にす其撰載する所は復讐奇談稚枝鳩新累解脫物語旬殿實々記青砥藤綱摸稜案同後集糸櫻春蝶々八丈奇談等あり近代文豪の傑作就て見るべし

第九冊編

脚本傑作集　水谷不倒校訂

本書は江戶時代諸名家の脚本中最も巧妙にして興味多く古來之を劇に演して尤も行はれたるものを蒐む我邦劇詩の妙を味はんと欲するものは此書を措て他に求むべからず劇を好む人文字を嗜む人共に本書を供へ其趣味の津々として盡さゞるを了せられよ

第四拾編

續京傳三馬傑作集

博文館編輯局

江戸作家中の巨擘として輕妙の筆婉麗の文加ふるに嶄新奇抜の思想を以て一世を傾倒せる者一を京傳といひ一を三馬とす本書は二家の傑作を撰集せしもの獨り小説として巧妙なるのみならず當時の風俗寫眞として見るに足るべき草双紙洒落本人情等各或は泣くべく或は喜ぶべし

第四拾壹編

釋迦八相倭文庫 上下

博文館編輯局

現實を天竺の皇室に則り趣旨を佛教の經文に假り進んで因果應報の理を明にし退ては善惡邪正の果を示し能く五戒を諷し巧みに六慾を戒め變幻の文飾明の辭不知不識の間世俗を教導訓諭するもの是れ釋迦八相倭文庫梗概とす若夫れ吾人の言を疑はゞ明窓淨机の邊繙讀一番せば思ひ半に過ぎん

第四拾參編

種彥短篇傑作集

幸堂得知君校訂

目次

●梅櫻振袖日記●女合法辻談義、青葭布袋本地、●花吹雪若衆宗玄、女摸様裕妻染、曽我昔狂言、●高野山萬年艸紙、桔梗辻千種衿、鬱偶二面鏡、●娵金平昔繪艸紙、●傾城盛衰記、●鱗案道中雙六、●浮世形六枚屏風、●娵狂言三勝話、忍岡對花籠、浮世一休廓問答、●鯨帷博多と三國、●比翼紋松に鶴賀、●女郎花喩粟島、●新板八百屋の鶴開●小脇差夢の蝶鮫、●唐人髷今國姓爺、●花紅葉名所扇雛金紺色作の早染●浮色猪口は喧手、●蛙歌春の土手節、●忍笠時代蒔絵、●関東小六昔舞臺、●富士裾浮れの蝶鳥、●●出世奴小萬の傳

第四拾四、五、六編

俊傑神稻水滸傳 上中下

博文館編輯局

本書俊傑神稻水滸傳は一部百五十の大卷にして夙に識者の嘆服する所なり時に本篇が變幻の脚色警秘の奇趣冊一冊綿々盡きず絶へず清興湧き皮肉動き讀で曉を徹するを覺えさるの珍書なり

（後付の八）

第四拾七編

近世奇談全集

博文館編輯局

架定虛飾の著漸く廢れ今や將に深遠神秘の境に達せんとするに當り所謂現文界の母源資料たる本邦古來の高想靈思より成れる珍聞奇談を輯集し茲に本書を公にす校訂嚴正我國古代の文流思潮は本書に依つて了知せらる

第四拾八編

名家短篇傑作集

博文館編輯局

目次

●復讐煎茶濫觴●糸道軒往古講釋●糸東九尾狐●十三鐘孝子勲蹟●小説比翼文●照子池浮名寫繪●敵討宿六娵娘●大盃舞花街始●戻駕籠故郷錦繪●昔唄猿狂言●復讐奇談橋由來●敵討挙山大全●會談興教門人雅話●兒ヶ淵雙仇討●鎌田又八强力譚●鰻屋お蝶三世談●父讐怨敵現腹鼓●開運馬一文字●戀女房仇討双六●敵討女夫似非蜂●床飾艶餅無垢●西國奇談月過夜神樂●黒盤太郎雨夜話●怪談岩倉萬之亟●浪花浴衣團七縞●枕琴夢通路●油丁製茶穢黄表紙

女學世界
每月壹同五日發行
(明治卅參年拾貳月廿五日 第參種郵便物認可) 第參卷第七號 (明治參拾六年六月五日發行)



(定價金貳拾錢)

Vol. III. (東京市小石川區久堅町百八番地 博進社工場印行) No. VII